

平安京左京五条三坊九町跡・
烏丸綾小路遺跡

2008年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



埋葬群全景（北から）



土坑 20 (西から)

平安京左京五条三坊九町跡・

烏丸綾小路遺跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、ビル建設にともなう平安京跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

平成 20 年 12 月

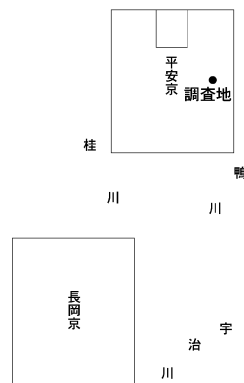
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡
- 2 調査所在地 京都市下京区童侍者町 159-1
- 3 委 託 者 三菱地所株式会社 代表取締役 木村恵司
- 4 調査期間 2008年5月7日～2008年9月26日
- 5 調査面積 585 m²
- 6 調査担当者 網 伸也・柏田有香
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「壬生」「三条大橋」「島原」「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI(ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 網 伸也・柏田有香
- 14 執筆分担 網 伸也:1～3、4-(5)、5-(1)・(2)
柏田有香:4-(1)～(4)・(6)、5-(3)・(4)
付章1:丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)
付章2:パリノ・サーヴェイ株式会社
- 15 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 16 調査および報告作成にあたり、下記の方々の御協力を得た。(五十音順/敬称略)

青木政幸、石井則孝、伊藤淳史、井上幸治、片山まび、勝田 至、河内将芳、木立雅昭、北野信彦、久保智康、源城正好、高妻洋成、高 正 龍、狭川真一、酒匂由紀子、佐古愛己、下坂 守、鋤柄俊夫、鈴木久男、田中長兵衛、坪井清足、寺岡武彦、中野晴久、西山良平、橋本清一、浜中邦弘、早島大祐、韓 盛 旭、藤澤珠織、丸山真史、森島康雄、脇谷草一郎



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 弥生時代の遺構	7
(3) 平安時代の遺構	7
(4) 鎌倉・室町時代の遺構	12
(5) 江戸時代の遺構	32
4. 遺 物	38
(1) 弥生・古墳時代の遺物	38
(2) 平安時代の遺物	40
(3) 鎌倉・室町時代の遺物	44
(4) 桃山・江戸時代の遺物	61
(5) 瓦類	67
(6) その他の遺物	69
5. ま と め	71
(1) 中世の遺構変遷	71
(2) 2時期の埋葬群の性格について	73
(3) 中世土坑群の性格について	75
(4) 烏丸綾小路遺跡に関する成果について	76
付章1 出土した動物遺存体	78
付章2 地下式倉庫に関する自然科学分析	80

図 版 目 次

巻頭図版1	埋葬群全景（北から）
巻頭図版2	土坑20（西から）
図版1	遺構
1	2区弥生時代遺構面溝群全景（西から）
2	溝971（南西から）
3	土坑908・909（北東から）

- 図版 2 遺構 1 1・2区平安時代遺構面全景（北西から）
2 建物9（西から）
3 土坑 802 検出状況（北東から）
- 図版 3 遺構 1 1・2区鎌倉・室町時代遺構面全景（北西から）
2 埋喪群全景（北から）
- 図版 4 遺構 1 埋喪群および土坑 426（東から）
2 埋喪列（北から、手前は埋喪 55）
3 埋喪列半裁状況（南東から、手前は埋喪 59）
- 図版 5 遺構 1 埋喪 237・炉 306（北から）
2 礎石列 6 南半部（南から）
3 1区鎌倉・室町時代遺構面全景（北西から）
- 図版 6 遺構 1 1区南東部全景 礎石列 8・井戸 22・埋喪群検出状況（北から）
2 井戸 22（北から）
3 井戸 80（東から）
- 図版 7 遺構 1 地下式倉庫 370（東から）
2 地下式倉庫 450（東から）
- 図版 8 遺構 1 1・2区土坑群全景（西から）
2 土坑 20 完掘状況（西から）
3 土坑 20 埋納遺物検出状況（北東から）
- 図版 9 遺構 1 土坑 79 検出状況（北から）
2 土坑 79 床直上土器群（西から）
3 土坑 79 完掘状況
- 図版 10 遺構 1 土坑 108（南から）
2 土坑 418・471（南西から）
- 図版 11 遺構 1 土坑 127（南から）
2 土坑 538（東から）
3 土坑 560（北西から）
4 土坑 791（北から）
- 図版 12 遺構 1 1区江戸時代遺構面南東部全景（北西から）
2 礎石列 3・4、石組遺構 30（北から）
3 石組遺構 30（西から）
- 図版 13 遺構 1 埋喪 15（北から）
2 埋喪 72（北から）
3 2区江戸時代遺構面北西部全景（北から）
- 図版 14 遺構 1 2区江戸時代遺構面南東部全景（北から）

- 2 土坑 236 (北東から)
- 3 1区江戸時代遺構面北端部全景 (南西から)
- 図版 15 遺物
 - 1 弥生土器
 - 2 石器
- 図版 16 遺物 土坑 61 出土土器
- 図版 17 遺物 土坑 127・502 出土土器
- 図版 18 遺物 土坑 108 出土土器
- 図版 19 遺物 地下式倉庫 370 出土遺物
- 図版 20 遺物 埋甕群埋土・埋甕群出土土器
- 図版 21 遺物 土坑 20 出土遺物
- 図版 22 遺物 土坑 79 出土遺物
- 図版 23 遺物 土坑 130・74 出土土器
- 図版 24 遺物 井戸 52・土坑 296 出土土器
- 図版 25 遺物 土坑 236 出土土器
- 図版 26 遺物 瓦類
- 図版 27 遺物
 - 1 錢貨
 - 2 鋳型
 - 3 椀型滓

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (北西から)	2
図 3	調査風景	2
図 4	調査区配置図 (1 : 500)	2
図 5	1区東半北壁断面図 (1 : 50)	5
図 6	2区南壁断面図 (1 : 50)	6
図 7	第 4 面 (弥生時代) 遺構平面図 (1 : 200)	8
図 8	溝 969・970、溝 971 断面図 (1 : 40)	9
図 9	第 3 面 (平安時代) 遺構平面図 (1 : 200)	10
図 10	建物 9・10 実測図 (1 : 50)	11
図 11	第 2 面 (鎌倉・室町時代) 遺構平面図 (1 : 200)	13
図 12	礎石列 6 実測図 (1 : 40)	15
図 13	埋甕 237・炉 306 実測図 (1 : 20)	16

図 14	埋甕群実測図 (1 : 40)	17
図 15	埋甕抜取土坑群・礎石列 7 実測図 (1 : 40)	18
図 16	羽釜埋納土坑 634 実測図 (1 : 10)	19
図 17	羽釜埋納土坑 634 (東から)	19
図 18	井戸 22・井戸 80・井戸 419 実測図 (1 : 50)	20
図 19	地下式倉庫 370 実測図 (1 : 40)	21
図 20	地下式倉庫 450 実測図 (1 : 40)	23
図 21	土坑 20 実測図 (1 : 20)	24
図 22	土坑 79 実測図 (1 : 20)	25
図 23	土坑 108・土坑 127 実測図 (1 : 20)	26
図 24	土坑 418・土坑 791 実測図 (1 : 20)	28
図 25	土坑 426 実測図 (1 : 20)	29
図 26	土坑 471 実測図 (1 : 20)	29
図 27	土坑 538・土坑 560 実測図 (1 : 20)	30
図 28	1 区東壁断面図 (1 : 40)	32
図 29	第 1 面 (江戸時代) 遺構平面図 (1 : 200)	33
図 30	第 1 面町屋関連遺構実測図 (1 : 40)	34
図 31	土坑 236 実測図 (1 : 40)	36
図 32	溝 969・970 出土土器実測図 (1 : 4)	39
図 33	溝 971 出土土器実測図 (1 : 4)	39
図 34	土坑 909 出土土器実測図 (1 : 4)	39
図 35	弥生時代石器実測図 (1 : 2)	40
図 36	井戸 805 出土土器実測図 (1 : 4)	41
図 37	溝 598 出土土器実測図 (1 : 4)	41
図 38	土坑 61 出土土器実測図 (1 : 4)	42
図 39	井戸 373 出土土器実測図 (1 : 4)	43
図 40	土坑 802 出土土器実測図 (1 : 4、1 : 8)	43
図 41	土坑 505 出土土器実測図 (1 : 4)	44
図 42	土坑 505 出土砥石実測図 (1 : 4)	44
図 43	羽釜埋納遺構 634 出土土器実測図 (1 : 4)	44
図 44	地下式倉庫 450 出土土器実測図 (1 : 4)	45
図 45	土坑 127 出土土器実測図 (1 : 4)	45
図 46	土坑 502 出土土器実測図 (1 : 4)	46
図 47	土坑 108・538 出土土器実測図 (1 : 4)	47
図 48	土坑 426 出土土器実測図 (1 : 4)	48

図 49	地下式倉庫 370 出土土器実測図 (1 : 4)	49
図 50	地下式倉庫 370 出土木製品・石製品実測図 (1 : 4)	49
図 51	埋喪群出土常滑産大甕実測図 (1 : 6)	50
図 52	埋喪群出土常滑産大甕口縁部実測図 (1 : 4)	51
図 53	埋喪群埋土出土土器実測図 (1 : 4)	52
図 54	土坑 20 出土土器実測図 (1 : 4)	53
図 55	土坑 20 出土金属製品・玉類実測図 (1 : 3、1 : 1)	54
図 56	青銅鍋 (金 1) 付着粉殻	54
図 57	土坑 79 出土土器実測図 (1 : 4)	55
図 58	土坑 79 出土短刀実測図 (1 : 3)	56
図 59	土坑 79 出土石製品実測図 (1 : 2)	56
図 60	土坑 560 出土土器実測図 (1 : 4)	56
図 61	土坑 791 出土土器実測図 (1 : 4)	57
図 62	土坑 418 出土土器実測図 (1 : 4)	57
図 63	土坑 471 出土土器実測図 (1 : 4)	58
図 64	井戸 22・80・419 出土土器実測図 (1 : 4)	59
図 65	土坑 216 出土土器実測図 (1 : 4)	59
図 66	土坑 130 出土土器実測図 (1 : 4)	60
図 67	土坑 74 出土土器実測図 (1 : 4)	61
図 68	江戸整地層、埋喪 15・72 出土土器実測図 (1 : 4) (1 : 6)	62
図 69	井戸 52 出土土器実測図 (1 : 4)	62
図 70	土坑 296 出土土器実測図 (1 : 4)	63
図 71	土坑 236 出土土器実測図 1 (1 : 4)	64
図 72	土坑 236 出土土器実測図 2 (1 : 4)	65
図 73	土坑 236 出土土器実測図 3 (1 : 4)	66
図 74	瓦拓影および実測図 (1 : 4)	68
図 75	土坑 79 出土骨片	69
図 76	土坑 79 出土骨片分析グラフ	69
図 77	鎌倉時代から室町時代の遺構変遷図 (1 : 500)	72
図 78	主要周辺調査位置図 (1 : 10,000)	74
図 79	調査 11 SK34	75
図 80	調査地点の位置および地下式倉庫覆土の堆積状況・分析層準	80
図 81	微細物	88
図 82	木材・炭化材 1	89
図 83	木材・炭化材 2	90

表 目 次

表 1	遺構概要表	4
表 2	遺物概要表	38
表 3	主要周辺調査一覧表	74
表 4	種名表	78
表 5	動物遺存体集計表	79
表 6	地下式倉庫の床面直上人為的堆積物の微細物分析結果	82
表 7	菌類の培養結果	83
表 8	各試料の優占コロニーの塩基配列相同性検索結果	85

付 表 目 次

付表 1	掲載遺物一覧表	91
------	---------	----

平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡

1. 調査経過

調査地は、平安京左京五条三坊九町にあたる。当町には平安時代後期の歌人藤原親隆の邸宅があったと伝えられており、中世から近世では下京の中心地として栄えた場所でもある。1998年に京都市埋蔵文化財調査センターが実施した試掘調査では、桃山時代から江戸時代初期の遺構面と、室町時代の遺構面が確認されており、平安時代の整地層や下層では弥生時代の遺構の存在も想定できた。今回、当敷地にオフィスビルの建設が計画されたため、工事に先立って発掘調査を行うこととなった。調査は試掘調査の成果を受けて、考古学的に平安京街区から中近世下京への歴史の変遷を明らかにするとともに、下層遺構の烏丸綾小路遺跡に関連する弥生時代の集落の実態解明を目的とした。

発掘調査区は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもと、建物建設予定地と試掘調査成果を考慮して設置した。調査対象面積は585㎡で、掘削土を場内処理するため、西半の1区と東半の2区に分けて反転調査を行った。まず、1区の調査を進めたところ、東半部に中世の埋蔵遺構が良好に遺存していることが予測できたため、西半部の調査を先行して終了し、1区東半部は2区と併行して行うこととした。調査区全体では、大きく4面の遺構面（第1面：江戸時代、第2面：鎌倉時代から室町時代、第3面：平安時代中期から後期、第4面：弥生時代

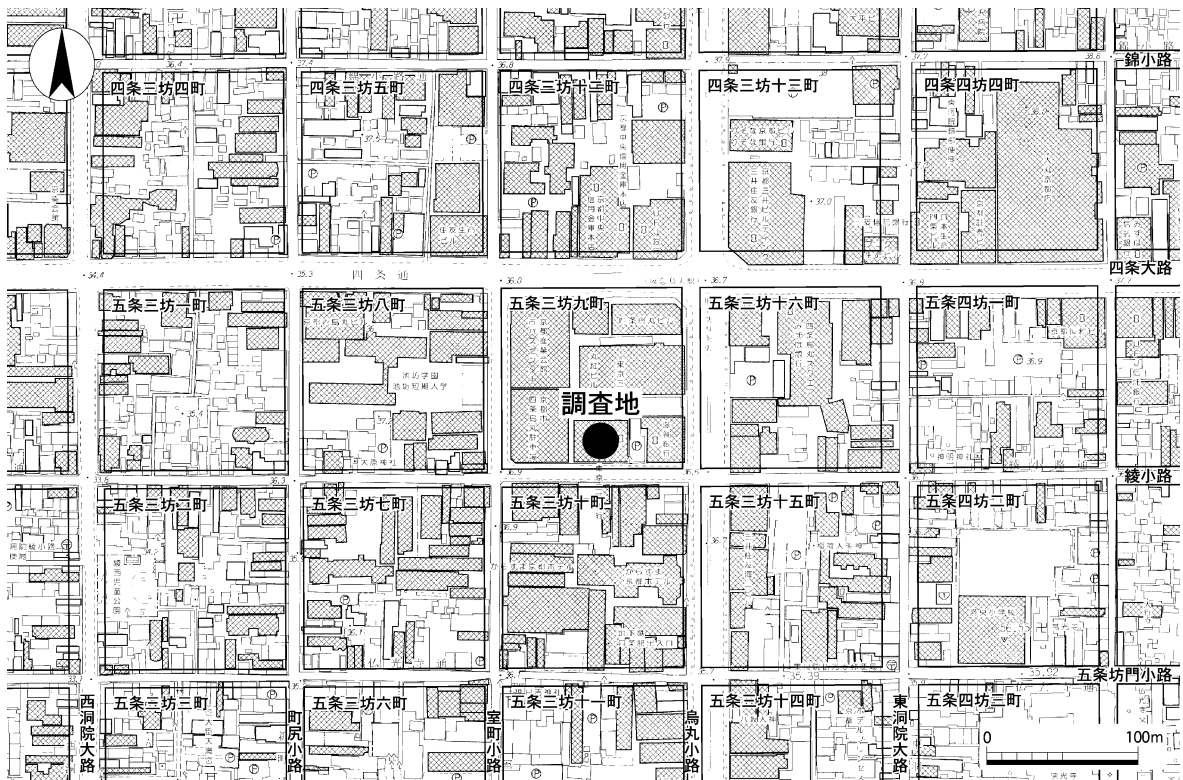


図1 調査位置図(1:5,000)



図2 調査前全景（北西から）



図3 調査風景

中期から古墳時代前期)を確認している。

検出した遺構は、総数60個体以上と想定できる埋甕および甕抜き取り土坑、地下式倉庫、礎石列などで、綾小路に面した室町時代の「酒屋」に関連する遺構群と想定できた。また、江戸時代では町屋建物の一部、平安時代では掘立柱建物、弥生時代では環濠とみられる3条の溝を発見しており、重層する下京地域の歴史の変遷の一部を明らかにした。これらの遺構については、1区・2区ともにそれぞれの遺構面において記録作業を行い、各遺構面の調査時には文化財保護課の検査指導を受けた。

なお、2008年8月9日に現地説明会を実施して、中世「酒屋」遺構の一般公開を行い、約450名の参加を得ることができた。また、9月13日にも弥生時代遺構面の現地公開を行っている。

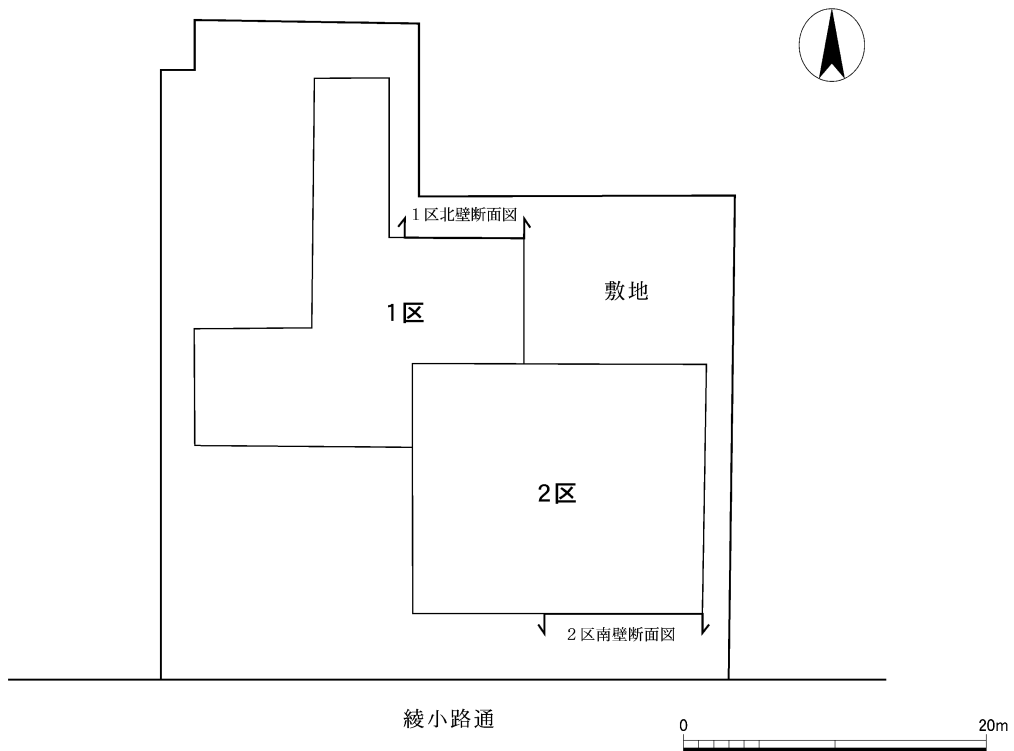


図4 調査区配置図（1：500）

2. 位置と環境

当調査地は、鴨川扇状地上の安定した基盤層の上に立地しており、西側の谷に向かって緩やかに傾斜している。当地周辺は居住に適した地理的条件を備えており、弥生時代から古墳時代にかけては烏丸綾小路遺跡と称する大規模な集落遺跡が形成された。この遺跡は、北は現在の錦小路通付近から南は五条通以南まで約 1.1 km、東は堺町通から西は猪熊通付近まで約 1.3 km の範囲に及んでいる。過去に行われた調査では、竪穴住居のほかに環濠と考えられる大溝や方形周溝墓などが見つかっており、弥生時代中期には環濠をもつ大規模な集落であったことが判明しつつある。存続期間も弥生時代前期から古墳時代後期までと長く、京都盆地の拠点的な集落の一つであったと考えられる。

その後、平安京への遷都に伴い、当地は平安京左京五条三坊九町に位置するようになる。ただ、平安時代の遺構については、周辺の調査で方形縦板組みの井戸を数基検出しているが、他は土坑・小ピットなどが発見されているだけであり、性格が明らかな遺構は少ないといえる。また、出土遺物も少なく、そのほとんどが中期から後期の土器類や瓦類で、前期の遺物は包含層などからわずかに出土するにすぎない。後世の掘削によって、平安時代の遺構の大半が削平されていることを考慮しても、平安時代の遺構密度が低い地域であることは間違いないであろう。

ところが、中世以降になると当町周辺では人々の活発な生活を示す遺構・遺物が多く発見されている。重複した多数の建物柱穴や石組み井戸・埋甕・方形土坑などを各所で検出しており、出土遺物も土師器類から陶器・瓦質土器・輸入陶磁器など多種多様な遺物が数多く認められる。室町時代の初めには、町々の自治的結束の象徴でもある祇園会山鋒が多く出され、下京が都市として多いに発展していった。とくに、四条と綾小路の間は室町面を中心に栄え、一時は「四条綾小路」という固有名詞で呼ばれていた¹⁾。当調査地は、中世下京の中心地であった四条室町の南東に位置しており、周辺には中世京都の経済的基盤となる酒屋あるいは土倉が多数存在しただけでなく、様々な商工業者が集住していたことが明らかにされている²⁾。発掘調査で発見されている中世の多様な遺構・遺物は、下京を支えた人々の生活の実態を具体的に示す重要な資料といえる。

さらに、江戸時代になると、当町には武家屋敷（藩邸）の存在が古絵図から窺うことができる。『寛永平安町古図』によれば、当町中央に「松平将監殿宿」と記載があり、烏丸通に開く町奥型の武家屋敷が造営されている³⁾。以降、「宿」は藩邸として継承され、松平藩邸から鍋島藩邸として幕末まで存続した。今回の調査区は綾小路からやや内に入った場所であり、江戸時代の遺構についてはこのような藩邸との関わりも考えておく必要がある。

註

- 1) 高橋康夫「京都・四条綾小路」『日本都市史入門Ⅲ 町』東京大学出版会
- 2) 脇田晴子「商業と町座」「土倉と貿易」『京都の歴史3 近世の胎動』京都市 1968年
- 3) 藤川昌樹「徳川期京都における武家屋敷の成立―「宿」の性格をめぐって―」『武家屋敷―空間と社会―』山川出版社 1994年

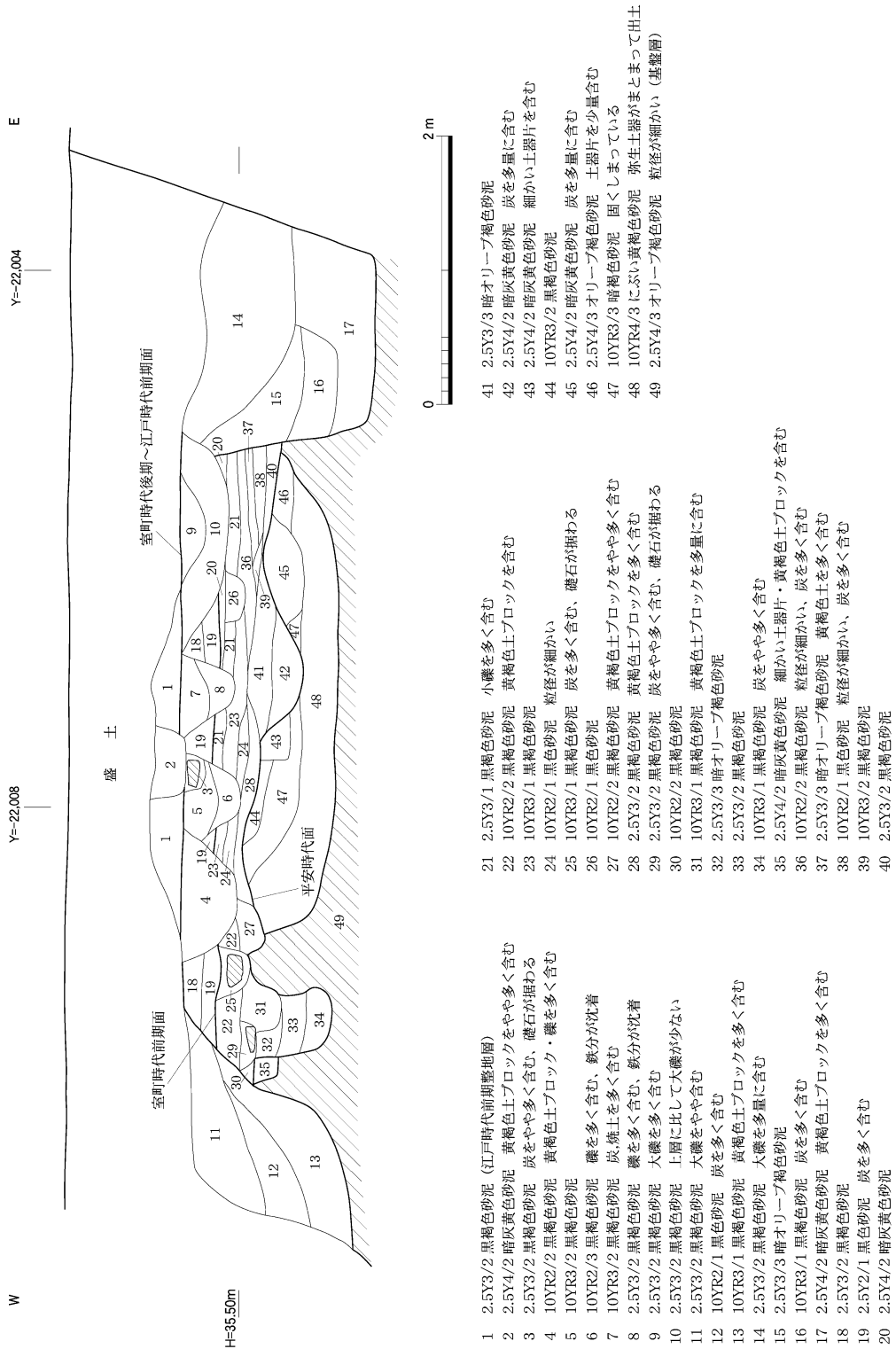
3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5・6)

調査地は現状では現代盛土のため平坦となっており、G.L.-0.8～1 mまでの現代盛土を除去すると、江戸時代の遺構面(第1面)となる。江戸時代遺構面を形成する整地層は、炭や焼土を少量含む黒褐色砂泥で、2区南端では標高36.0 mであるが、1区東半北端では標高35.9 mで北へ緩やかに傾斜する。鎌倉・室町時代の遺構面(第2面)は、1区では約0.2 m掘り下げて検出し2面の生活面を確認したが、2区では標高35.5～35.9 mの範囲で黒褐色砂泥を主体とする整地層が数層堆積しており、土間と想定できる灰褐色～黄褐色泥砂の叩き面も各層で確認している。綾小路に面して、生活面が多く形成されていた様相を窺うことができる。平安時代遺構面(第3面)は、にぶい黄褐色シルト～極細砂層を基盤層としており、標高35.3～35.4 mとなる。弥生時代遺構面(第4面)は、第3面の基盤層であるにぶい黄褐色シルトを約0.1 mほど掘り下げた段階で遺構を検出した。以下では各時代の主な遺構について、下層の遺構面から順に概説する。

表1 遺構概要表

時代	遺 構	備 考
弥生時代	溝969～971 土坑908・909	弥生時代中期の環濠の可能性はある。 弥生時代中期の円形を呈する浅い窪み。
平安時代	建物9・10 溝598 井戸805 井戸373 土坑61・802	綾小路寄りに建てられた10世紀の小建物。 北七門の中心を東西にはしる11世紀の溝。 10世紀の井戸。枿材は腐朽して残らず。 12世紀の井戸。枿痕跡が底部に残存。 12世紀の遺物包含。
鎌倉・ 室町時代	礎石列6・7 礎石列8 炉306 埋甕237・337・363 埋甕群 埋甕抜き土坑群 羽釜埋納土坑634 井戸22・80・419 井戸217・255 地下式倉庫370・450 土坑20・79 土坑108・127・418・471・ 502・538・560・791 土坑426 土坑74・130・216 土坑505	建物の側柱か？ 15世紀の遺物包含。 埋甕群の西を画する南北柱列。 土間に設けられた炉床遺構。 建物内に設置された単独埋甕と考えられる。 整然と並べられた埋甕群。14世紀前半に破却。 埋甕を抜き去った痕跡。15世紀後半の遺物出土。 中世の整地土下で検出した埋納土坑。地鎮か？ 円形石組井戸。15世紀後半から16世紀初頭の土器出土。 井戸材が抜き取られているか？ 15世紀後半から16世紀初頭の土器出土。 建物内に設置された地下室。13世紀の遺物が出土。 土坑20から短刀と青銅鍋、79からは短刀出土。14世紀中頃の土葬墓か。 土器を多量に包含する長方形土坑。13世紀後半から15世紀初頭にわたる。 土坑418は柱穴構造。 埋甕群南北中軸の北側に接した正方形土坑。埋甕群と関係するか。13世紀末に成立。 土取土坑。土坑130では生活廃棄物の処理。15世紀後半から16世紀前半の土器出土。 鉄滓を多量に包含。13世紀に鋳鉄が行われたことを示す。
江戸時代	礎石列1～5 竈263 埋甕15・72 石組溝254・石室208・ 石組遺構30 井戸52・262 土坑236 土坑296	町屋建物を構成する側柱列。 町屋建物の土間面で検出した竈の痕跡。 埋甕15は信楽大甕の便所甕。埋甕72は備前大甕を単独で設置。 町屋建物内に設置された水廻りの施設。 井戸52は井戸材が抜き取られている。井戸262は円形石組井戸。 形状から建物内の地下室か。17世紀前半の土器群が出土。 素掘りの廃棄土坑。17世紀初頭の土器群が出土。



W Y=-22,008 Y=-22,004 E

盛土

室町時代後期～江戸時代前期面

室町時代前期面

H=35.50m

0 2 m

- | | | | | | | |
|----|---------------------------|----|-------------------|--------------------|----|------------------|
| 1 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (江戸時代前期墓地層) | 21 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 | 小礫を多く含む | 41 | 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂泥 |
| 2 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 22 | 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 黄褐色土ブロックを含む | 42 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 3 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 23 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 黄褐色土ブロックを含む | 43 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 4 | 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 24 | 10YR2/1 黒褐色砂泥 | 粒径が細かい | 44 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 5 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 25 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭を多く含む、礫石が散らる | 45 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 6 | 10YR2/3 黒褐色砂泥 | 26 | 10YR2/1 黒褐色砂泥 | | 46 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 |
| 7 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 27 | 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 黄褐色土ブロックをやや多く含む | 47 | 10YR3/3 オリーブ褐色砂泥 |
| 8 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 28 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 黄褐色土ブロックを多く含む | 48 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 9 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 29 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 炭を多く含む | 49 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 |
| 10 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 30 | 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 炭をやや多く含む、礫石が散らる | | |
| 11 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 31 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 黄褐色土ブロックを多量に含む | | |
| 12 | 10YR2/1 黒褐色砂泥 | 32 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | | | |
| 13 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 33 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 炭をやや多く含む | | |
| 14 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 34 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭をやや多く含む | | |
| 15 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | 35 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 細かい土器片・黄褐色土ブロックを含む | | |
| 16 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 36 | 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 粒径が細かい、炭を多く含む | | |
| 17 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 37 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | 黄褐色土を多く含む | | |
| 18 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 38 | 10YR2/1 黒褐色砂泥 | 粒径が細かい、炭を多く含む | | |
| 19 | 2.5Y2/1 黒褐色砂泥 | 39 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | | | |
| 20 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 40 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | | | |

図5 1区東半北壁断面図(1:50)

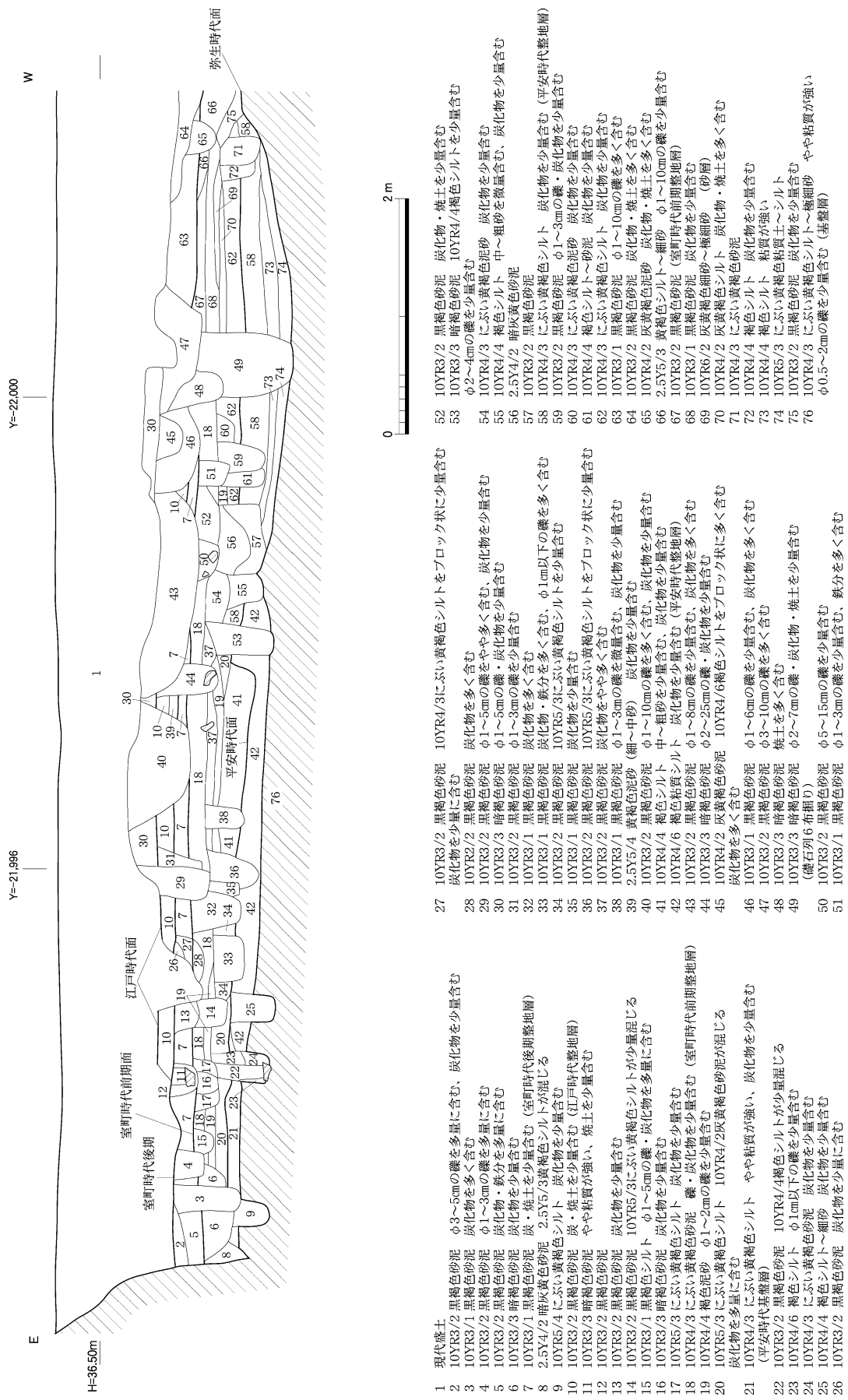


図6 2区南壁断面図 (1:50)

- | | | | |
|----|-------------------|------------------------------|-------------|
| 1 | 現代盛土 | | |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量に含む | 炭化物を少量含む |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭化物を多く含む | 炭化物を多く含む |
| 4 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ1~3cmの礫を多量に含む | 炭化物を少量含む |
| 5 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を多量に含む | 炭化物を多量に含む |
| 6 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | 炭化物を少量含む |
| 7 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭・焼土を少量含む | (室町時代後期整地層) |
| 8 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 2.5Y5/3 黄褐色シルトが混じる | |
| 9 | 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む | (江戸時代整地層) |
| 10 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭・焼土を少量含む | (江戸時代整地層) |
| 11 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | やや粘質が強い、焼土を少量含む | |
| 12 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 13 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 14 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが少量混じる | |
| 15 | 10YR3/1 黒褐色シルト | φ1~5cmの礫・炭化物を多量に含む | |
| 16 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 17 | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む | |
| 18 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 礫・炭化物を少量含む | (室町時代前期整地層) |
| 19 | 10YR4/4 褐色砂泥 | φ1~2cmの礫を少量含む | |
| 20 | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥が混じる | |
| 21 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | やや粘質が強い、炭化物を少量含む | (平安時代基盤層) |
| 22 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 10YR4/4 褐色シルトが少量混じる | |
| 23 | 10YR4/6 褐色シルト | φ1cm以下の礫を少量含む | |
| 24 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 25 | 10YR4/4 褐色シルト | φ1~2cmの礫を少量含む | |
| 26 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量に含む | |
| 27 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む | |
| 28 | 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を多く含む | |
| 29 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ1~5cmの礫をやや多く含む、炭化物を少量含む | |
| 30 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | φ1~5cmの礫を少量含む | |
| 31 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を多量に含む | |
| 32 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭化物を多く含む | |
| 33 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 34 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトを少量含む | |
| 35 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 36 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む | |
| 37 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物をやや多く含む | |
| 38 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | φ1~3cmの礫を微量含む、炭化物を少量含む | |
| 39 | 2.5Y5/4 黄褐色泥砂 | (細~中砂) 炭化物を少量含む | |
| 40 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ1~10cmの礫を多く含む、炭化物を少量含む | |
| 41 | 10YR4/4 褐色シルト | 中~粗砂を少量含む、炭化物を少量含む | |
| 42 | 10YR4/6 褐色粘質シルト | 炭化物を少量含む | (平安時代整地層) |
| 43 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ1~8cmの礫を少量含む、炭化物を多く含む | |
| 44 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | φ2~25cmの礫・炭化物を少量含む | |
| 45 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 10YR4/6 褐色シルトをブロック状に多く含む | |
| 46 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | φ1~6cmの礫を少量含む、炭化物を多く含む | |
| 47 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ3~10cmの礫を多く含む | |
| 48 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 焼土を多く含む | |
| 49 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | φ2~7cmの礫・炭化物を少量含む | (礫石列6布張り) |
| 50 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ5~15cmの礫を少量含む | |
| 51 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | φ1~3cmの礫を多く含む | |
| 52 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物・焼土を少量含む | |
| 53 | 10YR4/3 暗褐色砂泥 | 10YR4/4 褐色シルトを少量含む | |
| 54 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む | |
| 55 | 10YR4/4 褐色シルト | 中~粗砂を微量含む、炭化物を少量含む | |
| 56 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | | |
| 57 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 58 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む | (平安時代整地層) |
| 59 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ1~3cmの礫・炭化物を少量含む | |
| 60 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む | |
| 61 | 10YR4/4 褐色シルト | φ1~10cmの礫を多く含む | |
| 62 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む | |
| 63 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | φ1~10cmの礫を多く含む | |
| 64 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物・焼土を多く含む | |
| 65 | 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 | 炭化物・焼土を多く含む | |
| 66 | 2.5Y5/3 黄褐色シルト | φ1~10cmの礫を少量含む | |
| 67 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | (室町時代前期整地層) | |
| 68 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 69 | 10YR6/2 灰黄褐色細砂 | 炭化物を少量含む | (砂層) |
| 70 | 10YR4/2 灰黄褐色シルト | 炭化物・焼土を多く含む | |
| 71 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む | |
| 72 | 10YR4/4 褐色シルト | 炭化物を少量含む | |
| 73 | 10YR4/4 褐色シルト | 粘質が強い | |
| 74 | 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 | 炭化物を少量含む | |
| 75 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭化物を少量含む | |
| 76 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | φ0.5~2cmの礫を少量含む | (基盤層) |

(2) 弥生時代の遺構 (図7)

弥生時代の遺構面においては、東北東から西南西へ傾斜する溝を3条(溝969～971)と、浅い窪み状の土坑2基(土坑908・909)を検出した。

溝969・970(図8、図版1) 2区北半のほぼ同一場所に掘削された2条の溝で、溝969が溝970を切って成立している。溝969は幅2.2～2.3mで、底部の標高は東端で約34.8m、西端で約34.5mである。溝970は幅が不明だが溝969と同規模と考えられ、傾斜も西へ緩やかに傾斜する。両溝ともに埋土の中層に砂粒を多く含んでおり、流水堆積の形跡も一部認められるが、全体としては滞水はなく自然堆積による埋没である。遺物は下層から中層にかけては弥生時代中期の土器片や石器が出土し、最上層からは庄内式併行期の土器片が少量出土した。

溝971(図8、図版1) 2区南半で検出した溝である。溝969・970とほぼ並行するが、調査区中央付近で南西へやや屈曲する。幅は約2.3～2.5mで、底部の標高は東端が約34.4m、西端が約34.2mと、西に緩やかに傾斜する。東半部では断面逆台形の形状を呈している。規模や堆積状況は溝969・970と共通する。堆積状況は砂粒を多く含む流水堆積が部分的に認められるが、滞水は認められず自然堆積である。また、包含層からの出土遺物は少ないが、西半部の上層で確認した黒～黒褐色砂泥の窪み状堆積(図8D-D'ライン 6～9層)から弥生時代中期の土器がややまとまって出土し、最上層からは庄内式併行期の土器片が少量出土した。なお、西半部では溝を広く覆うように、浅く不整形な落ち込み状堆積が認められたが、出土遺物はほとんど認められなかった。

土坑908・909(図版1) 溝969・970の北側で検出した、平面円形を呈する2基の浅い土坑である。土坑908は西半を攪乱によって壊されているが、ともに径約4m、深さ約0.2mの規模をもつ。オリーブ褐色シルトが堆積し、埋土中から若干の弥生時代中期の土器片が出土した。検出段階では平面形状から竪穴住居跡の可能性も想定していたが、側壁が立ち上がりず柱穴も検出できないことから、現状では落ち込み状土坑として判断している。

(3) 平安時代の遺構 (図9)

平安時代中期と後期の遺構があるが、遺構数は多くない。中期の遺構は掘立柱建物2棟(建物9・10)と東西溝1条(溝598)、井戸1基(井戸805)を検出している。後期の遺構は井戸1基(井戸373)と土坑2基(土坑61・802)を検出している。そのほか、小ピットを数基検出しているが、遺構としてのまとまりは認識できなかった。

建物9(図10、図版2) 2区南東部で検出した東西2間以上、南北1間以上の掘立柱建物である。建物の北半は攪乱のため柱穴を検出できず、東も調査区外へ展開する。東西の柱間が約2.4m(8尺)等間なのに対して、南北柱間が約2.7m(9尺)と広いことから、南北2間の東西棟建物の身舎南西部である可能性が高い。削平のために柱穴は深さ0.1mほどしか残存していないが、柱掘形は一辺0.5～0.6mの隅丸方形を呈し、柱径は直径0.15～0.2mで、やや小型の建物である。柱穴926から、10世紀の土師器皿片が出土している。

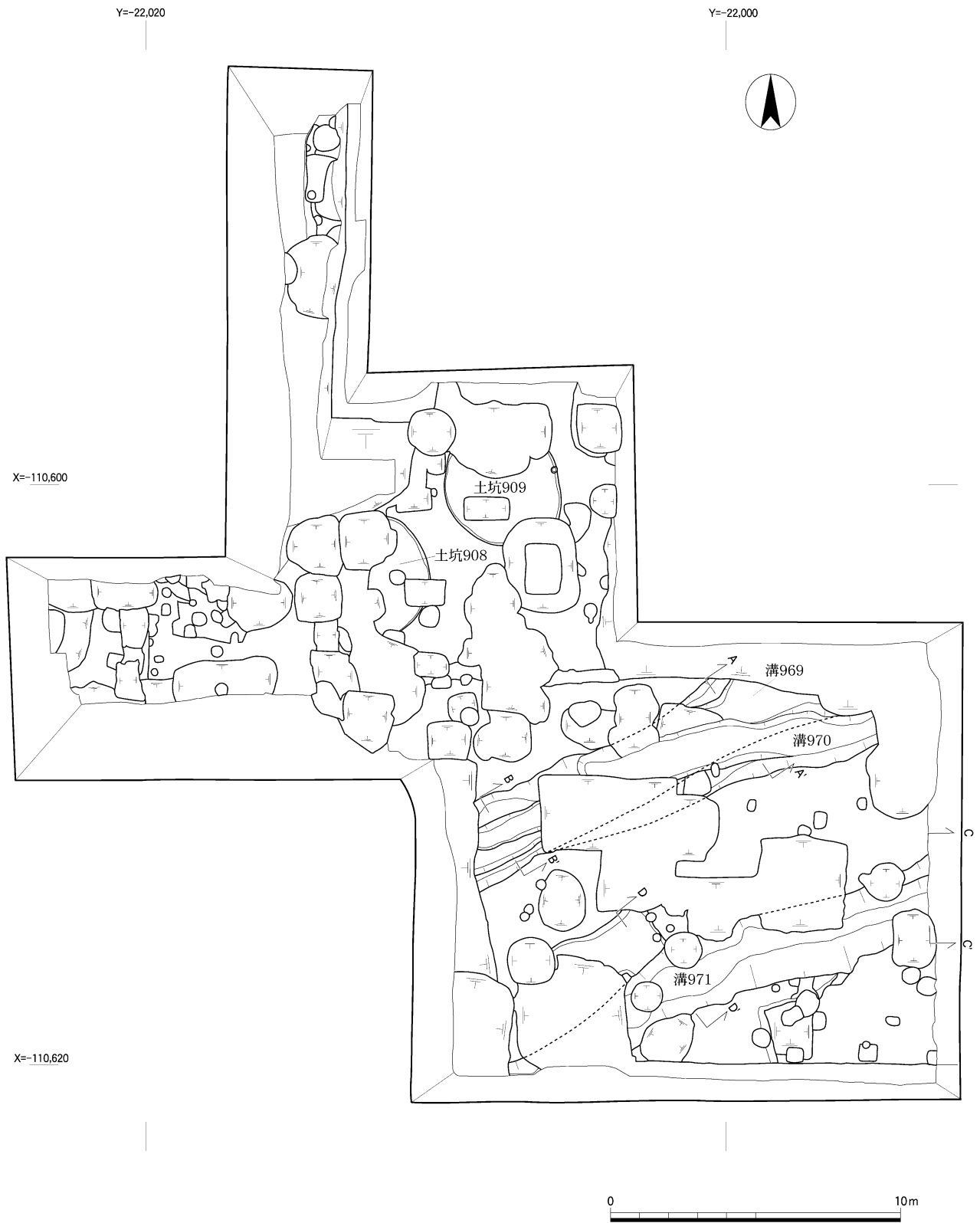
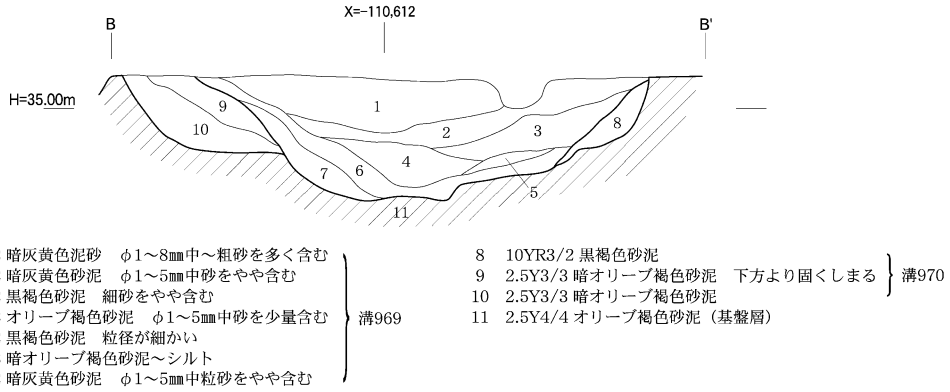
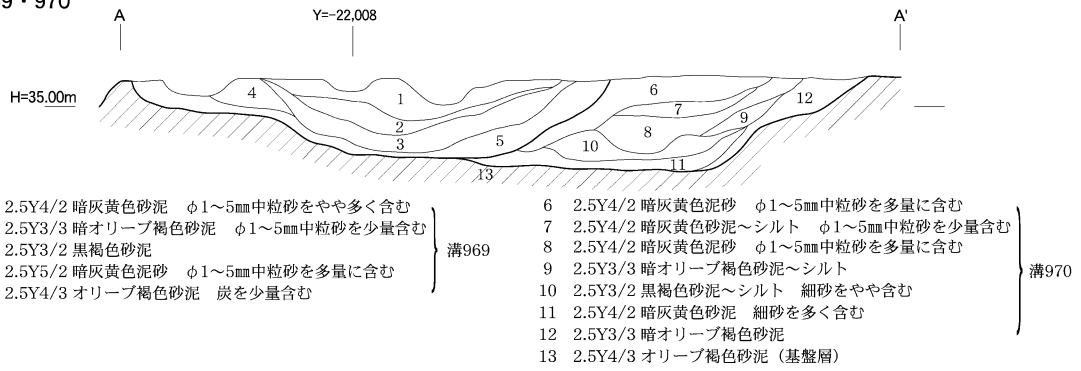


图7 第4面(弥生時代)遺構平面図(1:200)

溝969・970



溝971

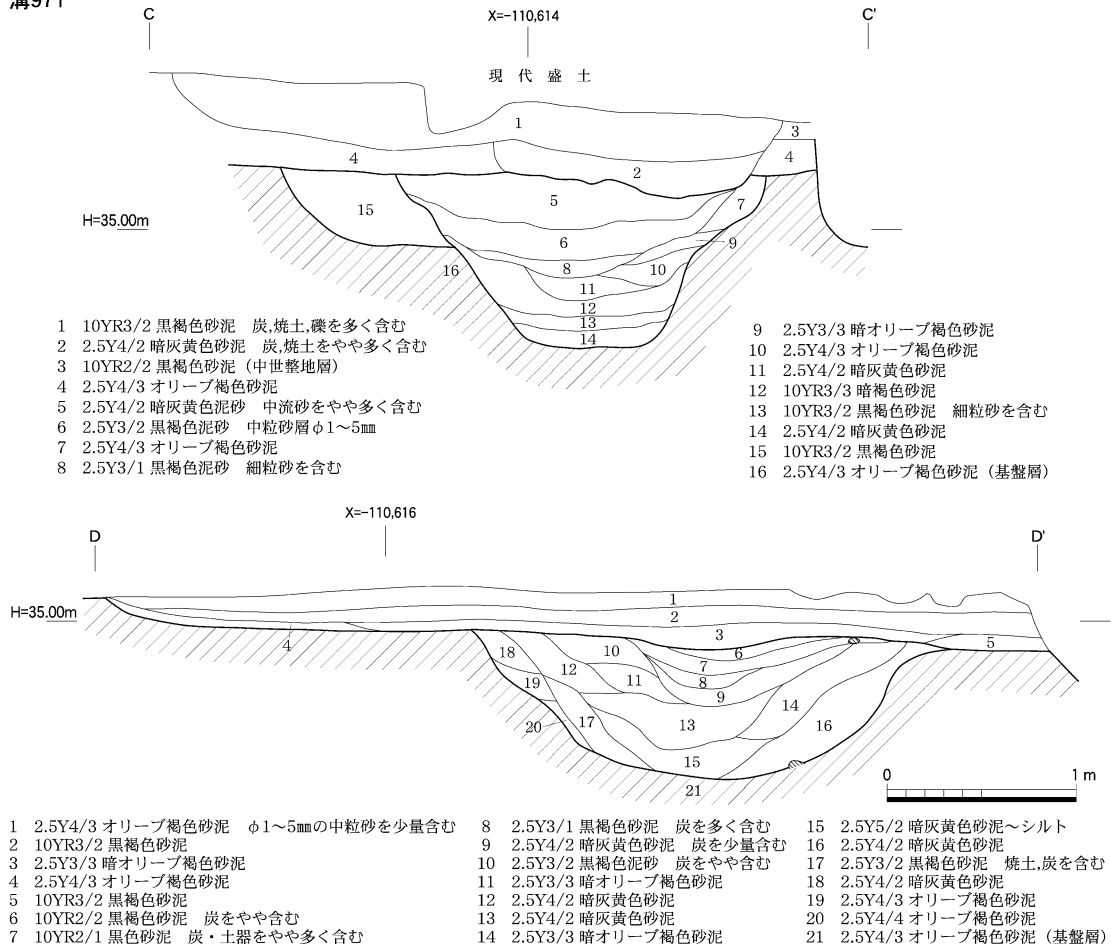


図8 溝969・970、溝971断面図(1:40)

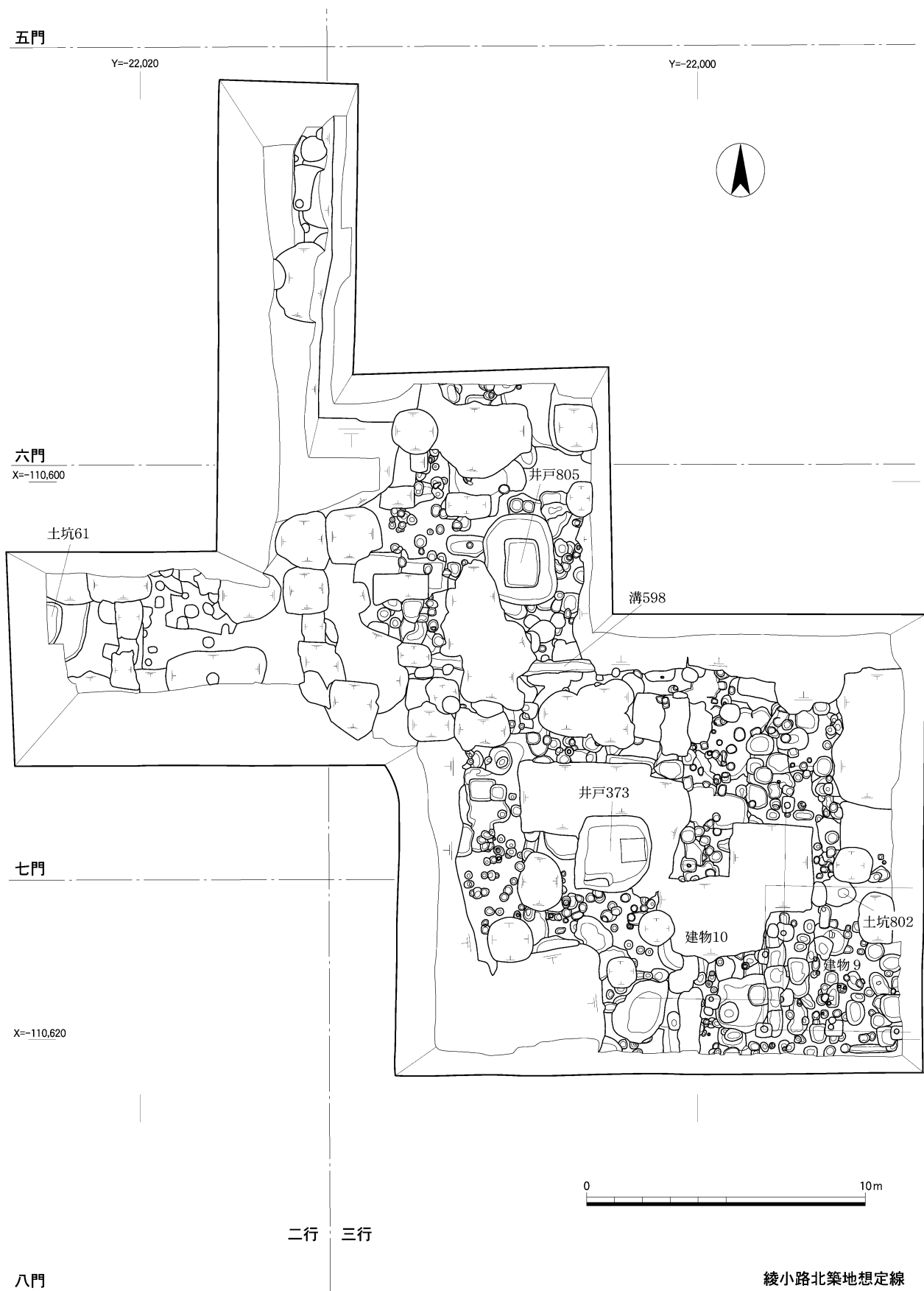


図9 第3面（平安時代）遺構平面図（1：200）

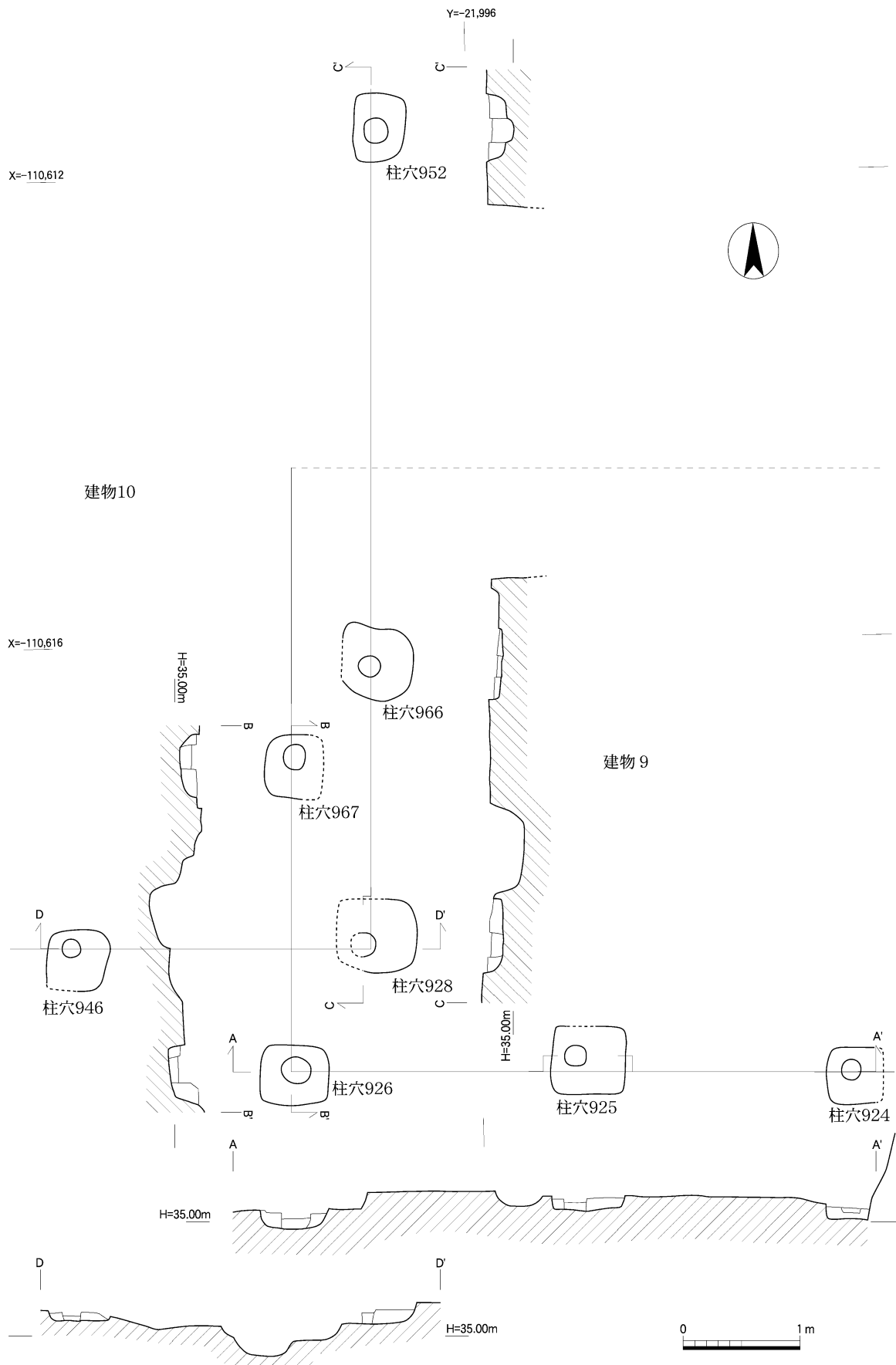


图 10 建物 9・10 实测图 (1 : 50)

建物 10 (図 10) 建物 9 の西端と重複して検出した東西 1 間以上、南北 3 間の掘立柱建物である。建物 9 とは逆に、南北の柱間が 2.4 m (8 尺) 弱に対して、東西柱間が約 2.55 m (8.5 尺) と広い。2 間×3 間の南北棟建物と想定できるが、西側柱はすべて攪乱のため壊されて確認できなかった。また、北妻中央部の柱も削平のため検出できていない。削平のために柱穴は深さ 0.1 m ほどしか残存していないが、柱掘形は一辺 0.4 ~ 0.6 m の隅丸方形を呈し、柱径は直径 0.15 ~ 0.2 m で、建物 9 とほぼ同規模である。

溝 598 2 区北西部で検出した、断面逆台形を呈する素掘りの東西溝である。幅約 0.5 m、深さ約 0.2 m で、8 m 分を検出しており、さらに東西に延長する。埋土にはにぶい黄褐色砂泥が堆積し、11 世紀の土器類のほか備前産軒平瓦が出土した。北七門の南北中央に位置しており、宅地内を区画する溝と考えられる。

井戸 805 溝 598 の北 2 m の地点で南肩を検出した井戸である。掘形は南北約 3.2 m、東西約 2.5 m の隅丸長方形を呈し、中央部が深くなる。中央部の形状も南北約 1.8 m、東西約 1.2 m と長方形を呈している。掘形部の深さは検出面から約 0.5 m であるが、中央部の深さは検出面から約 2 m であった。平面プランが長方形を呈することからやや疑問点も残るが、木柵材片が出土しており、現状では方形木柵組井戸の木柵が抜き取られたと考えるのが妥当であろう。底部の標高は約 33.3 m である。10 世紀の土師器皿や近江系緑釉陶器・白色土器などが出土している。

井戸 373 2 区中央部で検出した方形木柵井戸である。掘形は東西約 2.7 m、南北約 2.7 m の隅丸正方形を呈し、深さは検出面から約 2.9 m であった。砂礫を多く含む黒褐色砂泥が層位的に堆積しており、井戸柵は腐朽して全く残存していなかったが、底部東寄りにおいて一辺約 0.9 m の方形木柵の痕跡を確認した。井戸底部の標高は約 32.6 m である。埋土から 12 世紀の土器類が出土した。

土坑 61 1 区西端部で検出した浅い不整形土坑である。現状での検出規模は東西 1.5 m、南北 2 m で、深さは 0.15 ~ 0.2 m と非常に浅く西に向かって傾斜する。土坑の東端部を検出したのみで、大半は西調査区外に展開する。埋土は炭を少量含むオリーブ褐色砂泥で、多くの土器類を包含していた。出土土器の大半は土師器皿で 12 世紀の様相を呈し、白磁碗や白磁合子などの輸入陶磁器も出土している。

土坑 802 (図版 2) 2 区南東部で検出した播り鉢状の土坑である。平面プランは東西約 1.2 m、南北約 1.1 m のいびつな楕円形を呈し、深さは約 0.7 m である。下層に暗灰黄色砂泥、上層に暗オリーブ褐色砂泥が堆積し、最上層に須恵器甕が土圧で潰された状態で出土した。下層から出土した土師器皿は 12 世紀である。

(4) 鎌倉・室町時代の遺構 (図 11)

鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は、当調査で最も多く検出しており、細かくみれば遺構面も数面に分かれる。ただ、度重なる整地のため、細かい生活面に対応させて厳密に遺構面を掘り分けることは困難であった。検出した主な遺構は、礎石列 3 列 (礎石列 6 ~ 8)、炉 1 基 (炉

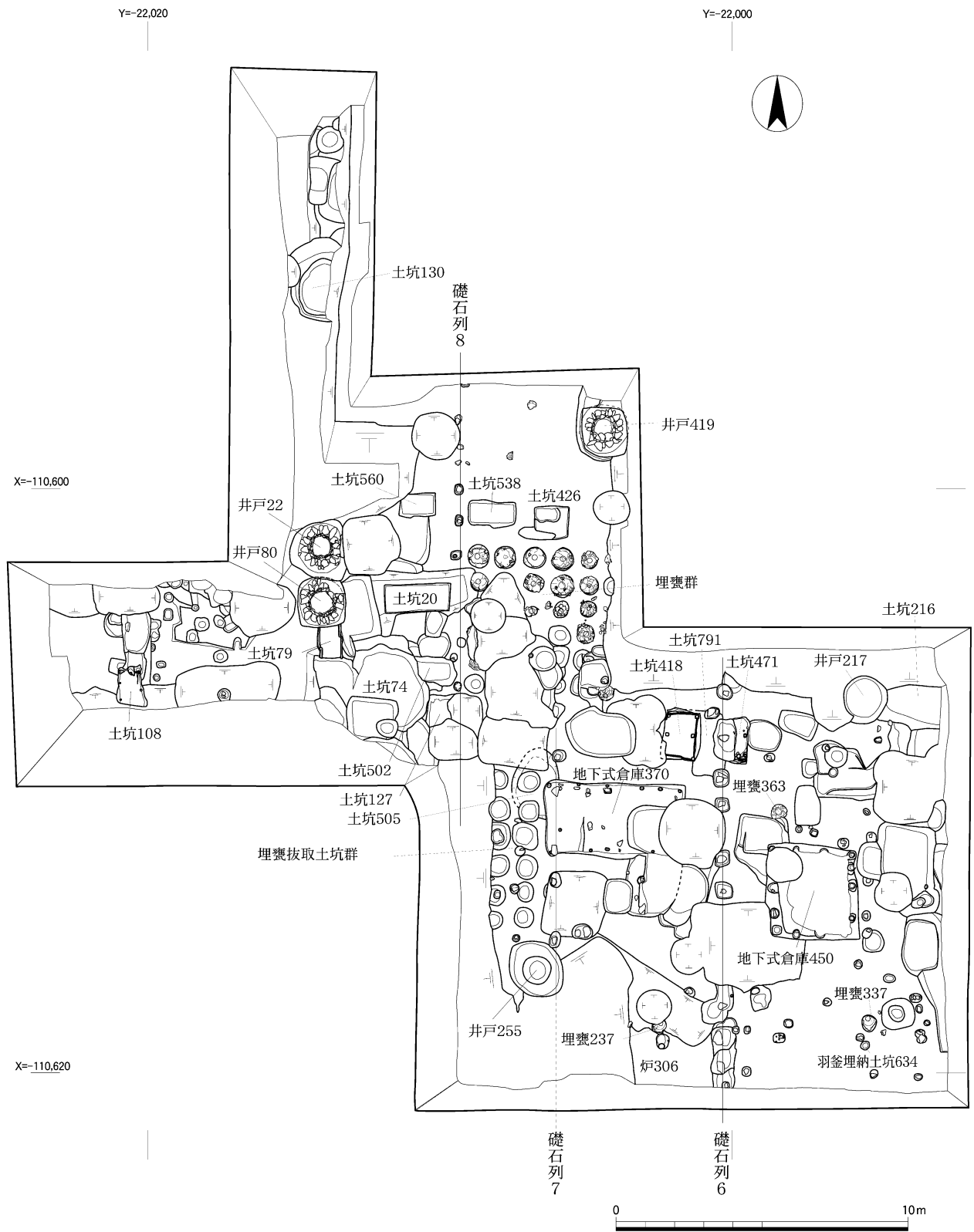


図11 第2面(鎌倉・室町時代)遺構平面図(1:200)

306)、単独埋甕3基(埋甕237・337・363)、埋甕群、埋甕抜取土坑群、羽釜埋納土坑1基(土坑634)、井戸5基(井戸22・80・217・255・419)、地下式倉庫2基(地下式倉庫370・450)、方形土坑11基(土坑20・79・108・127・418・426・471・502・538・560・791)、不整形土坑(土坑74・130・216)である。それぞれの遺構群の時期は、遺物の様相からさらに細分できるが、ここでは混乱を避けるため遺構の性格別に報告を行い、各遺構の時期的変遷は5章のまとめで改めて提示する。

礎石列6(図12、図版5) Y=-22,000 ラインのやや西で検出した南北方向の柱列である。北端と南端は調査区外に延長すると考えられる。柱位置に、一辺0.5～0.6mのややいびつな方形掘形を0.4～0.5mの深さで掘削し、底部に0.3～0.5mの平石を据えている。南端部では掘形は布掘り状に繋がり、深いところで約0.8mと深くなっている。礎石間から想定できる柱間は、1～1.5mと狭い。後述する礎石列7と共存して建物の壁面を構成したと考えられる。出土遺物は15世紀まで下る土師器皿が出土しており、南壁断面の観察でも、室町時代後期面から掘削していることがわかる。

礎石列7(図12) Y=-22,006 ラインで検出した南北方向の柱列である。地下式倉庫370を切って成立する。北端はX=-110,609 ラインで検出した柱穴で、南端は幕末の攪乱土坑で壊されて不明である。柱位置に、0.5～0.6mの楕円形を呈する掘形を、0.5～0.6mの深さで掘削し、底部に0.2～0.3mの平石を据えている。礎石間から想定できる柱間は、1～1.2mと狭い。礎石列6と構造が類似しており同一建物の礎石列と考えられるが、礎石がやや小振りでも北への延長も短いため、建物の西側柱とは考えにくい。礎石列6との距離は約5.6mである。出土遺物は15世紀まで下る土師器皿が出土している。

礎石列8(図版6) Y=-22,009.4 ラインで検出した南北方向の柱列である。北端と南端は調査区外に延長すると考えられる。柱位置に、0.3～0.4mの楕円形の掘形を0.2～0.3mの深さで掘削し、底部には0.2～0.3mの平石を据えている。ただ、柱の腐朽に対応するため礎石上に陶甕片を重ねる柱穴が存在する一方、平石を据えていない柱穴も認められる。礎石間から想定できる柱間が1～1.2mと狭い点は、礎石列6・7と共通するが、柱穴規模は小さい。層的に前後関係は把握できないが、後述する埋甕群の西に接して設けられていることから、埋甕群の西を画する柱列と想定できる。

炉306(図13、図版5) 2区南端部、礎石列6から西へ約2mの地点で検出した炉床遺構である。平面形は東西約0.55m、南北約0.65mの楕円形で、深さは約0.08mの浅い窪み状を呈する。焼土や炭を多量に含む褐灰～黒褐色土が2層堆積し、底部は被熱で固く締まっていた。なお、当遺構周辺から礎石列6にかけて、にぶい黄褐色泥砂で意図的に整地されており、土間空間として利用されていた状況が窺える。

埋甕237(図13、図版5) 炉306の北側に接して検出した単独の埋甕遺構である。炉306を切って成立している。上部はほとんど削平を受けており、検出面から約0.2mほどで掘形底部となる。常滑大甕の底部が据わった状態で出土した。おそらく、水甕として利用された遺構と推定できる。

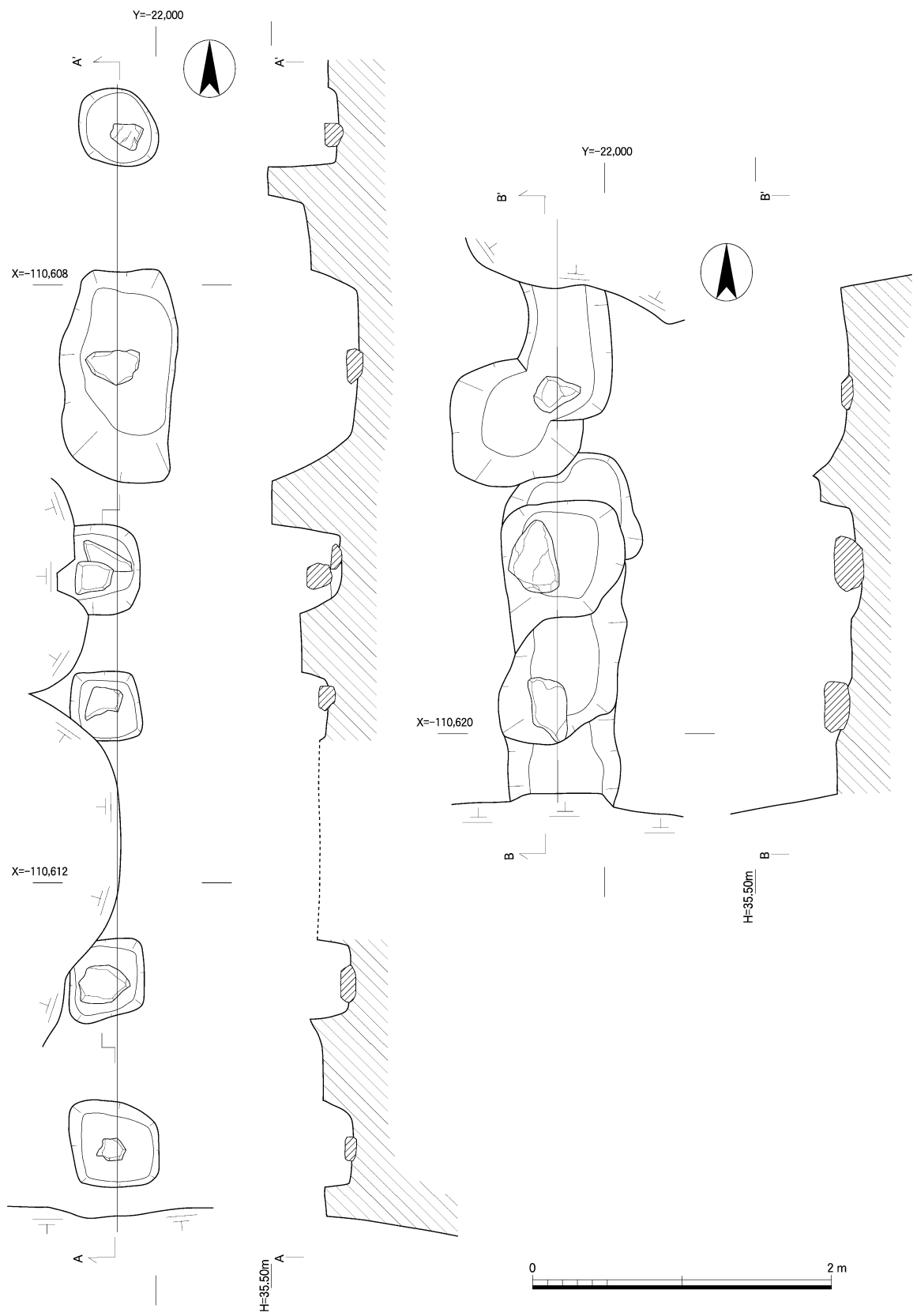


图 12 礎石列6実测图 (1 : 40)

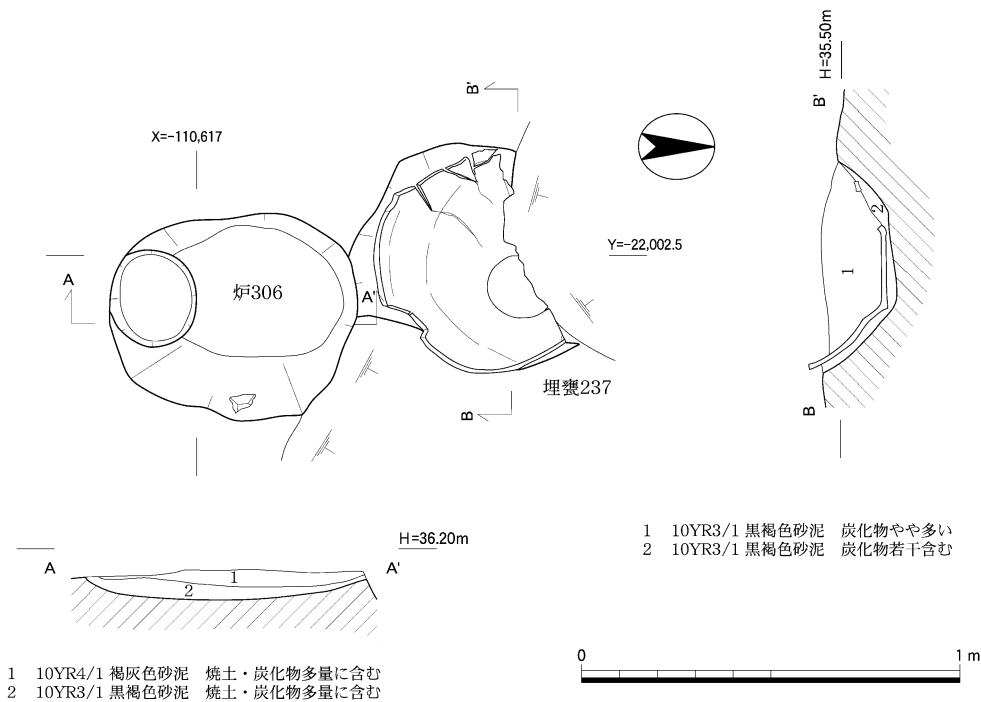
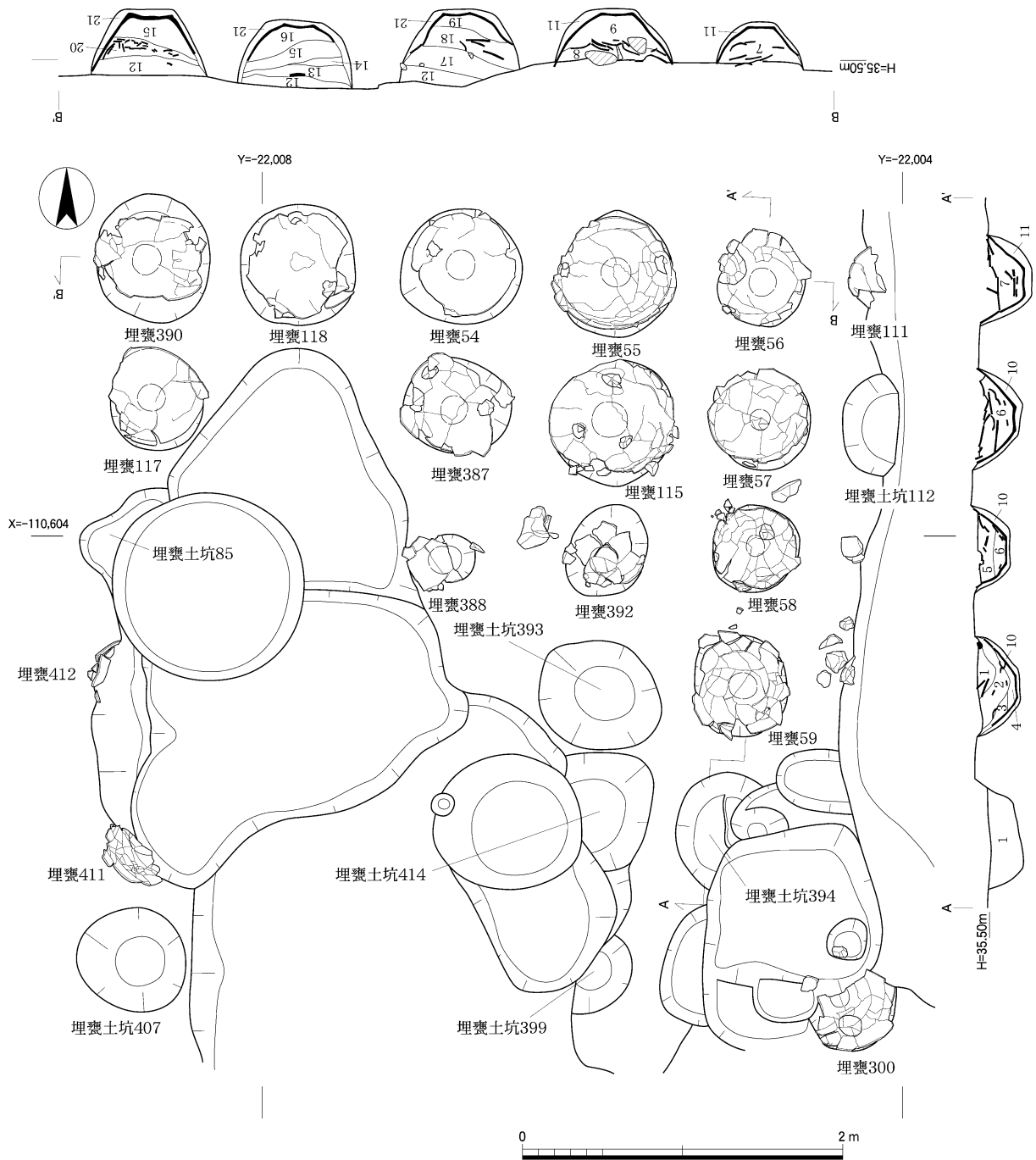


図 13 埋糞 237・炉 306 実測図 (1 : 20)

埋糞 337・363 礎石列 6 の東側で検出した単独の埋糞遺構である。埋糞 337 は 2 区南東部、礎石列 6 から東へ約 5 m の地点で検出した。掘形は深さ約 0.15 m しか残存しておらず、据えられた状態で常滑大甕の底部だけが出土している。埋糞 363 は X=-110,611 ライン上、礎石列 6 から東へ約 2 m の地点で検出しており、常滑大甕の底部が約 0.2 m の深さで残存し据わっていた。

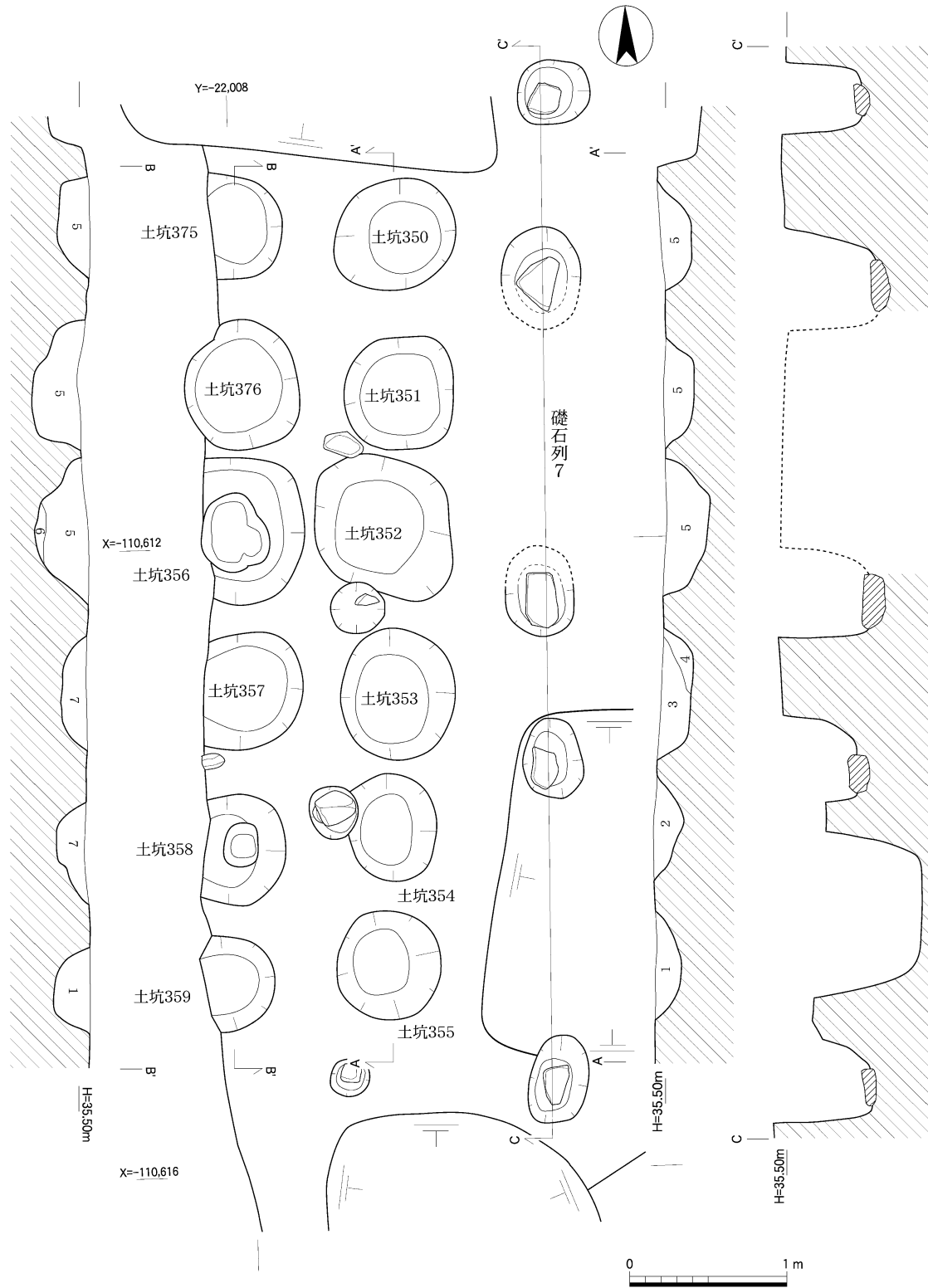
埋糞群 (図 14、巻頭図版 1、図版 3・4) 調査区中央、礎石列 8 の東に隣接して検出した埋糞群である。東端部は既存建物の基礎掘削、南西部は後世の土取穴で破壊されていたが、南東隅の埋糞 300 を確認できたため、東西 6 列、南北 6 列の 36 口の甕が整然と据えられていたことが判明した。甕はすべて常滑大甕で、南半の一部は甕が抜き取られていたが、北半はすべて甕底部が残存する。埋糞の間隔は、南北列では底部心々で約 0.9 m の等間隔、東西列では北から 2 列目と 3 列目および 3 列目と 4 列目の底部心々距離が約 0.8 m であり、他の底部心々距離は約 0.9 m である。これらの事実から、東西列北から 3 列目の大甕 6 口は肩部最大径が小さく約 0.7 m、他は肩部最大径が約 0.9 m の大甕だったと推測できる。残存する大甕はすべて、底部に棒状の金具で内側から突き割った痕跡が認められる。中でも埋糞 115・118・387 では、破壊痕跡が 4 箇所も確認でき、埋糞群は強制的かつ徹底的に破却された様子が窺える。また、破却後に多くの土器類を廃棄した甕 (埋糞 57・58・59・300・390) も確認でき、これらの土器群から 14 世紀前半に廃棄されたと考えられる。

埋糞採取土坑群 (図 15) 2 区西端部で検出した規則的に並ぶ土坑群である。直径 0.6 ~ 0.8 m の平面円形を呈する土坑が、東西 6 列、南北 2 列整然と配置されている。西への延長部は既存建物の基礎掘削で失われているが、調査区外にまだ数列並んでいたと想定している。断面は掘り鉢状で、深さ 0.15 ~ 0.3 m ほど、土坑間の心々距離は約 1 m である。この土坑群は配置から埋糞据



- | | | | | | |
|----|----------------|--------------------------------|----|----------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 炭, 焼土を少量含む, ϕ 1~3cmの礫少量含む | 12 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 焼土を多く含む | 13 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 炭を少量含む |
| 3 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 粘質が強い | 14 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭を少量含む |
| 4 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 粘質が強い | 15 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 粘質が強い |
| 5 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | やや粘質が強い | 16 | 10YR4/1 褐灰色砂泥 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む |
| 6 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | ϕ 0.5~1cmの礫を少量含む | 17 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭, 焼土を多く含む |
| 7 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 炭を少量含む | 18 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | |
| 8 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | ϕ 1~2cmの礫を含む | 19 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | やや粘質が強い |
| 9 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む | 20 | 10YR1.7/1 黒色砂泥 | 炭を多く含む |
| 10 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | ϕ 1~5cmの礫少量含む, 炭を少量含む | 21 | 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 | ϕ 1~5cmの礫少量含む, 炭を少量含む |
| 11 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 | ϕ 1~3cmの礫少量含む, 炭を多く含む | | | |

図14 埋葬群実測図 (1:40)



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭化物・焼土・鉄分を多く含む
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~2cmの礫・炭化物・焼土を少量含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 4 10YR4/1 褐灰色砂泥 粘質が強い、炭化物・焼土を少量含む
- 5 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭化物・鉄分を多く含む
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質が強い
- 7 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭化物を多く含む

図 15 埋甕抜取土坑群・礎石列 7 実測図 (1 : 40)

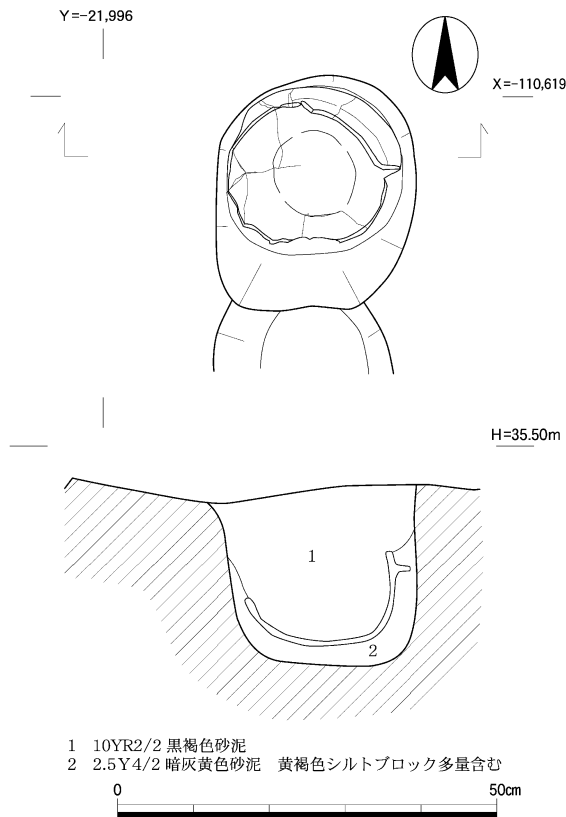


図 16 羽釜埋納土坑 634 実測図 (1 : 10)



図 17 羽釜埋納土坑 634 (東から)

え付け痕跡と考えられ、土坑間の距離は肩部最大径 1 m 弱の大甕を並べるのに適当な距離といえる。甕片がまったく出土しないため、埋甕は抜き去られたのであろう。なお、土坑 351・353・356・358 から 15 世紀後半の土器片が出土しており、廃棄時期の一端を示している。また、礎石列 7 が東に接しており、出土遺物からみても同時共存していた可能性がある。

羽釜埋納土坑 634 (図 16・17) 埋甕 337 の南で検出した小土坑である。直径 0.25 ~ 0.3 m の円形ピットを穿ち、中に正置の状態で瓦質土器の羽釜を据えていた。土坑の深さは検出面から約 0.25 m である。なお、平面プランは中世生活面の整地層を除去した段階で確認しており、建物の地鎮に関わる遺構と考えられる。

井戸 22 (図 18、図版 6) 1 区中央で検出した円形石組井戸である。掘形は長径約 1.7 m のいびつな円形を呈し、底部は検出面から深さ約 2.2 m である。底部には幅約 0.2 m の横板によって一辺 0.6 m の方形枅を組み、その上に長さ 0.2 ~ 0.3 m の石を木口積みで円形に積み上げる。石組は高さ約 1.1 m 残存しており、石組の内径は底部で約 0.6 m、上部で約 0.7 m であった。底部の標高は約 32.6 m である。埋土より 15 世紀後半から 16 世紀初頭の土師器が出土しており、明代の染付皿や青磁などもみられる。井戸 80 を切って成立しており、井戸 52 に掘形東端を壊されている。

井戸 80 (図 18、図版 6) 井戸 22 の南に隣接して検出した円形石組井戸である。掘形は長径 1.35 m の隅丸方形を呈し、底部は検出面から深さ約 2 m である。底部には高さ約 0.3 m、直径約 0.5 m の円形枅を据え、その上に長さ 0.2 m 前後の石を木口積みで円形に積み上げる。石組は高さ約

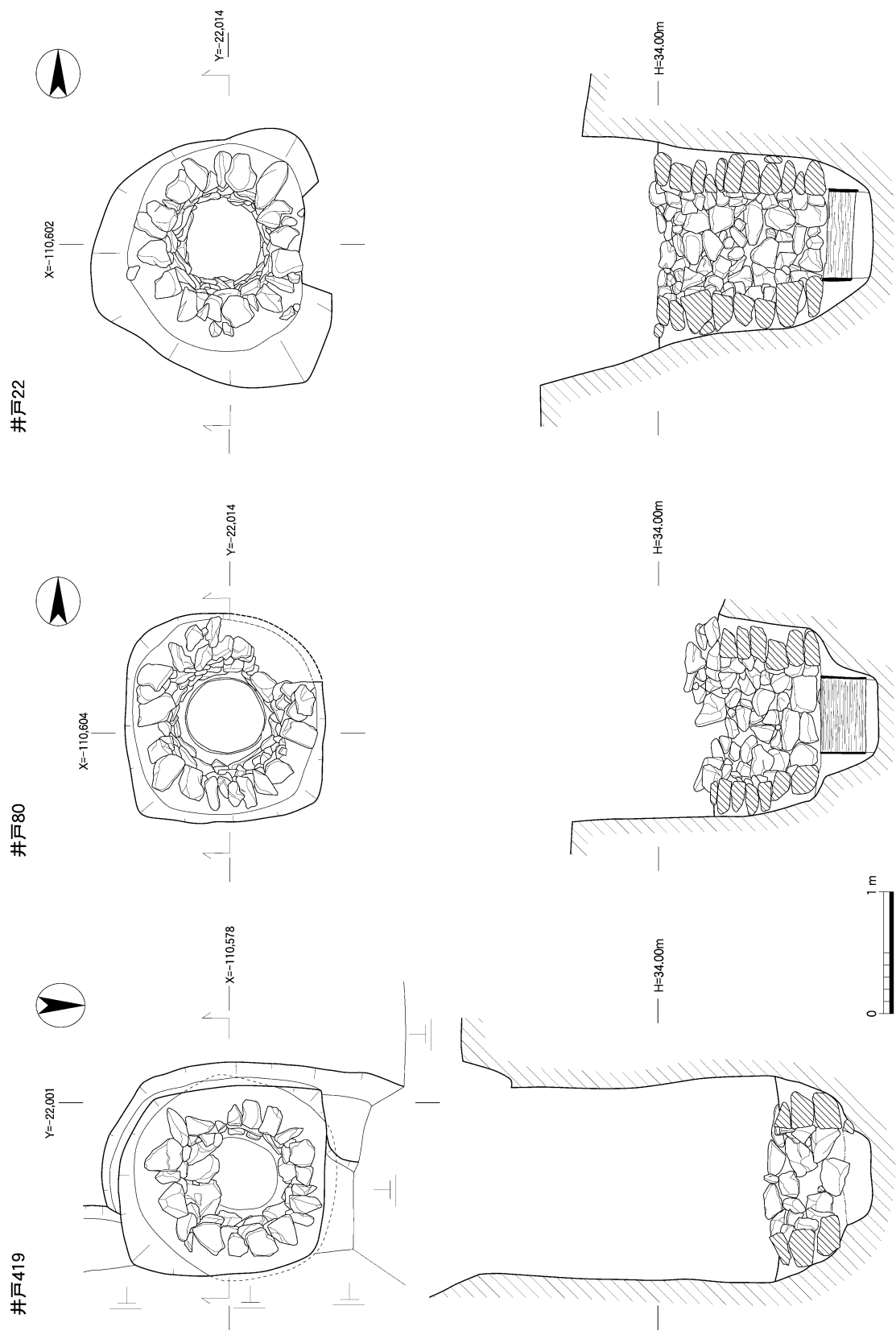


图 18 井戸 22・井戸 80・井戸 419 实测图 (1 : 50)

0.8 m 残存しており、石組の内径は底部で約 0.65 m、上部で約 0.8 m であった。底部の標高は約 32.6 m で、井戸 22・52 と共通する。出土遺物は少ないが、15 世紀の土器が出土する。井戸 22 によって掘形北端を壊されている。

井戸 217 2 区北東隅で検出した井戸である。直径約 1.6 m、深さは検出面から約 2.35 m、標高約 33.3 m である。井戸枠材は残存しておらず、元来素掘り構造なのか枠材が抜き取られているのか不明である。出土土器は 15 世紀後半から 16 世紀初頭である。

井戸 255 2 区南西部で検出した井戸である。掘形は径約 1.9 m の円形を呈するが、井戸枠は残存しない。ただ、底部中央に径約 1 m の窪みが認められることから、井戸枠材（石材か）は抜き取られた可能性がある。底部は検出面から深さ約 2.8 m で、標高約 32.75 m である。出土遺物は少ないが、15 世紀後半から 16 世紀初頭の土器が出土した。

井戸 419 (図 18) 1 区北東隅で検出した石組井戸である。掘形は径約 1.4 m の隅丸方形を呈し、底部は検出面から深さ約 2.7 m である。底部には深さ約 0.15 m の窪みを設け、その上に長さ 0.2 ~ 0.25 m の石を木口積みで円形に積み上げる。石組は高さ約 0.4 m ほどしか残っておらず、内径は 0.6 m 前後で、底部

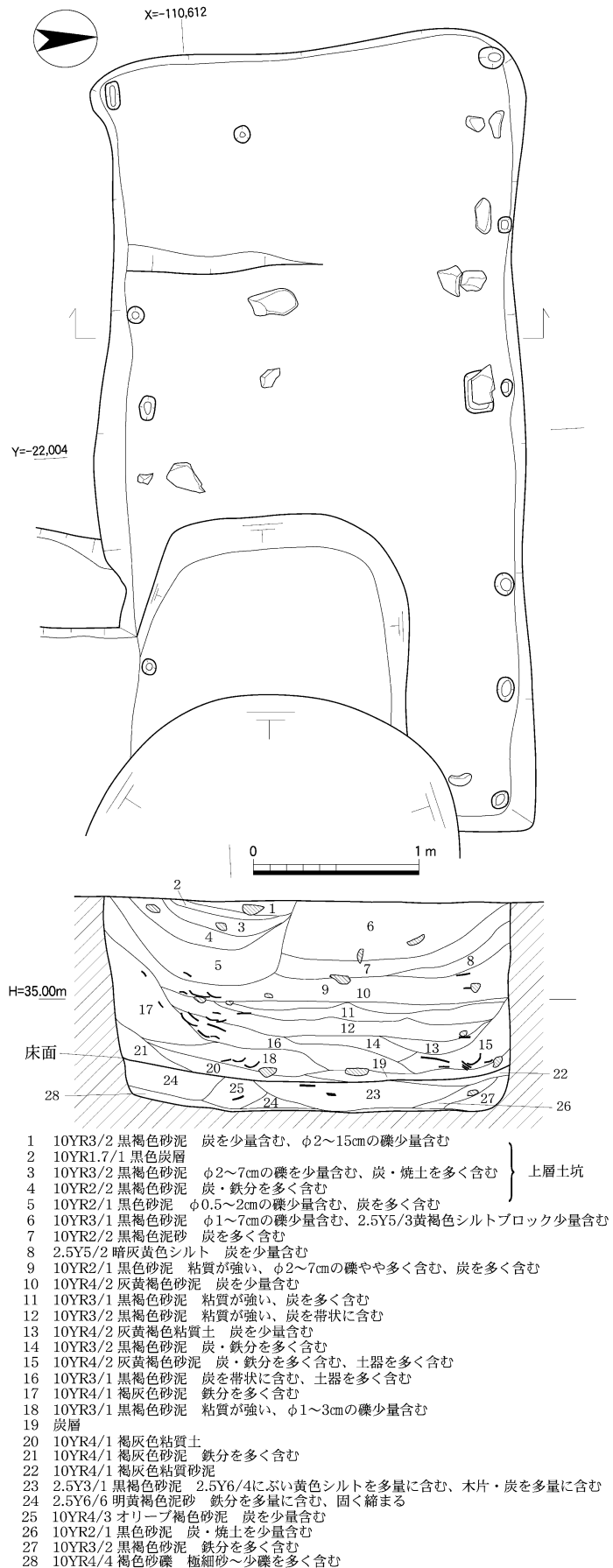


図 19 地下式倉庫 370 実測図 (1 : 40)

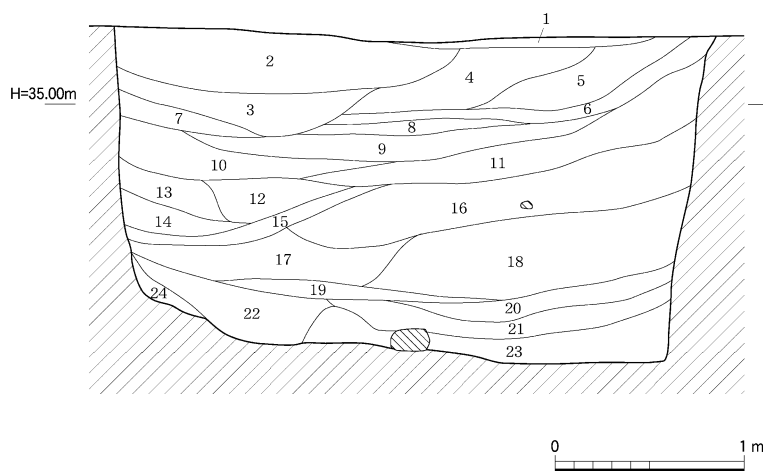
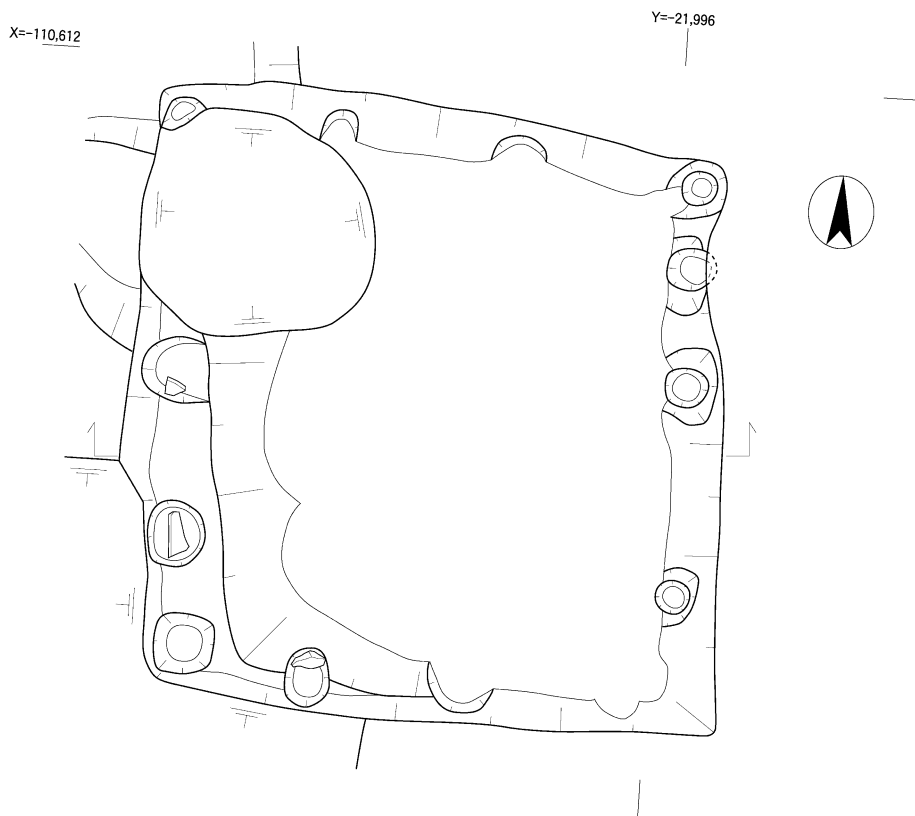
南側の石が内側にせり出している。底部の標高は約 32.6 m で、井戸 22・52・80 と共通する。出土遺物は少ないが、15 世紀後半から 16 世紀初頭の土器が出土した。

地下式倉庫 370 (図 19、図版 7) 2 区中央部のやや北西寄りで見出した大規模な方形土坑である。南東隅部は近代の井戸によって壊されているが、東西約 4.8 m、南北約 2.6 m の東西方向の長方形プランをもつ。検出面から深さ約 1.25 m まで掘り下げ、底面から 0.2 m 前後の厚さで床土を貼って叩き締め、床面を形成する。床土の一部である黒褐色砂泥層には、木片・炭が多量に含まれており、刀子形木製品が出土した。床面は検出面から約 1.1 m で、北壁沿いと南壁沿いに壁板を固定したと想定できる杭穴が並んでいた。また、杭穴列の前に根太を受けるための礎石を据えており、その一部と考えられる礎石が残っていた。おそらく、床は板貼りだったと想定できる。土坑内の堆積状況は、最下層に炭層が薄く堆積するが、その上は黒褐色砂泥や灰黄褐色砂泥によって人為的に埋め戻した状態で堆積している。礎石列 7 の柱穴は、埋め戻し後に形成されている。なお、埋土中からは 13 世紀後半の土師器類とともに、輸入陶磁器や瓦器・石硯・砥石などが、一括して廃棄された状態で出土した。

地下式倉庫 450 (図 20、図版 7) 2 区中央やや東寄りで見出した大規模な方形土坑である。東西約 3.2 m、南北約 3.3 m と、ほぼ正方形の平面プランをもつ。深さは検出面から約 1.7 m で、壁沿いに直径 0.2 ～ 0.3 m の柱痕跡が残る。柱穴は四隅柱のほか、東西壁に 3 本、南北壁に 2 本認められるが、柱間は一定でない。廃棄段階には地下式倉庫 370 と同様に、順次人為的に埋め戻されており、最上層は灰黄褐色砂泥によって薄く整地して地固めしていた。埋土からは 13 世紀前半の土師器や輸入陶磁器などが出土している。

土坑 20 (図 21、巻頭図版 2、図版 8) 1 区中央部で見出した東西方向の長方形土坑である。東西約 2.2 m、南北は東端で 0.7 ～ 0.8 m、西端で約 1 m、深さは検出面から約 0.2 m である。底部壁際には横板を留める木杭痕跡が残されており、断面観察からも壁面が板壁構造になっていたことがわかる。上半のほとんどが攪乱によって削平されているが、堆積は大きく 2 層に分かれ、上層に炭化物を多量に含む黒色粘質シルト（以下炭層とする）が堆積し、下層の黒褐色砂質土には多量の土師器皿が埋納されていた。最下層は西半がやや深くなっており、この窪んだ部分に黒褐色粘質シルトが堆積する。土師器皿はほとんどが正位置に据えられており、土師器群に混じって中央部に青銅製鍋と鉄製蓋、東端部に輸入白磁皿、南壁西寄りの位置に鉄製短刀が置かれていた。鉄製短刀は当初は南北方向に水平に置かれていたが、後に中央部が凹んだため北西下に傾いたようである。また、青銅製鍋の傍らからは桃の種が出土しており、その他埋土内から水晶やガラス製の玉、銅銭などが出土している。

土坑 79 (図 22、図版 9) 井戸 80 の南に接して見出した南北方向の長方形土坑である。北半が井戸 80 に壊されているため、全長は不明であるが、見出した南北の長さは約 1.3 m、東西幅は 0.8 m 前後である。検出面から約 0.5 m まで掘削した後、約 0.2 m の床土を貼って床面を形成する。床面の東西壁際で壁溝状を呈する横板痕跡を確認しており、南端は床土より上部が土取穴で壊されているが、掘形底部で南壁の板痕跡を確認し、これらの壁板を留める木杭跡も検出してい

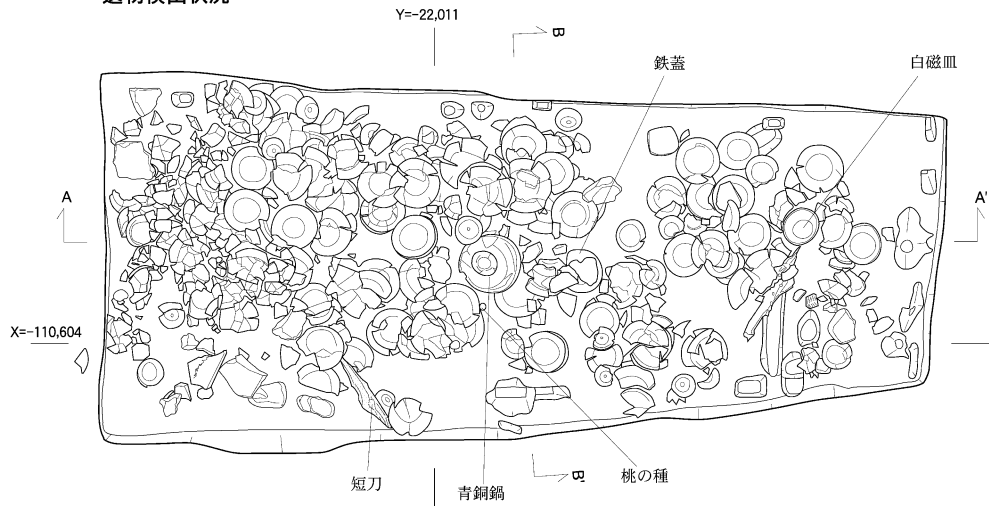


- | | | | | | |
|----|-------------------|--------------------------------------|----|------------------------|---------------------------------|
| 1 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 10YR6/6明黄褐色シルトブロックを多く含む | 14 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト | φ1~3cmの礫を少量含む |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色砂泥 | φ1~3cmの礫を少量含む、炭化物・焼土を多く含む | 15 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭化物・焼土を少量含む |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色砂泥 | | 16 | 10YR3/3 暗褐色シルト | 10YR4/1褐灰色砂泥ブロックを含む |
| 4 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 炭化物・焼土を少量含む | 17 | 10YR3/1 黒褐色泥砂 | 炭化物・焼土を少量含む |
| 5 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | φ1~3cmの礫を少量含む | 18 | 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 | 炭化物・焼土を少量含む |
| 6 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 10YR4/4褐色シルトブロックを多く含む | 19 | 2.5Y4/3 にぶい黄褐色シルト | 10YR4/1褐灰色砂泥を少量含む |
| 7 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 2.5Y5/3黄褐色シルトブロックを多く含む
炭化物をやや多く含む | 20 | 2.5Y4/3 にぶい黄褐色シルト | 炭化物を少量含む |
| 8 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト | | 21 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 粘質が強い、φ1~3cmの礫を少量含む
炭化物を多く含む |
| 9 | 10YR4/1 褐灰色砂泥 | 炭化物をやや多く含む | 22 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | φ1~3cmの礫をやや多く含む
炭化物を少量含む |
| 10 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 | φ1~5cmの礫・炭化物を少量含む | 23 | 2.5Y4/3 にぶい黄褐色泥砂(細~粗砂) | φ3~25cmの礫を少量含む |
| 11 | 2.5Y5/4 黒褐色シルト | 炭化物・焼土を少量含む | 24 | 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 | |
| 12 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト | 10YR3/1黒褐色砂泥を少量含む | | | |
| 13 | 2.5Y5/3 黄褐色シルト | 10YR4/1褐灰色砂泥を含む | | | |

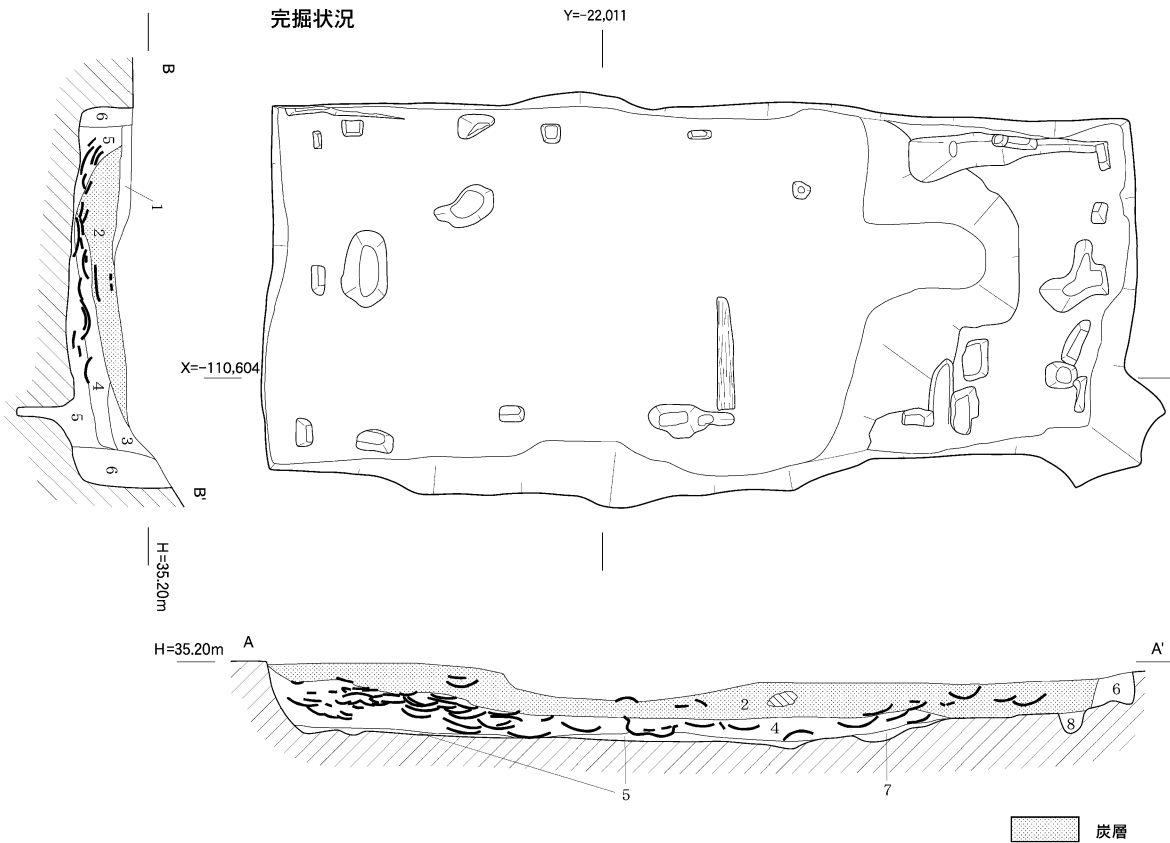
図 20 地下式倉庫 450 実測図 (1 : 40)



遺物検出状況



完掘状況



- 1 10YR2/1 黒褐色粘質シルト 細～中砂混じる
- 2 10YR1.7/1 黒色粘質シルト
- 3 10YR2/1 黒褐色粘質シルト 細～中砂混じる
- 4 10YR3/1 黒褐色砂質土 細～中砂混じる
- 5 10YR2/1 黒褐色粘質シルト 黄褐色シルトブロック少量混じる
- 6 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト～粘土 (木碎痕)
- 7 2.5Y5/3 黄褐色シルト 炭少量混じる
- 8 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質粘土～シルト (杭痕)



図 21 土坑 20 実測図 (1 : 20)

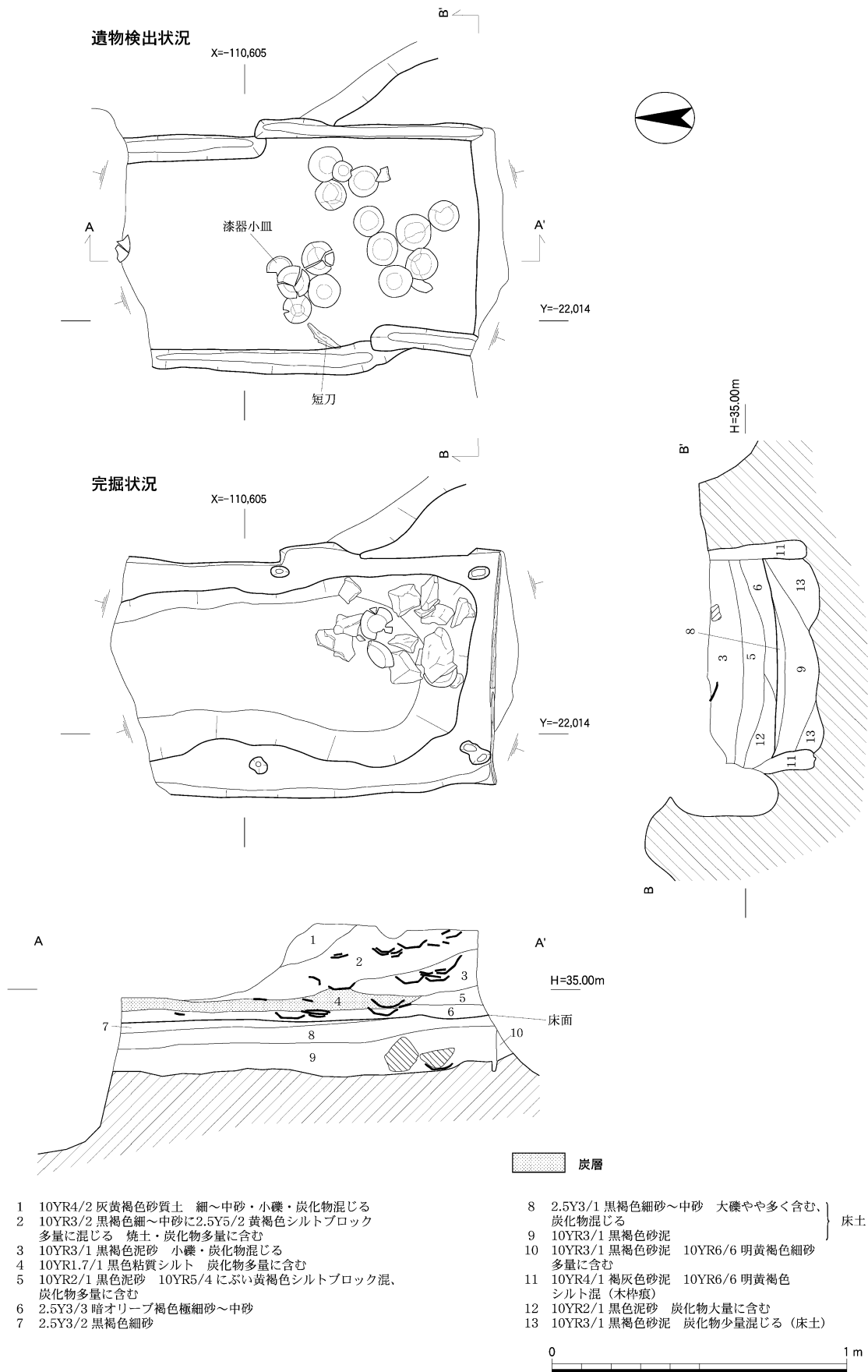
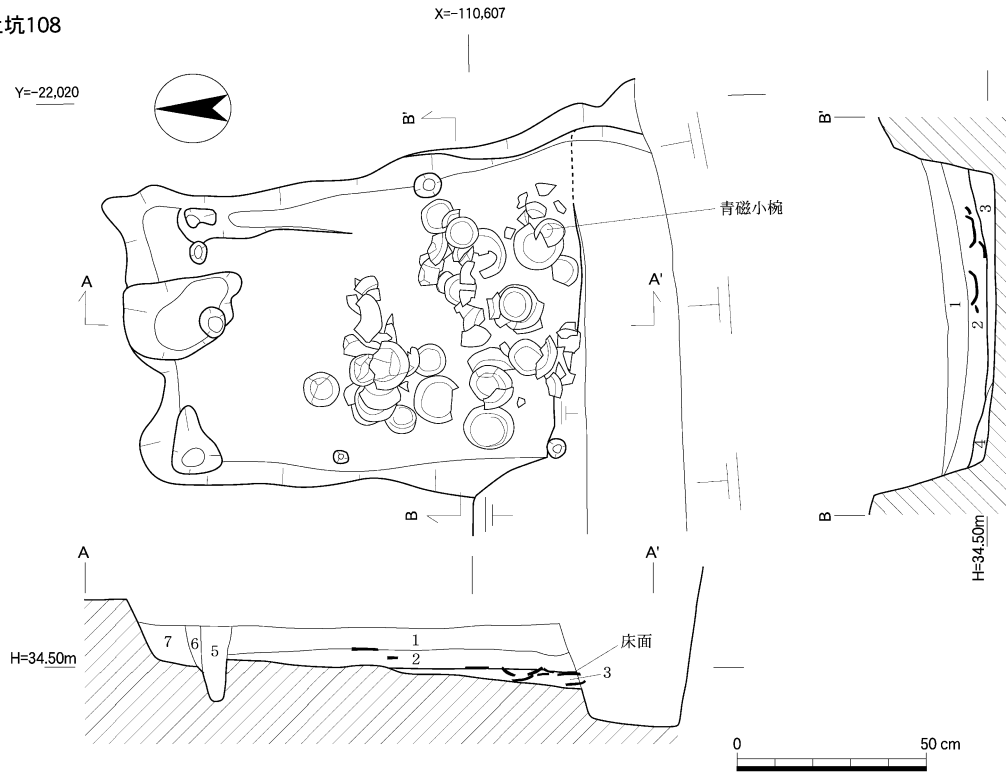


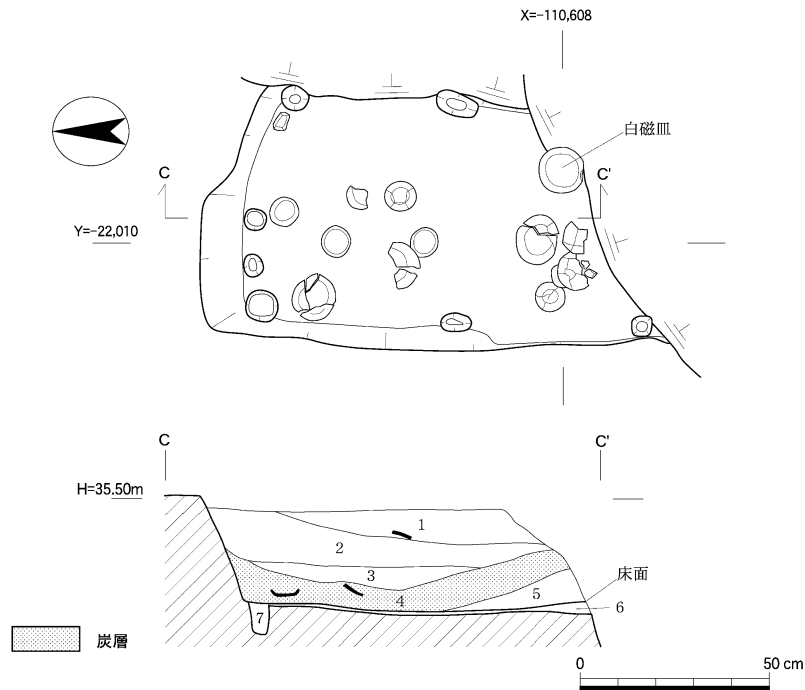
図 22 土坑 79 実測図 (1 : 20)

土坑108



- 1 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 φ2~3cmの礫少量含む、炭化物を少量含む
 - 2 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 2.5Y5/3黄褐色シルトブロックをまだらに含む
 - 3 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 2.5Y5/3黄褐色シルトブロックをまだらに多く含む
 - 4 2.5Y4/1 黄灰色細~中砂
 - 5 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 粘質がやや強い
 - 6 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
 - 7 10YR5/2 灰黄褐色泥砂
- } 床土

土坑127



- 1 10YR4/1 褐灰色砂泥 5Y6/4オリーブ黄色シルトブロックを多く含む
- 2 10YR4/1 褐灰色砂泥 炭化物を多く含む
- 3 10YR3/1 黒褐色砂泥 やや粘質が強い、炭化物を多く含む
- 4 10YR2/1 黒色粘質シルト 炭化物を多く含む
- 5 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭化物、焼土を多く含む
- 6 10YR3/1 黒褐色砂泥 細~中砂が混じる、炭化物を多く含む (床土)
- 7 10YR5/1 褐灰色粘質土

図 23 土坑 108・土坑 127 実測図 (1 : 20)

る。掘形底部は中央部が窪み、南端部では被熱した人頭大ほどのチャートと完形の土師器皿が床土内に数枚かたまって出土した。床面上は黒褐色細砂で整え、土師器皿を正位置に多数据えており、土師器皿の下には漆器小皿が1枚置かれていた。床面上の堆積は、最下層に床面直上の土器群を包含する暗オリーブ褐色極細砂～中砂、その上層に土器をほとんど含まない黒色粘質シルト（炭層）が堆積しており、土坑20と類似する。さらに上層では、土師器皿を多量に包含する黒褐色泥砂などが層序的に堆積しており、ここから出土する土師器皿もほとんどが正位置に据えられていた。また、注目すべき遺物として、西壁際で鉄製短刀が土坑20と同様内側に傾いた状態で出土しており、最上層では瓦器の壺が倒置の状態で出土した。その他、埋土内から鉄釘や銅銭・紡錘車状石製品が出土している。

土坑108（図23、図版10） 1区西端部で検出した南北方向の長方形土坑である。南半は調査区外で既存建物の基礎によって壊されているが、検出した長さで約1.5m、東西幅は0.8～0.9mである。深さは検出面から約0.2mで、南半の窪みに黒褐色砂泥の床土を貼って床面を整える。また、壁際には壁板を留める木杭跡を7箇所検出した。床面直上中央部には、土師器皿が多数正位置に据えられており、青磁小椀や青磁椀・白磁皿も出土している。

土坑127（図23、図版11） 1区南端部で検出した南北方向の長方形土坑である。南半および東壁部は後世の土取穴によって壊されているが、検出した南北長は約1.2m、東西幅は約0.7mである。深さは検出面から約0.3mで、全体に黒褐色砂泥の床土を薄く貼って床面を整える。また、壁際には壁板を留める木杭跡を6箇所検出した。床面直上には、まばらであるが土師器皿が正位置に据えられており、白磁皿や青磁杯も出土している。

土坑418（図24、図版10） 2区北端部で検出した南北方向の長方形土坑である。検出面での規模は南北約1.8m、東西約1.3mであった。掘形は検出面から約0.4mまで掘り込むが底部は平坦ではなく凹凸があり、深いところで厚さ約0.2mの床土を置き、その上に暗灰黄色砂泥を貼って固く締め、床面を形成する。他の方形土坑とは異なり、四隅と東西壁中央に一辺0.1m前後の方形柱を立てており、柱穴と壁との間に壁溝状を呈する壁板材の痕跡を検出した。床面直上には土器を多く包含する黒褐色泥砂があり、北半部では土師器皿が正位置でまとまって据えられていた。また、土器群の上層には遺物をあまり含まない黒色粘質シルト（炭層）が堆積し、最上層は黒褐色砂泥となる。後述する土坑791を壊して成立する遺構である。

土坑426（図25） 1区東端部、埋甕群の北に接して検出した方形土坑である。平面プランは一辺約1.2mの正方形を呈し、深さは0.1m弱と非常に浅い。北西部がやや窪むが全体に底部は平坦であり、北半部で土師器皿がまとまって出土している。他の方形土坑と比べて浅く構造が全く異なっており、埋甕群の南北中軸ライン上にのることから、埋甕群に付随した遺構の可能性が考えられる。

土坑471（図26、図版10） 土坑418の東に並行して検出した南北方向の長方形土坑である。南北の長さ約1.6m、西半は礎石列6の柱掘形に壊されているが、検出した東西長は約0.4mである。掘形は検出面から0.3～0.35mまで掘り込み、深いところで厚さ約0.15mの床土を盛り、

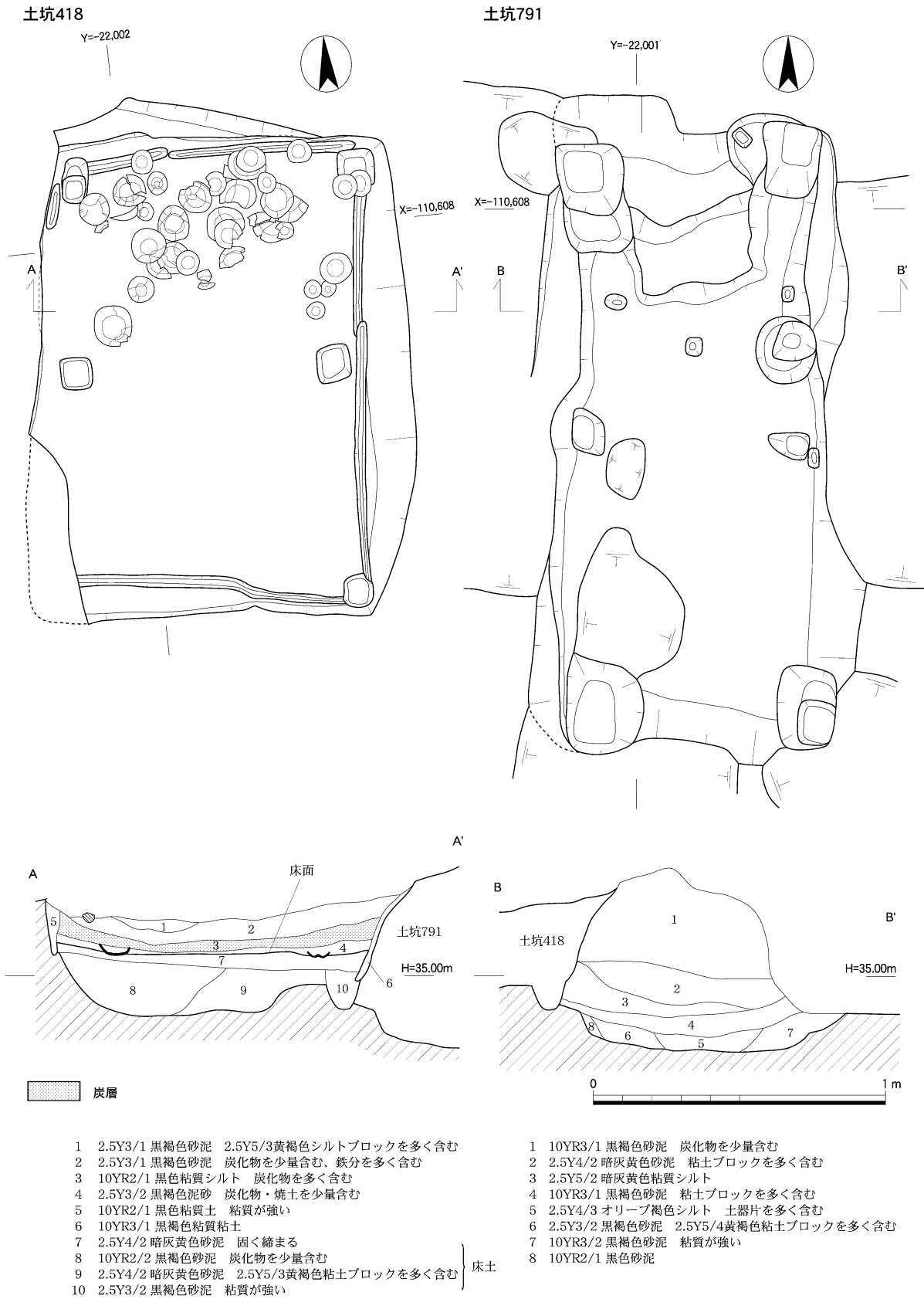


図24 土坑418・土坑791 実測図 (1:20)

その上に黒褐色シルトを貼って床面を形成する。東壁際で木杭跡を2箇所検出しており、南壁際では板壁痕跡らしき壁溝を確認した。床面北半には土師器皿がまとめて正位置に据えられており、埋土中層に遺物をあまり含まない黒色粘質シルト（炭層）が堆積する点も共通する。

土坑 502 土坑 20 の南に並行して検出した東西方向の長方形土坑である。西半は土取穴である土坑 74 に壊されているが、東西の検出長は約 1.3 m、南北幅は約 1 m、深

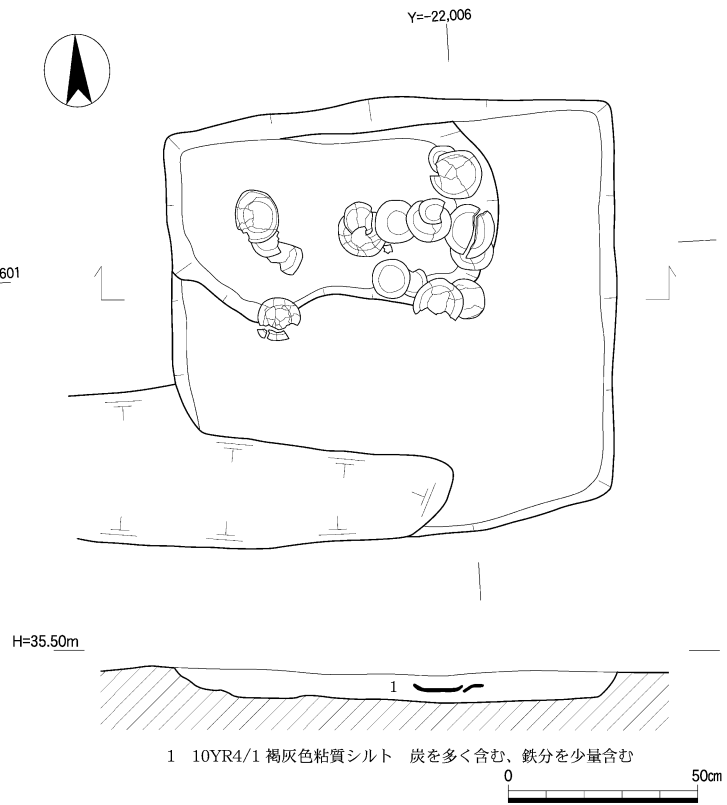


図 25 土坑 426 実測図 (1 : 20)

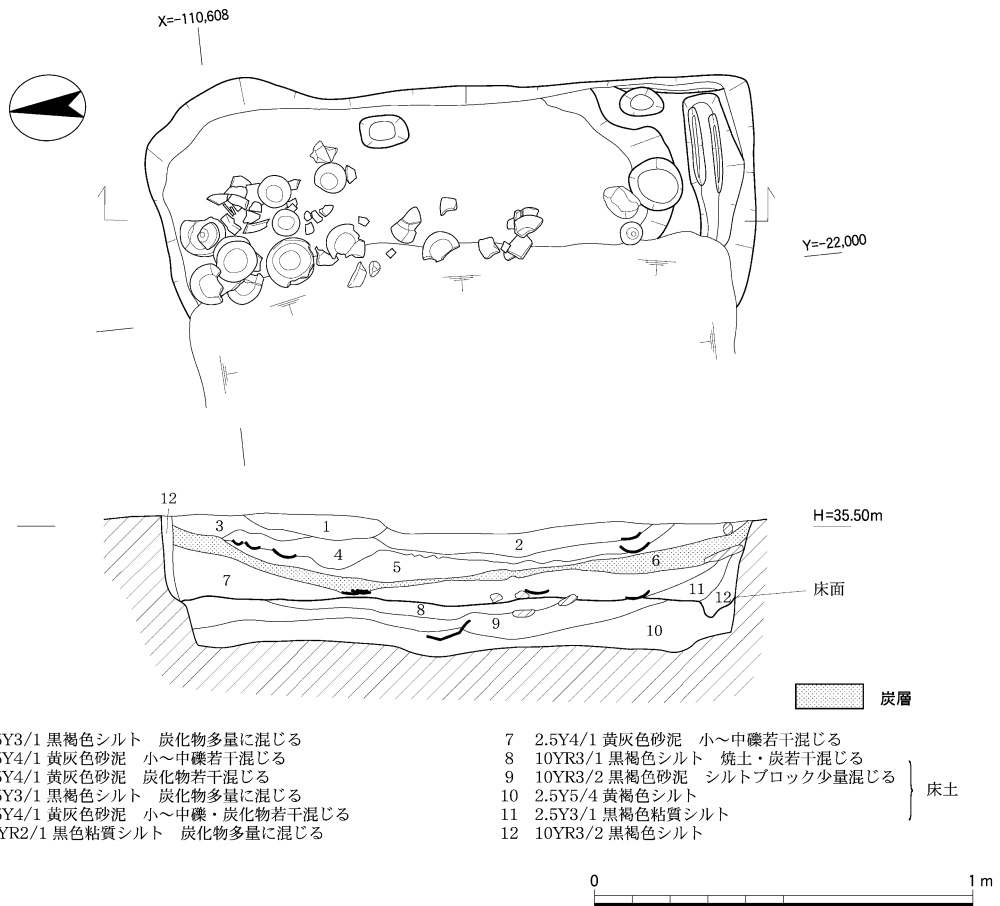
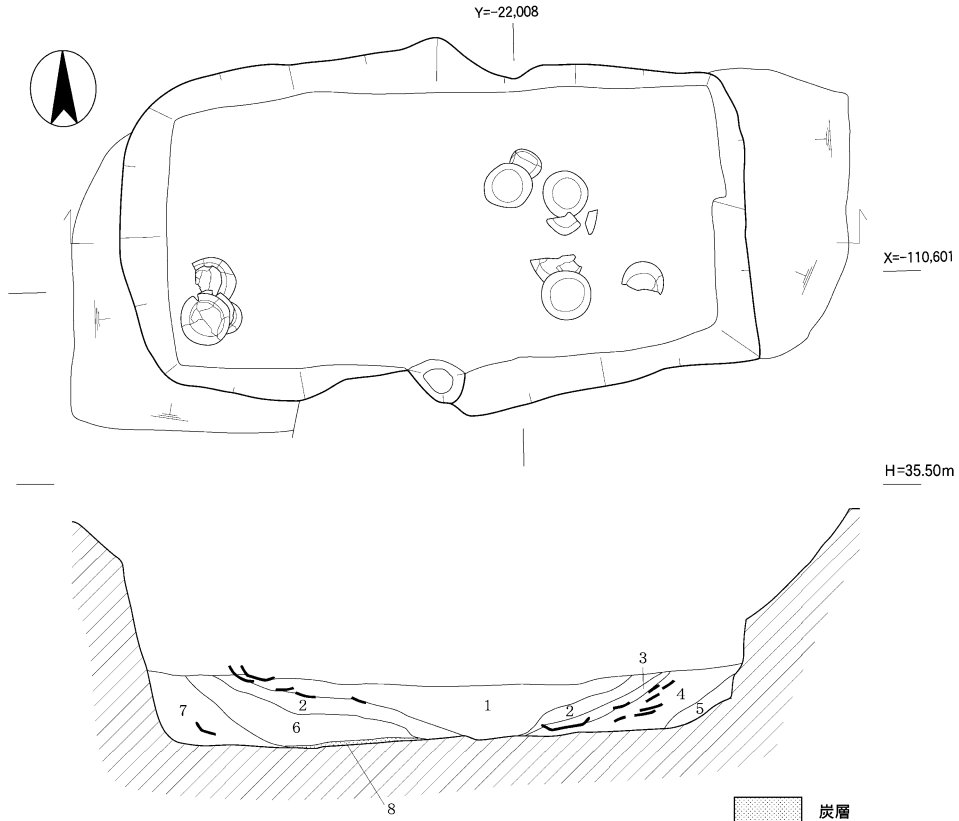


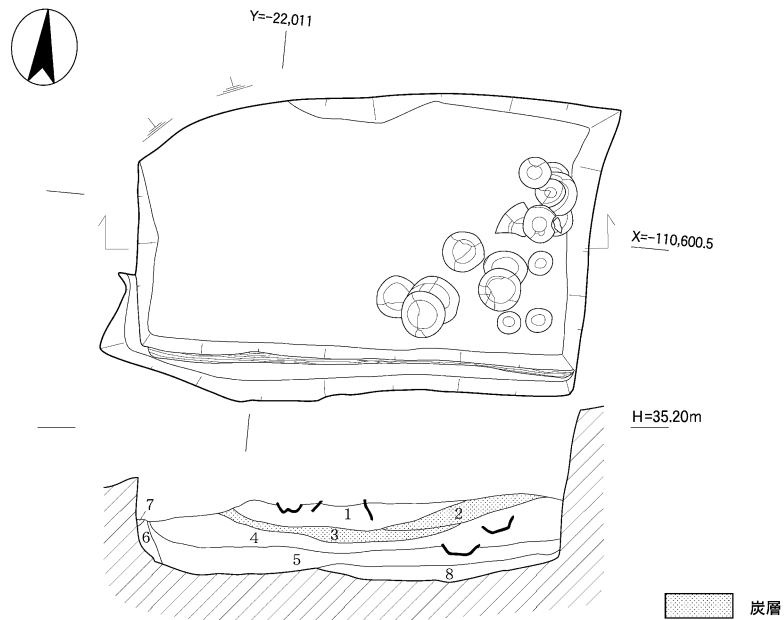
図 26 土坑 471 実測図 (1 : 20)

土坑538



- | | |
|---------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト 炭化物多量に含む | 5 2.5Y3/2 黒褐色砂泥に10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック・炭を若干含む |
| 2 10YR3/1 黒褐色砂泥に2.5Y5/2 黄褐色シルトブロック多量に混じる 炭化物多量に含む | 6 2.5Y3/2 黒褐色シルトにシルトブロック・炭を若干含む |
| 3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト 炭若干混じる | 7 2.5Y3/1 黒褐色砂泥にシルトブロックを若干・炭を多量に含む |
| 4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 炭多量に含む | 8 2.5Y2/1 黒色粘質シルト |

土坑560



- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 中砂～粗砂 炭多量に含む | 5 10YR4/1 褐灰色粘土～シルト |
| 2 10YR2/1 黒色粘質シルト 炭多量に含む | 6 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 中砂～粗砂 炭若干含む |
| 3 10YR1.7/1 黒色粘質シルト 炭多量に含む | 7 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト |
| 4 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 中砂～粗砂 炭多量に含む | 8 2.5Y3/2 黒褐色泥砂 細砂～中砂 |



図 27 土坑 538・土坑 560 実測図 (1 : 20)

さは検出面から約 0.45 m である。木杭跡などは検出できなかったが、最下層から土師器皿が多数出土した点や、遺物をあまり含まない黒色粘質シルトが中層から下層に堆積する点が他の長方形土坑と共通する。埋土上層は礫をやや多く含む褐色砂泥であった。なお、出土した遺物の中には、ロクロ成形の白色土器杯がある。

土坑 538 (図 27、図版 11) 土坑 426 の西で検出した東西方向の長方形土坑である。東西約 1.65 m、南北は約 0.9 m、深さは検出面から約 0.5 m である。他の長方形土坑のように底部に木杭跡は検出しておらず、壁板の痕跡も確認できなかった。底部からは完形の土師器皿が正置の状態で数枚出土した。埋没過程は、最下層に黒色粘質シルト（炭層）が薄く堆積するが、上層は壁際から順次埋めていった状況を示しており、埋土中からも土師器皿が出土している。

土坑 560 (図 27、図版 11) 土坑 20 の北、土坑 538 の西で検出した東西方向の長方形土坑である。東西約 1.2 m、南北は約 0.8 m、深さは検出面から約 0.4 m である。他の長方形土坑のように底部に木杭跡は検出していないが、南壁に約 0.2 m の高さで横板が残存しており、西壁でも断面観察で壁板痕跡を確認した。底部に約 0.15 m の厚さで褐灰色粘土～シルトの無遺物層が堆積しているが、この無遺物層は自然堆積によるものと判断でき、土坑掘削から埋め戻しまで時間差があったことを示唆する。また、土坑の東寄り土師器皿がまとまって出土しており、その上層には他の方形土坑と同様に、遺物をあまり含まない黒色粘質シルト（炭層）が堆積する。

土坑 791 (図 24、図版 11) 土坑 418 の東で検出した南北方向の長方形土坑である。土坑 418 に西肩部を壊されており、東肩部は礎石列 6 の柱穴に壊されている。南北約 1.8 m、東西幅は底部付近で約 1.25 m であった。深さは最も残りの良い北肩部で、検出面から約 0.5 m で掘形底部となっている。底部に堆積している黒褐色砂泥は、床土の可能性もある。土坑 418 と同様に、土坑の四隅に一辺 0.1 ～ 0.2 m の方形柱穴があり、東西壁際の中央にも径 0.1 m ほどの柱穴が認められる。ただ、北半には数箇所木杭跡が残されており、遺存状態が悪いため構造は不明な点が多い。

土坑 74 1 区南端部、礎石列 8 の西側で検出した不整形の土坑である。東西約 2.5 m、南北約 3 m ほどの規模で、底部も凹凸が激しい。深いところで検出面から約 1 m の深さをもつ。西側および南側に掘削された土坑と同じく、土取りのために掘られた土坑と考えられる。埋土は焼土を多く含む灰黄褐色砂泥で、この土坑が埋没した後に整地が行われ、後述する江戸時代の遺構群が形成される。埋土中からは 16 世紀前半の土器群が出土している。

土坑 130 (図 28) 1 区北端部で検出したややいびつな円形を呈する土坑である。東半は調査区外となる。南北は約 3 m で、底部は南側が深く検出面から約 1.6 m であった。調査区東壁の断面観察によれば、底部に暗灰色粘質シルト～黒色粘土が堆積し、約 0.4 m ほど堆積した段階で炭層が認められる。同様の炭層は上層でも確認でき、埋没過程において少なくとも 4 回は炭層が堆積する状況におかれたことがわかる。この土坑の位置が町屋の奥まった場所であることから、生活に伴う廃棄物の焼却が繰り返し行われたことを示唆している。土坑底部から 15 世紀後半の土器群が出土している。

土坑 216 2 区北東隅で検出した不整形土坑である。東側は調査区外に展開し、北側は既存建

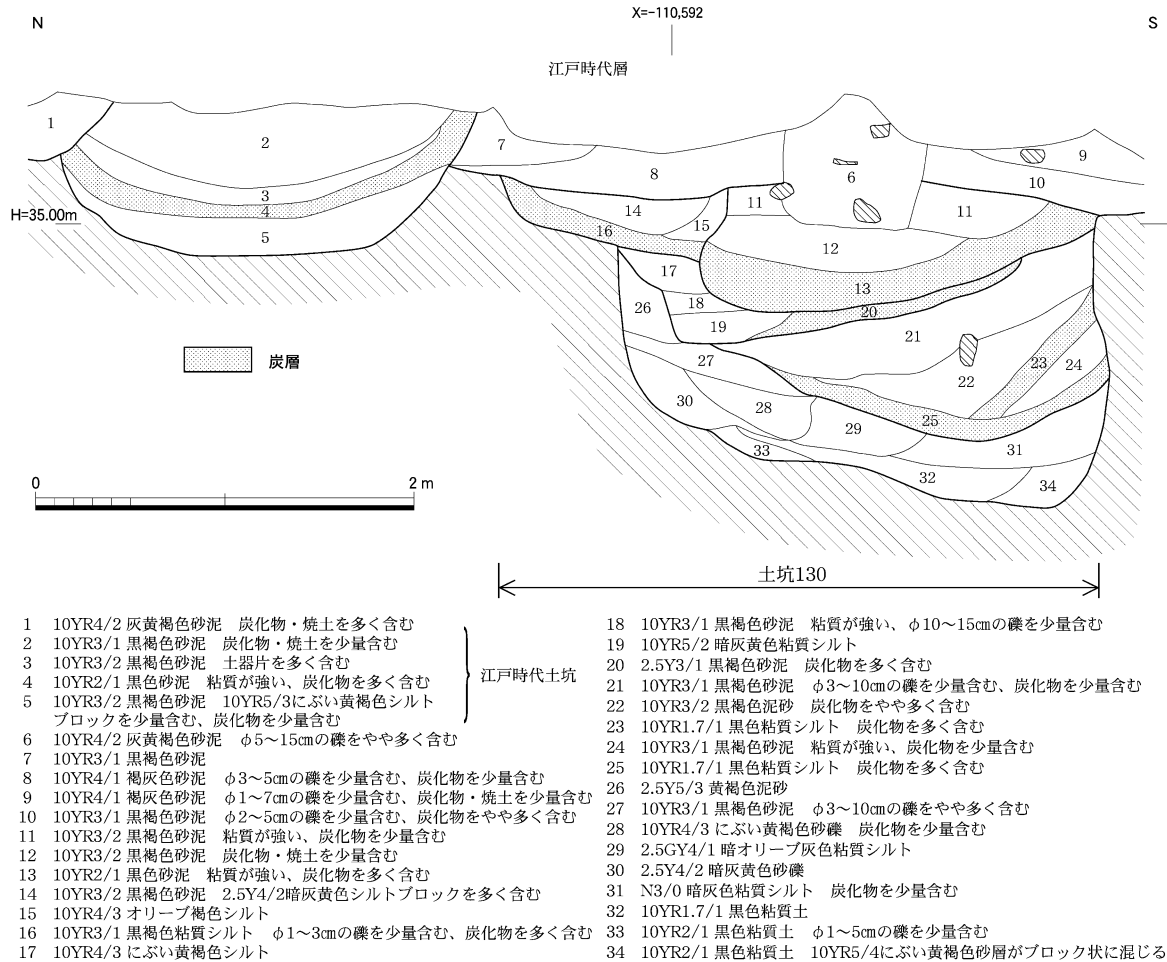


図 28 1区東壁断面図 (1:40)

物の基礎によって破壊されている。検出した規模は東西約 2 m、南北約 1.5 m で、深さは検出面から約 0.9 m である。底部は下層の礫面で止まっていることから、土坑 74 と同様に土取穴と考えられる。埋土は礫を多量に含む黒褐色砂泥で、15 世紀後半から 16 世紀前半の土器片が出土する。また、鋳型片が数点出土している。

土坑 505 埋糞採取土坑群の土坑 350 と土坑 351 の下層で検出した不整形土坑である。検出した規模は東西約 1.5 m、南北約 2 m で、深さは検出面から約 0.3 m である。埋土は褐色砂泥で、鉄滓を多量に包含していた。地下式倉庫 370 に東肩部を壊されており、鋳鉄を伴うこの土坑の成立がそれ以前であることを示している。

(5) 江戸時代の遺構 (図 29)

江戸時代の遺構は、綾小路に面する町屋関係の遺構を検出した。1 区東端部から 2 区北半部にかけて削平が著しく、この部分では建物関係の遺構は検出できなかったが、遺構総数は下京中心部としては少ない。検出した遺構は、礎石列 5 列 (礎石列 1~5)、竈遺構 1 基 (竈 263)、埋糞 2 基 (埋糞 15・72)、方形の石組遺構 (石組遺構 30)、石敷溝 1 条 (石敷溝 254)、小型石室 1 基 (石室 208)、井戸 3 基 (井戸 52・171・262)、土坑 3 基 (168・236・296) である。

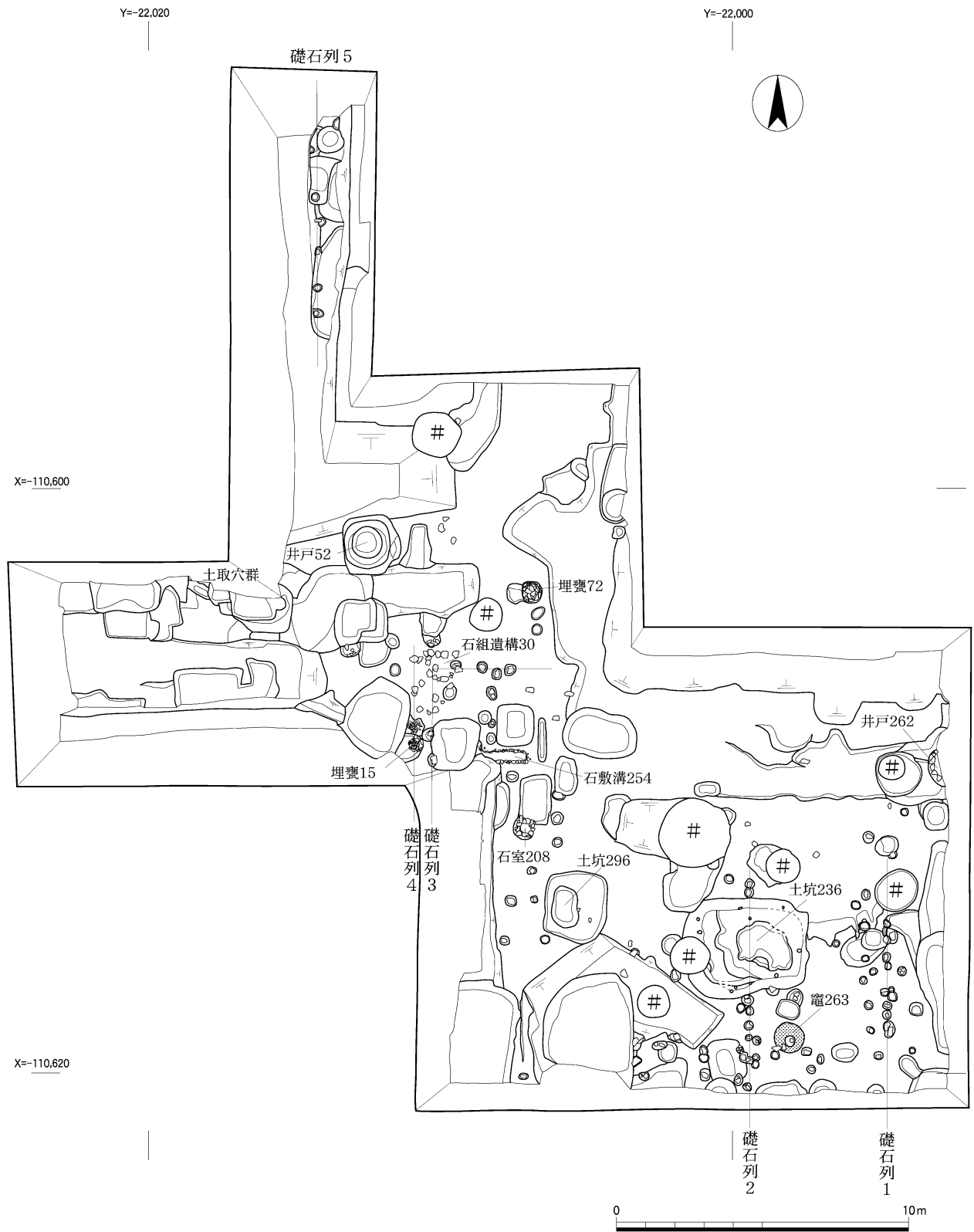


図 29 第 1 面 (江戸時代) 遺構平面図 (1 : 200)

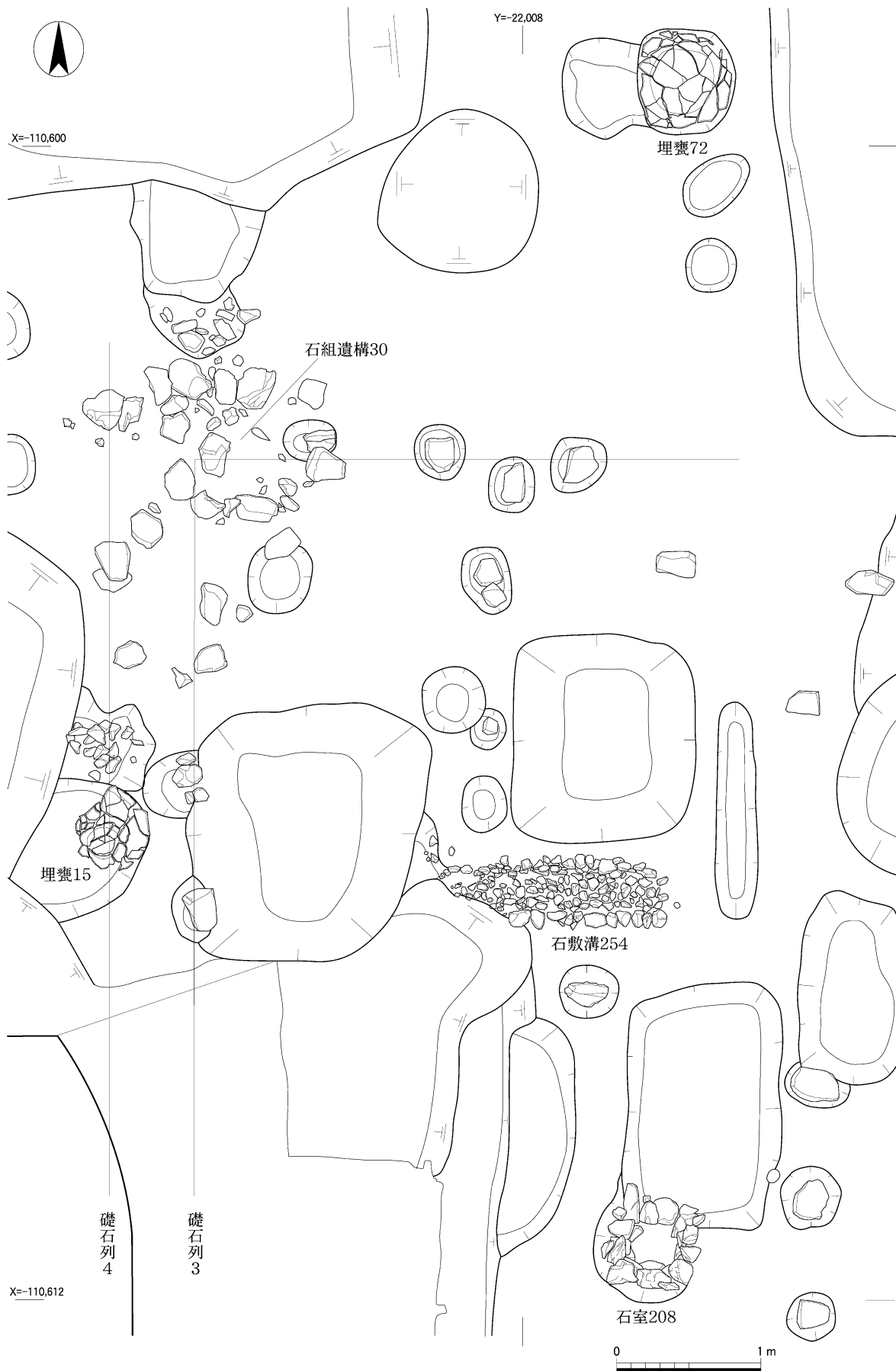


図30 第1面町屋関連遺構実測図(1:40)

礎石列1 2区南東部、Y=-21,995ラインのやや東寄りで見出した南北方向の柱列である。南端は調査区外に延長し、北は北半の削平によって壊されている。柱位置に0.2～0.3mの楕円形の掘形を、0.1～0.2mの深さで掘削し、底部に平石を据えている。柱穴は同一ライン上で重複しており、何度も建て替えられたことを示しているが、建物としての柱間を確定することはできなかった。

礎石列2 2区中央南部、Y=-21,999.5ラインで見出した南北方向の柱列である。南端は調査区外に延長し、北は北半の削平によって壊されている。柱規模や構造は礎石列1と同じである。柱穴が同一ライン上で重複している点も共通する。後述する土坑236上でも礎石を確認しており、土坑236埋没後にも柱列として機能しているが、同一場所には下層に礎石列6があり、中世から地境として踏襲されていたことを示唆している。

礎石列3(図30、図版12) 1区南東部、Y=-22,010ラインのやや西寄りで見出した南北方向の柱列で、X=-110,602.2ラインで東へ折れる。南端は調査区外に延長し、東は削平によって壊されている。建物の北西隅部に相当すると考えられる。後述する石組遺構30の中に建物隅柱の礎石が据えられているため、石組遺構30よりも新しいことがわかる。

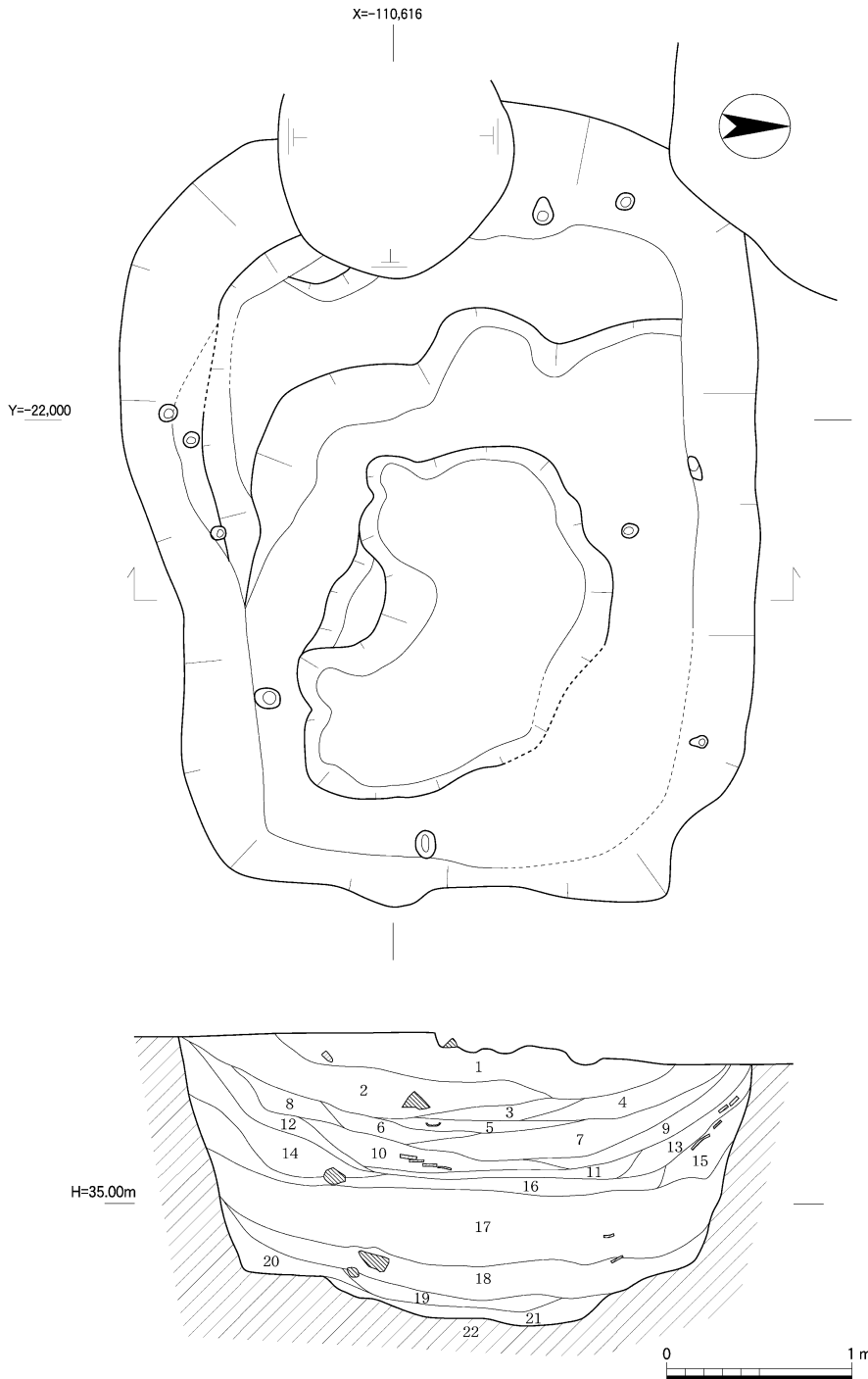
礎石列4(図30、図版12) 礎石列3の西に並行して見出した南北方向の柱列である。礎石は南北2箇所に据えられており、その南は根石状の集石群となる。北および南への延長は削平・攪乱のため明らかでない。礎石は約0.3mの大振りの平石で、北側の礎石間は約1m、南側の礎石-集石間は約1.2mである。集積の南には埋糞15が据えられている。また、北端礎石の東に接して石組遺構30が付属する。礎石列3と同様に建物の北西隅部の可能性が高い。なお、礎石列3・4の北への延長線上は、現在でも踏襲して地境となっている。

礎石列5 1区北端部で見出した南北方向の柱列である。5間分検出しており、北は調査区外に延長し、南は攪乱によって壊される。柱穴は直径0.3～0.4mの円形を呈し、底部に0.2～0.3mの平石を礎石として据えていた。柱間は0.8～1.5mと不均等で、他の礎石列と同様である。土坑130が埋没した後に成立する遺構である。

竈263 1区南端、礎石列2の東で見出した竈遺構である。直径約1.2mの円形を呈し、検出段階では周辺部が固く締まる褐色シルトで、中央部に焼土・炭を多量に含む黒褐色砂泥が堆積していた。褐色シルト層が竈本体の基部、中央部が竈内に相当する。断面観察によれば、少なくとも2回の修築がなされている。

埋糞15(図30、図版13) 礎石列4の柱間に据えられた埋糞である。検出面から約0.25mの深さで、信楽大甕の底部が据わっていた。廃棄の時に西側が大きく掘削されており、0.2～0.4mほどの大礫を甕上に投棄した状態で埋め戻している。甕の内面に付着物が認められることから、便所甕として使用されたと想定できる。

埋糞72(図30、図版13) 1区東半部で見出した埋糞である。建物の裏庭空間に単独で据えられたと考えられる。直径約0.7mの掘形を掘削し、検出面から約0.6mの深さで備前大甕の底部が据わっていた。検出段階には甕が土圧で潰れた状態で出土しており、口縁部の破片も認められる。



- | | |
|------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 1 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭を少量含む、φ2~7cmの礫少量含む | 12 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭・灰が帯状に入る |
| 2 10YR4/1 褐灰色砂泥 やや砂が多い、φ3~10cmの礫を少量含む、
2.5Y5/3黄褐色シルトブロックを少量含む | 13 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭・灰が帯状に入る、層下に粘質シルトが溜まる |
| 3 10YR4/1 褐灰色砂泥 φ2~3cmの礫を少量含む | 14 10YR4/1 褐灰色泥砂 炭をやや多く含む |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 炭を少量含む | 15 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト |
| 5 10YR3/1 黒褐色砂泥 粘質が強い | 16 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 φ3~5cmの礫を少量含む |
| 6 10YR4/1 褐灰色砂泥 やや砂が多い、炭をやや多く含む | 17 2.5Y4/1 黒褐色砂泥 灰が帯状に層を成して堆積 |
| 7 10YR4/1 褐灰色砂泥 φ2~5cmの礫をやや多く含む、
黄褐色中~粗砂の砂を含む、炭を多く含む | 18 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・灰を多く含む、φ5~25cmの礫少量含む |
| 8 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 | 19 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭を少量含む |
| 9 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 炭混じりの砂泥を少量含む | 20 2.5Y7/2 灰黄色シルト (灰層) |
| 10 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 炭を多量に含む、焼土を少量含む | 21 2.5Y4/1 黒褐色粘質シルト 炭を少量含む |
| 11 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 炭を多量に含む | 22 2.5Y5/3 黄褐色シルト~細砂 (基盤層) |

図 31 土坑 236 実測図 (1 : 40)

石組溝 254 (図 30) 2 区北西隅部、礎石列 3 の東で検出した石組みの東西溝である。Y=-22,007 ラインが東端で、緩やかに西へ傾斜するが、西端は攪乱で壊されていた。溝肩部には拳大の礫を小口を揃えて並べており、底部にも礫を敷き詰めている。南北幅は約 0.3 m、東西長は検出分で約 1.4 m、深さは東端部で約 0.1 m、西端部で約 0.15 m である。

石室 208 (図 30) 石組溝 254 の南約 2.5 m の地点で検出した小型の石室である。0.15 ~ 0.2 m の石を小口を揃えて方形に組んでおり、内法は一辺約 0.3 m の正方形、深さは検出面から約 0.3 m である。埋土から風炉のミニチュア土器が出土している。なお、南側は 17 世紀後半の肥前系磁器を包含する土坑に壊されており、遺構の成立時期を示唆している。

石組遺構 30 (図 30、図版 12) 礎石列 3 の屈曲部下層で検出した方形の石組遺構である。所々の石は抜き取られているが、一辺約 0.8 m の正方形に石を並べており、内側には砂が敷かれていた。礎石列 4 の建物に伴う遺構と考えられ、手水などを置いた基礎部の可能性がある。

井戸 52 1 区中央部、井戸 22 の東に隣接して検出した井戸である。掘形は径約 2 m の隅丸形状を呈するが、井戸枠は残存しない。ただ、底部中央北寄りに径約 1 m の窪みが認められることから、井戸枠材(石材か)は抜き取られた可能性がある。底部は検出面から深さ約 2.6 m で、標高約 32.6 m である。出土遺物は 17 世紀初頭の土器類で、高麗青磁が出土している。

井戸 262 2 区東壁際で検出した円形石組井戸である。掘形は直径約 1.2 m で 0.2 m 前後の石を木口積みで丸く積み上げている。東側の 3 分の 2 が調査区外となり、危険が伴うため底部まで掘り下げていないが、17 世紀の井戸と想定している。

土坑 236 (図 31、図版 14) 2 区中央南寄りで検出した大規模な方形土坑である。東西約 4.2 m、南北約 3.4 m と、隅丸長方形の平面プランをもつ。深さは検出面から約 1.3 m で、中央部はさらに窪んで約 1.5 m の深さになっている。底部壁際に木杭痕跡を数箇所を確認しており、仏壇落としのような地下式倉庫だったと考えられる。倉庫廃絶後は廃棄土坑になったようで、灰が帯状に層をなす黒褐色砂泥が中層に厚さ約 0.4 m で堆積しており、当土坑内で廃棄物の焼却が行われていたことを示している。上層は人為的に埋め戻されており、埋土内から 17 世紀前半の初期伊万里を含む土器群が多量に出土した。

土坑 296 2 区西半部、石室 208 の南東で検出した素掘りの土坑である。東西約 0.9 m、南北約 1.4 m、深さは約 0.9 m である。埋土内から肥前系陶器を中心とする 17 世紀初頭の土器群がまとまって出土した。

4. 遺 物

今回の調査では整理コンテナにして 200 箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器陶磁器類・瓦類・石製品・金属製品・木製品・鋳造関係遺物・ガラス製品・動植物遺体などがある。時期は、弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代のものがある。鎌倉時代から室町時代に帰属するものが最も多く約 8 割を占める。弥生時代と平安時代のものは少量である。以下では、出土遺物の一括性を重視する立場に立ち、遺構別に時代の古いものから概要を述べる。なお、瓦類と骨については遺物の性質状、出土遺構に関わらず別項を設けた。

(1) 弥生・古墳時代の遺物

弥生時代の遺物は、溝 969・970・971、土坑 909 などから出土した土器と石器がある。中期のものが主体で、古墳時代前期（庄内式併行期）の遺物が少量混じる。石器は磨製石鏃、打製石鏃、石包丁などがある。石包丁の中には再加工して使用しているものが認められる。

溝 969・970（図 32・35、図版 15） 1・2 は溝 969 から出土した甕で、頸部外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整で、口縁部端面にはハケ原体による刻目文を施す。3・4 は溝 970 から出土した甕の底部である。3 は外面タテハケ調整、内面はナデで仕上げる。一部に煤が付着する。4 は木の葉底で、外面は粗いタテハケ調整、内面はナデで仕上げる。2 次焼成を受ける。以上は、弥生時代中期中葉¹⁾に位置付けられる。なお、小片のため図化できなかったが、溝 969 の最上層か

表 2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
弥生時代 古墳時代	土器、石器		土器13点、石器7点：計20点	1箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品		土師器62点、須恵器4点、灰釉陶器3点、白色土器9点、緑釉陶器3点、黒色土器2点、瓦器1点、焼締陶器1点、輸入陶磁器11点、瓦15点：計113点	3箱	0箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、山茶碗、瓦器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、銭貨、鋳造関係、石製品、ガラス製品、骨		土師器506点、須恵器3点、山茶碗2点、瓦器10点、白色土器5点、焼締陶器21点、施釉陶器9点、輸入陶磁器36点、瓦1点、金属製品4点、銭貨2点、鋳造関係10点、石製品4点、石製玉1点、ガラス玉2点、木製品1点、骨1点：計618点	160箱	0箱
桃山時代 ～江戸時代	土師器、軟質施釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦類、銭貨、石製品、骨		土師器38点、軟質施釉陶器2点、瓦器1点、焼締陶器12点、輸入陶磁器12点、国産陶器29点、国産磁器13点、銭貨6点：計113点	20箱	16箱
合 計		241箱	864点 (41箱)	184箱	16箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より41箱多くなっている。

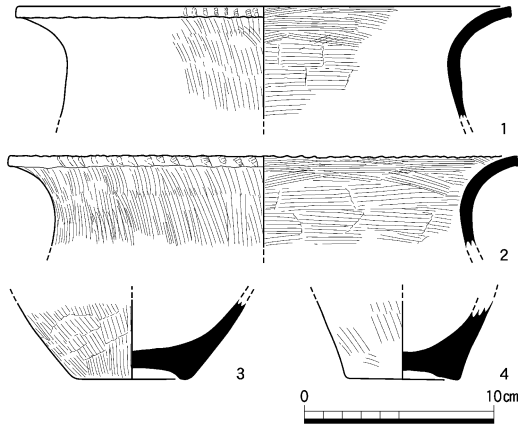


図 32 溝 969・970 出土土器実測図 (1 : 4)

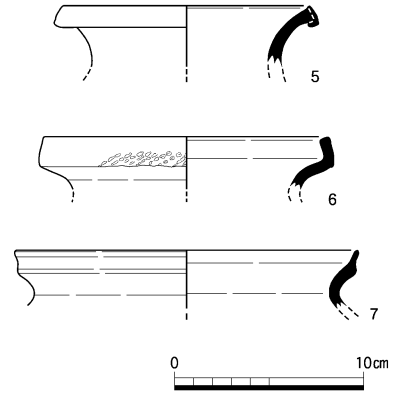


図 33 溝 971 出土土器実測図 (1 : 4)

らは、古墳時代前期（庄内式併行期）のものと考えられる甕の破片や小型の高杯の破片が出土している。

溝 969 からは石器が 4 点(石 1・2・4・6)出土した。石 1・2 はサヌカイト製の打製石鏃である。いずれも完存する。石 1 は平基式で、長さ 2.1 cm、幅 1.6 cm、重さは 1.14 g ある。石 2 は凸基式で、長さは 4.95 cm、幅 1.85 cm、重さは 4.84 g ある。石 4 は石包丁の転用品と考えられる剥片石器である。粘板岩製で、石包丁時の紐孔が 1 箇所残る。表裏面ともに研磨を施し、割れ面に新たに押圧技法により刃部をつくる。重さは 8.89 g ある。石 6 は、粘板岩製の大型石包丁である。上部は欠損するが、紐孔は 2 箇所残る。刃部は両刃である。両側縁とも割れ面に研磨痕が認められ、意図的に打ち欠かれた転用品の可能性はある。重さは 54.92 g ある。

溝 971 (図 33・35、図版 15) 溝の上層から少量の土器が出土している。5 は広口壺である。口縁端部に粘土を付加して上下に拡張する。頸部から口縁部までヨコナデで仕上げる。6 は近江系の受口状口縁甕である。胎土から搬入品と考えられる。口縁部下半には列点文を施す。7 は在地系の受口状口縁甕である。口縁の立ち上がりは短く外反する。5・6 は弥生時代中期後葉、7 は古墳時代前期（庄内式併行期）に位置付けられる。また、図化していないものの中に庄内式併行期と考えられる波状文をもつ壺の体部片がある。

石器は 1 点(石 3)出土した。石 3 は粘板岩製の磨製石鏃である。基部は割れて残存しない。腹・背面中央には剥離面が残るが、刃部は丁寧に研磨されている。残存長 3.35 cm、幅 1.65 cm、重さは 2.01 g ある。

土坑 909 (図 34・35、図版 15) 弥生時代中期中葉から後葉までのやや幅をもつ土器片が出土している。8 は広口壺である。口縁端

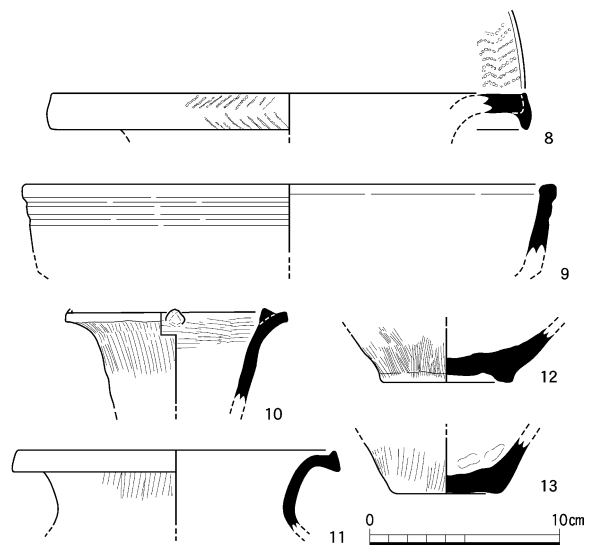


図 34 土坑 909 出土土器実測図 (1 : 4)

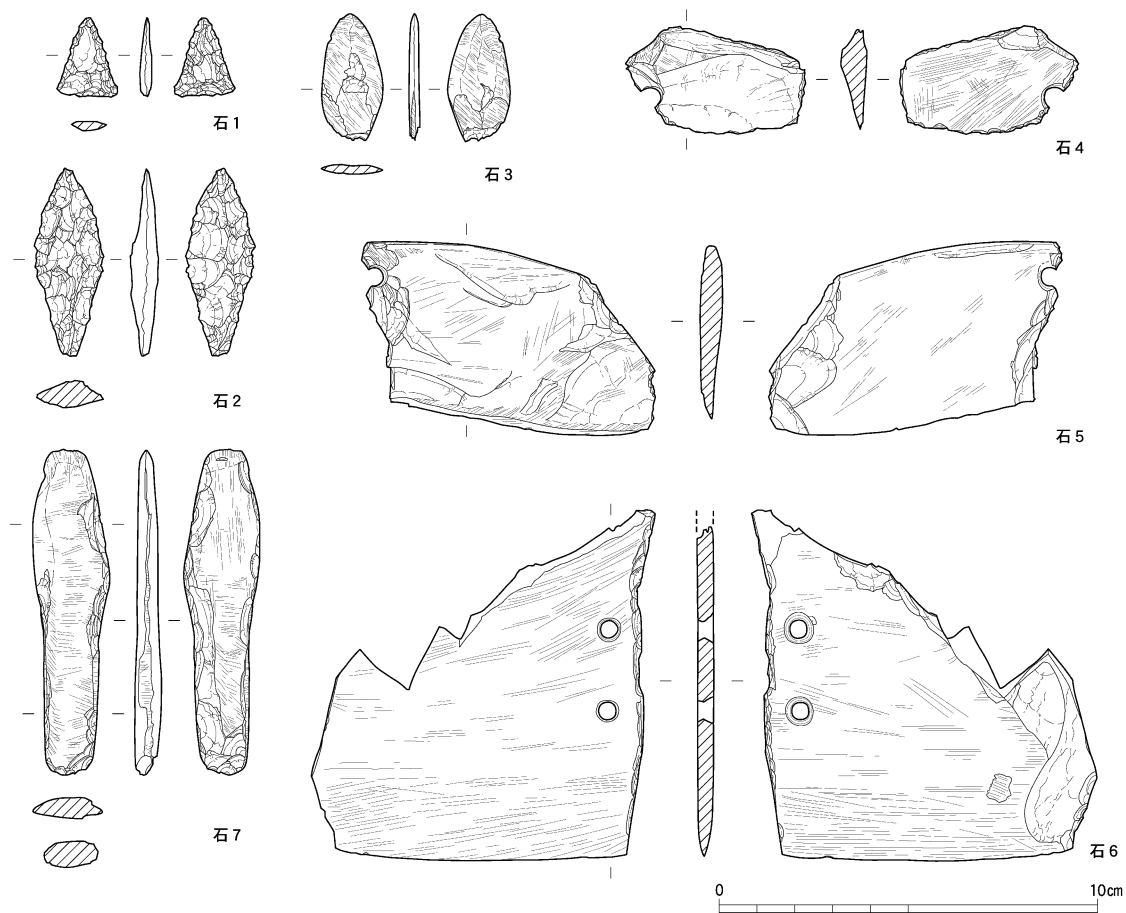


図 35 弥生時代石器実測図（1：2）

部は粘土を付加して垂下させ、口縁端部と内面には羽状文をめぐらせる。9は有段口縁壺である。口縁部の上半に2条の凹線をめぐらせる。10・11は広口壺である。10は外面タテハケ調整、内面ヨコハケ調整で、口縁内面にはコブ状突起が付く。11は外面タテハケ調整、内面は磨滅する。口縁端部は上方に拡張する。12は甕の底部である。2次焼成を受ける。外面はタテハケ調整、底部外面はナデで仕上げる。底部内面には指オサエがのこる。13は壺の底部である。外面は細かいタテハケ調整、底部外面はナデで仕上げる。内面は磨滅する。

石器は2点（石5・7）出土した。石5は粘板岩製の石包丁である。約1/2を欠損する。紐孔は1箇所残存し、紐孔上部は紐擦れにより磨滅する。刃部にも使用による磨滅がみとめられる。重さは30.72gある。石7は粘板岩製の棒状石器である。長さ8.6cm、幅2.05cm、重さは16.20gある。全体に研磨痕がみとめられる。先端部には研磨の方向と異なる擦痕があり、使用痕の可能性はある。下半は表面が滑らかになる。

（2）平安時代の遺物

平安時代の遺物は、井戸373・805、土坑61・802、溝598などから出土した。建物9・10を構成する柱穴からは、10世紀代の土師器の破片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

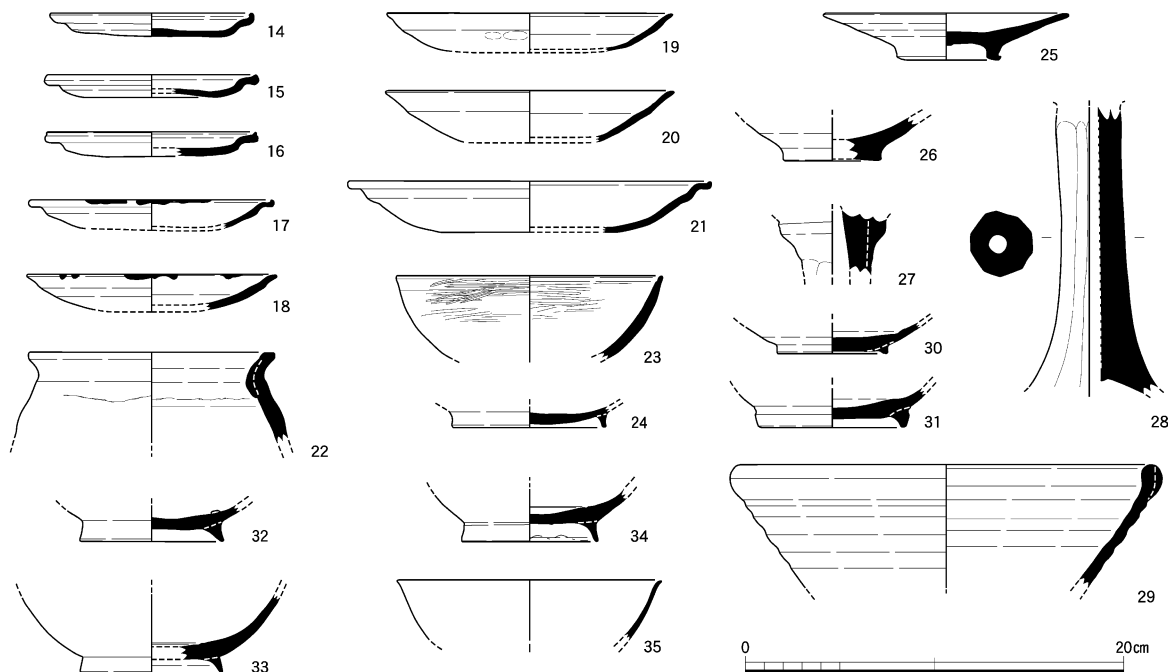


図36 井戸805出土土器実測図(1:4)

井戸805(図36)土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、桃の種などが出土した。京都Ⅲ期中段階²⁾に属する一群である。

14～21は土師器の皿である。いわゆる「て」の字状口縁のもの(14～17・21)と直線口縁のもの(18～20)がある。口径は11cm前後(14～16)、13cm前後(17・18)、15cm前後(19・20)、19cm前後(21)の4群に分かれる。17・18は灯明皿として使用されている。22は土師器甕である。粗雑なつくりで粘土紐の接合痕が明瞭に残る。23・24は黒色土器B類の椀である。25～28は白色土器で、皿(25)、杯(26)、高杯(27・28)がある。29は須恵器の鉢、30・31は灰釉陶器である。

灰釉の30は段皿、31は椀で硯に転用している。32～34は緑釉陶器の椀である。すべて貼り付け高台で、33は全面施釉、32・34は部分施釉する。32の底部内面にはトチン痕が付く。35は輸入陶磁器の白磁椀である。

溝598(図37)土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器、軒瓦などが出土した。京都Ⅳ期中段階に属すると考えられる。36～39は土師器皿である。36はコースター形の皿である。37～39は大型皿で、口径は13.6～14.4cmの間にある。38は灯明皿として使用されている。

土坑61(図38、図版16)土師器、須恵器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、鉄滓などが出土した。京都Ⅴ期新段階に属する資料である。40～67は土師器の皿である。40～58は小型皿で、口径は9.0～10.6cmの間に分布する。45は口縁端部に煤が付着し灯明皿として使用されている。59はコースター形の皿で口径は10.6cmある。60～67は大型皿である。口径は、67が16.4cm

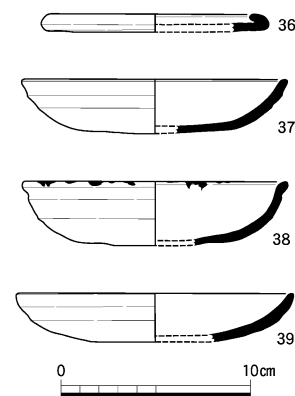


図37 溝598出土土器実測図(1:4)

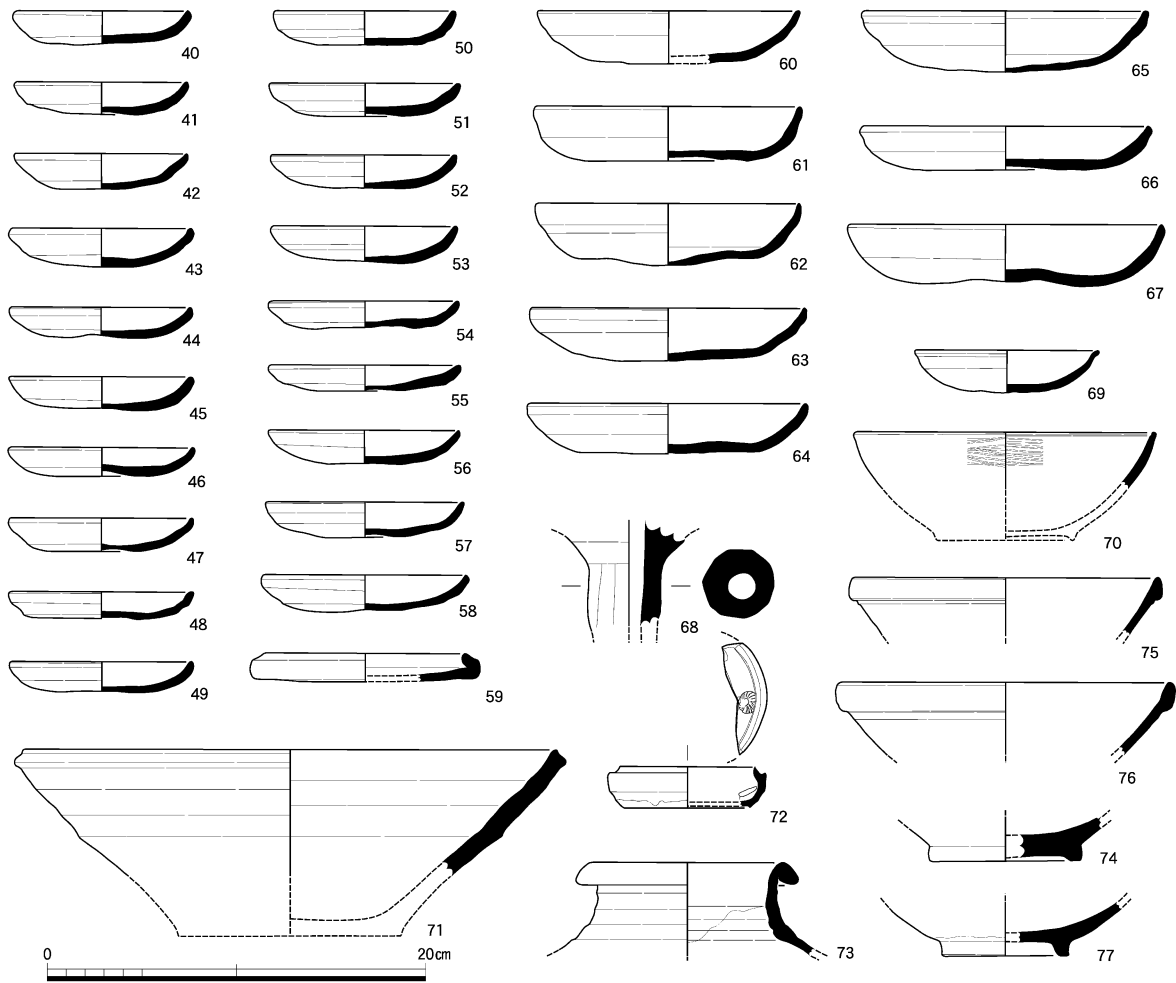


図 38 土坑 61 出土土器実測図 (1 : 4)

と特に大きい他は 13.8 ~ 15.0 cm の間に分布する。68 は白色土器高杯の脚部である。面取りは 11 面を数える。69 は瓦器の皿で口縁部はヨコナデで端部は外反する。他は粗いナデで仕上げる。灯明皿として使用され、口縁に煤が付着する。70 は瓦器碗である。口縁部内面には 1 条の沈線がめぐる。幅約 1 mm のヘラミガキが内外面ともに密に施される。71 は東播系の須恵器鉢である。口径は 28.0 cm ある。72 ~ 77 は輸入陶磁器である。72 は青白磁の子持ち合子で、中には花卉に葛が絡まるモチーフが付く。73 は白磁四耳壺で、74 は同一個体の底部と考えられる。75・76・77 は白磁碗で、いずれも玉縁状口縁のものである。

井戸 373 (図 39) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、石鍋、砥石、平瓦などが出土した。京都 V 期新段階に属する資料である。

78 ~ 86 は土師器の小型皿である。口径は 9.3 ~ 9.9 cm の間に分布する。87 ~ 92 は土師器の大型皿である。口径は 13 ~ 16.4 cm の間に分布する。93 ~ 96 は白色土器である。93 は皿で、底部はヘラオコシする。94 は高台付きの碗、95 は無高台の碗である。95 の底部は糸切りする。96 は高杯の脚柱部である。面取りは 12 面を数える。97 は灰釉陶器の皿である。底部内面に赤色顔料が付着する。98・99 は須恵器の甕と壺である。98 の甕は体部外面タタキ目、内面は板ナデする。99 の壺は外面タタキ目、内面はヨコナデする。100 ~ 102 は輸入陶磁器の白磁碗である。

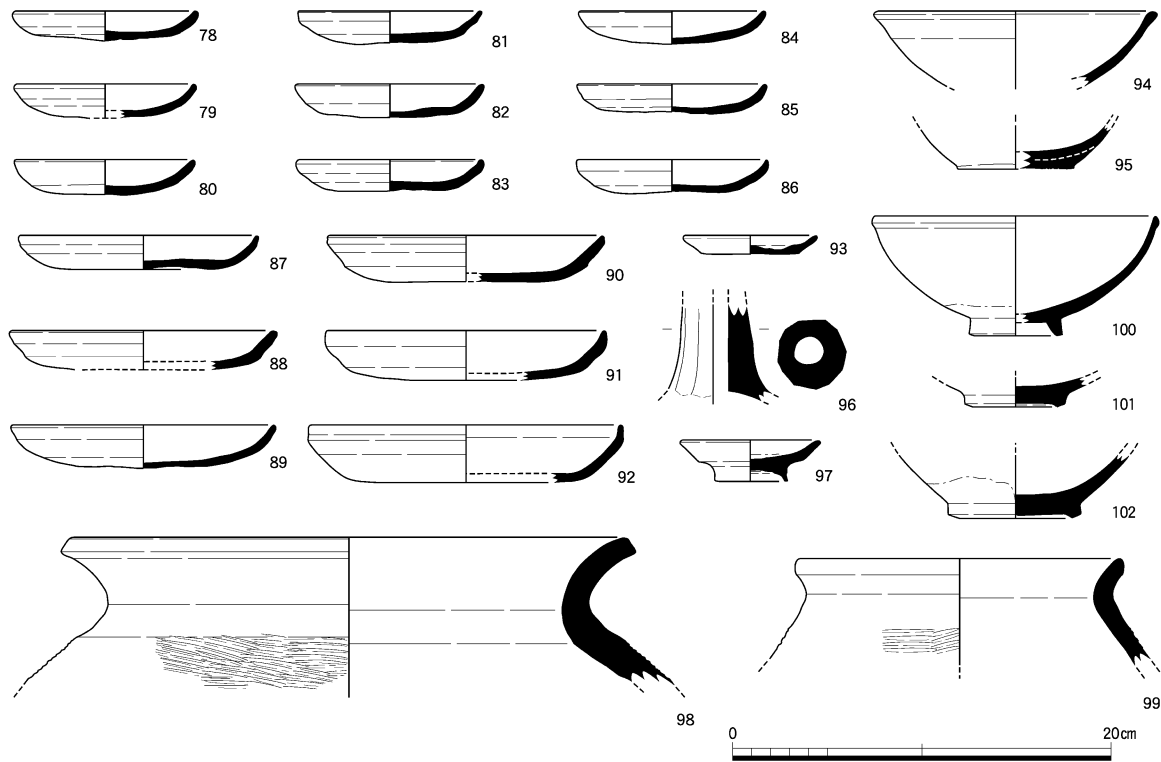


図 39 井戸 373 出土土器実測図 (1 : 4)

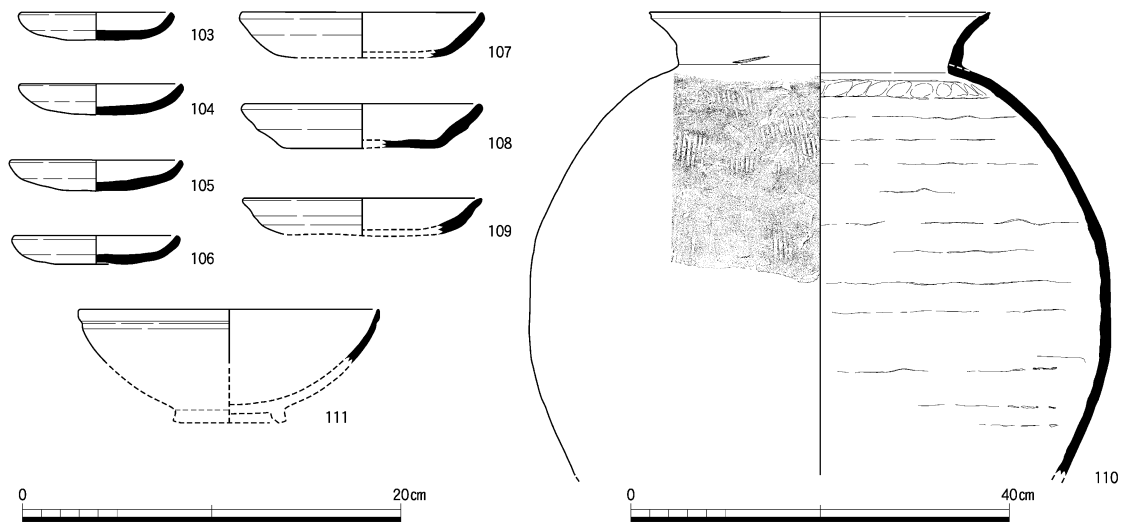


図 40 土坑 802 出土土器実測図 (1 : 4、1 : 8)

いずれも玉縁状口縁のものと考えられる。

土坑 802 (図 40) 土師器、須恵器、灰釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、砥石、平瓦などが出土した。京都VI期古～中段階に属する資料と考えられる。

103～106は、土師器の小型皿である。口径は7.9～8.9 cmの間に分布する。107～109は土師器の大型皿である。口径は12.3～12.7 cmの間に分布する。110は焼締陶器の常滑産甕である。球形の体部から口縁部が大きく外反し、口縁端部は摘み上げる。頸部にはヘラ記号が認められる。体部外面には縦方向の平行線に斜方向の細線が1条加わるタタキ文様が施される。常滑の甕編年³⁾

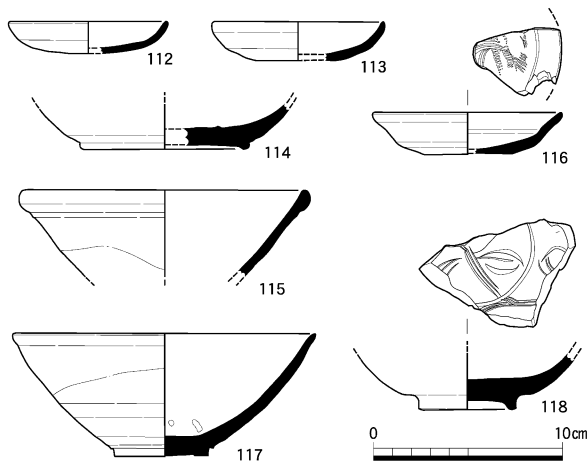


図 41 土坑 505 出土土器実測図 (1 : 4)

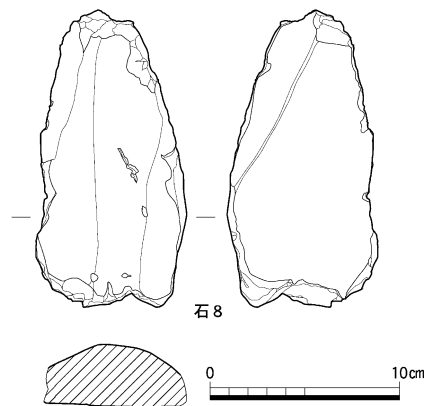


図 42 土坑 505 出土砥石実測図 (1 : 4)

では 1 b 型式に位置付けられるものと考えられる。111 は輸入陶磁器の白磁碗である。口縁端部に小さな玉縁が付く。

(3) 鎌倉・室町時代の遺物

鎌倉時代から室町時代にかけての遺物は、今回の調査で最も多く出土した。特に長方形土坑群からは良好な一括資料が得られた。ここでは遺構の種類に関わらず、標識となる一括遺物が出土した遺構を基準とし、それと同時期と考えられる遺物が出土した遺構を古い順から並べて提示する。

土坑 505 (図 41・42、図版 27) 土師器、須恵器、瓦器、山茶碗、輸入陶磁器、瓦片、砥石、碗形滓などが出土した。京都 VI 期中段階頃に位置付けられる資料と考える。

112・113 は土師器の小型皿である。114 は山茶碗である。底部内面が平滑で、硯転用品の可能性がある。115～118 は輸入陶磁器である。115 は白磁碗、116 は同安窯系の青磁皿、117 は越州窯系の青磁碗で底部内面に目跡がある。118 は龍泉窯系の青磁碗である。内面に片彫蓮花文を有する。

砥石が 1 点出土している。石 8 は砂岩製の粗砥石である。両側面と両端面は欠損する。残存長 15.7 cm、最大幅 7.9 cm、最大厚 3.5 cm、重量は 537 g ある。表裏面とも砥面として使用している。

また、土坑 505 からは、整理コンテナ 2 箱分の碗形滓がまとまって出土した。当該時期に鑄鉄

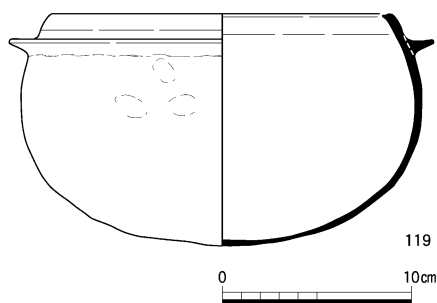


図 43 羽釜埋納遺構 634 出土土器実測図 (1 : 4)

が行われていたことを示す資料である。総重量は 24,563 g ある。図版 27 に残存状況の良好なもの (鑄 1～6) を掲載した。直径は 10.5～13.5 cm の間にあり、1 個体の重量は鑄 1 が 871g、鑄 2 が 672 g、鑄 3 が 811 g、鑄 4 が 914g、鑄 5 が 886 g、鑄 6 が 1,349 g ある。

羽釜埋納遺構 634 (図 43) 119 は埋納された土師器羽釜である。体部下半には煤が付着する。相伴土器はないが、体部最大径が口縁部径より大きく丸みを帯びる形状

や、器壁が薄い点など羽釜としては古い形状を示す。

地下式倉庫 450 (図 44、図版 27) 土師器、須恵器、白色土器、焼締陶器、山茶碗、瓦器、輸入陶磁器、瓦、銭貨、鉄滓、砥石などが出土した。京都VI期新段階に属する資料と考える。

120～125は土師器小型皿で、120は口径が6.6cmと小さいが、口縁部を強く2段にナデるため器高が1.8cmと高くなっている。他は口径8cm強のもの(121～123)と口径9cm強(124・125)のものに分けられる。126は土師器の白色系小型皿である。器壁が厚く、白色系の出現期の様相を呈している。127は白色土器の皿である。ロクロ成形で、底部は糸切りする。128は山茶碗の小皿である。底部内面に赤色顔料が付着する。129～134は輸入陶磁器で、青白磁皿(129)、白磁皿(130・131)、白磁碗(132・133)、龍泉窯系の青磁碗(134)がある。135～138は焼締陶器の常滑産甕口縁である。口縁部内側に凹線がめぐり先端が尖るもの(135)と、口縁端部を拡張し縁帯がめぐるもの(136～138)がある。縁帯の幅は2～2.5cmある。常滑の甕編年では4型式から6a型式に位置付けられるものである。

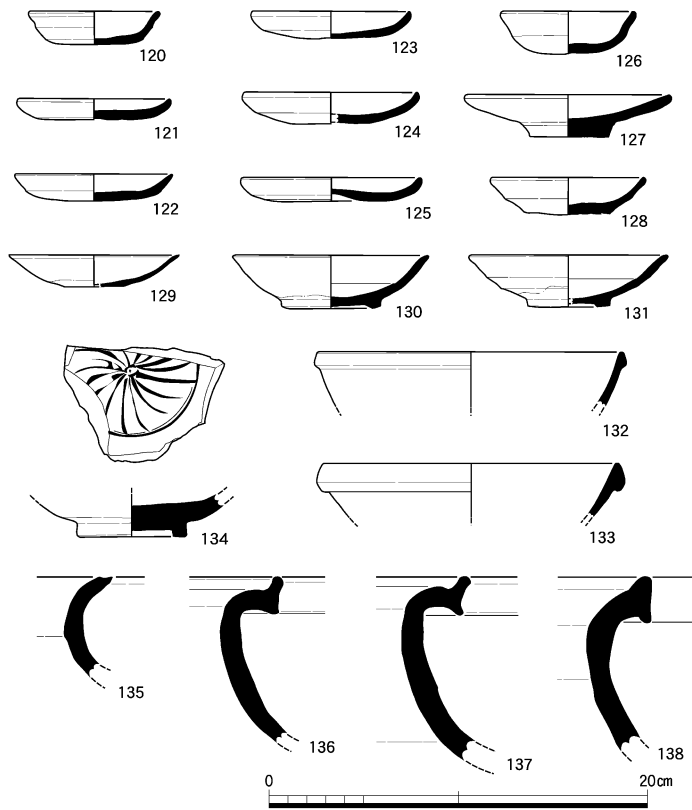


図 44 地下式倉庫 450 出土土器実測図 (1 : 4)

また、銭貨が1枚出土している。図版 27 - 銭 1 で、元豊通寶(初鑄北宋 1078 年)である。

土坑 127 (図 45、図版 17) 破片数にして 253 片の土器類が出土した。内訳は土師器 210 片、白色土器 3 片、瓦器 9 片、施釉陶器 2 片、焼締陶器 21 片、輸入陶磁器 8 片である。土師器はすべて皿で

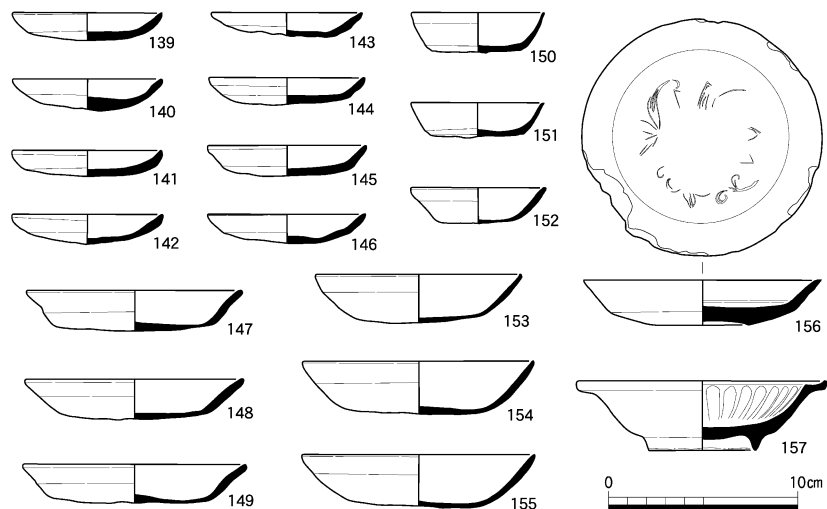


図 45 土坑 127 出土土器実測図 (1 : 4)

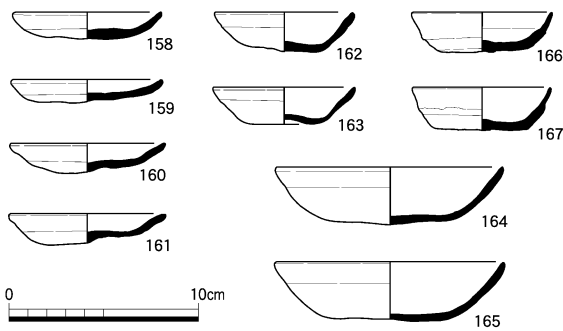


図 46 土坑 502 出土土器実測図 (1 : 4)

完形品が多い。京都Ⅶ期古～中段階に属する資料である。土器類以外には鉄滓や平瓦が出土している。

139～146 は土師器の赤色系小型皿である。口径は 7.9～8.4 cm の間にまとまる。147～149 は土師器の赤色系大型皿で口径は 11.5 cm 前後ある。150・151 は白色土器の杯である。ロクロ成形後、底部と体部の境を回転ヘラケズ

リする。底部はヘラオコシする。152 は土師器の白色系小型皿で口径は 7.0 cm ある。153～155 は土師器の白色系大型皿である。口径は 153 が 10.8 cm とやや小振り、154・155 は 12 cm 強ある。156・157 は完形の輸入陶磁器である。156 は白磁皿で底部は釉を掻き取り、底部内面には草花文の凹印を押す。157 は龍泉窯系の青磁杯で、高台端部は釉を掻き取り、体部内面はケズリで花卉を表現する。

土坑 502 (図 46、図版 17) 破片数にして 505 片の土器類が出土した。内訳は土師器 460 片 (うち 446 片は皿)、瓦器 10 片、須恵器 19 片、施釉陶器 2 片、焼締陶器 2 片、輸入陶磁器 12 片である。京都Ⅶ期中段階に属する資料である。土器類以外には、鉄滓や砥石片が出土している。

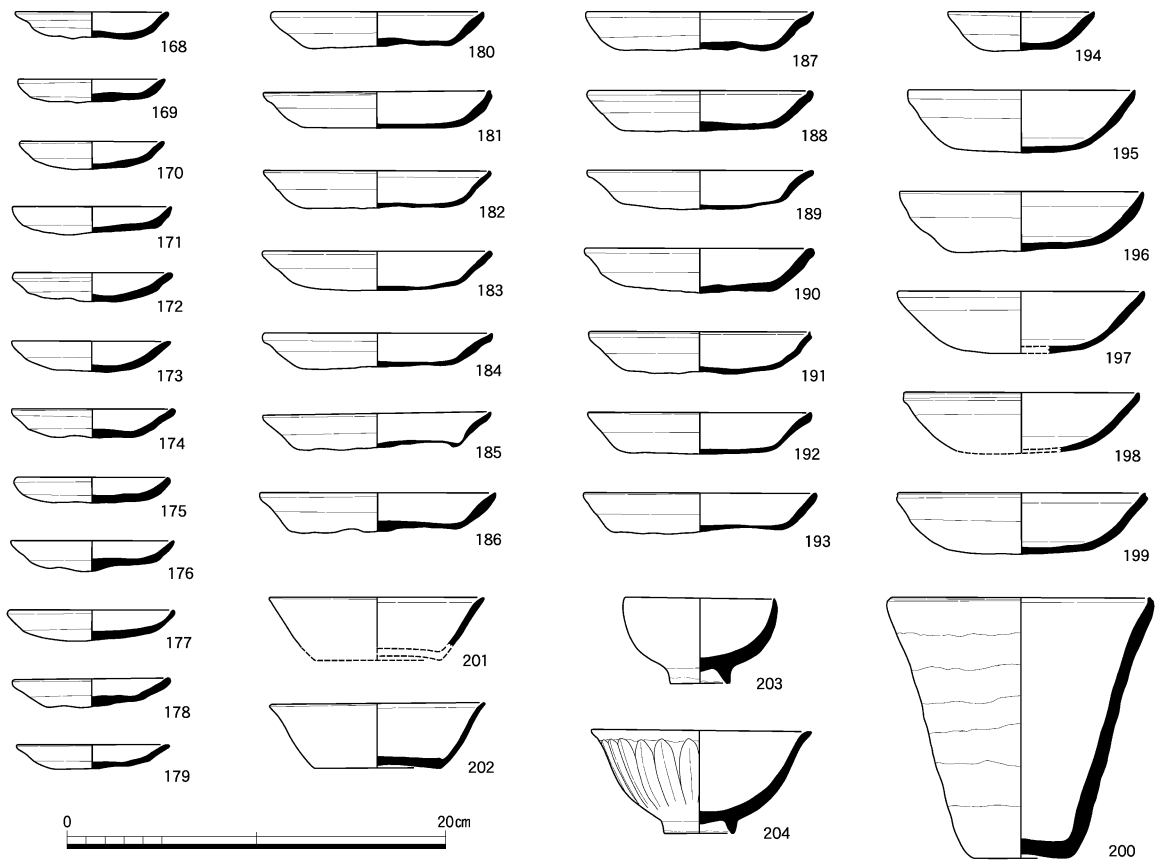
158～161 は、土師器の赤色系小型皿である。口径は 7.9～8.4 cm の間に分布する。162・163 は、土師器の白色系小型皿で、口径は 7.5 cm 前後ある。163 は底部が上方に持ち上がり、いわゆるへそ皿的要素をもつ。口縁端部に煤が付着する灯明皿である。164・165 は土師器の白色系大型皿である。口径は 12 cm 強ある。166・167 は白色土器の杯である。ロクロ成形で、底部はヘラオコシする。底部付近は回転ヘラケズリが見られず、胎土にはクサリレキを含む。非在地産と考えられる。

土坑 108 (図 47、図版 18) 破片数にして 541 片の土器類が出土した。内訳は土師器 507 片 (うち皿が 504 片)、瓦器 9 点、須恵器 7 点、焼締陶器 4 片、輸入陶磁器 14 片である。京都Ⅶ期古～中段階に属する資料である。土器類以外には鉄滓、石鍋、ガラス、炭化米などが出土している。

168～179 は土師器の赤色系小型皿である。口径は 7.6～8.6 cm の間に分布する。180～193 は土師器の赤色系大型皿である。口径は 11.0 cm とやや小さい 180 を除いて、他は 12 cm 前後ある。194 は土師器の白色系小型皿である。口径は 7.6 cm ある。195～199 は土師器の白色系大型皿である。口径は 12～13 cm の間に分布する。200 は土師器の深鉢である。粘土紐接合痕が明瞭にのこる。201～204 は輸入陶磁器である。白磁皿 (201・202)、龍泉窯系の青磁小椀 (203)、龍泉窯系の青磁椀 (204) がある。白磁皿は 2 点とも口禿である。203 の青磁小椀は口禿で、高台端部の釉を掻き取り、施釉部との境は赤く発色する。204 の青磁椀は口縁端部が外反し、体部外面には鎬蓮弁文を有する。高台端部は釉を掻き取り、赤く発色する。

土坑 538 (図 47) 破片数にして 374 片の土器類が出土した。内訳は土師器 286 片 (うち皿が 282 片)、瓦器 30 片、須恵器 37 片、施釉陶器 3 片、焼締陶器 1 片、輸入陶磁器 17 片である。京

土坑108



土坑538

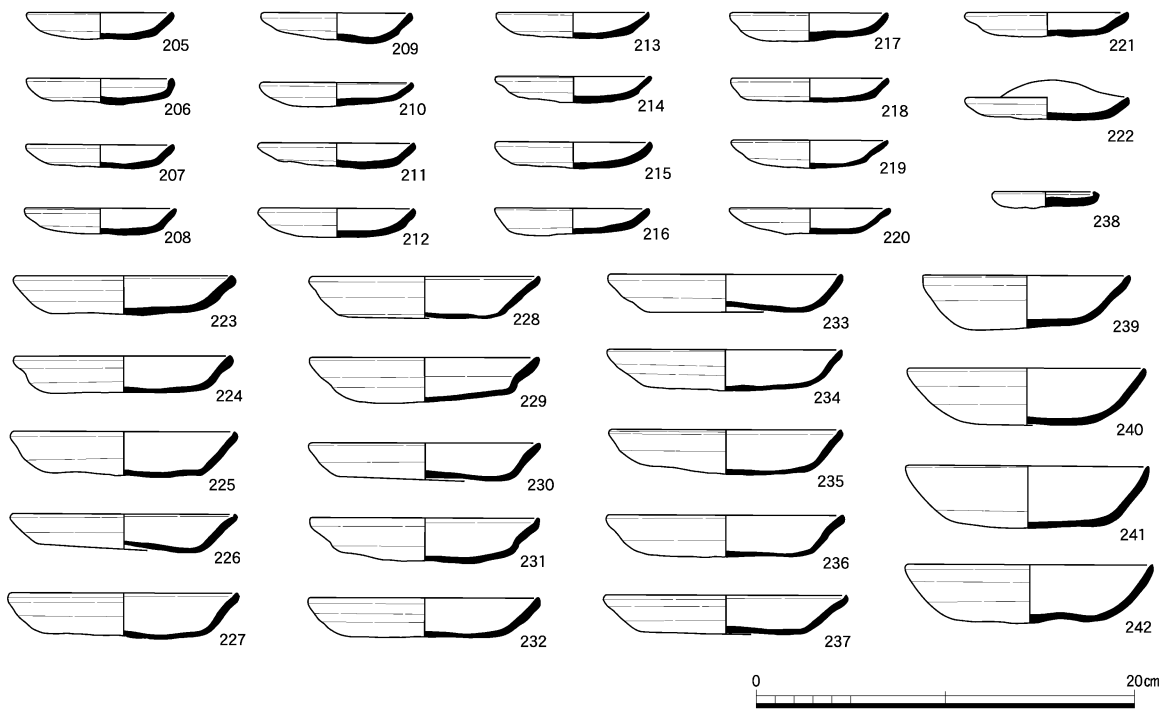


图 47 土坑 108·538 出土土器实测图 (1 : 4)

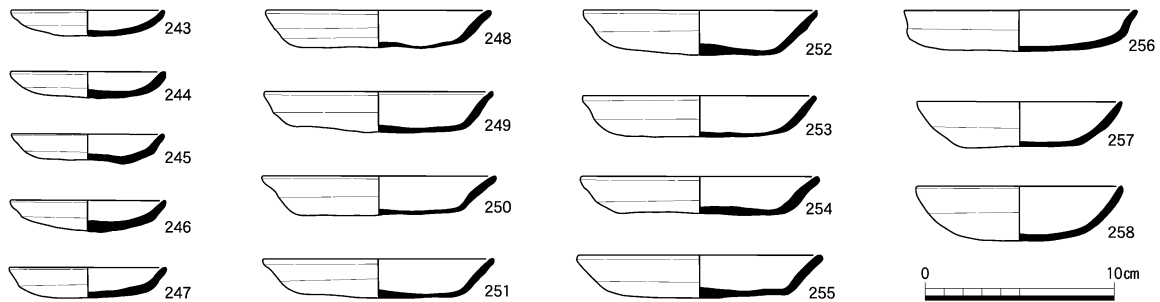


図 48 土坑 426 出土土器実測図（1：4）

都VII期古～中段階に属する資料である。土器以外には鉄製短刀、鉄釘、鉄滓、砥石、軽石などが出土している。

205～222は土師器の赤色系小型皿である。口径は7.6～8.4 cmの間に分布する。胎土にクサリレキや金雲母を含むものが多い。また、口縁端部を強く横ナデするために206のように口縁部が直立ぎみになるものや、207・208のように外反するものが多く、在地産とは異なる特徴の見られるものを含む一群である。223～237は土師器の赤色系大型皿である。口径は11.4～12.7 cmの間に分布する。小型皿と同様に胎土にクサリレキや金雲母を含むもの多く、口縁部が強い横ナデにより外反するものや、やや長くのびるものが目立つ。238は土師器のコースター形の皿である。口径は5.3 cmある。239～242は土師器の白色系大型皿である。239のみやや小振りて口径は10.8 cm、240～242は口径12.5 cm前後ある。

また、土坑538からは鉄製短刀が出土したが、断片であり、錆の進行も著しいため図化できなかった。残存重量は40.24 gある。破断面で確認できた刃の厚さは約2.5 mmある。

土坑426（図48）土師器、焼締陶器甕片、輸入陶磁器白磁・青磁などが出土した。京都VII期古～中段階に属する資料である。

243～247は土師器の赤色系小型皿である。口径は8～8.2 cmの間にまとまる。248～256は土師器の赤色系大型皿である。口径は11.8～12.8 cmの間に分布する。252～254・256は胎土にクサリレキを含む。特に256は多量に含み、口縁部を短く摘み上げるように横ナデするなど、乙訓産の土師器皿の特徴を示す。257・258は土師器の白色系大型皿である。口径は2点とも10.8 cmある。

地下式倉庫370（図49・50、図版19・27）土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、銭貨、鉄滓、植物遺存体、石鍋、軒平瓦、木製品などが出土した。京都VII期古～中段階に属する資料である。

259～265は土師器の赤色系小型皿である。口径は7.8～8.8 cmの間に分布する。266～268は土師器の赤色系大型皿である。口径は12～12.9 cmの間に分布する。269～272は土師器の白色系のコースター形の皿である。口径は4～5 cmの間にある。273は土師器の白色系小型皿で、口径は7.3 cmある。274～286は土師器の白色系大型皿である。口径は10.8～13.2 cmの間に分布する。口縁部を2段に横ナデするものと1段のみのものがある。287は瓦器の皿である。内外面ともにやや疎なヘラミガキを施す。外面は縦に凹みを入れて輪花状にする。288～293は輸入

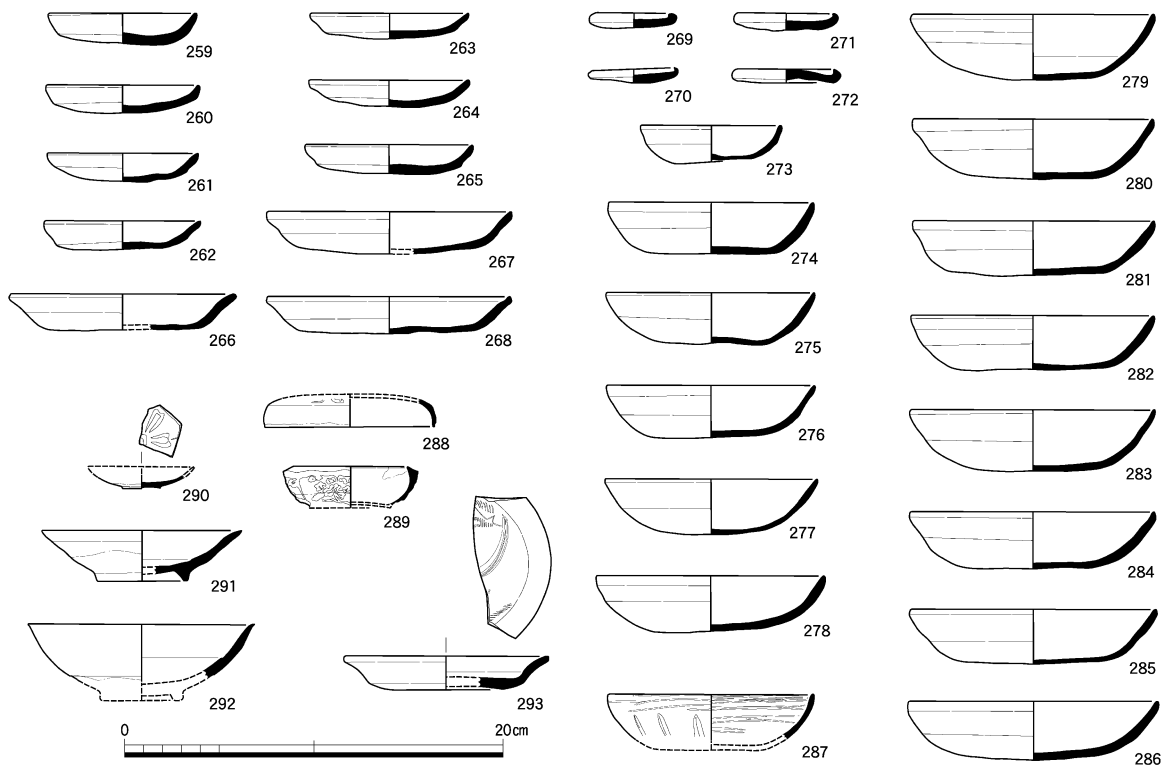


図 49 地下式倉庫 370 出土土器実測図 (1 : 4)

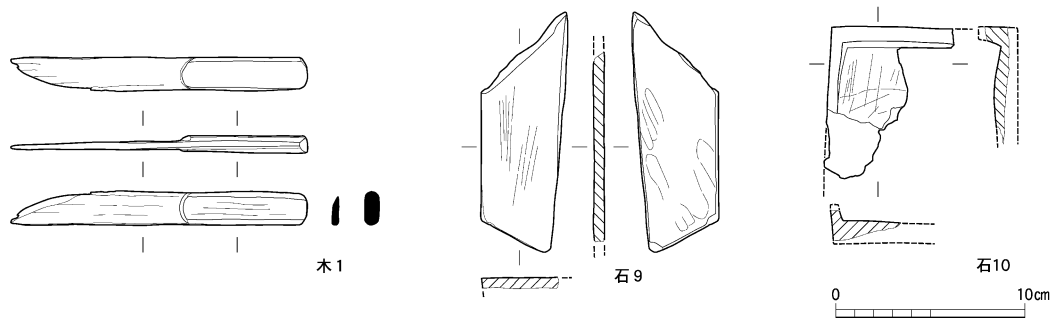


図 50 地下式倉庫 370 出土木製品・石製品実測図 (1 : 4)

陶磁器で、白磁の合子蓋と身 (288・289)、白磁小皿 (290)、白磁皿 (291)、白磁椀 (292)、龍泉窯系青磁皿 (293) がある。

図 50 は、地下式倉庫 370 から出土した土器類以外の遺物である。木 1 は床土から出土した刀子形木製品である。柄部分や刃先まで精巧に表現されている。長さ 15.6 cm、最大幅 1.8 cm、最大厚は 0.8 cm である。樹種はスギ。石 9 は砥石である。表面は砥面で、裏面には鑿痕が認められる。残存長 12.6 cm、最大幅 4.4 cm、最大厚は 0.6 cm である。石材は珪質頁岩～珪質粘板岩⁴⁾で、重量は 49.21 g である。石 10 は硯である。海部と陸部のまわりに縁を付ける形状の硯としては最古級のものと考えられる。平面形は陸部にかけて広がり、台形状になる。残存長 8.0 cm、残存幅 6.8 cm、最大厚は 1.6 cm である。材質は頁岩～粘板岩で、重量は 52.99 g である。また、銭貨が 1 枚出土している。図版 27 - 銭 2 で、景祐元寶 (初鑄北宋 1034 年) である。

埋甕群 (図 51・52、図版 20) 埋甕群では焼締陶器の常滑産大甕が据えられた状態で出土した

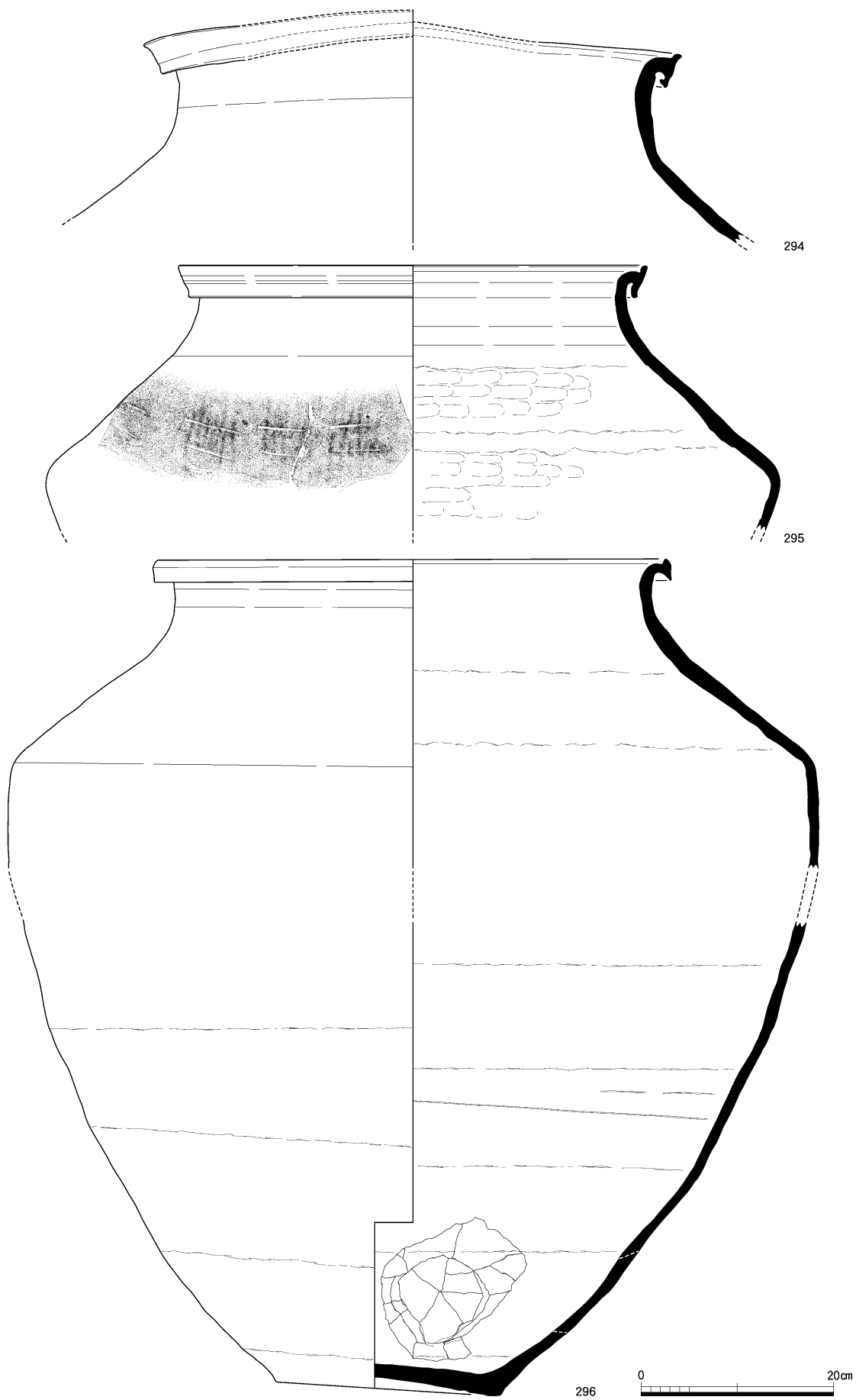


图 51 埋甕群出土常滑産大甕実測図 (1 : 6)

が、地上に露出していたと考えられる上半部については、破却時あるいは後世の整地時に削平されており、全体を復元できるものは少ない。口径を復元できたのは3点である。294は埋甕55の甕口縁部である。口径は実測図では55.7 cmあるが、焼き歪みが大きく10 cm前後の誤差がある。縁帯部の幅は3.8 cmあり、常滑の甕編年では7型式のものである。同一個体と考えられる底部は底より約30 cmまで残存し、内側から穿孔された痕が2箇所認められる。295は埋甕57の甕口縁部から肩部である。口

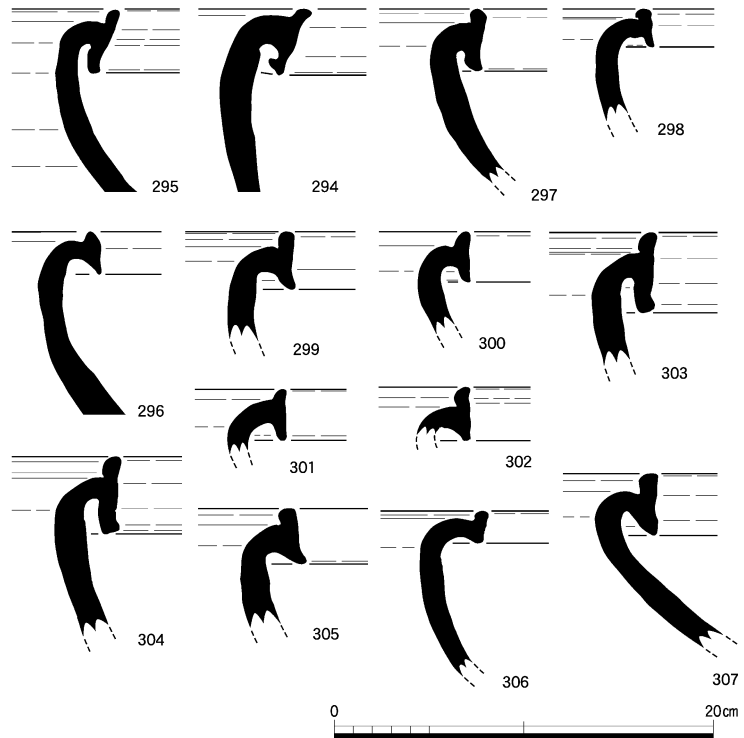


図52 埋甕群出土常滑産大甕口縁部実測図(1:4)

径は48.3 cmあり、肩が大きく張る形状を示す。肩部には斜格子と平行線の組み合わせが2段になったタタキ文様を巡らせる。口縁部の縁帯幅は3.5 cmあり、常滑の甕編年では6b~7型式のものである。同一個体と考えられる底部は底より24 cm残存する。296は埋甕115の甕で、唯一全体を復元できたものである。口径は52.8 cmあり、縁帯の幅は2.3 cmで常滑の甕編年では6a型式のものである。肩部は無文。底部には内側から穿孔された痕が4箇所認められる。

図52は、埋甕群の常滑産甕の口縁部である。各出土遺構は一覧表に掲載した。縁帯幅は1.7~4.2 cmの間に分布し、常滑の甕編年では5型式~7型式までのものがある。

埋甕群埋土(図53、図版20)埋甕群の埋土からは、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、石鍋、鉄釘、鉄滓、軽石、丸・平瓦などが出土した。特に埋甕57・58・59・300・390からは、まとめて土器類が出土し、埋甕群の廃絶時期を示す土器群と考えられる。京都Ⅶ期新~Ⅷ期古段階に属する資料である。

308~323は土師器の赤色系小型皿である。口径は7.3~8.4 cmの間に分布する。胎土にクサリレキを多く含み、口縁部を強く横ナデするものが多い。324~328は土師器の赤色系大型皿である。口径は10~11.5 cmまでの間に分布するが、324が10 cmと小さいのを除けば、他は11 cm前後ある。いずれも胎土にクサリレキを含む。329~332は土師器の白色系小型皿である。口径は6.2~7.0 cmの間に分布する。331・332は底部が上方に持ち上がり、いわゆるへそ皿を志向する。2点ともに口縁端部を強く横ナデし外反する。333~344は土師器の白色系大型皿である。口径は11.6~12.6 cmの間に分布する。12 cm前後のものが多い。345は東播系の須恵器鉢、346は瓦質の火鉢である。瓦質火鉢は底部未調整で型作りである。347~350は輸入陶磁器である。

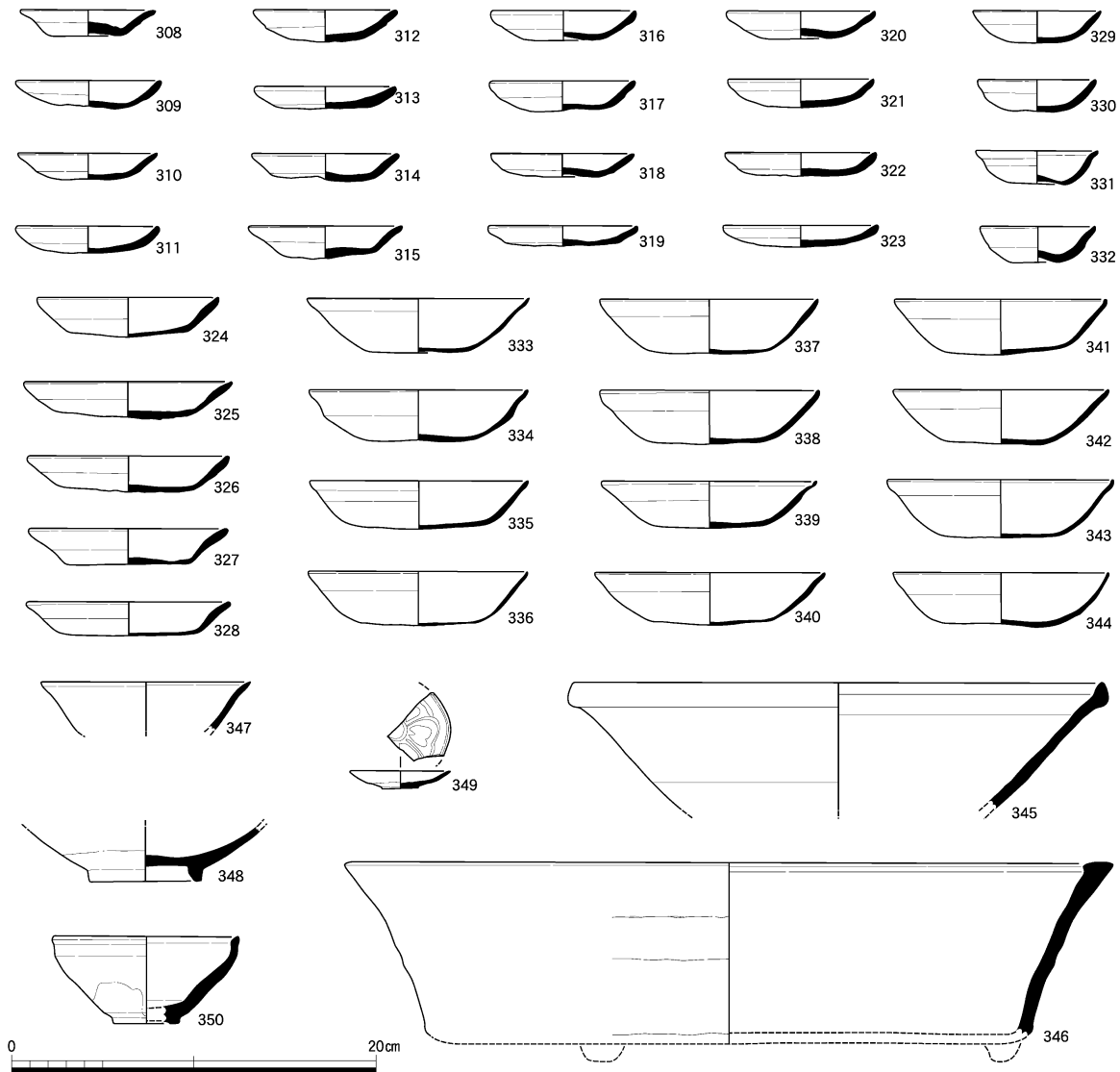


図 53 埋甕群埋土出土土器実測図（1：4）

白磁碗（347・348）、青白磁小皿（349）、天目茶碗（350）がある。347の白磁碗は口禿である。349の青白磁小皿は内面に白釉で花文を描く。350の天目茶碗は露胎部分に上薬をかけ赤く発色させている。

土坑20(図54～56、図版21) 破片数にして6,639片の土器類が出土した。内訳は土師器6,578片（うち皿が6,572片）、瓦器17片、須恵器18片、施釉陶器5片、焼締陶器9片、輸入陶磁器12片と、土師器皿が全体の99%近くを占める。京都Ⅷ期古段階に属する一括資料である。土器類以外には、漆器、銅製碗、鉄製短刀、鉄製蓋、鉄釘、鉄滓、銭貨、ガラス小玉、水晶玉、砥石、瓦片、桃の種などが出土している。

351～432は土師器皿である。351～365は赤色系小型皿で、口径は7.2～8.2cmの間に分布する。366～385は赤色系大型皿である。口径は10.4～12cmの間に分布するが、11cm前後のものが多く、386は白色系小型皿である。口径は6cmある。387～401は白色系のいわゆるへそ皿である。口径は6.1～7.1cmまでの間に分布する。402・403は白色系の中型皿で、2点とも

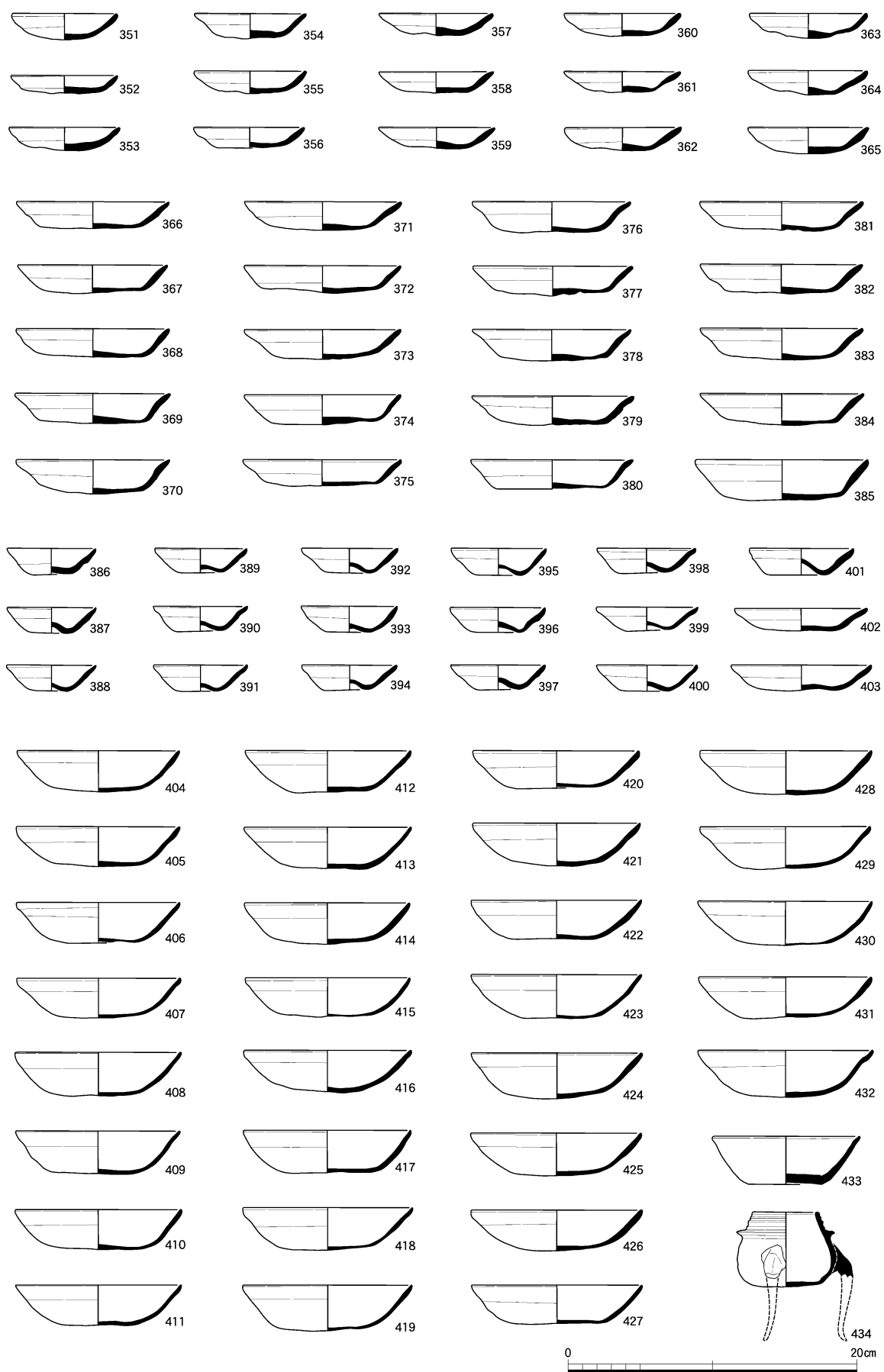


图 54 土坑 20 出土土器实测图 (1 : 4)

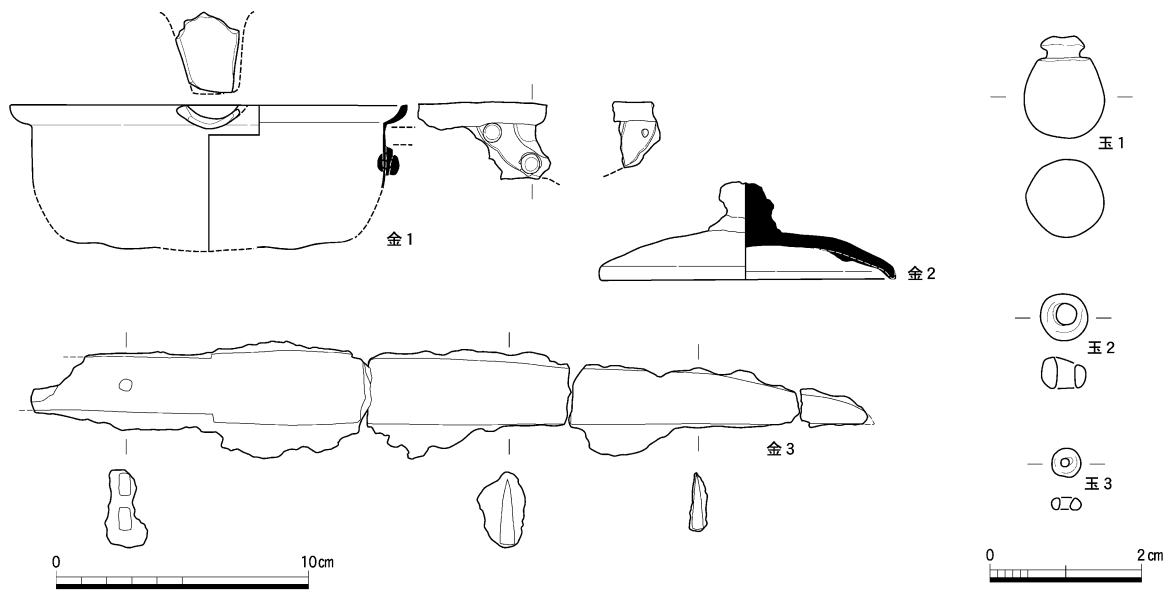


図55 土坑20出土金属製品・玉類実測図(1:3、1:1)



図56 青銅鍋(金1)付着糊殻

灯明皿として使用されている。404～432は白色系の大型皿である。口径は11.2～12 cmの間に分布する。433は完形の輸入陶磁器の白磁皿である。口禿で、底部は釉を掻き取る。434は瓦器のミニチュア三足羽釜である。

図55は土坑20から出土した土器類以外の遺物である。金1は土坑の中央に据えられていた青銅製鍋である⁵⁾。復元口径15.7 cm、器高5.9 cm、残存重量は188.1

gある。胴部の器壁は1 mm前後と薄い。口縁部は受け口状を呈し、片口が付く。側面には雲形板金を鋳留しており、本来はそこに柄が取り付けられていたと考えられる。底部外面には煤が厚く付着していた。また、底部外面には稲の糊殻(図56)やマメが付着していたが、糊殻は炭化していないことから、鍋の下に敷かれていたと考えられる。金2は鉄製の蓋で、金1の青銅製鍋の横から裏返った状態で出土したものである。口径11.5 cm、器高3.9 cm、重量は174 gある。頂上には鈕座の上に宝珠形の鈕が付く。全体に錆が進行し、文様などの有無は不明である。金3は鉄製の短刀である。全体の残存長は33.2 cmあり、茎を除いた刃部の残存長は25.8 cmある。残存重量は192 gあり、破断面で確認できた刃の厚さは最大で6 mmある。茎の目釘孔の直径は5 mmある。玉1～3は、埋土の水洗篩別で出土したものである。玉1は水晶製の露玉である⁶⁾。重量1.99 g、比重は2.65で、先端に紐を括り付けるための加工がなされている。玉2はガラス製の小玉である。鉛ガラスで、割面で観察できる色は青色であるが、表面は風化して白く変色する。小口径6.5 mm、孔径3.0 mm、厚さ4.0 mm、重量は0.18 gある。玉3もガラス製小玉である。鉛ガラスで、色は青緑色を呈するが、表面の一部は風化により白く変色する。小口径4.0 mm、孔径1.75 mm、厚さ1.75 mm、重量は0.03 gある。

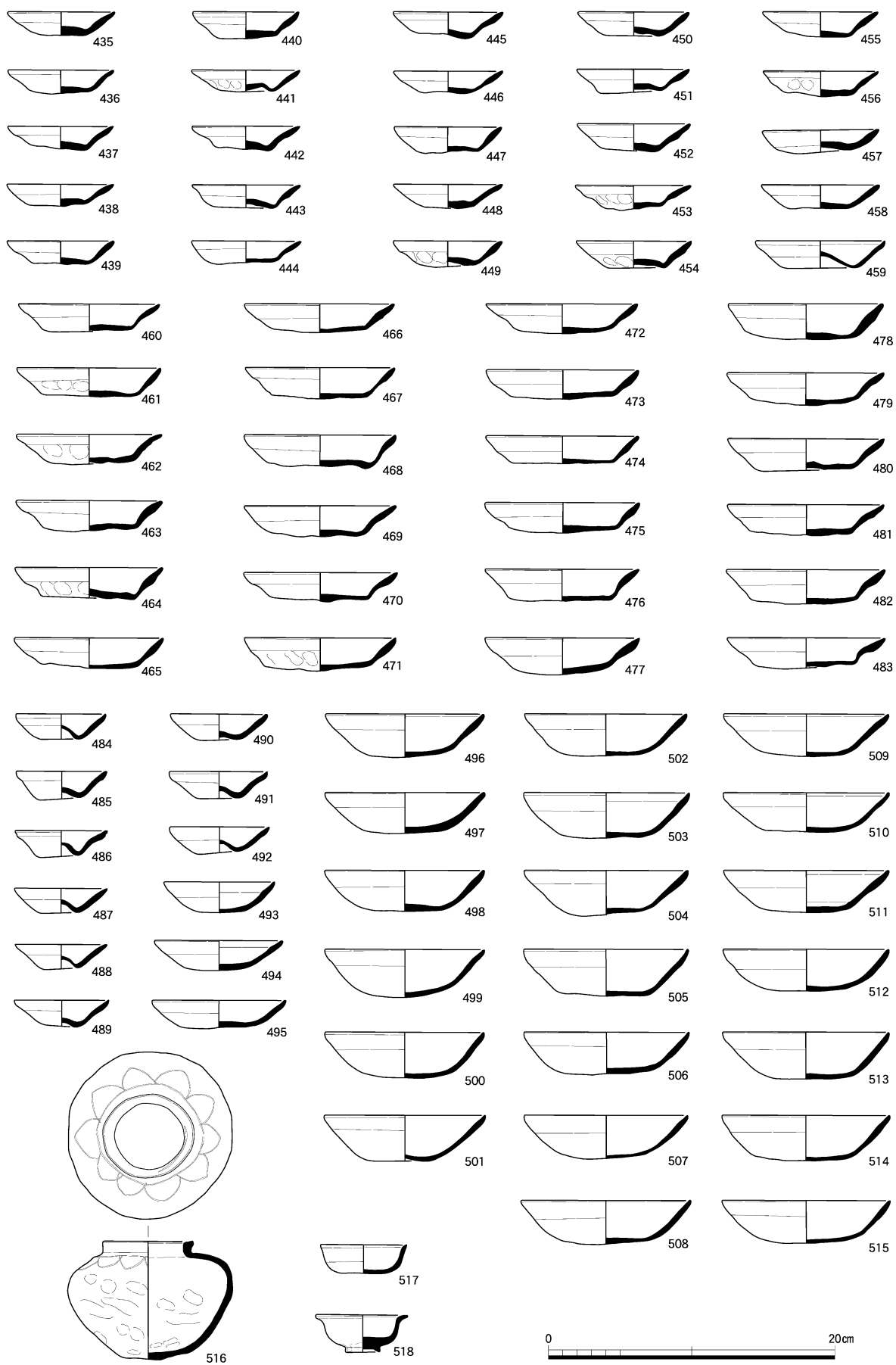


图 57 土坑 79 出土土器实测图 (1 : 4)

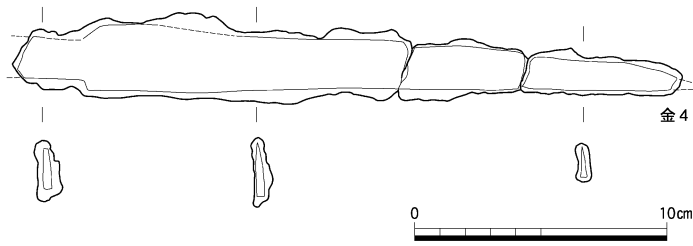


図 58 土坑 79 出土短刀実測図 (1 : 3)

土坑 79 (図 57 ~ 59、図版 22) 破片数にして 2,340 片の土器類が出土した。内訳は、土師器 2,271 片 (うち皿が 2,250 片)、瓦器 13 片、須恵器 19 片、施釉陶器 7 片、焼締陶器 19 片、輸入陶磁器 11 片と、土師器皿

が全体の 96% を占める。京都 VIII 期古段階に属する一括資料である。土器類以外には、漆器、銭貨、鉄製短刀、鉄釘、鉄滓、石製紡錘車、石鍋、砥石、瓦類、焼石などが出土している。

435 ~ 515 は土師器皿である。435 ~ 458 は赤色系小型皿である。口径は 7.3 ~ 8.2 cm の間に分布する。459 は赤色系のいわゆるへそ皿である。460 ~ 483 は赤色系の大型皿である。口径は 9.7 ~ 11 cm の間に分布する。484 ~ 492 は、白色系のいわゆるへそ皿である。口径は 6.2 ~ 7 cm の間に分布する。493 ~ 495 は白色系の小型皿である。器高の低い 494・495 はいずれも灯明皿として使用されている。496 ~ 515 は、白色系の大型皿である。口径は 11 ~ 11.8 cm の間に分布する。516 は瓦器の短頸壺である。肩部に花卉状の暗文を施す。517 は瓦器の小皿である。518 は施釉陶器の古瀬戸小皿で、貼り付けの高台が付く。

図 58・59 は土坑 79 から出土した土器類以外の遺物である。金 4 は鉄製の短刀である。全体の残存長は 26.3 cm あり、茎を除いた刃部の残存長は 23.5 cm ある。残存重量は 97.9 g あり、破断面で確認できた刃の

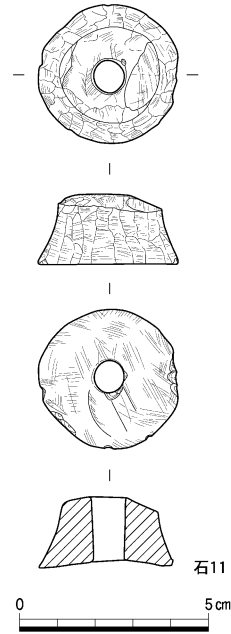


図 59 土坑 79 出土石製品実測図 (1 : 2)

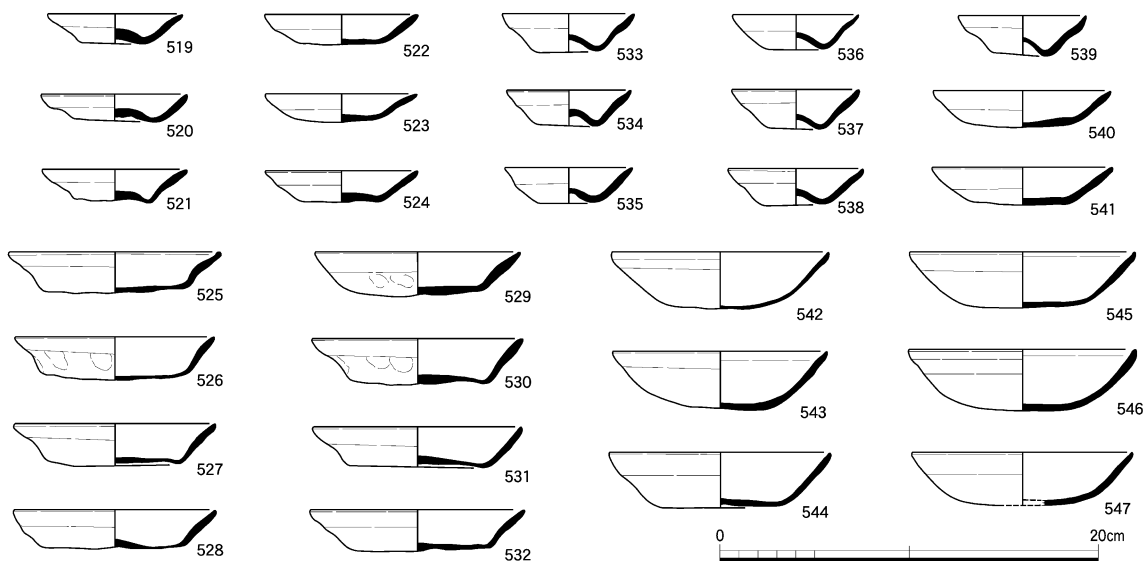


図 60 土坑 560 出土土器実測図 (1 : 4)

厚さは最大で3mmある。石11は滑石製の紡錘車状石製品である。側面観は台形状を呈する。狭端面の最大径は2.65cm、広端面の最大径は3.65cmある。高さは1.85cm、穿孔径は狭端側で0.9cm、重量は28.93gある。狭端面には加工痕や剥離痕が残るが部分的に研磨を行っている。側面は細かい単位のケズリ加工を行っている。広端面は研磨され平滑である。

土坑560(図60)破片数にして524片の土器類が出土した。内訳は、土師器470片(うち皿が455片)、瓦器8片、須恵器20片、施釉陶器9片、焼締陶器13片、輸入陶磁器4片である。京都Ⅷ期古段階に属する資料である。土器類以外には、鉄滓、壁土、砥石、瓦片などが出土している。

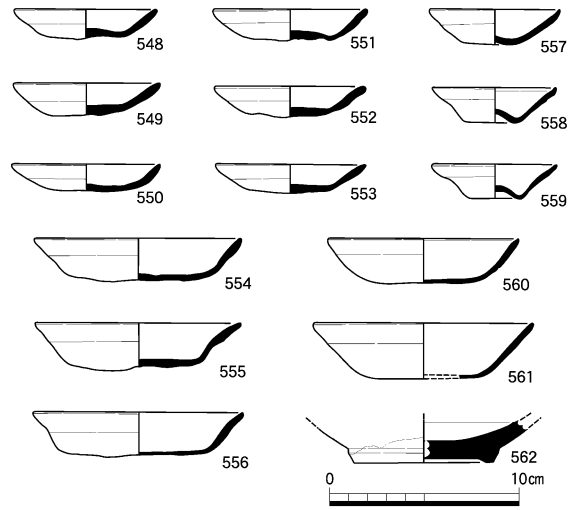


図61 土坑791出土土器実測図(1:4)

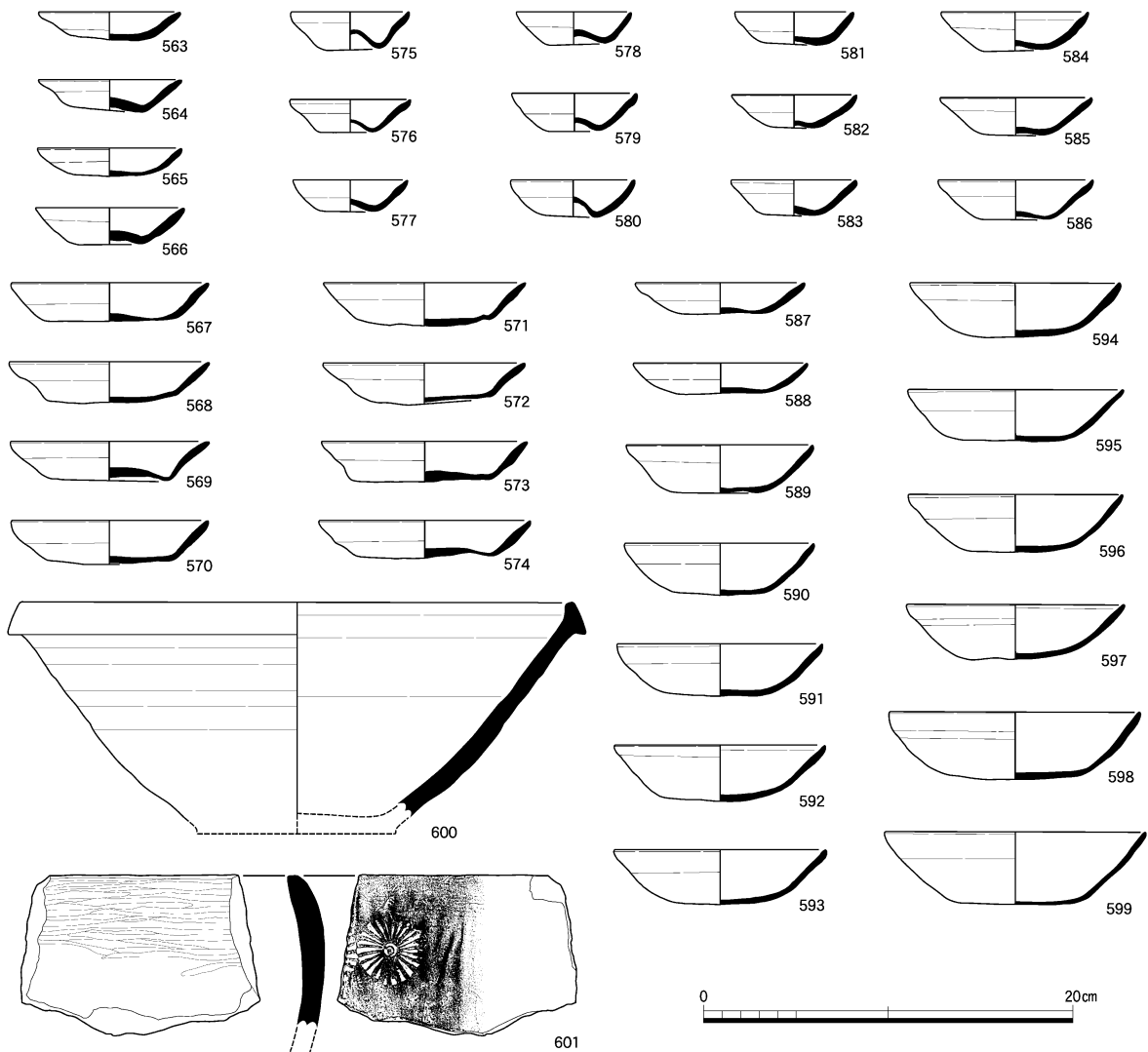


図62 土坑418出土土器実測図(1:4)

519～547は土師器皿である。519～524は赤色系の小型皿で、口径は7.2～8cmの間に分布する。525～532は、赤色系の大型皿である。口径は10.2～11.2cmの間に分布する。533～538は白色系のいわゆるへそ皿である。口径は6.6～7.1cm。540・541は白色系の小型皿で、いずれも灯明皿として使用されている。542～547は白色系の大型皿である。口径は11.4～12cmの間に分布する。

土坑791(図61)土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、鉄滓、砥石、平瓦などが出土した。京都Ⅷ期古段階に属する資料と考えている。

548～561は土師器皿である。548～553は赤色系の小型皿で、口径は7.4～8cmの間に分布する。554～556は赤色系の大型皿で、口径は10.8～11cmの間にまとまる。557は白色系の小型皿、558・559はいわゆるへそ皿である。口径は6.4～6.8cm。560・561は白色系の大型皿である。口径は560が10cm、561が11.4cmある。562は、輸入陶磁器の白磁碗である。底部外面に墨書が認められる。

土坑418(図62)土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、鉄滓、鉄釘、砥石、瓦片などが出土した。京都Ⅷ期古～中段階に属する資料である。

563～599は土師器皿である。563～566は赤色系の小型皿で、口径は7.6～8cmの間に分布する。565は底部内面に墨が付着する。567～574は赤色系の大型皿である。口径は10.6～11.4cmの間に分布する。575～580は白色系のいわゆるへそ皿である。口径は1.8～2.1cm。581～586は白色系の小型皿である。口径は1.8～2.2cmある。587・588は白色系小型皿の器高の低いタイプで、いずれも灯明皿として使用されている。口径は9.1cmと9.4cm。589～599は白色系の大型皿である。口径が10.1～11.8cmのもの(589～597)と、口径が13.6～14cmで器高の高いもの(598・599)に分かれる。600は東播系の須恵器鉢、601は瓦器の火鉢である。

火鉢の外面には花文のスタンプが押印される。

土坑471(図63)土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、鉄滓、瓦片などが出土した。京都Ⅷ期古～中段階に属する資料である。

602～618は土師器皿である。602は赤色系の小皿で、口径は8cmある。603～609は赤色系の大型皿である。口径は10.6～11cmの間に分布する。610～612は、白色系のいわゆるへそ皿である。口径は6.8～7.2cmの間にある。613～615は白色系の小型皿で、613は器高の高いタイプ、614・615は器高の低いタイプである。口径は8.2～9.2

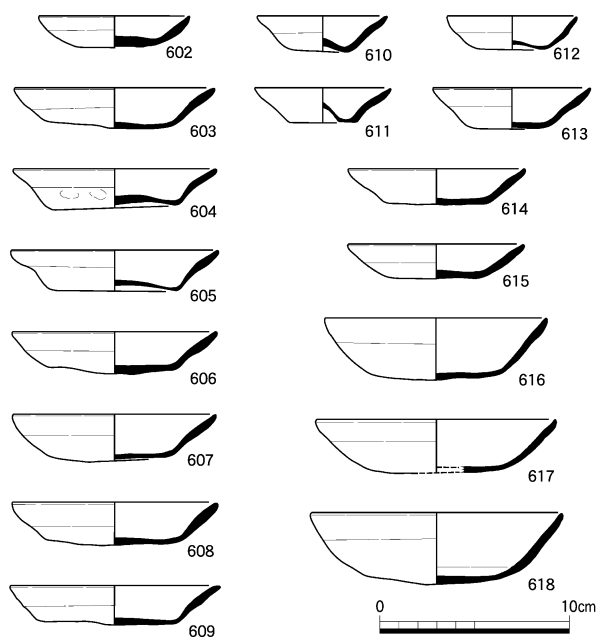


図63 土坑471出土土器実測図(1:4)

cmの間にあり、614は灯明皿として使用されている。616～618は白色系の大型皿である。口径は11.6～13.2cmの間にある。

井戸22・80・419（図64）621～627は井戸22から出土した土器類である。京都X期古～中段階に属する資料と考えている。621・622は白色系の土師器皿で、621は

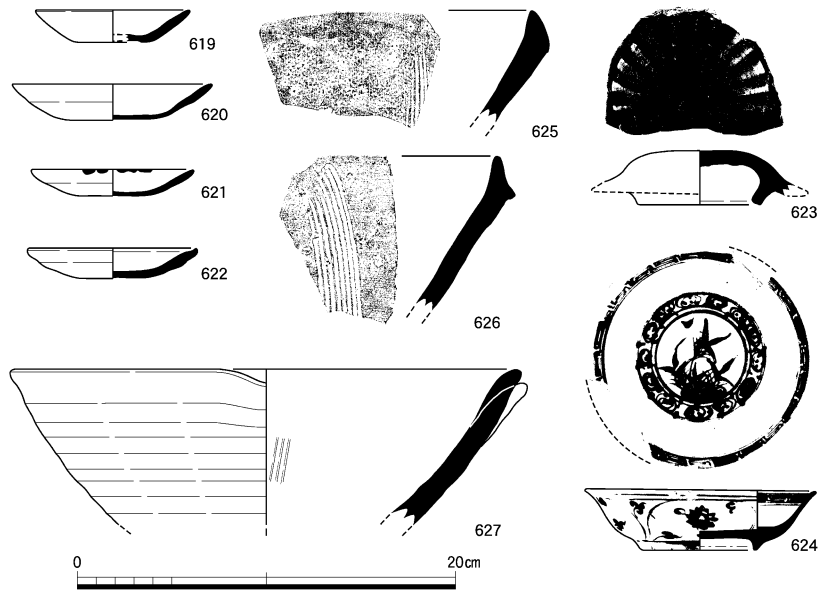


図64 井戸22・80・419出土土器実測図（1：4）

灯明皿として使用されている。623・634は輸入陶磁器である。623は青磁蓋、624は井戸の底から出土した明の染付皿である。625～627は焼締陶器の播鉢である。625・626は備前焼で焼成は硬質、627は信楽焼で焼成は軟質である。井戸22からはほかに、施釉陶器、瓦器、丸平瓦、砥石などが出土している。619は井戸80から出土した土師器の白色系の皿である。遺物量が少ないが、井戸22と同時期頃のものと考えている。井戸80からはほかに、施釉陶器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、丸瓦などが出土している。620は井戸419から出土した白色系の土師器皿である。井戸22と同時期か、やや新しいものと捉えている。井戸419からはほかに、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などの破片、軒平瓦、鉄釘、砥石などが出土している。

土坑216（図65、図版27）土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、砥石、鋳型などが出土した。京都IX期新段階～X期古段階に属する資料である。

628～639は土師器皿である。628・629は赤色系の小型皿で口径は7cmと8.6cmである。630・631は赤色系の大型皿である。口径は10.5cmと10.3cmである。632・633は白色系の小型皿で、口径はいずれも8cmある。634・635は白色系のいわゆるへそ皿である。636～639は白色系の大型皿である。口径は14.2～15cmの間にある。640は施釉陶器の瀬戸美濃産天目茶碗である。

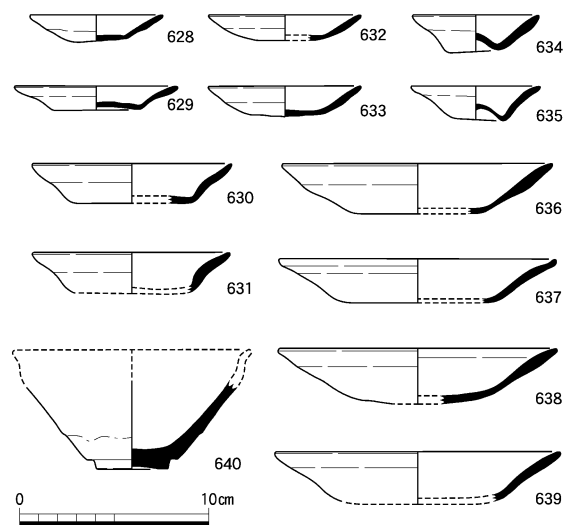


図65 土坑216出土土器実測図（1：4）

図版27の鋳7～10は土坑216から出土した鋳型である。いずれも一部に厚さ1.5～5mmの真土が残るが、破片のため全体の形状を復元

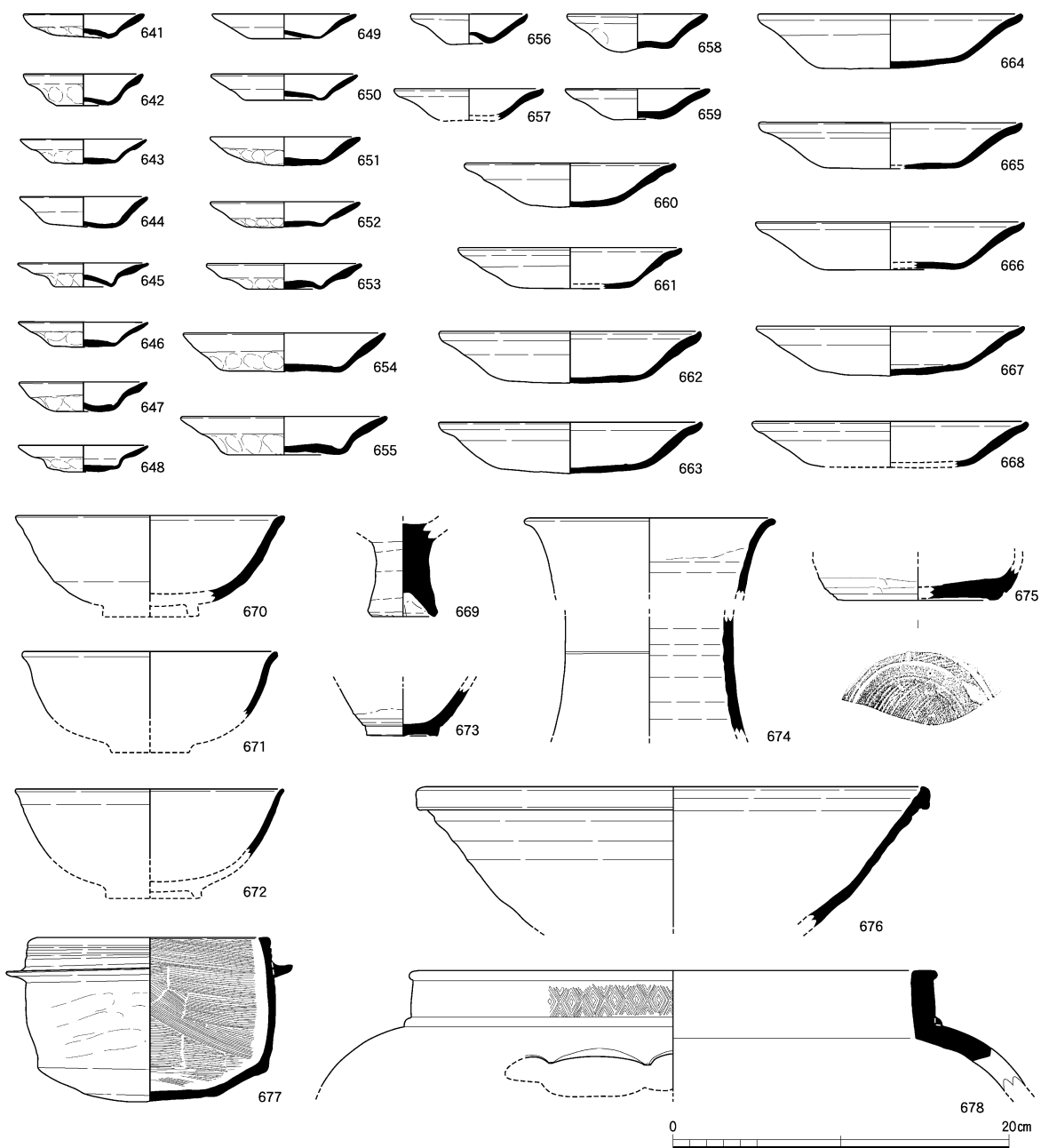


図 66 土坑 130 出土土器実測図 (1 : 4)

することは困難である。しかし、4点ともに真土の湾曲度からみて小型の製品の鋳型と考えられる。

土坑 130 (図 66、図版 23) 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、木製品 (箸か)、鉄釘、砥石、軒平瓦などが出土した。京都Ⅸ期新段階～Ⅹ期古段階に属する資料である。

641～668は土師器皿である。641～653は赤色系の小型皿で、口径は7～9cmの間に分布する。654・655は赤色系の大型皿である。口径は11.9cmと12cmである。656～659は白色系の小型皿で、656はいわゆるへそ皿である。口径は7～8.8cmの間に分布する。660～668は白色系の大型皿である。口径が12.4～13.2cmのもの(660・661)と、15.2～15.8cmのもの(662～668)の2群に分かれる。669～670は輸入陶磁器で、青磁脚(669)、青磁椀(671・672)、白磁椀(672)がある。671の青磁椀は、後述する井戸52出土の象嵌が施された高麗青磁片(712)

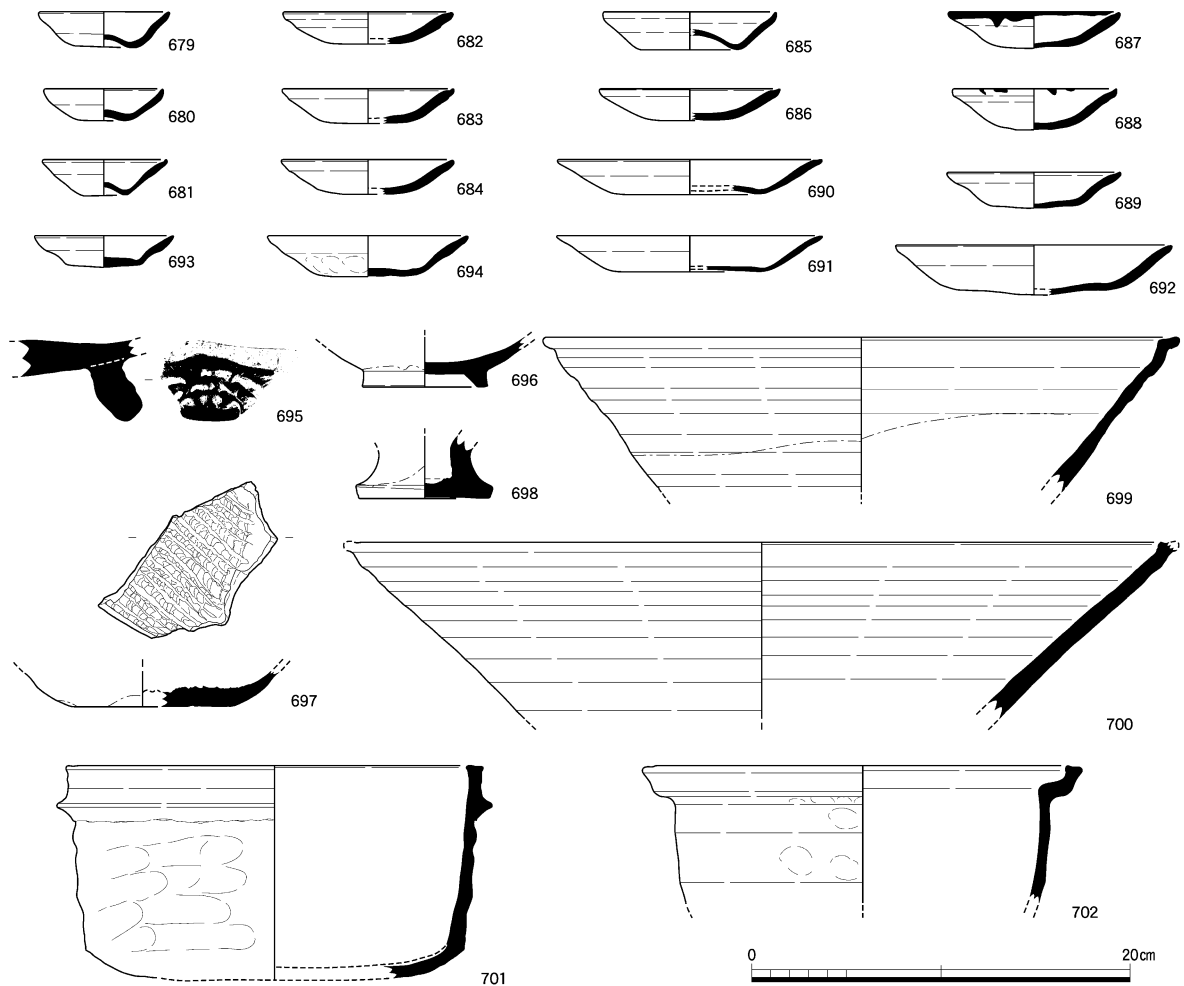


図 67 土坑 74 出土土器実測図 (1 : 4)

と胎土が酷似することから高麗青磁の可能性がある。673 は瀬戸美濃産の天目茶椀である。674 ・ 675 は瀬戸産の施釉陶器で、674 は壺の口縁部と頸部である。頸部に 1 条の沈線がめぐる。675 は壺あるいは筒型容器の底部と考えられる。676 は須恵器鉢、677 は瓦質土器の羽釜、678 は瓦質土器の火鉢である。

土坑 74 (図 67、図版 23・27) 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、鉄釘、銭貨、砥石、瓦類などが出土した。京都X期古段階に属する資料と考える。

679 ~ 692 は土師器皿である。679 ~ 681・685 は白色系のいわゆるへそ皿で、口径は 679 ~ 681 が 6.2 ~ 6.8 cm、685 は 9 cm ある。682 ~ 684・686 ~ 689 は白色系の小型皿である。口径は 8.8 ~ 9.1 cm の間に分布する。687・688 は灯明皿として使用されている。690 ~ 692 は白色系の大型皿である。口径は 13.9 ~ 14.5 cm の間にある。695・696 は輸入陶磁器で、695 は青磁の獣脚三足盤の脚、696 は白磁椀である。697 ~ 700 は瀬戸産の施釉陶器で、697 は卸目皿、698 は花瓶の脚部、699・700 は大型の鉢である。701・702 は瓦器の羽釜と鍋である。

銭貨が 1 枚出土している。図版 27 - 銭 3 で、熙寧元寶 (初鑄北宋 1068 年) である。

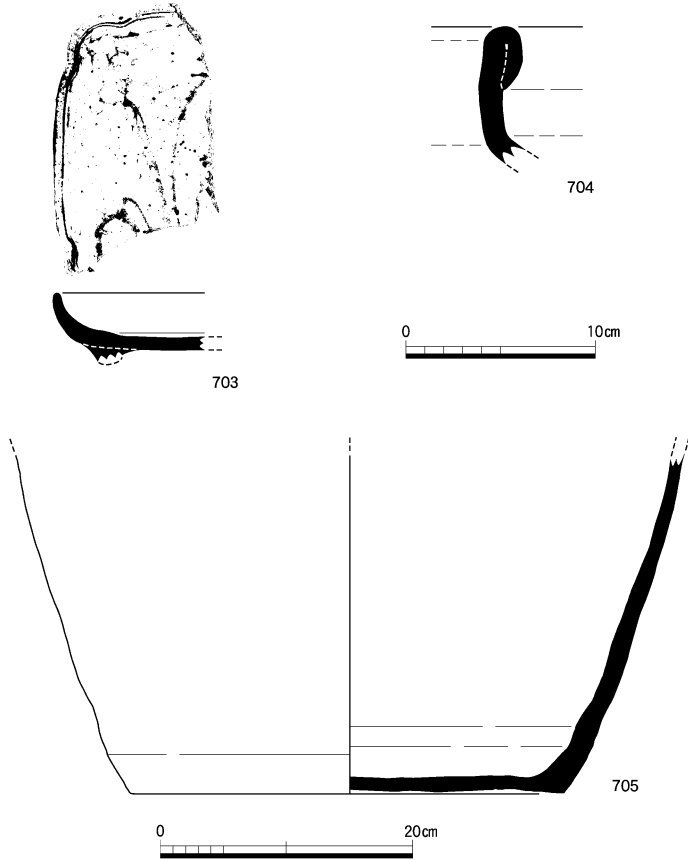


図68 江戸整地層、埋甕15・72出土土器実測図(1:4)(1:6)

(4) 桃山・江戸時代の遺物

江戸時代の遺物は主に町屋に関連する土坑や井戸から出土した。17世紀半ばまでのものが主体でそれ以降の遺物は少ない。なお、当該時期に関しては土師器皿の出土量が少なく、型式変化にも乏しいため、京都の土器編年⁷⁾は用いず、共伴する他器種の土器の編年⁷⁾を参考に時期を決定した。

江戸整地層、埋甕15・72(図68、図版27)703は江戸時代の町屋を形成する整地層から出土した瀬戸美濃系施釉陶器の絵志野の皿である。桃山時代に遡る可能性がある。この整地層からは銭貨が複数枚出土した。錆が進行し銭文が読解できるものは少ない。図版27

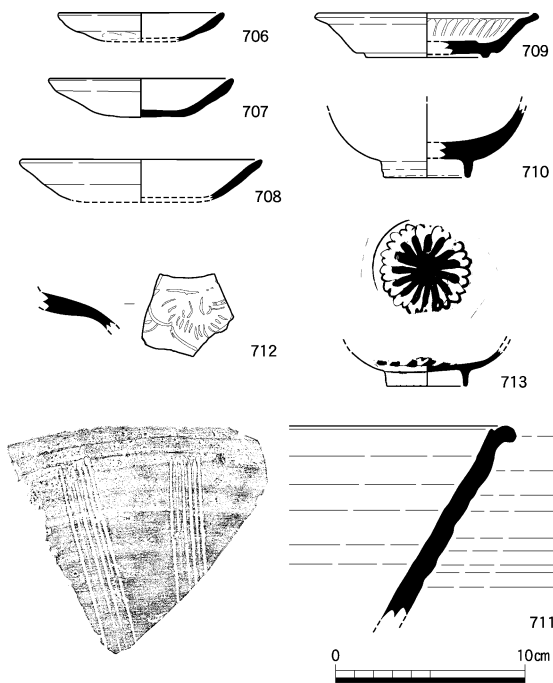


図69 井戸52出土土器実測図(1:4)

一銭4は開元通寶、銭5は聖宋元寶(初鑄北宋1098年)、銭6は政和通寶(初鑄北宋1111年)、銭7は洪武通寶(初鑄明1368年)である。

図68の704は埋甕72出土の焼締陶器備前焼大甕の口縁部、705は埋甕15出土の信楽焼の甕底部である。いずれも17世紀初頭のもと考えられる。

井戸52(図69、図版24)土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、埴塙、瓦などが出土した。16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる資料と考える。

706～708は土師器皿である。709・710は施釉陶器である。709は黄瀬戸の皿、710は肥前系の椀である。711は焼締陶器信楽焼の播鉢である。712は高麗青磁で、梅瓶片か

と考えられる。象嵌で花文が彫られている。14世紀後半の高麗末期の伝世品⁸⁾と考えられる。713は輸入陶磁器で、明代の染付磁器の椀である。

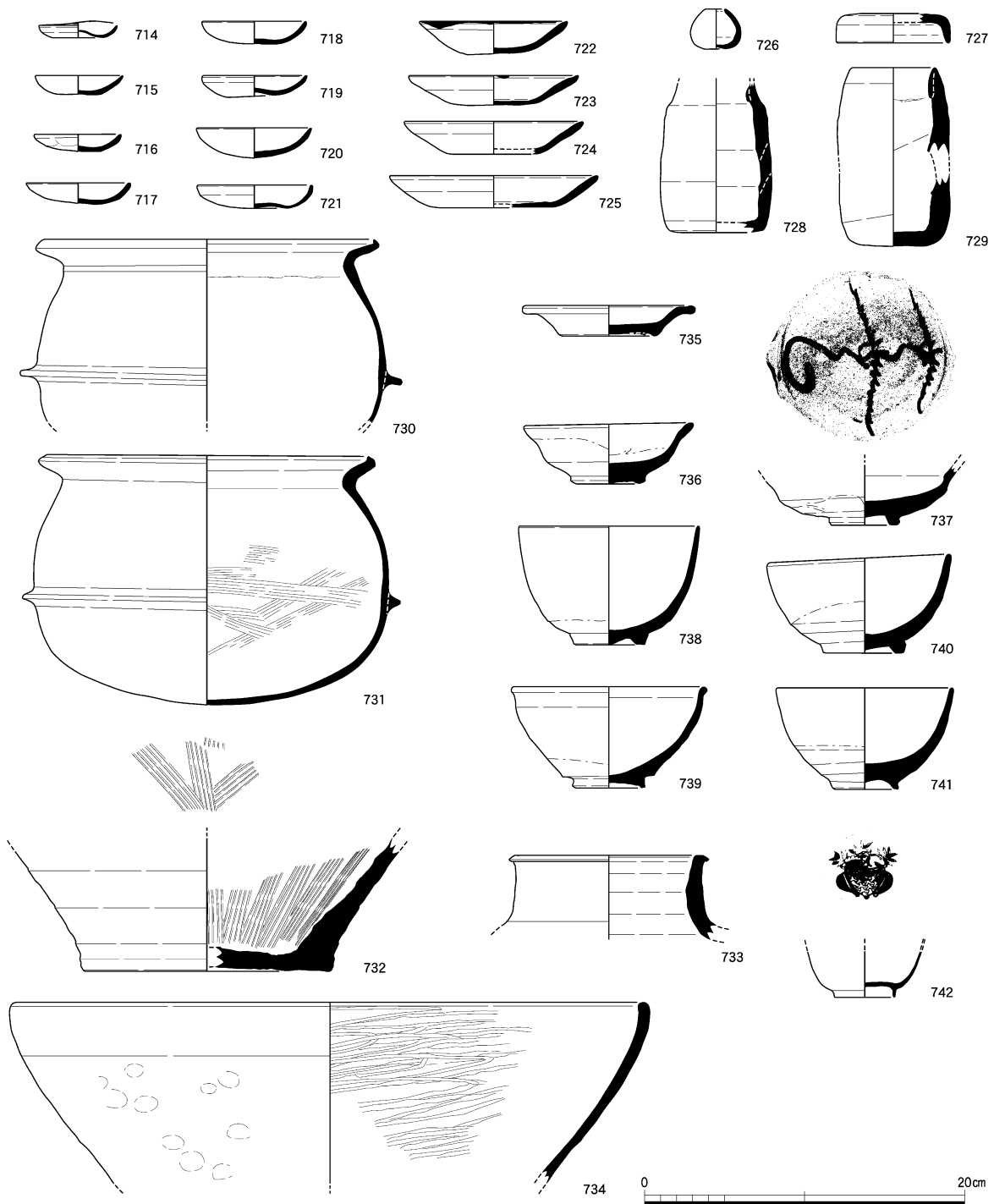


図70 土坑296出土土器実測図(1:4)

土坑296(図70、図版24・27)破片数にして360片の土器類が出土した。内訳は土師器270片、瓦器14片、須恵器3片、施釉陶器43片(肥前系38片、瀬戸美濃系4片、志野1片)、焼締陶器27片(備前9片、常滑2片、信楽12片、丹波4片)、輸入陶磁器3片である。17世紀初頭に位置付けられる資料である。土器類以外には、漆器片、銭貨、軽石、瓦類などが出土している。

714～725は土師器皿である。714～721は赤色系の皿で口径は4.9～7.1cmの間に分布する。714・719は灯明皿として使用されている。722～725は白色系の皿である。口径は9.1～13

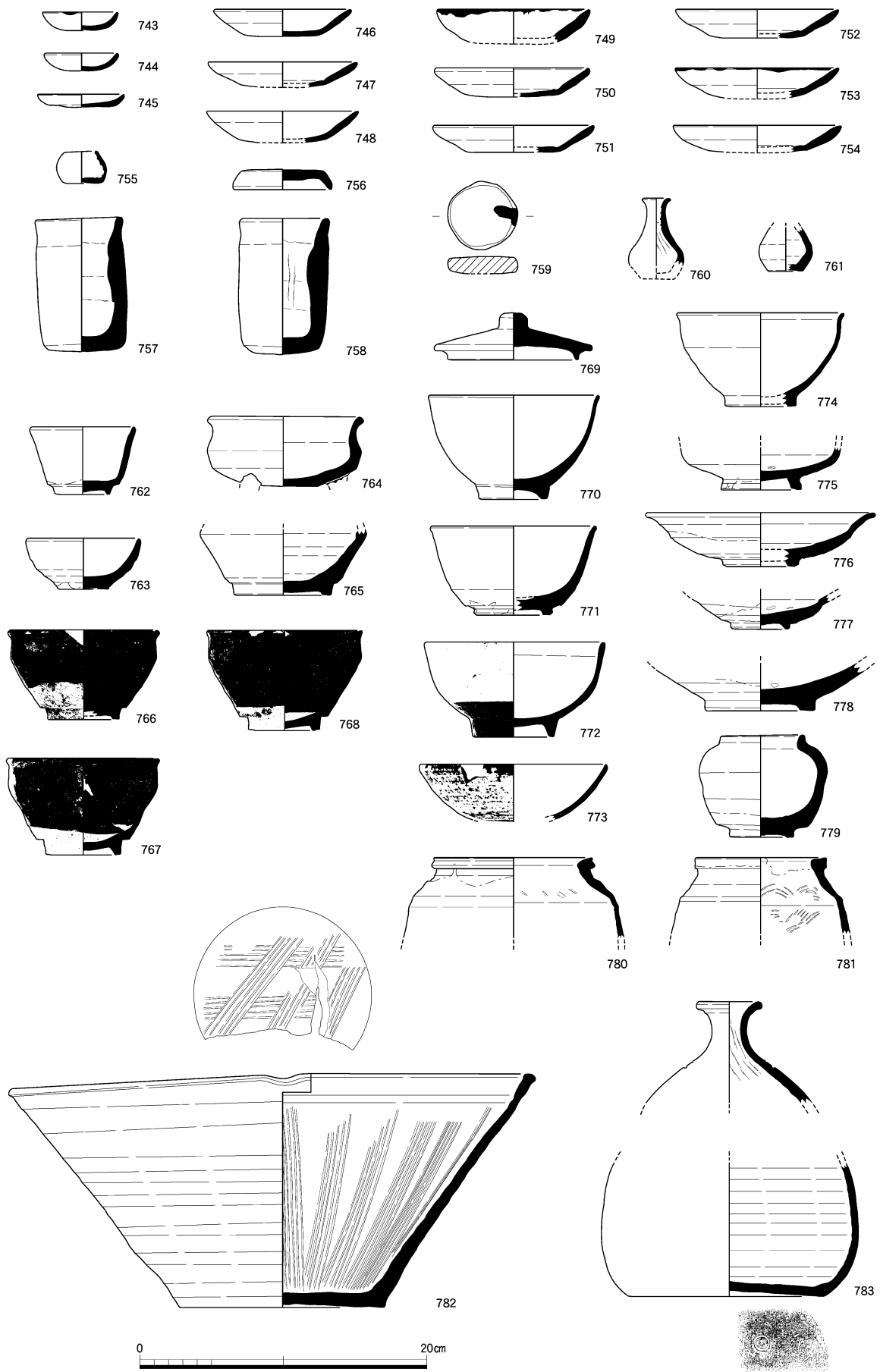


图 71 土坑 236 出土土器实测图 1 (1 : 4)

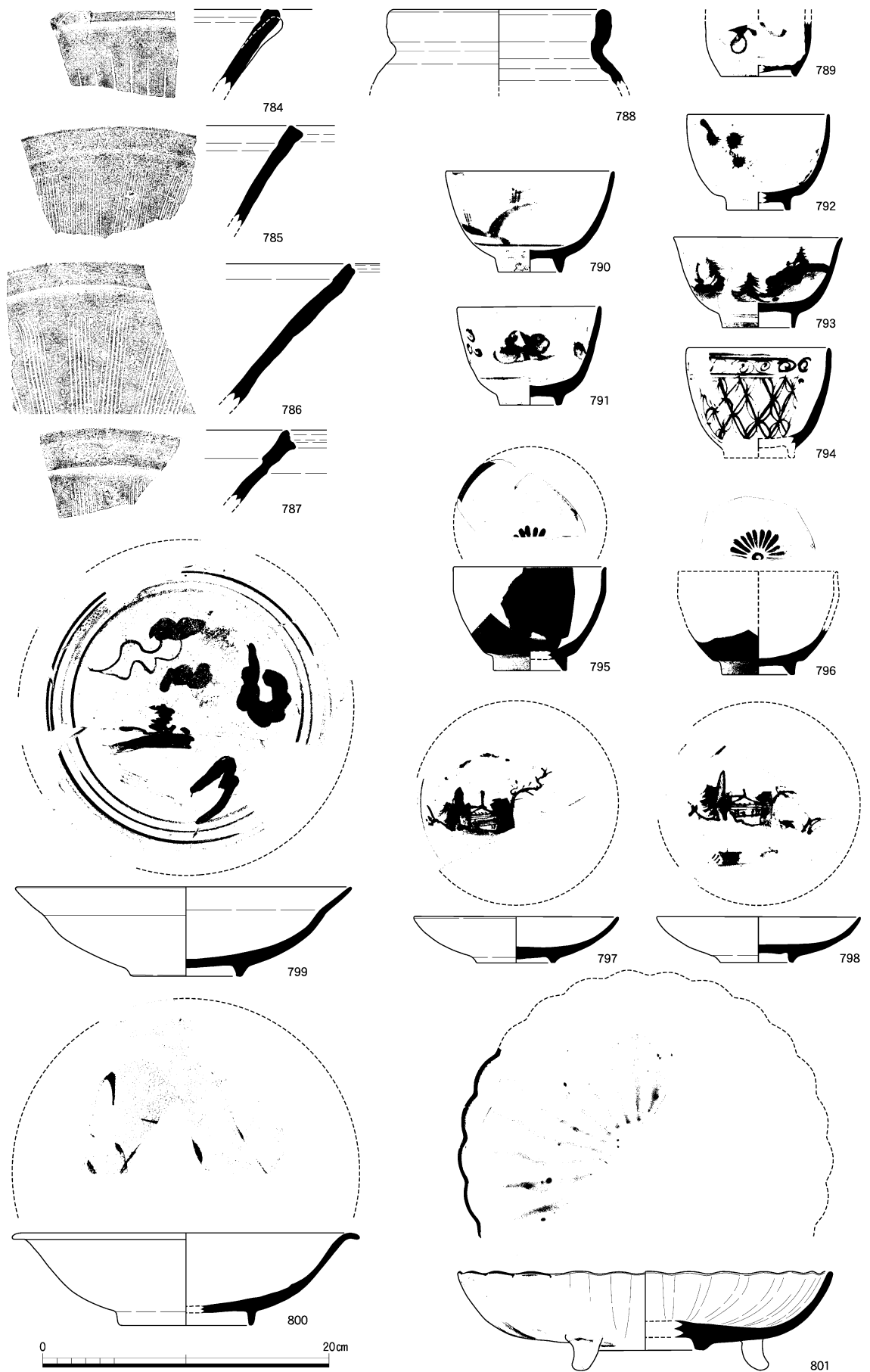


图 72 土坑 236 出土土器实测图 2 (1:4)

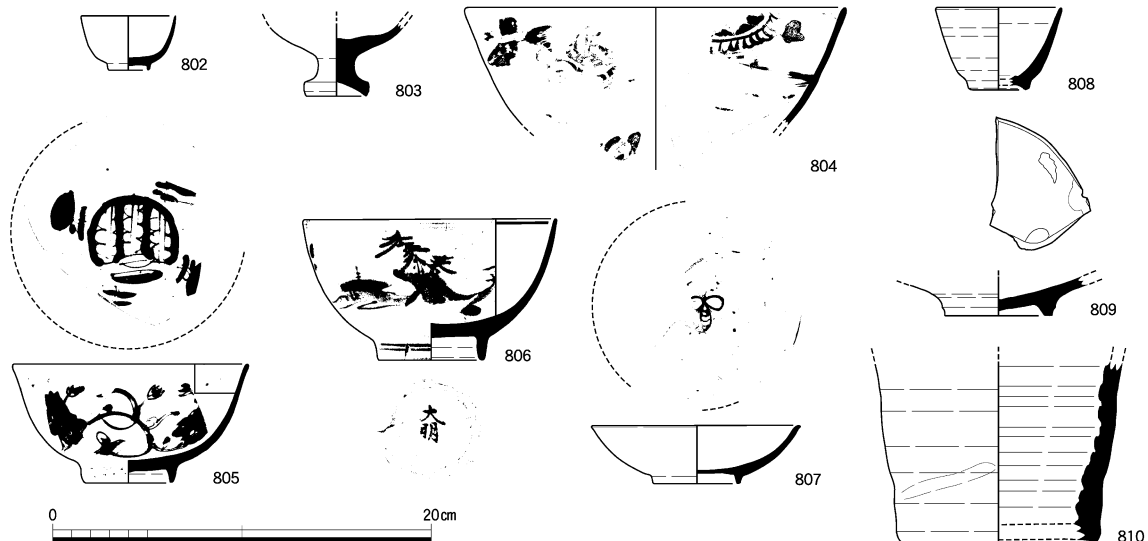


図73 土坑236出土土器実測図3（1：4）

cmの間に分布する。722は灯明皿として使用されている。726～731は土師器で、小壺（726）、塩壺蓋（727）、塩壺（728・729）、羽釜（730・731）がある。732・733は焼締陶器で、信楽焼播鉢（732）と、信楽焼壺（733）である。732の播目は5条1単位で、底部内面には放射状に播目が施される。734は瓦器の火鉢である。内面に粗いヘラミガキを施す。735～741は施釉陶器である。735は黄瀬戸の皿。736～741は肥前系陶器である。肥前系のものには、皿（736）、向付（737）、天目茶椀（738・739）、灰釉椀（740・741）がある。742は輸入陶磁器で明代の染付磁器小椀である。底部内面に籠に花を盛った意匠が描かれる。

また、土坑296からは7枚の銭貨が癒着した状況で出土した（図版27－銭8）。銭文は不明である。

土坑236（図71～73、図版25）破片数にして849片の土器類が出土した。内訳は、土師器302片、瓦器46片、焼締陶器101片（備前25片、信楽12片、丹波47片、不明17片）、施釉陶器162片（肥前系100片、瀬戸美濃系41片、不明21片）、磁器143片（肥前系129片、不明14片）、輸入陶磁器95片である。17世紀前半に位置付けられる一括資料である。

743～754は土師器皿である。743～745は赤色系の皿で、口径は5～5.9cmの間にある。746～754は白色系の皿である。口径は8.8～11.6cmの間に分布する。749・753は灯明皿として使用されている。755～759は土師器である。小壺（755）、塩壺蓋（756）、塩壺（757・758）、円盤状製品（759）がある。760・761は軟質施釉陶器の小壺である。762～769は瀬戸美濃系の施釉陶器である。長石釉の杯（762・763）、香炉（764）、壺（765）、天目茶椀（766～768）がある。769～772、774～781は肥前系の施釉陶器である。緑釉の蓋（769）、椀（770～772、774、775）、皿（776～778）、壺（779～781）がある。770は内野山窯産で、全面施釉し高台裏には3箇所（3箇所）の砂目が付く。771は長石釉で底部外面は無釉である。772は上半に長石釉、下半に灰釉がかかる。全面施釉である。774・775は鉄釉で774は天目茶椀である。775の底部内面には3箇所（3箇所）のトチン痕がみとめられる。776の皿は灰釉、底部内面には砂目

が付く。777の皿は長石釉がかかり、底部内面には4箇所の胎土目が付く。778の大型の皿は透明釉がかかり、底部内面には4箇所の胎土目が付く。779の壺は灰釉がかかる。780の壺は頸部以下に鉄釉がかかる。781の壺は口縁部から外面全体に藁灰釉がかかり、内面には同心円文の当て具痕がのこる。773は産地不明の施釉陶器の椀である。胎土と釉薬は朝鮮半島のものに似る⁹⁾。782～788は焼締陶器である。782は信楽焼の播鉢である。播目は5条1単位で、底部内面には格子目状の播目が施される。783は備前焼の徳利である。底部外面に「○」のスタンプが押される。784～787は丹波焼の播鉢である。播目と口縁端部の形状に型式変化が捉えられる。788は種壺と呼ばれる丹波焼の壺である。789～801は肥前系の磁器である。壺(789)、椀(790～796)、皿(797～800)、盤(801)がある。789の壺は底部外面無釉で、高台裏には砂が付着する。椀は、791・792・793が全面施釉、790は底部外面と高台無釉である。791の高台裏には砂が付着し、底部外面には3箇所の砂目が付く。文様は、草花文(791・793)、山水文(790・793)、幾何学文(794)がある。795・796は外面鉄釉、内面染付の椀である。高台と底部内面は無釉で、底部内面には菊花文が描かれる。797・798は山水文の皿で、全面施釉される。高台裏には砂が付着する。同文様・同形状のものが合わせて4個体文出土しており、セット品と考えられる。799は山水文の大型の皿で、全面施釉される。高台裏には砂が付着する。800も大型の皿である。文様は不明だが貫入が全体に見られる。全面施釉され、高台裏には砂が付着する。801は青磁の三足付盤である。口縁端部には辰砂をかける。彦根城家老屋敷跡で同一品の出土例がある¹⁰⁾。802～807、809、810は輸入陶磁器である。802～806は中国陶磁器で、白磁小椀(802)、白磁杯(803)、色絵椀(804)、染付椀(805・806)がある。802の白磁小椀は4個体以上の破片が出土しており、セット品と考えられる。807の染付皿は産地が特定できないもので、焼成はやや軟質、白磁部分の釉色はややくすむ。809は李朝の刷毛目皿である。810はベトナム産の焼締陶器壺である。808の白磁小椀は産地不明であるが、胎土と釉薬は朝鮮半島のものに似る。高台には貝目が認められる。また、凶化したもの以外に華南三彩の壺の破片が出土している。

(5) 瓦類 (図74、図版26)

瓦類の出土は、調査区全体で見ても非常に少ない。また、明確な遺構に伴うものはほとんどなく、混入の状態出土しているものが多い。ここでは、今回の調査で出土した軒瓦について、出土遺構とは関係なくすべて報告する。

軒丸瓦は平安時代後期の巴文軒丸瓦が2点出土している。瓦1は左方向に巻き込む二つ巴文、瓦2は右方向に巻き込む三つ巴文で、やや大振りの珠文を外区に巡らす。接合は丸瓦を差し込み、瓦当裏面はオサエ調整で仕上げる。胎土には砂粒をやや多く含み、にぶい黄橙色～暗灰色に焼きムラを生じている。ともに、栗栖野窯産である。瓦1は土坑426の東で検出した落ち込みから、瓦2は2区南東部のピットから出土した。

軒平瓦は平安時代前期から後期のものが主流で13点あり、室町時代前期のものが1点みられる。

瓦3は平城宮6664型式の搬入瓦である。段顎をナデ調整で仕上げ、凹面は横方向の篋削りを

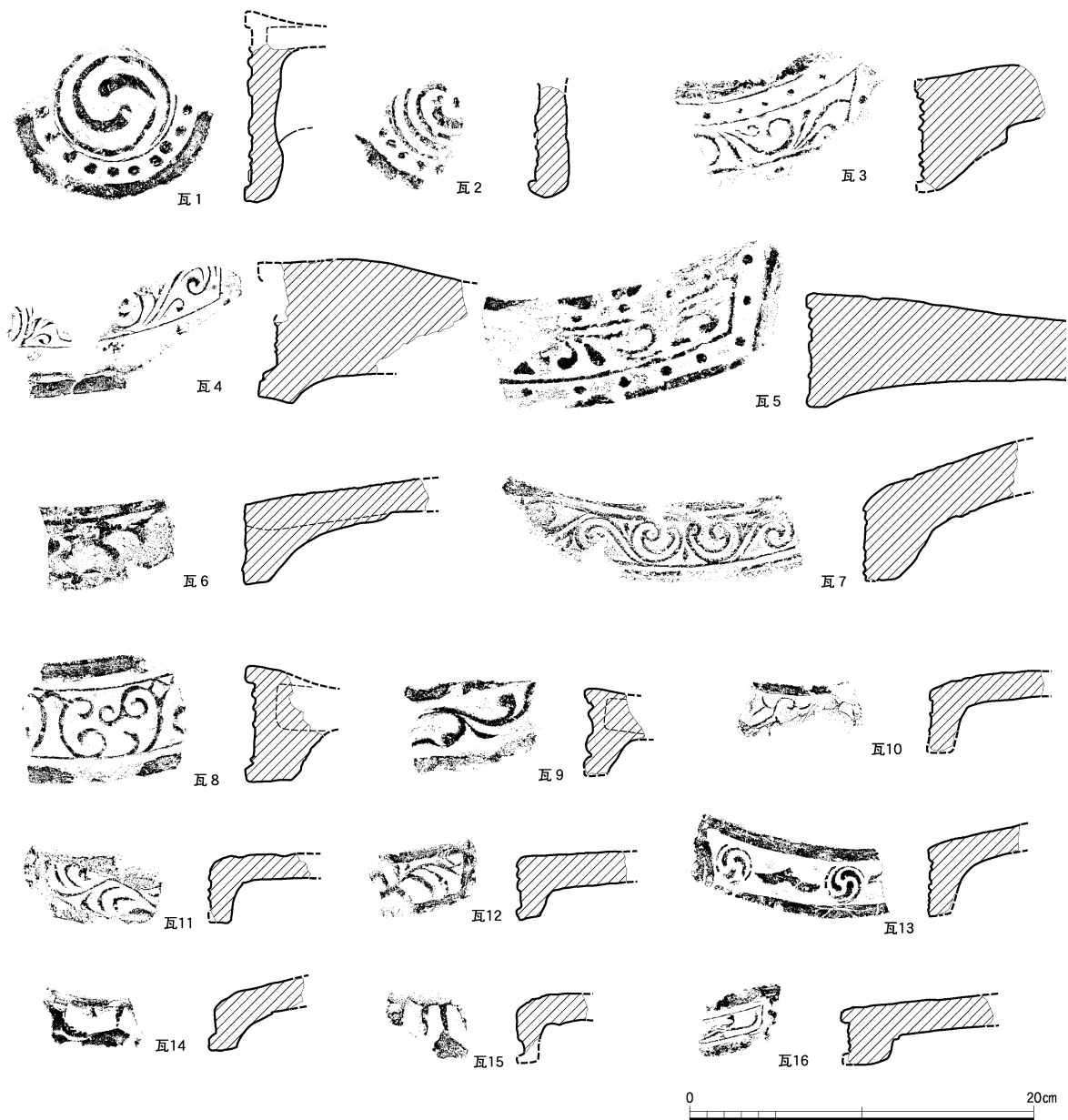


図 74 瓦拓影および実測図（1：4）

施す。溝 598 から出土。瓦 4・5 は平安時代前期の軒平瓦である。瓦 4 は均整唐草文の下外区珠文間に「西」銘を表出させる。凸面は縦ヘラケズリで、曲線顎を横ナデ調整で仕上げ、幅約 2 cm の顎面をもつ。凹面端部は削り後にナデ調整、後方は粗い布目を残す。内側は灰白色で、外面を燻しで黒色化する。土坑 370 の最下層から出土。瓦 5 は端が広がる棒状の中心飾りから唐草文が派生する軒平瓦で、右京職周辺から多く出土するタイプである。凸面は縦ヘラケズリとナデ調整によって曲線顎を仕上げ、幅約 1 cm の顎面をもつ。凹面も丁寧にナデ調整を施す。内側は灰白色で、外面を燻しで黒色化する。2 区南東隅の平安時代整地層から出土。

瓦 6 は平安時代中期の軒平瓦である。凸面から顎部はオサエ調整で成形し、顎面を篋削りで面取りする。凹面端部は横篋削りで、後方には粗い布目が残る。堅緻な焼成で、暗灰色を呈する。小野瓦窯産と考えられるが、森ヶ東瓦窯産あるいは池田瓦窯からも同文瓦が出土している。土坑

538 から出土。

瓦 7～15 は平安時代後期の軒平瓦である。瓦 7 は複線によって唐草文を表現する軒平瓦である。平瓦端部凸面に粘土を付加して顎部を成形し、篋削りによって仕上げる。平瓦部凸面はナデ調整。凹面は布目が残りに、端部を篋削りで面取りする。砂粒を多く含み、黄橙色を呈する。備前国分寺から同文瓦が出土しており、備前から搬入された軒平瓦である。溝 598 から出土。瓦 8・9 は播磨産の軒平瓦である。平瓦を差し込んで、ナデ調整で仕上げる。焼成は堅緻で、暗灰色を呈する。瓦 9 の文様面には灰かぶりが認められる。ともに井戸 419 から出土。

瓦 10～15 は栗栖野瓦窯産の軒平瓦である。瓦 10～12 が唐草文、瓦 13 が雁行巴文、瓦 14・15 が剣頭文である。瓦 10・13 は半折り曲げ技法で凹面布目は端部で布端が確認できるが、瓦 11・12・14・15 は折り曲げ技法によって文様部を形成するため、文様面まで布目が確認できるものがある。凸面はオサエ調整で、瓦 12 には縄叩きが残る。瓦 15 も縄叩きと顎部に布目が残っている。瓦 10 は 2 区南端部の掘り下げ中、瓦 11 は井戸 80 南の土坑、瓦 12 は 2 区中央部掘り下げ中、瓦 13 は 2 区南東部掘り下げ中、瓦 14 は 2 区北東部の土坑、瓦 15 は 2 区南東部の土坑から出土。

瓦 16 は室町時代まで下ると考えられる唐草文軒平瓦である。丁寧なナデ調整によって仕上げており、凸面には凹型成形台の痕跡が、凹面にはナデ残った細かい布目が認められる。燻しによって内面は灰白色、外面は暗灰色を呈する。2 区南西部で検出した近世井戸から出土。

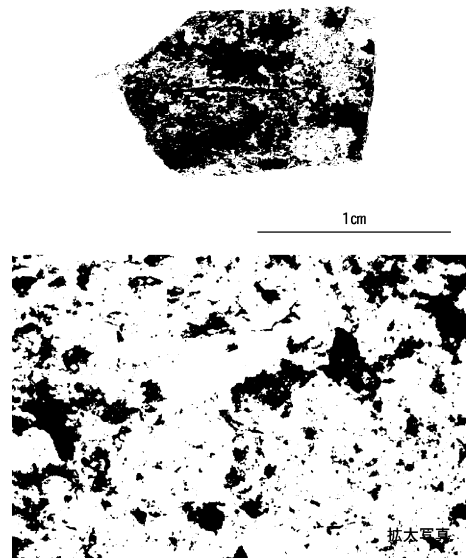


図 75 土坑 79 出土骨片

(6) その他の遺物

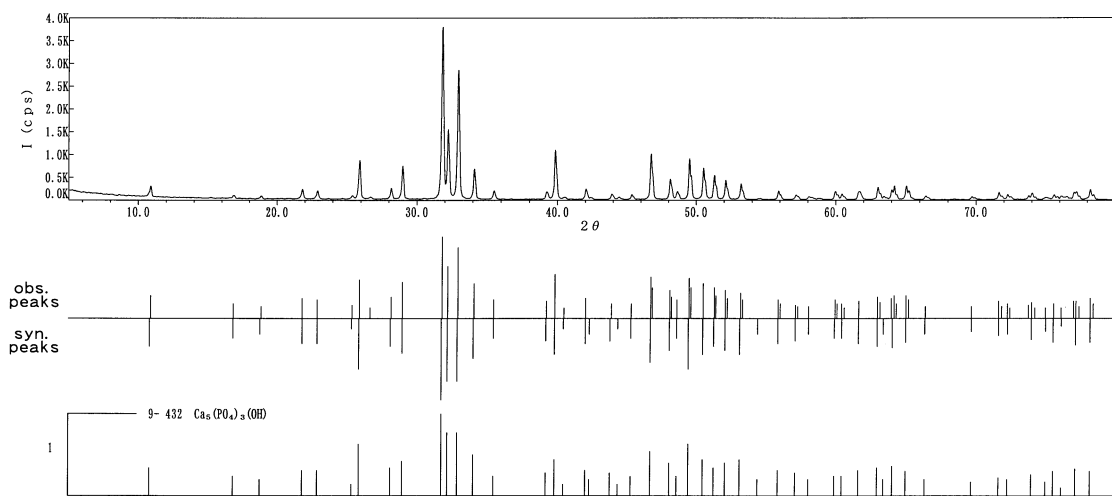


図 76 土坑 79 出土骨片分析グラフ

鎌倉時代から室町時代の長方形土坑群の埋土を水洗篩別した結果、骨類が出土した。そのうち魚骨については付章で詳述する。ここでは、土坑 79 から出土した獣骨あるいは人骨の可能性のある骨について分析結果を記す。

土坑 79 から、骨片と思われるものが 3 片出土した。そのうちの 1 片 (図 75) について、X線回折法による調査を行った¹¹⁾。測定はパウダー法によりおこない、測定条件は管電圧 40kV、管電流 100mA、 $2\theta = 5-80^\circ$ として、ターゲットには銅を用いた。測定の結果、リン酸カルシウムのスペクトルが得られた (図 76) ことから先述の分析試料は獣骨もしくは人骨のいずれかであること示唆された。

註

- 1) 弥生土器の年代観については、森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990 年を参考にした。
- 2) 平安時代以降の土器の型式については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年によった。
- 3) 常滑産の甕の型式については、中野晴久「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 年によった。
- 4) 石 9・10 の石材については、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏に御教示をいただいた。
- 5) 金属製品、玉類については、京都国立博物館久保智康氏に御教示をいただいた。
- 6) 玉類の分析は、東京文化財研究所北野信彦氏に依頼した。
- 7) 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000 年、『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 年、『近世丹波焼の研究』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター 2007 年、畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 2003 年などを参考にした。
- 8) 高麗青磁については、韓国文化遺産研究院韓盛旭氏、東京芸術大学片山まび氏に御教示をいただいた。
- 9) 遺物番号 773、808、809 については東京芸術大学片山まび氏に御教示をいただいた。
- 10) 『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984 年
- 11) 分析は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の高妻洋成氏と脇谷草一郎氏に依頼し、分析結果についても御教示をいただいた。

5. ま と め

(1) 中世の遺構変遷

今回の調査では、中世から近世初頭の町屋関係の遺構を良好な状態で検出できたことが大きな成果である。左京の下京周辺では江戸時代以降の攪乱が激しいために、当該期の遺構が良好に遺存している場所は少ない。これまで多くの発掘調査を実施してきたが、中世京都において最も栄えた下京の様相を、考古学的見地からはなかなか明らかにできなかった。

ところが当調査では、烏丸綾小路という下京でも中心に位置する場所で中世から近世初頭の遺構を多く確認でき、中世京都の実態解明に大きく寄与する成果を得ることができた。たとえば、町屋建物の礎石列・炉・水甕・地下式倉庫・井戸などを良好に検出したことで、中世下京の町屋における空間利用の実態と変遷をある程度復元することが可能である。ここではまず、出土した土器の年代観に従って、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構の変遷を押さえておく。

1期 綾小路に面した中世の建物群が成立し始める時期である。遺構の数は少ないが、綾小路に面する空間に整地が施されて土間を形成し、整地層下には地鎮と想定できる羽釜埋納土坑 634 が据えられる。やや奥まった空間には地下式倉庫 450 が造られており、建物構造は不明だが町屋建物群が成立し始める。また、鉄滓を多量に包含した土坑 505 も認められ、綾小路から奥まった空間では鋳鉄も行われたようである。地下式倉庫 450 から出土した土器群は、中世京都の編年でⅥ期新段階であり、13世紀中頃まで遡る。

2期 当調査地での活動が非常に活発になる時期である。綾小路に面する空間は1期と同様に建物内土間空間として利用されており、炉 306 あるいは埋甕 363 や 337 が同時期と考えられる。埋甕 237 も時期差はないであろう。また、やや奥まった場所には地下式倉庫 370 が造られ、その北には東西6列、南北6列の埋甕群が整然と据えられていた。これらの埋甕群は、綾小路北築地推定ラインから北へ22mから27mの場所に位置しており、建物空間を奥へ広げて埋甕を伴う施設が新たに形成されたことを示している。なお、これらの施設にやや先行して、西に土坑 108・127・502 が成立しており、土坑 538 も先行する土坑であるが、土器型式からは時期を分けることができなかった。これらの土坑群は後述するように土葬墓である可能性が高く、裏空間が墓として利用されはじめた後、その一郭に埋甕施設が造られたことを示している。土坑群の成立時期はⅦ期古段階で13世紀末頃、埋甕から出土した土器群はⅦ期新段階で14世紀中頃に比定できる。埋甕群からの土器は廃棄された時期を示すものであり、土坑群と埋甕施設は共存していた可能性がある。

3期 埋甕群が廃棄され、生業活動が遺構の上から認められなくなった後も、土葬墓が継続的に造られていた時期である。礎石列8の西側に形成された土坑 20・79・560 は、埋納された土器群が埋甕廃棄時の土器群よりも新しく、東にも新たに土坑 791 が造られる。綾小路面での様相は明らかでない。土坑群から出土する土器はⅦ期新段階からⅧ期古段階に想定でき、14世紀後半の土器群である。

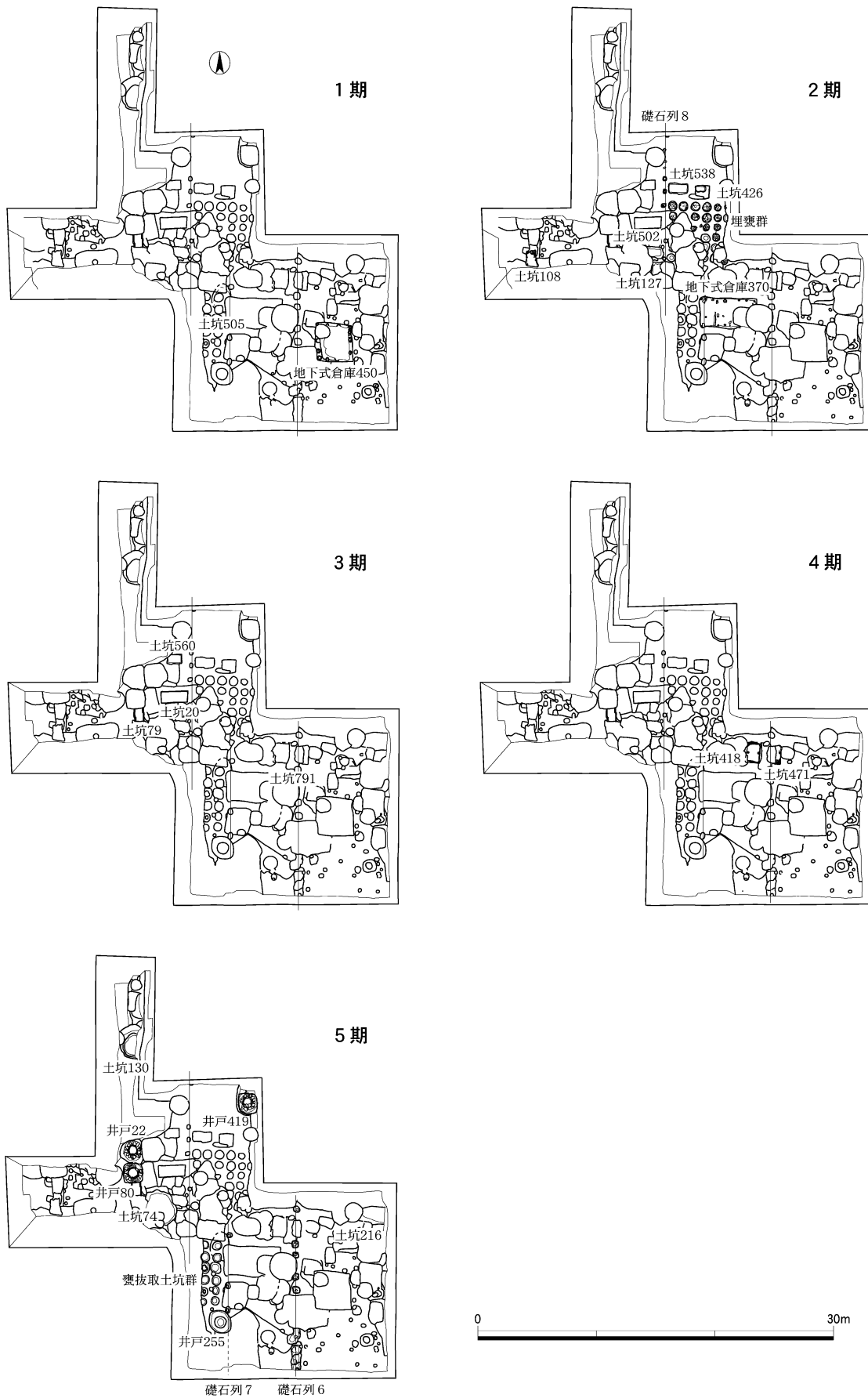


図77 鎌倉時代から室町時代の遺構変遷図（1：500）

4期 土葬墓と考えられる土坑群が形成されなくなる時期である。当該期の遺構は小型地下室と想定できる土坑418と土坑471だけで、Ⅷ期古段階から中段階の土器が出土する。14世紀末から15世紀初頭に比定できる。

5期 当地において、再び生業活動が活気を帯びるようになる時期である。比較的大きな礎石を伴う礎石列6と7を検出するとともに、礎石列7の西では東西2列以上、南北6列に整然と並ぶ円形土坑群を確認した。この土坑群は埋甕抜取土坑と考えられ、2期と同様に埋甕施設を伴う生業活動が行われたことを示している。また、この時期には井戸22・80・419と円形石組井戸が裏空間に伴っており、埋甕抜取土坑群の南東に位置する井戸255も同時期かと考えられる。さらに、土取りあるいはゴミ廃棄のために穿たれた土坑74・130・216も認められるようになる。出土土器はやや新しくⅨ期中段階から新段階にかけての土器群であり、15世紀後半に比定できる。

以上、出土土器群の観察から中世遺構の時期変遷について述べた。ここで注目できるのは、2期と5期において埋甕を伴う生業活動が活発に行われていたことである。また、想定町屋建物の裏地において土葬墓と想定できる土坑が継続して形成されていたことも重要な所見といえる。そこで、当地の性格を考えるうえで重要な遺構である埋甕群と土坑群について、項を分けて検討してみたい。

(2) 2時期の埋甕群の性格について

前述したように2期と5期において、多数の埋甕群およびその痕跡を確認した。整然と並ぶ甕の存在から、当地が醸造を生業とする町屋だったと考えられ、その候補として室町時代の経済基盤を支えた「酒屋」との関係が想定できる。

鎌倉時代から室町時代にかけて、京都では貨幣経済の発展にともない土倉などの高利貸業者が生まれた。酒屋などの醸造業者も豊富な資金を蓄積しており、彼らは有力寺社に従属して庇護を受けていた。鎌倉時代の武家政権下では「沽酒の禁」が伝統的政策であり、京都においても嘉元3年(1305)に洛中での沽酒の禁が断行されている。しかし、南北朝期には禁裏財政の資源として酒屋課税が認められるところとなり、足利幕府の確立とともに酒屋役をめぐる公家・武家・社寺の複雑な利権関係が生まれたと考えられている¹⁾。

2期の埋甕群は、常滑大甕の口縁部の断面形態から13世紀中頃の古いタイプから14世紀前半の新しいタイプまで混在している²⁾。ただ、Ⅶ期古段階から中段階の土器が埋納された土坑538よりも後に成立していることから、2期における醸造業の成立は14世紀初頭以降と考えられる。また、地下式倉庫370の床面堆積土壌の自然科学分析を行ったところ、麹菌がわずかながら採取されている。この分析結果をどのように解釈するかは問題も残るが、地下式倉庫370が麴室である可能性も指摘でき、当地が酒屋であったことの傍証になろう。なお、これらの埋甕群は、棒状のもので故意に穴を開けられており、それが数箇所にも及ぶことから徹底的に破却されたことがわかる。破却の時期が14世紀中頃であることは、京都における南北朝の騒乱との関係で非常に興味深い事実である。

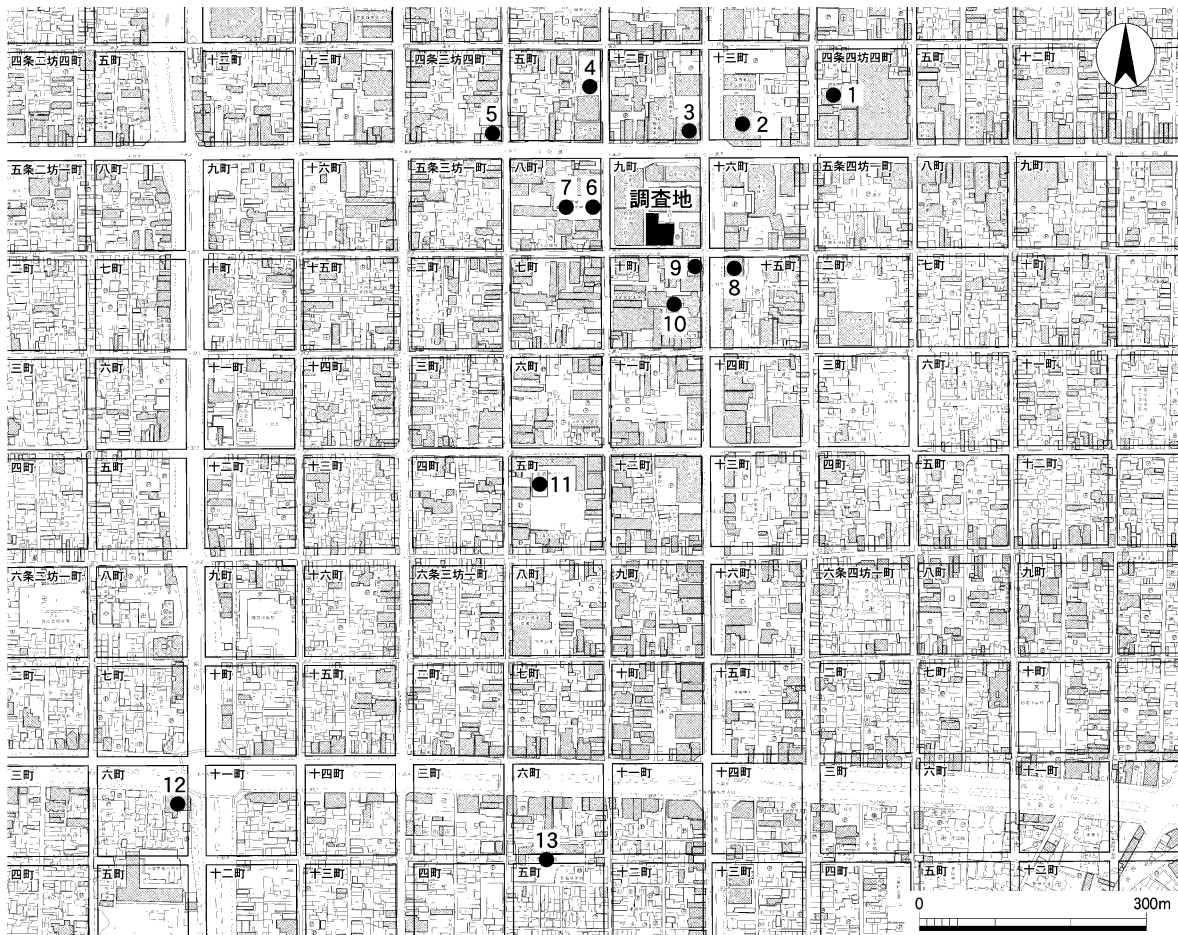


図 78 主要周辺調査位置図 (1 : 10,000)

表 3 主要周辺調査一覧表

No.	遺跡名	調査年	調査機関	文 献
1	左京四条四坊四町	1991	京都文化博物館	『平安京左京四条四坊四町』 京都文化博物館 1993年
2	左京四条三坊十三町	1982	平安博物館	『平安京跡研究調査報告第11輯 平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』 財団法人古代学協会 1984年
3	左京四条三坊十二町	2006	京都市埋蔵文化財研究所	『平安京左京四条三坊十二町跡』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
4	左京四条三坊五町	2007	古代文化調査会	『平安京左京四条三坊五町一菊水鉾町の調査一』 古代文化調査会 2008年
5	左京四条三坊四町	2006	日開調査設計コンサルタント	『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』 株式会社日開調査設計コンサルタント 2007年
6	左京五条三坊八町	1991	京都市埋蔵文化財研究所	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
7	左京五条三坊八町	1995	古代学協会	『平安京跡研究調査報告第19輯 平安京左京五条三坊八町』 財団法人古代学協会 1997年
8	左京五条三坊十五町	1979	古代学協会	『平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五条三坊十五町』 財団法人古代学協会 1981年
9	左京五条三坊十町	1979	烏丸線内遺跡調査会	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
10	左京五条三坊十町	1981	京都市埋蔵文化財研究所	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
11	左京五条三坊五町	1980	京都市埋蔵文化財研究所	『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
12	左京六条二坊六町	1985	古代学協会・平安博物館	『平安京跡研究調査報告第17輯 平安京左京六条二坊六町』 財団法人古代学協会 1986年
13	左京六条三坊五町	2004 ~2005	京都市埋蔵文化財研究所	『平安京左京六条三坊五町跡』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年

次に5期の埋甕群であるが、2期の埋甕群とは異なりすべて抜き取られている。抜取土坑の年代は15世紀後半から末までに比定できるのは前述した通りである。幕府の政所代を代々世襲した蜷川家文書の『土倉酒屋注文』には、応仁乱以降の下京酒屋として当調査地である「綾少路烏丸西北³⁾類」に「澤村又次郎」という酒屋が記載されている。5期の埋甕抜取土坑群が、『土倉酒屋注文』の「澤村又次郎」と関係するかどうかは不明であるが、当期の建物は大型の礎石を伴っており、石組井戸22からは明染皿が出土するなど、有力な酒屋の存在を示唆している。

以前、『北野神社文書』にある応永33年(1426)の酒屋名簿に記載された「楊梅室町西南類之倉」と推定できる遺構を、図78の調査13においても発見している。また、周辺では調査5でも15世紀後半の埋甕抜取土坑群を検出しており、調査4では埋甕抜取土坑群とともに破却された埋甕底部が残されていた。これらの埋甕関係遺構は、室町時代において当地周辺に多くの酒屋が所在していたことを示している。今回の調査では、中世下京の発展を支えた「酒屋」が古くから当地に所在したことを明らかにするとともに、文献史料と対比できる可能性をもつ酒屋遺構を確認できたことが大きな成果である。

(3) 中世土坑群の性格について

前述したように、今回検出した中世の長方形土坑群(土坑20・79・108・127・418・471・502・538・560)については、土⁴⁾葬墓であると考えている。これらの土坑は、①方形の掘形を持ち壁板を杭留めする、②多量の土師器皿を正位置に入れる、③埋土に炭層が認められる、④鉄製短刀あるいは小刀を入れる、⑤完形の輸入陶磁器を1点以上入れる、といった属性を持つ。こうした属性を持つ土坑は、周辺でも調査1・7・8・9・10・11・12などで見つかっている。これらの土坑の時期は13世紀中葉から14世紀中葉におさまり、出土位置が表通りから奥まった町屋の裏側であることも共通する。これらの土坑群の性格については、調査8の報告では「墓」、調査1の報告では「土坑墓」と記載される一方で、調査7では、「室のような収納施設」とされるなど、評価の分かれるところであった。しかしながら、今回の調査でほぼ完全な状態で検出できた土坑20をみると、青銅製鍋や鉄製短刀の他に、玉類や桃の種、銭貨といった儀礼的性格を持つ遺物がセットで出土しており、状況証拠から「土葬墓」と考えるのが妥当であろう。したがって、13世紀半ばから14世紀後半頃に

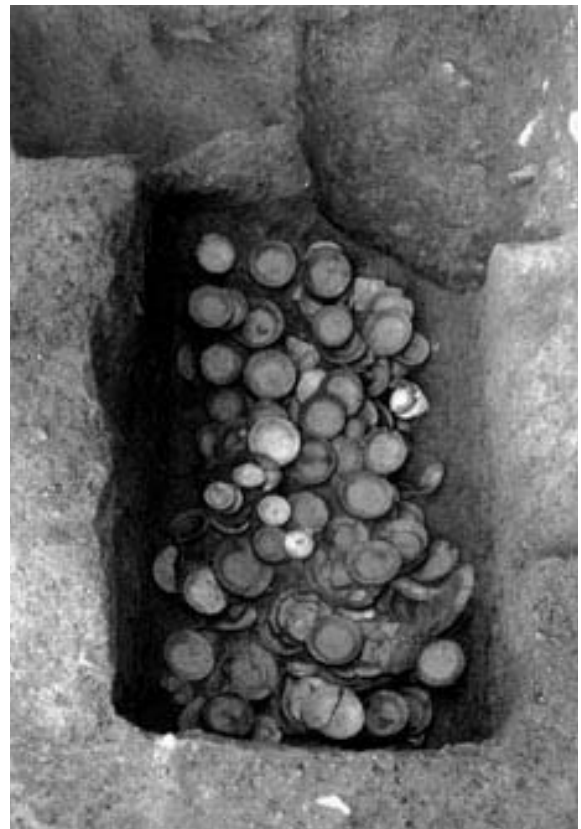


図79 調査11 SK34

かけて、下京の一带で共通の葬送儀礼のもとに、町屋の裏に土葬墓が築かれたと考えることができる。

これらの土葬墓が作られた鎌倉時代から室町時代にかけては、烏辺野や蓮台野が共同葬送地として機能する一方で、発掘成果から、市街地に墓が築かれる例が増加することがわかっており、大きくはその流れの中で捉えることができる⁵⁾。しかし、京内に築かれた墓には、直葬の土葬墓や火葬墓、集石墓など様々な形態が見られる中で、先に述べた属性の①②にあたる板壁構造と多量の土師器皿埋納に特徴付けられる土葬墓が、酒屋の分布とも重なる下京の一定の地域に限定されて築かれることは注目できる。すなわち、中世京都の経済を支えた下京の中心にあって、高級輸入陶磁器や金属製品の埋納は財力を示し、多者が埋葬に関わったことを物語る多量の土師器皿の埋納は、地縁的関係の濃密さを示す地域的特性と捉えることができるのではないだろうか。

さらに個々の属性について見れば、④の鉄製短刀は、今回検出した土坑 20・79 と同様に、調査 1 の土坑墓 S 380 や調査 11 の S K 34 (図 79) などでも斜めに落ち込んだような状況で出土しており、本来は遺体あるいは蓋の上に置かれた「護り刀」であったと考えられる。他にも③の炭層の性格⁶⁾や木棺の有無⁷⁾など、明らかにすべき問題点は多いが、中世の葬送儀礼の解明に向けて、良好な資料を得られたことは大きな成果と言える。

(4) 烏丸綾小路遺跡に関する成果について

今回の調査では、弥生時代の遺構として 3 条の溝 (溝 969・970・971) を検出した。これら 3 条の溝は、断面の形状や滞水の痕跡が認められないことなどから、人工的に開削された溝と判断しており、開削時期は、出土遺物からみて中期中葉から後葉頃と推測される。また溝 969 は、位置や規模から溝 970 を掘り直したものと考えられ、一時期、溝の維持管理が図られていたことがわかる。以上のことから、これらの溝は集落を囲む環濠である可能性が高いと考えられる。周辺調査でも、調査 6 (図 78) で、弥生時代中期中葉から後葉にかけての人工的な溝が見ついている。溝は南北方向に走り、南端で東にまがる。幅 2.1 m、深さ約 1 m で断面は V 字状を呈しており、集落の西を限る環濠の可能性が指摘されている。さらに、調査 2 でも中期後葉から後期に機能した南北方向の 4 条の溝が検出されているほか、調査 1 でも後期の北西から南東方向に走る人工的な溝が見ついている。いずれも機能時期がほぼ同じであり、規模も類似することから、今回の調査でみつかった溝との関連が窺える。なお、この時期の集落の中心は四条烏丸の交差点付近にあったと考えられ、調査 3 では、中期中葉の方形周溝墓 1 基と中期後葉から後期前半の竪穴住居 3 棟が見ついている。

また、溝 969・971 の廃絶時期については、調査 1・2・6 の溝が後期中葉までに機能を停止していることや、綾小路通より北側で後期中葉以後の遺構・遺物の出土頻度が極端に減ることから、後期中葉には環濠として機能しなくなっていたと考えられる。しかし、溝 969、溝 971 とともに最上層から古墳時代前期 (庄内式併行期) の土器片が出土しており、その頃までは窪地として残っていたと推測され、最終的にはこの時期に整地が行われ埋没したのであろう。庄内式併行期の遺

構は、調査9・11で竪穴住居が見つかったほか、調査8・10でも遺構・遺物の出土が報告されており、綾小路通より南に集中している。弥生時代後期から庄内式併行期にかけて、集落の中心が綾小路通を境に北から南へ展開したことがわかる。

以上のように、今調査で烏丸綾小路遺跡内での集落域の変遷の一端を明らかにすることができ、他の集落遺跡の動向との比較検討のための好資料を得られたことは大きな成果と言えよう。

註

- 1) 小野晃嗣『日本産業発達史の研究』 至文堂 1941年
- 2) 中野晴久「常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』 真陽舎 1995年
- 3) 『大日本古文書』家わけ第二十一 蜷川家文書之二
- 4) 火葬墓と明確に区別するためにこう呼ぶ。中世墓に関する用語や、中世の墓制全般については元興寺文化財研究所狭川真一氏に御教示をいただいた。
- 5) 勝田至「中世民衆の葬制と死穢—特に死体遺棄について」『史林』第70巻3号1987年、勝田至『死者たちの中世』吉川弘文館2003、山田邦和「京都の都市空間と墓地」『日本史研究』409 1996年、百瀬正恒「都市京都における死、浄土とかわら」『中世都市鎌倉と死の世界』高志書院2002年
- 6) 腐臭を防ぐためのものである可能性を考えている。
- 7) 木棺の痕跡が認められないことを墓ではない根拠の一つとする意見もあるが（調査7報告）、今回の調査では各土坑から鉄釘が出土しており、木棺が腐食した可能性があると同時に、板壁により土坑自体が木槨と呼べる構造であることから、必ずしも木棺を必要としなかったとも考えられる。

付章 1 出土した動物遺存体

丸山真史（京都大学大学院人間・環境学研究科）

(1) 概要

今回、報告する動物遺存体は、中世および近世の遺構から出土したものである。出土した動物遺存体は、破片数にして 31 点を数え、そのうち種類や部位を同定したものは 25 点にのぼる。その内訳は貝類 7 点、魚類 17 点、鳥類 1 点であり、破片数では魚類が最も多い（表 1・2）。また、出土した動物遺存体の大部分は白色を呈することから、被熱した可能性がある。

(2) 種類別の特徴

貝類 ミミガイ科、アカニシといった巻貝、フネガイ科、イタヤガイ、ハマグリといった二枚貝が出土しており、それらはすべて海水産の種類である。ハマグリが 3 点、その他は 1 点ずつ、計 7 点が出土している。ミミガイ科としたものは、細片となっており種は特定できないが、大型のアワビ類である。フネガイ科は殻体の一部が出土しており、種を特定することが困難であるが、アカガイの可能性が高い。いずれも破損しており、殻高や殻長を計測することができない。

魚類 淡水産のコイ、海水産のマダイ、タイ科が出土している。コイの咽頭歯が 1 点、マダイの主上顎骨が 1 点、タイ科の椎骨が 1 点、顎骨から遊離した状態の歯が 14 点出土している。現生骨格標本との比較によれば、コイ、マダイの両種は、体長 30 から 40 cm 程度の個体と推定される。このほか、ナマズやギギの仲間と思われる椎骨が 1 点出土している。

鳥類 ニワトリの大腿骨が 1 点のみ出土しており、最大長 (GL) 89.4 mm、近位端最大幅 (Bp) 17.4 mm、遠位端最大幅 (Bd) 18.5 mm を測る。

表 4 種名表

軟体動物門 Mollusca	脊椎動物門 Vertebrata
腹足綱 Gastropoda	硬骨魚綱 Osteichthyes
古腹足目 Vetigastropoda	コイ目 Cyprinida
ミミガイ科 Haliotidae	コイ科 Cyprinidae
ミミガイ科の一種 Haliotidae gen. et sp. indet.	コイ <i>Cyprinus carpio</i>
新腹足目 Neogastropoda	ナマズ目 Siluriformes
アッキガイ科 Muricidae	ナマズ目の一種? Siluriformes fam., gen. et sp. indet.
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	スズキ目 Percidae
斧足綱 Bivalvia	タイ科 Sparidae
フネガイ目 Arcoida	マダイ <i>Pagrus major</i>
フネガイ科 Arcidae	タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet.
フネガイ科の一種 Arcidae gen. et sp. indet.	鳥綱 Aves
カキ目 Ostreoidae	キジ目 Galliformes
イタヤガイ科 Pectinidae	キジ科 Phasianidae
イタヤガイ <i>Pecten albicans</i>	ニワトリ <i>Gallus domesticus</i>
マルスダレカイ目 Veneroida	
マルスダレガイ科 Veneridae	
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	

(3) 中世京都における水産物利用

京都市内では本遺跡のほかに、平安京左京四條二坊十二町跡、同三條二坊十町跡から、中世の動物遺存体が出土しており、本報告ではそれらをあわせて、京都における中世の魚類遺存体の出土概要と意義を論じる。

平安京左京四條二坊十二町跡の12世紀後半の土壌では、スズキやブリ属が出土しており、平安京左京三條二坊十町跡の14世紀中頃の土壌では、アユ、コイ、サケ属、ボラ科、アジ科、タイ科、ベラ科が出土している¹⁾。また、本遺跡ではコイとマダイが出土しており、魚種として新たにマダイを追加された。これ

らの魚類遺存体は、いずれも食料残滓と考えられる。15世紀中頃に一条兼良が著した『尺素往来』には、美物とされる魚貝類や鳥獣類が記載されており、魚類では鮎、鯉、鯰、鮭、鱒、名吉、鱒、赤鯛、鱸、鰯などがあげられる²⁾。『尺素往来』に見る「美物」と遺跡から出土した魚種は、ベラ科を除いてほぼ合致することは興味深い。実際に遺跡から出土している魚類遺存体は、淡水産よりも海水産が多く、内陸部の京都における海産物の流通を示す。『尺素往来』に登場する魚種以外に、ベラ科が出土していることは、多様な魚種を知った上で、美味なものを取り上げたのであろう。

京都の遺跡から出土する中世の魚類遺存体は、都市における食生活や、海産物の流通、あるいは漁撈技術について示唆するところが大きい。また、近世の京都では多様な魚種が消費されていたことが、近年の発掘調査で明らかになりつつある³⁾。京都における水産物利用について、階層による利用状況や、海産物流通の変遷などの課題は少なくないが、中世の魚類遺存体が増加すれば、中世と近世の比較が充実し、内陸都市である京都のより具体的な水産物利用の解明が期待される。

註

- 1) 平安京左京四條二坊十二町の魚類遺存体は筆者実見。丸山真史・松井章 2008「出土した動物遺存体」『平安京左京三條二坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所。
- 2) 名吉はボラのこと。続群書類従完成会 1928「尺素往来」『群書類従』第九輯 塙保己一編纂 続群書類従完成会 pp.503-520。
- 3) 例えば、平安京左京六條三坊五町跡では、中世まで下魚とされたマグロ属や、中世遺跡で出土が低調なタラ科、シイラ、キダイなど多様な魚種が出土している(丸山真史・松井章 2005「出土した脊椎動物遺存体」『平安京左京六條三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 pp.126-137)。

表5 動物遺存体集計表

時期	遺構	大分類	小分類	部位	左	右	-	計	
13c	土坑20	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯			1	1	
			マダイ	主上顎骨		1		1	
	土坑79	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯				1	1
			タイ科?	椎骨				1	1
			ナマズ目?	椎骨				1	1
				椎骨				1	1
		不明	鰭棘				1	1	
土坑108	硬骨魚綱	コイ	咽頭歯		1		1		
		タイ科	椎骨				1	1	
土坑418	硬骨魚綱	不明	椎骨				1	1	
土坑560	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯				1	1	
		不明	椎骨				1	1	
計								12	
17c中	土坑236	腹足綱	アカニシ	殻質			1	1	
			アワビ類	殻質			1	1	
		斧足綱	イタヤガイ	殻質		3	1		1
			ハマグリ	殻質				3	3
	フネガイ科	殻質			1		1		
	鳥綱	ニワトリ	大腿骨		1			1	
計								8	

付章2 地下式倉庫に関する自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

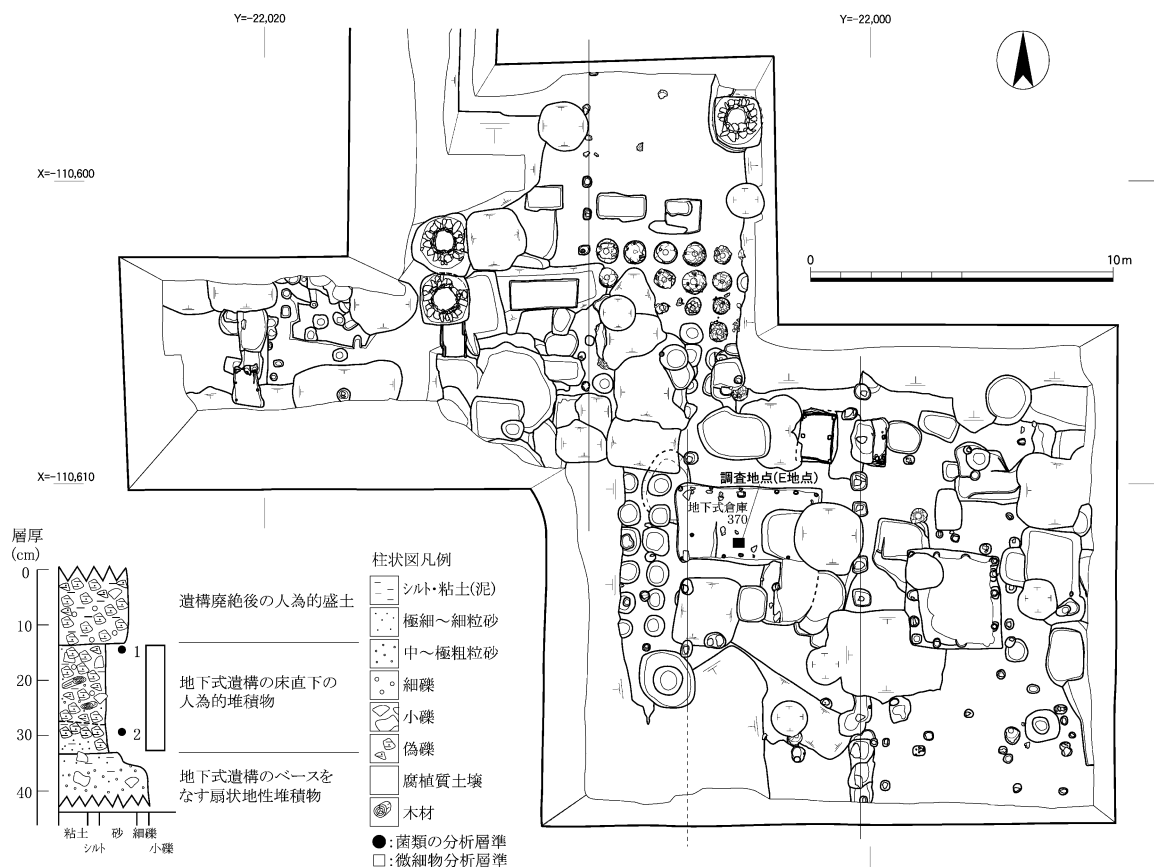
平安京左京五条三坊九町跡の発掘調査では、室町時代の麴室の可能性がある地下式倉庫が検出されている。今回の分析調査では、地下式倉庫の機能・用途に関する情報を得ることを目的として、地下式倉庫の床直下堆積物について、以下の自然科学分析調査を実施する。

地下式倉庫の床面には、木材片などを含む人為的な盛土が行われている。この人為的堆積物の性格を把握することを目的として、堆積物中の内容物を把握するため微細物分析を実施する。また、麴室の可能性を検討することを目的として、人為的堆積物中に麴菌であるアスペルギウス属糸状菌の痕跡の有無について、堆積物中の菌類の培養とDNA分析を行い検討する。

(2) 調査地点・試料

調査地点 (E地点) の位置、調査地点における床面の人為的堆積物 (盛土) の層相を図80に示す。

地下式倉庫は、扇状地性堆積物である砂礫～砂層を掘削して構築されている。地下式倉庫床面には、厚さ約20cmの盛土が行われている。この人為的堆積物は、下部がやや腐植に富む砂質泥ないしその偽礫からなる。中・上部は垂角状をなす泥質砂の偽礫と木材片などの植物遺体が不規則



に配置する間隙のある堆積物からなる。偽礫の大きさは1 cm～5 cm程度とばらつき、垂角状をなすものがほとんどである。

微細物分析試料は、床面に施工されている人為的堆積物を一括試料として扱い分析する。この際、堆積物中に取り込まれている木材片についても樹種同定を併せて実施する。菌類に関する分析は、床面を構成する堆積物の最上部と、下部のやや腐植に富む砂質泥の2層準から採取した堆積物試料について実施する。

(3) 分析方法

(3) - 1 微細物分析

堆積物中の偽礫を可能な限り除去し採取した試料200cc(366.1g)を水に浸し、粒径0.5 mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実の他、炭化材(主に径4 mm以上)、動物遺存体、土器、鍛冶滓などの遺物を抽出する。

抽出した遺物は、炭化材、動物遺体、土器、鍛冶滓などに区分し、70℃で48時間乾燥した後、各々の重量(g)と最大サイズ(mm)について記録をとる。記録後は、種類別に容器に入れて保管する。また、抽出した種実および木材・炭化材については以下に示す方法により種類を同定する。

1) 種実同定

種実は、双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、分類群(taxon)と部位を同定・計数する。分析後の種実は、種類別にサンプル管瓶に保存する。

2) 樹種同定

生木については、剃刀で木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の切片を作製し、ガム・クロラル(抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察する。炭化材は、試料を自然乾燥させた後、木口・柁目・板目の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で観察する。顕微鏡下で木材組織の種類や配列を観察し、現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して、分類群種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(3) - 2 菌類に関する分析

1) 培養法

各試料を希釈平板培養法によって菌類を培養し、得られた生糸状菌数の計数から菌量を算出する。また、観察された特徴的コロニーを記載する。

2) DNA分析法

各試料の生糸菌コロニーの優占コロニーの 26s リボソーム R N A 遺伝子 D1 ~ D2 領域の塩基配列を決定する。決定した配列を日本 DNA データバンク上の Blast 検索により相同性検索することによってコロニーの菌種を推定する。

(4) 結果

(4) - 1 微細物分析

結果を表 6 に示す。抽出された微細物は、種実、最大径 1.1 cm の炭化材 0.787g、被熱した貝類と思われる破片 1 個 (<0.01g)、最大径 2 cm の土器 12 個 (4.32g) の他、「湯玉」(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993) に似る金属粒 0.136g や板状の金属片 2.219g などの「鍛冶滓」が確認された。

産出した炭化種実は、イネの穎と思われる破片 1 個、ムギ類の胚乳 1 個に同定された。以下に形態的特徴を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.)? イネ科イネ属

穎 (果) の基部果実序柄部と思われる破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ 6 ~ 7.5 mm、幅 3 ~ 4 mm、厚さ 2 mm 程度のやや扁平な長楕円体。破片は大きさ 1 mm 程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎 (護穎と言う場合もある) と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲粒を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・ムギ類 (*Triticum aestivum* L. - *Hordeum vulgare* L.) イネ科コムギ属 - オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ 4 mm、径 3 mm 程度の倒卵体。腹面は正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面は粗面。コムギ (*Triticum aestivum* L.) ほど丸みを帯びず、オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) ほど両端が尖らないことから、両種の判別に至らず、ムギ類としている。

表 6 地下式倉庫の床面直上人為的堆積物の微細物分析結果

種類・部位など	個数ないし重量	備考	
炭化種実	イネ? 穎 (破片)	1個	基部
	ムギ類 胚乳 (完形)	1個	
炭化材	コナラ属アカガシ亜属	0.787g	最大径1.1cm
	コナラ属アカガシ亜属		
	カキノキ属		
	カツラ		
	イネ科		
貝類? (破片: 被熱している)	1個 (<0.01g)		
土器片	12個 (4.32g)	最大径2cm	
鍛冶滓	湯玉	0.136g	
	金属片	2.219g	
分析残渣 (碎屑物)	2mm以上	34.89g	
	1-2mm	15.18g	
	0.5-1mm	15.63g	

炭化材は、広葉樹3分類群(コナラ属アカガシ亜属・カキノキ属・カツラ)と草本1分類群(イネ科)に同定された。微細物分析とは別に実施した木材片は針葉樹のヒノキ科に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

試料は収縮して組織が潰れている。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・カキノキ属 (*Diospyros*) カキノキ科

散孔材で、管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、10～20細胞高でやや階層状に配列する。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～30細胞高。

・イネ科 (Gramineae)

試料は厚さ約5mmの板状を呈する。横断面では、2対4個の道管の外側に師部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

(4)－2 菌類に関する分析結果

1) 培養法による結果

希釈平板培養法による生糸状菌数の計数結果と観察された特徴的コロニーを表7に示す。

上部試料(試料1)、下部試料(試料2)ともに優占コロニーは属種決定できるような分生孢子

表7 菌類の培養結果

項目	上段：試料番号 下段：糸状菌総数	
	上部試料	下部試料
	1.9×10 ⁴ /g	1.5×10 ³ /g
優占コロニー	直径1mm以下のコロニー ※ 直径1～2mmのコロニー ※	直径1mm以下のコロニー ※ 直径5mm程度のコロニー ※ 直径20mm程度のコロニー ※
特徴的コロニー	3.2×10 ² /g <i>Alternaria</i> 属 2.6×10 ¹ /g <i>Trichoderma</i> 属 8.0×10 ⁰ /g <i>Penicillium</i> 属	1.6×10 ¹ /g <i>Penicillium</i> 属 8.0×10 ⁰ /g <i>Aspergillus niger</i>

※：PDA培地上で30℃、7日間培養後の状態

は形成しておらず形態からの同定は不可能であった。

2) DNA分析

生糸状菌コロニーの DNA 塩基配列決定による菌種の推定を行った。優占コロニーの形態からの同定は不可能であったので、各試料の生糸状菌コロニーの優占コロニーの 26s リボソーム RNA 遺伝子 D1 ~ D2 領域の塩基配列を決定した。決定した結果を以下に示した。

・直径 1 mm 以下のコロニーの配列

```
GGGAAGNGT GANNNNCGGT GGGANNATG ANTAAGTCCC NNGGAAAAGG 50
GCATCATAGA GGGTGATAAT CCCGTACATG GCATGGAGCG CCCGAAGCTT 100
TGTGATACGN TTTCTAAGAG TCGAGTTGTT TGGGAATGCA GCTGAAAAGG 150
GGTGGTAAAT GCCATCTAAG CTANTATTGG GAGAGCCGAT AGCGAACAGT 200
ACAGTGATGA AGTGAAGACT TGAAGGGTTA CAGTACGTGA ATGCAAGGAG 250
TAGAGTCA
```

・直径 1 ~ 2 mm のコロニーの配列

```
ACCCAGAGNC CGAGTGGTAA NNNNCCCAGA GGGCGGTGGG GCGAAGGCAG 50
CGGTCCAAGT TCCTTGG AAC AGGACGTCAC AGAGGGTGAG AATCCCGTAC 100
GTGGTCGCTA ACCTTCGCCG TGTAAGCCCC CTTGACGAG TCGAGTTGTT 150
TGGGAATGCA GCTCTAAACC TGGGAGGTAA ATTTCTTCTA AAGCGTAAAT 200
ACTGGCCAGA GACCGATATG CGCACAAGTA GAGTGACTNC GAACGATGAA 250
AGCACCTTGG AAAGAGAGTC AAATAGCACG TGAAATTGTT GAAAGGGAAG 300
CGCTTGCAGC ACAGACTTCC TGTAGTTGCT CATCCGGGCT TTTGCCCGGT 350
GCACTCTTCT GCGGGCAGGC CAGCATCAGT TTGGCGGTTG GATAAAGATC 400
TCTGTCATGT ACCTCTTTTC NGGGAGCCTT AT
```

・直径 5 mm 程度のコロニーの配列

```
CGGCGAGTGA AGCGNCAACA GCTCAAATTT GAAATCTGGC TTCGGCCCGA 50
GTTGTAATTT GTAGAGGATG CTTTTGGCGA GGTGCCTTCT GAGTTCCCTG 100
GAACGGGACG CCAGANAGGG TGAGAGCCCC GTATAGTCGG ACACCAAGCC 150
TCTGTAAAGC TGGTTCGACG ACTCGAGTAG TTTCGGGAAG GCTGCTCAA 200
ATGGGAGGTA TATCTTCTT AAAGCTAAAT ATAGGCCAGA GACCGATAGC 250
GCACAAGTAG AGTGTATCGA AAGATGAAAA GCACTTTGAA AAGAGGGTTA 300
AATAGCACGT GAAATTCTTG AAAGGGGAAG CGCTTGTGAC CAGACTTGTG 350
CCGGGCTGAT CATCCAGTGT TCTACTGGTG CAGTCGACCC GGCTCAGGCC 400
AGCGTCGGTT CTCGTGGGGG GATAAAAGCT TCGGGAACGT GGCTCCTCCG 450
GGCGTGTAT AGCCCGTTGT TTAATACCCT CGTGGGGACC AAGGTTTCGCG 500
CTCT
```

・直径 20 mm 程度のコロニーの配列

CGGCGAGTTA TGCGNCAACA GCTCANNTTT TATATNTNNN CNNTTCGGGG 50
 CCCGAGTTGT AATTTGCAGA GGGTGCTTTG GCGTTGGCGG CGGTCTAACT 100
 TCCTTGGAAC AGGACATCAC AGAGGGTGAG AATCCCGTAC GTGGTCGCCC 150
 GCCTTCGCCG TGTAAGCCC CTTCGACGAC TCGACTTGTT TGGGAATCAG 200
 CTCTAAATGG GAGGTAAATT TCTTCTAAAAG CTAATACGC CAGAGACCGA 250
 TAGCGCACAA GTAGAGTGAT CGAAAGATGA AAAGCACTTT CAAAGAGAGT 300
 CAAACAGCAC GTGAAATTGT TGAAAGGGAA TGCTCTTGCA GCCAGACTTG 350
 GCCGCCGTTG CTCACCCGGG CTCCTGCCTG CCCGGGGCAC TCTTCGGCGG 400
 TCAGGCCAGC ATCAGTTCGG GCGGTCGGAT AAAGGGCTCT GACACGTACT 450
 TCCTTCGGGG TCGACATACA GGGGAGCCGC CATGCGACCA GCCCGGACTN 500
 AGGTCCGCGC ATCTGCC

以上の配列を日本DNAデータベース上のBlast検索により相同性検索することによってコロニーの菌種を推定した。

表8に各試料の優占コロニー塩基配列の相同性検索の結果を示した。データベース上のDNA塩基配列との相同性が99%以上の場合同種であると言われている。今回の結果では全て相同性が99%未満であり、なおかつ異なる種の菌が同じ相同性の数値を示してヒットしているため明確な属種の推定は不可能であったが、優占コロニーはデータベースでヒットした菌種に遺伝的に近い

表8 各試料の優占コロニーの塩基配列相同性検索結果

試料	コロニー	相同性検索によりヒットした菌種	相同性	分類
上部試料 (試料1)	直径1mm以下のコロニー	<i>Pseudozyma sp</i>	93%	担子菌門
		<i>Pseudozyma hubeiensis</i>	93%	担子菌門
		<i>Ustilago striiformis</i>	93%	担子菌門
		<i>Ustilago davisii</i>	93%	担子菌門
		<i>Sporisorium reilianum</i>	93%	担子菌門
		<i>Ustilago tritici</i>	93%	担子菌門
		<i>Ustilago altitilis</i>	93%	担子菌門
		<i>Ustilago alcornii</i>	93%	担子菌門
	<i>Sporisorium lepturi</i>	93%	担子菌門	
	直径1~2mmのコロニー	<i>Camarosporium quaternatum</i>	95%	子のう菌門
		<i>Phoma herbarum</i>	95%	子のう菌門
		<i>Ochrocladosporium frigidarii</i>	95%	子のう菌門
		<i>Hyalodendriella betulae</i>	95%	子のう菌門
		<i>Cladosporium elatum</i>	95%	子のう菌門
	下部試料 (試料2)	直径1mm以下のコロニー	<i>Pseudozyma sp</i>	93%
<i>Pseudozyma hubeiensis</i>			93%	担子菌門
<i>Ustilago striiformis</i>			93%	担子菌門
<i>Ustilago davisii</i>			93%	担子菌門
<i>Sporisorium reilianum</i>			93%	担子菌門
<i>Ustilago tritici</i>			93%	担子菌門
<i>Ustilago altitilis</i>			93%	担子菌門
<i>Ustilago alcornii</i>			93%	担子菌門
<i>Sporisorium lepturi</i>		93%	担子菌門	
直径5mm程度のコロニー		<i>Lecythophora sp</i>	96%	子のう菌門
		<i>Lecythophora hoffmannii</i>	96%	子のう菌門
直径20mm程度のコロニー		<i>Massarina igniaria</i>	92%	子のう菌門

菌であると思われる。

(5) 考察

1) 堆積物中の微細物

室町時代の地下式遺構の床面に施工されている人為的堆積物は、調査地点では下部がやや腐植に富む砂質泥ないしその偽礫からなり、中・上部は垂角状をなす泥質砂の偽礫、礫、木材片などの植物遺体が不規則に配置する間隙の多い堆積物からなる。このように床面的人為的堆積物は多少の層相変化が認められ、上位ほど隙間が多くなっていることが窺える。

床面直上的人為的堆積物からは、炭化種実、炭化材、被熱した貝類と思われる破片、土器、「鍛冶滓」の可能性のある「湯玉」に似る金属粒や板状の金属片が産出した。このうち、炭化種実は、栽培種のムギ類の胚乳とイネの可能性のある穎といった栽培植物に由来するものであった。また、炭化材には、常緑広葉樹のアカガシ亜属、落葉広葉樹のカツラ・カキノキ属、草本のイネ科といった複数の種類が認められた。なお、イネ科は、稈の厚さが5 mm以上あることから、イネやムギ類ではなく、タケ亜科やヨシ属など、稈が木質化する種類に由来する可能性が高い。

このように床面に施工されている人為的堆積物には、被熱した遺物が多く取り込まれていることが窺える。これらの被熱した遺物は、遺物の性状から鍛冶炉の廃棄物や、食料残滓などが含まれる住居の炉の燃料残滓などに由来する可能性が考えられる。また、大きな礫や炭化していないヒノキなどの木材片も盛土材料として利用されている。これらのことから、床面直上的人為的堆積物（盛土）は、異なる成因や由来の堆積物や物などから構成されていることが特徴といえる。この特徴が意図的なものであるか否かは不明であるが、今回の地下式倉庫が温度・湿度調整が必要な麴室の可能性のあることから、麴室独特の床面盛土の施工法の一つであったのかもしれない。この点については、今後の類例の蓄積をもって再評価していく必要がある課題である。

2) 麴菌の有無について

室町時代の地下式遺構的人為的堆積物下部および最上部試料の菌類の培養結果は、最上部試料で直径1 mm以下のコロニーや直径1～2 mmのコロニー、下部試料で直径1 mm以下のコロニー、直径5 mm程度のコロニー、直径20 mm程度のコロニーが優占したが、これら優占コロニーでは属・種を決定できるような分生胞子は形成しておらず、形態からの同定は不可能であった。なお、特徴的なコロニーとして、上部試料で *Alternaria* 属、*Trichoderma* 属、*Penicillium* 属、下部試料で *Penicillium* 属や *Aspergillus niger* が確認されている。このうち、*Aspergillus niger* は麴菌の仲間であるが含量密度は著しく少ない。

いっぽう、DNA分析の結果では、人為的堆積物最上部試料の直径1 mm以下のコロニーが担子菌門、直径1～2 mmのコロニーが子のう菌門、下部試料の直径1 mm以下のコロニーが担子菌門、直径5 mm程度のコロニーと直径20 mm程度のコロニーが子のう菌門である可能性が示された。DNA塩基配列との相同性が99%以上の場合は同種であるとされるが、今回の結果では全て相同性が99%

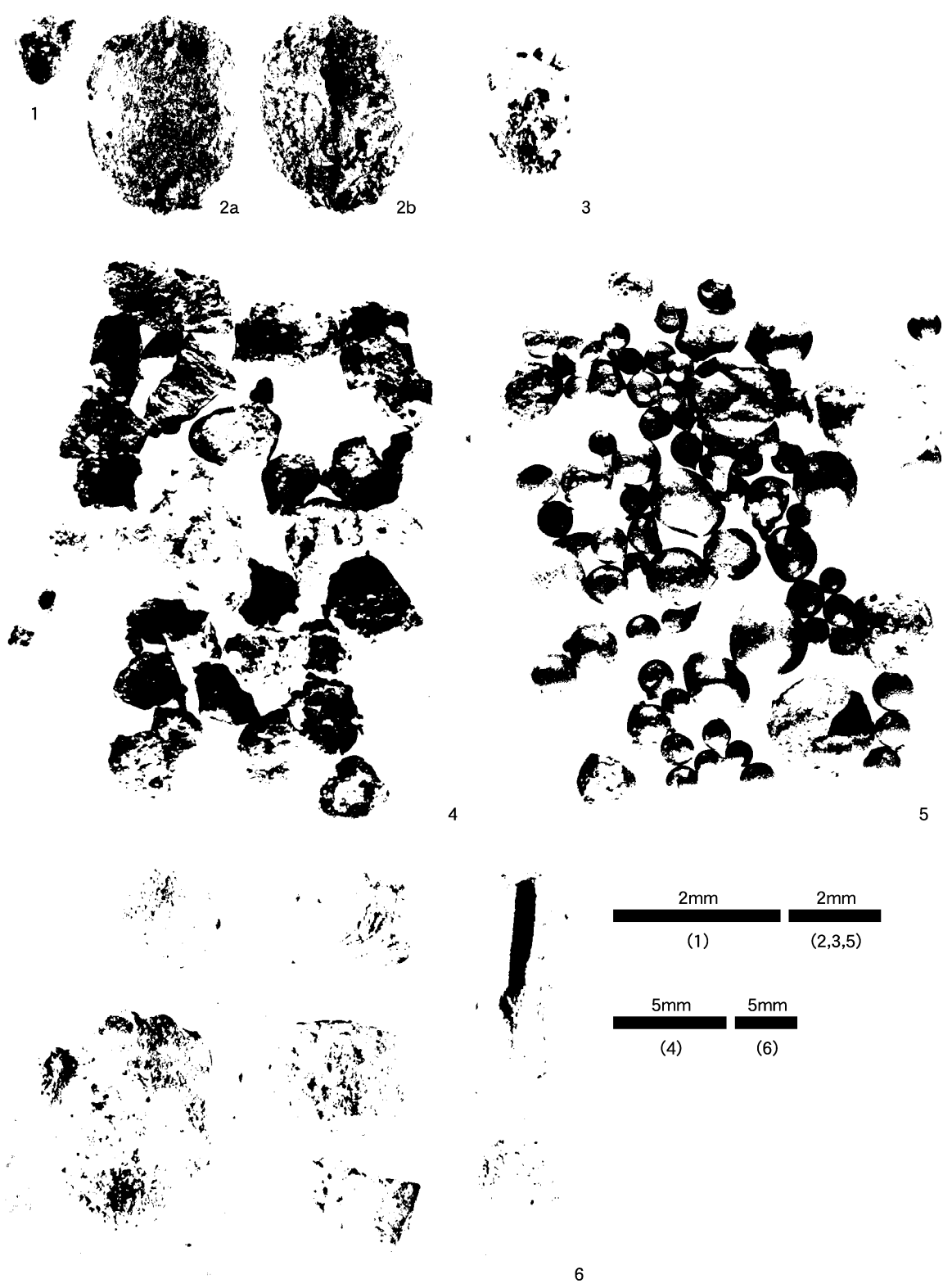
未満であり、異なる種の菌が同じ相同性の数値を示していることから、明確な属種の推定は不可能である。

以上の室町時代の地下式遺構の人為的堆積物 2 層準の分析結果は、いずれの層準も著しく菌類が少ないことを示している。このような菌類の含量密度は、もともと菌類が少なかったことを示している可能性もあるが、遺構廃絶後の経年変化の過程で分解消失している可能性の方が高いように思われる。そうだとすると、今回の結果は淘汰された結果であり、下部の腐植に富む層準から含量密度が少ないながらも産出した麴菌の仲間である *Aspergillus niger* の解釈も変わってくることになる。現時点では、菌類の経年変化による分解消失課程に関する調査研究例はなく、今回

の結果のみから、麴室であったと積極的に支持することはできないが、菌類の分解過程に関する研究が進展することにより、今回の結果を改めて評価する必要性がある。

引用文献

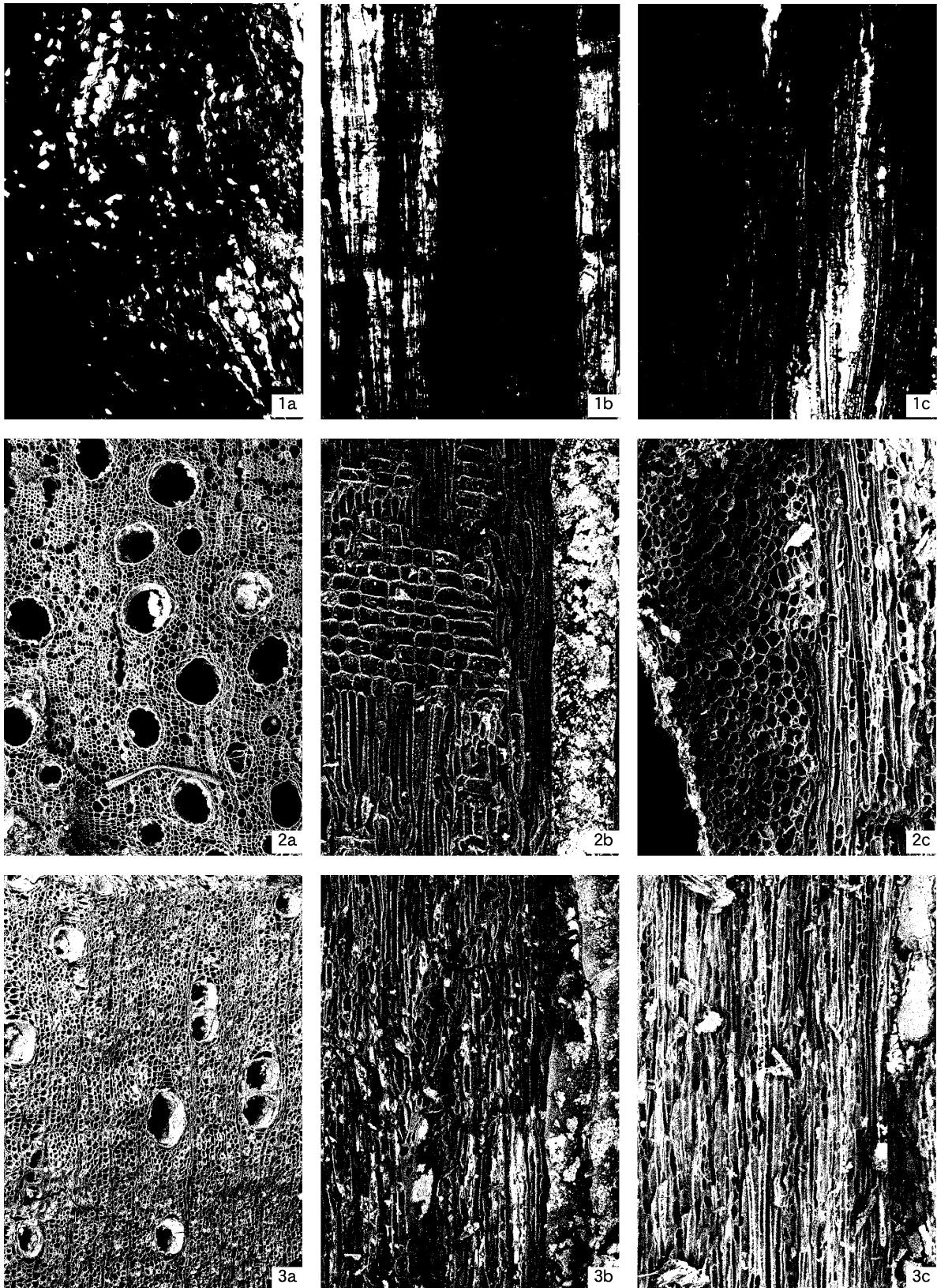
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑. 東北大学出版会,642p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,1993,自然科学分析. 新宿区福祉部遺跡調査会編,北新宿三丁目遺跡一(仮称)新宿区立北新宿特別養護老人ホーム建設事業に伴う緊急発掘報告書一,125-129.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所,2005,平安京左京六条三坊五町跡. 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8,205p.



- 1. イネ? 穎(E地点;地下式遺構)
- 3. 貝類?(E地点;地下式遺構)
- 5. 湯玉(E地点;地下式遺構)

- 2. ムギ類 胚乳(E地点;地下式遺構)
- 4. 金属片(E地点;地下式遺構)
- 6. 土器(E地点;地下式遺構)

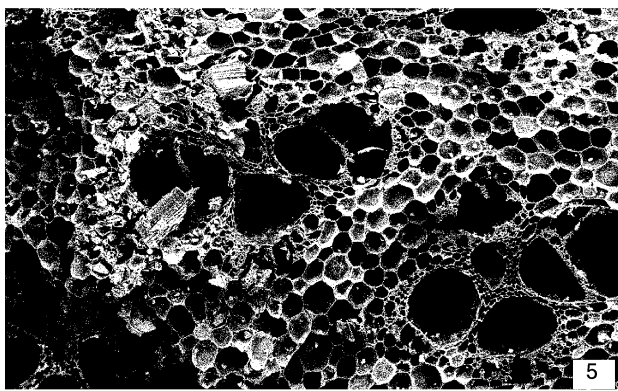
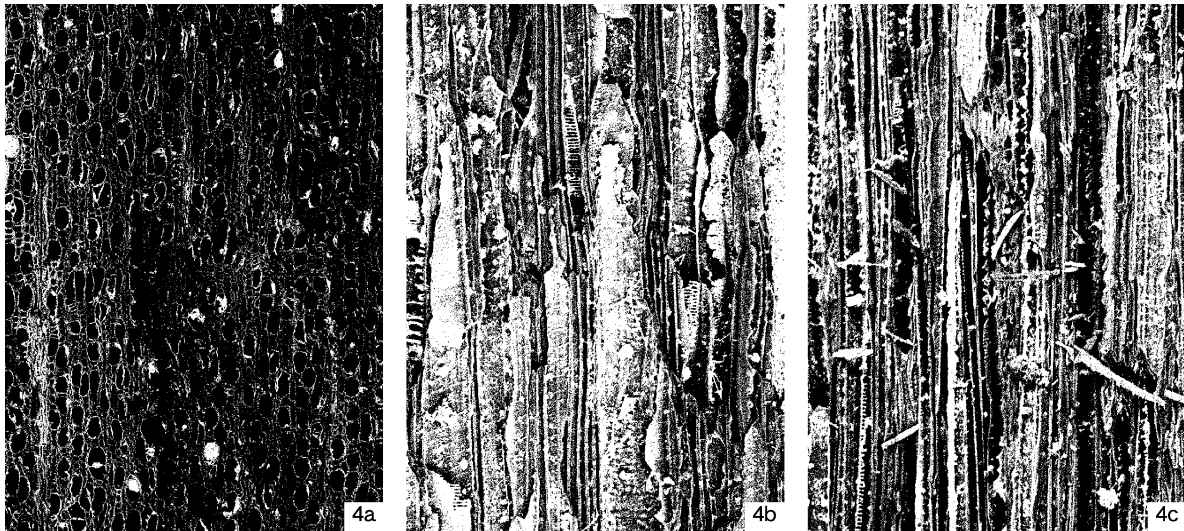
図 81 微細物



1. ヒノキ科(E地点;地下式遺構)
 2. コナラ属アカガシ亜属(E地点;地下式遺構)
 3. カキノキ属(E地点;地下式遺構)
- a:木口, b:柱目, c:板目

200 μ m:1a
 100 μ m: 1 b,c
 200 μ m:2-3a
 200 μ m:2-3b,c

図82 木材・炭化材1



200 μ m:4a,5
 200 μ m:4b,c

4. カツラ(E地点;地下式遺構) a:木口,b:柁目,c:板目
 5. イネ科(E地点;地下式遺構) 横断面

図 83 木材・炭化材 2

付表1 掲載遺物一覧表

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
1	弥生土器	甗	溝969	26.0			10	10YR8/2灰白色 0.5~2mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
2	弥生土器	甗	溝969	26.8			口縁20	2.5Y8/2灰白色 0.5~1mm石英・長石・チャート少量、金雲母少量	
3	弥生土器	甗底部	溝970			5.8	底部50	10YR6/2灰黄褐色 0.5~2mmの石英・長石・チャートやや多量	
4	弥生土器	甗底部	溝970			6.0	底部90	7.5YR7/3にぶい橙色 1~2mmの石英・長石・チャート多量	底部に木の葉の痕
5	弥生土器	広口壺	溝971	13.0			口縁20	7.5YR6/4にぶい橙色 0.5~1mmの石英・長石・チャート少量	
6	弥生土器	甗	溝971	15.0			口縁10	10YR6/2灰黄褐色 0.5~1mmの石英・長石少量	
7	弥生土器	甗	溝971	18.0			口縁40	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5~3mmの石英・長石多量、クサリレキ微量	
8	弥生土器	広口壺	土坑909	25.0			口縁10	7.5YR8/3浅黄褐色 0.5~2mmの石英・長石・チャート多量、クサリレキ少量	
9	弥生土器	有段口縁壺	土坑909	28.0			口縁10	7.5YR6/3にぶい褐色 0.5~2mmの石英・長石多量、チャート少量、クサリレキ・金雲母少量	
10	弥生土器	広口壺	土坑909	11.5			口縁40	10YR8/2灰白色 0.5~3mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
11	弥生土器	広口壺	土坑909	16.8			口縁10	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5~3mmの石英・長石・チャート多量、クサリレキ少量	
12	弥生土器	壺底部	土坑909			6.8	底部100	2.5Y7/2灰黄色 0.5~4mmの石英・長石多量、チャート・金雲母少量	
13	弥生土器	甗底部	土坑909			5.6	底部50	2.5YR6/6褐色 1~3mmの石英・長石・チャート多量	
14	土師器	皿	井戸805	10.6	1.3		90	5YR7/6橙色 1~2mmの石英・長石少量、クサリレキ少量	
15	土師器	皿	井戸805	11.0	1.2		25	10YR8/3浅黄褐色 1~4.5mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
16	土師器	皿	井戸805	11.0	1.3		20	5YR7/6橙色	
17	土師器	皿	井戸805	12.6			20	10YR7/3にぶい黄褐色 1~3.5mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	灯明皿
18	土師器	皿	井戸805	13.1			15	2.5Y7/2灰黄色 1~2mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	灯明皿
19	土師器	皿	井戸805	15.0			20	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5~1.5mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
20	土師器	皿	井戸805	15.0	2.7		10	7.5YR8/4浅黄褐色	
21	土師器	皿	井戸805	19.0	2.7		15	5YR7/6褐色 1~2mmの石英・長石少量、クサリレキ多量	
22	土師器	甗	井戸805	12.8			口縁25	2.5YR5/8明赤褐色 1~2mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
23	黒色土器	椀	井戸805	14.0			口縁20	10YR3/1黒褐色	
24	黒色土器	椀	井戸805			8.0	底部80	2.5Y2/1黒色	
25	白色土器	皿	井戸805	12.7	2.5	4.8	50	2.5Y8/2灰白色	
26	白色土器	椀	井戸805	4.9			底部40	2.5Y8/1灰白色	
27	白色土器	高杯	井戸805				10以下	2.5Y8/1灰白色	
28	白色土器	高杯	井戸805				脚柱部100	2.5Y8/1灰白色1~4mmの石英・長石・チャート少量	
29	須恵器	鉢	井戸805	21.6			15	N8/0灰白色	
30	灰釉陶器	段皿	井戸805			5.8	底部25	5Y7/1灰白色	
31	灰釉陶器	椀	井戸805			7.4	底部40	10YR7/3にぶい黄褐色 0.5~2.5mmの石英・長石少量	
32	緑釉陶器	椀	井戸805			7.4	底部100	胎土10YR8/3浅黄褐色、釉7.5Y4/3暗オリブ色	
33	緑釉陶器	椀	井戸805			7.5	底部25	胎土5YR7/6褐色 釉濃緑色 1~1.5mmの石英・長石・チャート少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色調胎土	備考
34	緑釉陶器	椀	井戸805			7.2	底部90	胎土7.5YR8/4浅黄橙色、釉濃緑色	
35	輸入陶磁器 白磁	椀	井戸805	13.8			口縁20		
36	土師器	皿・コース ター	溝598	11.2	1.0		20	10YR8/2灰白色	
37	土師器	皿	溝598	13.6	2.9		40	10YR6/2灰黄褐色	
38	土師器	皿	溝598	13.8	3.4		20	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
39	土師器	皿	溝598	14.4			30	10YR8/4浅黄橙色 1～3mmの石英・長石 ・チャート多量	
40	土師器	皿・小	土坑61	9.0	1.8		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
41	土師器	皿・小	土坑61	9.0	1.8		50	7.5Y7/4にぶい橙色	
42	土師器	皿・小	土坑61	9.4	1.9		90	7.5YR8/4浅黄橙色	
43	土師器	皿・小	土坑61	9.4	2.1		90	10YR8/3浅黄橙色	
44	土師器	皿・小	土坑61	9.5	1.7		100	10YR8/2灰白色	
45	土師器	皿・小	土坑61	9.6	1.8		80	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
46	土師器	皿・小	土坑61	9.6	1.6		50	2.5Y8/3淡黄色	
47	土師器	皿・小	土坑61	9.6	1.8		60	10YR7/4にぶい黄橙色	
48	土師器	皿・小	土坑61	9.6	1.5		90	2.5Y8/2灰白色	
49	土師器	皿・小	土坑61	9.6	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
50	土師器	皿・小	土坑61	9.7	1.8		100	10YR8/1灰白色	
51	土師器	皿・小	土坑61	9.8	1.8		50	10YR8/2灰白色	
52	土師器	皿・小	土坑61	9.8	1.8		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
53	土師器	皿・小	土坑61	9.8	2.0		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
54	土師器	皿・小	土坑61	9.8	1.5		100	2.5Y8/3淡黄色	
55	土師器	皿・小	土坑61	10.0	1.4		50	10YR8/4浅黄橙色	
56	土師器	皿・小	土坑61	10.2	1.8		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
57	土師器	皿・小	土坑61	10.2	1.9		35	10YR8/3浅黄橙色	
58	土師器	皿・小	土坑61	10.6	2.0		100	10YR8/3浅黄橙色	
59	土師器	皿・コース ター	土坑61	10.6	1.6		35	7.5YR7/4にぶい橙色	
60	土師器	皿・大	土坑61	13.8	2.8		口縁50	7.5YR8/3浅黄橙色	
61	土師器	皿・大	土坑61	13.8	2.9		60	2.5Y8/2灰白色	
62	土師器	皿・大	土坑61	13.8	3.3		25	10YR8/2灰白色	
63	土師器	皿・大	土坑61	14.4	3.3		80	2.5Y7/3浅黄橙色	
64	土師器	皿・大	土坑61	14.6	2.7		60	7.5YR7/4にぶい橙色	
65	土師器	皿・大	土坑61	14.9	3.3		60	10YR8/3浅黄橙色	
66	土師器	皿・大	土坑61	15.0	2.4		60	10YR8/3浅黄橙色	

No	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
67	土師器	皿・大	土坑61	16.4	3.3		70	10YR7/3にぶい黄橙色	
68	白色土器	高杯	土坑61				10	10YR8/1灰白色	面取り11面
69	瓦器	皿	土坑61	9.8	2.3		95	外面10YR6/1褐灰色 断面5Y7/1灰白色	
70	瓦器	椀	土坑61	15.7			10	外面N6/0灰色 断面5Y8/1灰白色	
71	須恵器	鉢	土坑61	28.0				7.5Y5/1灰色	
72	輸入陶磁器 青白磁	合子	土坑61	7.2	2.2	6.6	50	釉5B7/1明青灰色	子持ち合子。花から蔓がのびるモチーフ。口縁部は釉葉の色がPB3/1暗灰色に変色する
73	輸入陶磁器 白磁	四耳壺	土坑61	10.0			25	胎土7.5Y8/1灰白色、釉7.5Y8/2灰白色	
74	輸入陶磁器 白磁	壺底部	土坑61			7.9	20	胎土7.5Y8/1灰白色、釉7.5Y8/2灰白色	73の四耳壺の底部
75	輸入陶磁器 白磁	椀	土坑61	16.0				口縁20 胎土2.5Y8/1灰白色、釉2.5GY8/1灰白色	
76	輸入陶磁器 白磁	椀	土坑61	17.3			20	胎土2.5Y8/1灰白色、釉2.5GY8/1灰白色	
77	輸入陶磁器 白磁	椀	土坑61			6.6	底部30	胎土2.5Y8/2灰白色、釉5Y8/1灰白色	
78	土師器	皿・小	井戸373	9.3	1.6		50	7.5YR8/4浅黄橙色	
79	土師器	皿・小	井戸373	9.3	1.8		40	2.5Y7/2灰黄色	内面煤付着。
80	土師器	皿・小	井戸373	9.4	1.9		100	2.5Y8/2灰白色 1～2mmの石英・長石・チャート少量	
81	土師器	皿・小	井戸373	9.5	1.8		50	2.5Y7/2灰黄色 0.5～1.5mmの石英・長石・チャート少量	
82	土師器	皿・小	井戸373	9.6	1.8		30	10YR8/4浅黄橙色 1mm以下の石英・長石・チャート少量	
83	土師器	皿・小	井戸373	9.6	1.7		40	10YR8/3浅黄橙色	
84	土師器	皿・小	井戸373	9.6	1.8		40	10YR7/3にぶい黄橙色	
85	土師器	皿・小	井戸373	9.8	1.6		70	2.5Y8/3淡黄色	
86	土師器	皿・小	井戸373	9.9	1.8		70	10YR8/4浅黄橙色 クサリレキ多量	
87	土師器	皿・大	井戸373	13.0	1.8		20	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ多量	
88	土師器	皿・大	井戸373	13.8	2.1		25	7.5YR8/4浅黄橙色	
89	土師器	皿・大	井戸373	13.8	2.3		30	2.5Y8/3淡黄色	
90	土師器	皿・大	井戸373	14.4	2.5		40	10YR8/3浅黄橙色 1mm以下の石英・長石微量	
91	土師器	皿・大	井戸373	14.6	2.6		20	2.5Y8/2灰白色	
92	土師器	皿・大	井戸373	16.4	3.1		20	10YR8/3浅黄橙色 1～3mmのチャート少量、クサリレキ多量	
93	白色土器	皿	井戸373	7.0	1.0		30	7.5YR8/1灰白色	
94	白色土器	椀	井戸373	14.5			口縁40	2.5Y8/2灰白色	
95	白色土器	椀	井戸373			6.1	底部50	5Y8/2灰白色	
96	白色土器	高杯	井戸373				脚柱部50	2.5Y8/2灰白色	
97	灰釉陶器	皿	井戸373	7.2	2.2	3.6	60	5Y7/1灰白色	底部内面に赤色顔料付着。視転用か。
98	須恵器	甕	井戸373	29.1			口縁20	5Y6/1灰色 1～3mmのチャート多量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色調胎土	備考
99	須恵器	壺	井戸373	17.0			口縁20	5Y5/1灰色	
100	輸入陶磁器 白磁	椀	井戸373	14.8	6.3	4.3	30	胎土10YR7/1灰白色 黒色砂粒少量、釉 2.5GY8/1灰白色	
101	輸入陶磁器 白磁	椀	井戸373			4.4	底部100	釉7.5GY8/1明緑灰色	
102	輸入陶磁器 白磁	椀	井戸373			6.0	底部100	釉7.5Y7/1灰白色	
103	土師器	皿・小	土坑802	7.9	1.5		100	10YR8/3浅黄橙色	
104	土師器	皿・小	土坑802	7.9	1.6		90	7.5YR7/4にぶい橙色 1～3mmのチャート 少量、クサリレキ少量	
105	土師器	皿・小	土坑802	8.9	1.7		25	10YR7/4にぶい黄橙色 クサリレキ少量	
106	土師器	皿・小	土坑802	8.5	1.5		60	7.5YR8/4浅黄橙色 クサリレキ少量	
107	土師器	皿・大	土坑802	12.7	2.4		20	10YR8/4浅黄橙色	
108	土師器	皿・大	土坑802	12.3	2.4		40	10YR7/2にぶい黄橙色 クサリレキ・金雲 母多量	
109	土師器	皿・大	土坑802	12.5			10	7.5YR7/3にぶい橙色 1～2mmの石英・長 石少量	
110	焼締陶器 常滑	甕	土坑802	36.0			30	2.5Y4/1黄灰色	
111	輸入陶磁器 白磁	皿	土坑802	15.8			口縁20		
112	土師器	皿・小	土坑505	8.2			20	2.5Y7/3浅黄色	
113	土師器	皿・小	土坑505	9.0	2.1		20	10YR7/2にぶい黄橙色	
114	山茶椀	椀	土坑505			8.3	底部20	2.5Y7/1灰白色	底部内面平滑、硯に転 用か
115	輸入陶磁器 白磁	椀	土坑505	14.5			10		
116	輸入陶磁器 青磁	皿	土坑505	9.9			10	釉2.5GY7/1明オリーブ灰色	底部は釉掻きとり
117	輸入陶磁器 青磁	椀	土坑505	15.8	6.5	4.9	60	胎土5Y8/2灰白色、釉5Y7/3浅黄色	越州窯産。底部内面に 目痕。
118	輸入陶磁器 青磁	椀	土坑505			5.2	底部50	釉7.5Y5/2灰オリーブ色	全面施釉
119	土師器	羽釜	土坑634	18.0	12.2		80	10YR8/2灰白色 金雲母多量	
120	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 450	6.6	1.8		30	10YR8/3浅黄橙色	
121	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 450	8.0	1.1		25	10YR8/2灰白色 クサリレキ微量	
122	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 450	8.2	1.5		40	2.5Y8/2灰白色	
123	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 450	8.3	1.5		70	7.5YR8/4浅黄橙色 クサリレキ多量	
124	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 450	9.1	1.7		40	10YR8/3浅黄橙色	
125	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 450	9.3	1.3		20	10YR8/3浅黄橙色 クサリレキ少量	
126	土師器	皿・白小	地下式倉庫 450	6.8	2.3		100	2.5Y8/2灰白色 1～2mmの石英・長石少量	
127	白色土器	皿	地下式倉庫 450	10.7	2.4	4.2	70	2.5Y8/2灰白色	底部糸切り
128	山茶椀	小皿	地下式倉庫 450	8.0	2.0		60	2.5Y8/1灰白色	底部糸切り。底部内面 に赤色顔料付着。内面 自然釉少量かかる。
129	輸入陶磁器 青白磁	皿	地下式倉庫 450	9.0	1.7	3.1	25	釉7.5GY8/1明緑灰色	
130	輸入陶磁器 白磁	皿	地下式倉庫 450	10.0	2.8	5.2	30	釉2.5GY8/1灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
131	輸入陶磁器 白磁	皿	地下式倉庫 450	10.3	2.8	4.4	40	釉2.5GY8/1灰白色	
132	輸入陶磁器 白磁	椀	地下式倉庫 450	16.0			20	釉7.5Y7/1灰白色	
133	輸入陶磁器 白磁	椀	地下式倉庫 450	15.6			10	釉7.5Y8/2灰白色	
134	輸入陶磁器 青磁	椀	地下式倉庫 450			5.5	底部60	釉10Y6/2オリーブ灰色	
135	焼締陶器 常滑	甗	地下式倉庫 450				口縁15	外面10YR4/3にぶい黄褐色、断面10Y5/1 褐灰色	
136	焼締陶器 常滑	甗	地下式倉庫 450				破片	外面N8/0灰白色、断面10YR6/1褐灰色 1～2mmの石英・長石少量	外面自然釉かかる
137	焼締陶器 常滑	甗	地下式倉庫 450				破片	外面7.5YR2/2黒褐色、断面10YR6/1褐灰 色 1～5mmの石英・長石多量	
138	焼締陶器 常滑	甗	地下式倉庫 450				破片	外面5Y5/4オリーブ色、断面10YR7/1灰白 色 0.5～2mmの石英・長石多量	外面自然釉かかる
139	土師器	皿・小	土坑127	7.9	1.5		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
140	土師器	皿・小	土坑127	7.9	1.7		100	2.5Y7/2灰黄色	
141	土師器	皿・小	土坑127	7.9	1.4		100	2.5Y7/3浅黄色	
142	土師器	皿・小	土坑127	8.0	1.6		50	10YR7/2にぶい黄橙色 0.5～1mmの石英・ 長石少量、クサリレキ微量	
143	土師器	皿・小	土坑127	8.0	1.3		50	10YR6/3にぶい黄橙色	
144	土師器	皿・小	土坑127	8.2	1.5		90	7.5YR7/4にぶい橙色	
145	土師器	皿・小	土坑127	8.4	2.6		100	10YR7/2にぶい黄橙色 1～3mmの石英・ 長石少量、金雲母少量	
146	土師器	皿・小	土坑127	8.4	1.6		80	10YR7/3にぶい黄橙色	
147	土師器	皿・大	土坑127	11.4	2.2		100	10YR6/3にぶい黄橙色 0.5～2mmの石英・ 長石・チャート多量、金雲母多量	
148	土師器	皿・大	土坑127	11.6	2.2		40	10YR6/3にぶい黄橙色 金雲母少量	
149	土師器	皿・大	土坑127	11.8	2.0		100	10YR7/3にぶい黄橙色 1～10mmのチャー ト少量、1～2mmの石英・長石少量	
150	白色土器	杯	土坑127	7.0	2.2		50	10YR8/1灰白色	
151	白色土器	杯	土坑127	7.0	1.9		75	10YR8/2灰白色	
152	土師器	皿・白小	土坑127	7.0	1.9		100	10YR8/2灰白色	
153	土師器	皿・白大	土坑127	10.8	2.6		65	10YR8/1灰白色	
154	土師器	皿・白大	土坑127	12.2	2.9		80	10YR8/2灰白色	
155	土師器	皿・白大	土坑127	12.3	2.9		50	10YR8/2灰白色	
156	輸入陶磁器 白磁	皿	土坑127	12.6	2.4	5.0	100	釉5Y6/2灰オリーブ色	
157	輸入陶磁器 青磁	杯	土坑127	13.0	3.7	5.7	100	釉明緑色	
158	土師器	皿・小	土坑502	7.9	1.5		70	10YR7/3にぶい黄橙色	
159	土師器	皿・小	土坑502	8.0	1.3		50	2.5Y7/3浅黄色	
160	土師器	皿・小	土坑502	8.2	1.6		60	2.5Y7/3浅黄色	
161	土師器	皿・小	土坑502	8.4	1.7		60	7.5YR7/4にぶい橙色	
162	土師器	皿・白小	土坑502	7.4	2.1		90	2.5Y8/2灰白色	
163	土師器	皿・白小	土坑502	7.6	2.0		100	10YR8/2灰白色	灯明皿

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
164	土師器	皿・白大	土坑502	12.1	3.1		50	2.5Y8/2灰白色	
165	土師器	皿・白大	土坑502	12.2	3.2		90	2.5Y8/2灰白色	
166	白色土器	杯	土坑502	7.5	2.1		80	5Y8/2灰白色 クサリレキ少量	
167	白色土器	杯	土坑502	7.5	2.1		80	2.5Y8/3淡黄色 クサリレキ少量	
168	土師器	皿・赤小	土坑108	8.0	1.5		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
169	土師器	皿・赤小	土坑108	7.8	1.3		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
170	土師器	皿・赤小	土坑108	7.6	1.5		70	10YR7/2にぶい黄橙色	
171	土師器	皿・赤小	土坑108	8.4	1.5		100	10YR8/2灰白色	
172	土師器	皿・赤小	土坑108	8.2	1.6		100	10YR7/2にぶい黄橙色	
173	土師器	皿・赤小	土坑108	8.2	1.7		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
174	土師器	皿・赤小	土坑108	8.5	1.6		90	10YR7/2にぶい黄橙色	
175	土師器	皿・赤小	土坑108	8.0	1.4		80	10YR7/2にぶい黄橙色	
176	土師器	皿・赤小	土坑108	8.6	1.6		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
177	土師器	皿・赤小	土坑108	8.6	1.7		100	10YR7/2にぶい黄橙色	
178	土師器	皿・赤小	土坑108	8.2	1.5		90	10YR7/3にぶい黄橙色	
179	土師器	皿・赤小	土坑108	8.0	1.3		70	10YR8/2灰白色	
180	土師器	皿・赤大	土坑108	11.0	2.0		100	7.5YR7/3にぶい橙色 0.5~2mmの石英・長石少量	
181	土師器	皿・赤大	土坑108	12.0	2.0		60	10YR7/3にぶい黄橙色	
182	土師器	皿・赤大	土坑108	12.0	2.0		50	10YR8/3浅黄橙色	
183	土師器	皿・赤大	土坑108	12.0	2.1		35	2.5Y7/2灰黄色	
184	土師器	皿・赤大	土坑108	11.9	2.1		50	10YR7/3にぶい黄橙色	
185	土師器	皿・赤大	土坑108	12.0	2.0		70	10YR8/2灰白色	
186	土師器	皿・赤大	土坑108	12.4	2.2		100	10YR8/3浅黄橙色 0.5~3mmの石英・長石少量	
187	土師器	皿・赤大	土坑108	12.0	2.1		90	10YR8/3浅黄橙色	
188	土師器	皿・赤大	土坑108	11.6	2.2		80	7.5YR7/3にぶい橙色	
189	土師器	皿・赤大	土坑108	11.9	2.1		50	10YR7/3にぶい黄橙色	
190	土師器	皿・赤大	土坑108	12.0	2.4		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
191	土師器	皿・赤大	土坑108	11.6	2.2		90	10YR8/2灰白色	
192	土師器	皿・赤大	土坑108	11.8	2.2		80	2.5Y7/2灰黄色	
193	土師器	皿・赤大	土坑108	12.2	2.2		50	10YR8/3浅黄橙色	
194	土師器	皿・白小	土坑108	7.6	2.1		100	2.5Y8/2灰白色	
195	土師器	皿・白大	土坑108	12.0	3.3		100	2.5Y8/2灰白色	
196	土師器	皿・白大	土坑108	12.8	3.2		100	2.5Y8/2灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
197	土師器	皿・白大	土坑108	13.0	3.3		40	2.5Y8/2灰白色	
198	土師器	皿・白大	土坑108	12.4			口縁70	2.5Y8/2灰白色	
199	土師器	皿・白大	土坑108	13.0	3.2		100	2.5Y8/1灰白色	
200	土師器	深鉢	土坑108	13.6	13.8	5.0	50	2.5Y7/2灰黄色	
201	輸入陶磁器 白磁	皿	土坑108	11.2			口縁25	釉10Y8/1灰白色	
202	輸入陶磁器 白磁	皿	土坑108	11.2	3.5	6.6	90	釉5GY8/1灰白色	
203	輸入陶磁器 青磁	椀	土坑108	8.0	4.6	3.1	100	釉7.5Y4/1灰色、高台2.5YR7/8橙色	
204	輸入陶磁器 青磁	椀	土坑108	11.6	5.4	3.6	80	釉5GY7/1明緑灰色	
205	土師器	皿・赤小	土坑538	7.6	1.4		100	10YR7/2にぶい黄橙色 1～3mmの石英・長石・チャート少量、金雲母少量	
206	土師器	皿・赤小	土坑538	7.6	1.4		70	10YR7/3にぶい黄橙色 1～5mmのチャート多量、金雲母多量、クサリレキ少量	
207	土師器	皿・赤小	土坑538	7.7	1.3		100	10YR7/3にぶい黄橙色 クサリレキ・金雲母少量	
208	土師器	皿・赤小	土坑538	7.8	1.4		60	2.5Y8/3淡黄色	
209	土師器	皿・赤小	土坑538	7.8	1.6		100	2.5Y8/3淡黄色	
210	土師器	皿・赤小	土坑538	7.9	1.3		50	2.5Y8/3淡黄色 1～2mmの石英・長石少量、金雲母少量	灯明皿
211	土師器	皿・赤小	土坑538	8.0	1.4		80	2.5Y7/3浅黄色 1～2mmの石英・長石少量、金雲母少量	
212	土師器	皿・赤小	土坑538	8.0	1.6		85	10YR7/4にぶい黄橙色 1～3cmの石英・長石少量、金雲母多量	
213	土師器	皿・赤小	土坑538	8.0	1.4		100	10YR7/3にぶい黄橙色 1～2mmの石英・長石少量、金雲母多量	
214	土師器	皿・赤小	土坑538	8.0	1.4		100	2.5Y8/3淡黄色	
215	土師器	皿・赤小	土坑538	8.1	1.4		100	2.5Y8/3淡黄色	
216	土師器	皿・赤小	土坑538	8.1	1.4		80	10YR8/2灰白色 1～2mmの石英・長石・チャート少量、金雲母少量	
217	土師器	皿・赤小	土坑538	8.2	1.5		60	2.5Y8/3淡黄色 クサリレキ・金雲母少量	
218	土師器	皿・赤小	土坑538	8.2	1.3		100	2.5Y8/3淡黄色 1～2mmのチャート少量、クサリレキ少量	
219	土師器	皿・赤小	土坑538	8.2	1.5		70	2.5Y7/2灰黄色 0.5～2mmの石英・長石多量、金雲母少量	
220	土師器	皿・赤小	土坑538	8.4	1.4		100	2.5Y8/2灰白色 1～2mmの石英・長石少量	
221	土師器	皿・赤小	土坑538	8.4	1.3		100	2.5Y7/2灰黄色 クサリレキ・金雲母少量	
222	土師器	皿・赤小	土坑538	8.4	1.2		100	10YR7/3にぶい黄橙色 1～2mmの石英・長石多量、クサリレキ・金雲母多量	
223	土師器	皿・赤大	土坑538	11.4	2.1		70	2.5Y7/3浅黄色 1～3mmのチャート少量、金雲母・クサリレキ少量	
224	土師器	皿・赤大	土坑538	11.3	2.0		50	2.5Y8/3淡黄色 0.5～1mmのチャート少量、金雲母・クサリレキ少量	
225	土師器	皿・赤大	土坑538	11.7	2.5		90	2.5Y7/2灰黄色	
226	土師器	皿・赤大	土坑538	11.8	2.1		95	10YR8/3浅黄橙色 クサリレキ少量	
227	土師器	皿・赤大	土坑538	11.9	2.5		100	7.5YR7/4にぶい橙色 1～2mmの石英・長石少量、クサリレキ多量、金雲母少量	
228	土師器	皿・赤大	土坑538	12.0	2.2		80	10YR7/4にぶい黄橙色 1～3mmのチャート少量、クサリレキ多量	
229	土師器	皿・赤大	土坑538	12.0	2.4		100	10YR8/3浅黄橙色 1～2mmの石英・長石少量、金雲母少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
230	土師器	皿・赤大	土坑538	12.0	2.1		100	10YR8/3浅黄橙色 1~2mmの石英・長石多量、金雲母少量、クサリレキ微量	
231	土師器	皿・赤大	土坑538	12.0	2.5		100	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5~1mmの石英・長石少量、金雲母・クサリレキ少量	
232	土師器	皿・赤大	土坑538	12.1	2.1		100	10YR8/3浅黄橙色 1~3mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ微量	
233	土師器	皿・赤大	土坑538	12.2	2.0		95	10YR8/4浅黄橙色 クサリレキ多量	
234	土師器	皿・赤大	土坑538	12.2	2.2		80	10YR8/3浅黄橙色 1~3mmの石英・長石少量、クサリレキ少量	
235	土師器	皿・赤大	土坑538	12.2	2.4		100	7.5YR8/4浅黄橙色 1~3mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ多量	
236	土師器	皿・赤大	土坑538	12.4	2.2		100	7.5YR7/4にぶい橙色 1~3mmのチャート少量、金雲母・クサリレキ多量	灯明皿
237	土師器	皿・赤大	土坑538	12.7	2.1		70	2.5Y8/3淡黄色	
238	土師器	皿・白 コースター	土坑538	5.3	0.9		90	2.5Y8/2灰白色 1~3mmの石英・長石少量	
239	土師器	皿・白大	土坑538	10.8	2.9		100	2.5Y8/1灰白色	
240	土師器	皿・白大	土坑538	12.4	3.1		100	2.5Y8/1灰白色	
241	土師器	皿・白大	土坑538	12.7	3.3		100	2.5Y8/2灰白色	
242	土師器	皿・白大	土坑538	12.8	3.1		100	2.5Y8/1灰白色	
243	土師器	皿・赤小	土坑426	8.0	1.4		50	10YR7/3にぶい黄橙色 クサリレキ少量	
244	土師器	皿・赤小	土坑426	8.0	1.5		80	10YR7/2にぶい黄橙色 金雲母少量	
245	土師器	皿・赤小	土坑426	8.0	1.6		80	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5~2mmの石英・長石多量、クサリレキ多量	
246	土師器	皿・赤小	土坑426	8.1	1.7		100	10YR7/2にぶい黄橙色 1~2mmの石英・長石少量	
247	土師器	皿・赤小	土坑426	8.2	1.6		80	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5~2mmの石英・長石・チャート少量	
248	土師器	皿・赤大	土坑426	11.8	2.0		85	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5~2mmの石英・長石少量、金雲母少量	
249	土師器	皿・赤大	土坑426	12.0	2.2		90	7.5YR7/3にぶい橙色	
250	土師器	皿・赤大	土坑426	12.2	2.1		100	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5~1mmの石英・長石少量	
251	土師器	皿・赤大	土坑426	12.1	2.1		100	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5~1mmの石英・長石少量、金雲母少量	
252	土師器	皿・赤大	土坑426	12.2	2.4		100	10YR7/4にぶい黄橙色 0.5~2mmの石英・長石少量、クサリレキ少量	
253	土師器	皿・赤大	土坑426	12.2	2.2		100	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5~5mmの石英・長石多量、クサリレキ・金雲母少量	
254	土師器	皿・赤大	土坑426	12.4	2.1		100	10YR7/2にぶい黄橙色 1~2mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
255	土師器	皿・赤大	土坑426	12.8	2.3		100	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5~2mmの石英・長石少量、金雲母少量	
256	土師器	皿・赤大	土坑426	12.2	2.3		90	10YR8/3浅黄橙色 1~4mmの石英・長石量、クサリレキ多量	
257	土師器	皿・白大	土坑426	10.8	2.5		100	10YR8/2灰白色	
258	土師器	皿・白大	土坑426	10.8	2.9		100	10YR8/2灰白色	
259	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 370	7.8	1.7		100	10YR7/4にぶい黄橙色 0.5~2mmのチャート少量	
260	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 370	8.0	1.5		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
261	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 370	8.0	1.5		70	10YR7/3にぶい黄橙色	
262	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 370	8.2	1.6		80	7.5YR7/3にぶい橙色 クサリレキ少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
263	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 370	8.4	1.4		80	10YR7/3にぶい黄橙色 クサリレキ少量	
264	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 370	8.4	1.5		100	2.7Y7/3浅黄色 0.5～1mmの石英・長石・ チャート少量、クサリレキ少量	
265	土師器	皿・赤小	地下式倉庫 370	8.8	1.6		100	2.5Y8/2灰白色	
266	土師器	皿・赤大	地下式倉庫 370	12.0	2.0		40	10YR7/3にぶい黄橙色クサリレキ少量	
267	土師器	皿・赤大	地下式倉庫 370	12.8	2.3		20	10YR7/2にぶい黄橙色	
268	土師器	皿・赤大	地下式倉庫 370	12.9	1.5		50	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5～1mmの石英・ 長石・チャート少量、クサリレキ少量	
269	土師器	皿・コース ター	地下式倉庫 370	4.0	0.8		100	10YR8/2灰白色	
270	土師器	皿・コース ター	地下式倉庫 370	4.3	0.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
271	土師器	皿・コース ター	地下式倉庫 370	5.0	0.9		100	10YR8/2灰白色	
272	土師器	皿・コース ター	地下式倉庫 370	5.0	0.8		100	2.5Y8/3浅黄色	
273	土師器	皿・白小	地下式倉庫 370	7.3	2.0		50	10YR8/2灰白色 0.5～2mmのチャート少量	
274	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	10.8	2.8		100	2.5Y8/2灰白色 0.5～1mmの石英・長石・ チャート少量	
275	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	11.0	2.8		100	2.5Y8/2灰白色	
276	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	11.0	2.8		100	2.5Y8/2灰白色	
277	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	11.2	3.0		40	10YR8/2灰白色 0.5～1mmのチャート少量	
278	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	12.0	3.0		100	10YR8/2灰白色 0.5～3mmの石英・長石・ チャート少量	
279	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	12.6	3.5		100	10YR8/2灰白色	
280	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	12.6	3.2		70	2.5Y8/2灰白色 0.5～2mmの石英・長石少 量	
281	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	12.6	2.9		50	2.5Y8/2灰白色	
282	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	12.8	2.9		100	10YR8/2灰白色 1～10mmの石英・長石多 量	
283	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	12.8	3.3		90	10YR8/2灰白色 1～3mmの石英・長石・ チャート少量	
284	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	12.9	3.0		50	2.5Y8/2灰白色 1～5mmの石英・長石微量	
285	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	13.0	2.9		50	2.5Y8/2灰白色	
286	土師器	皿・白大	地下式倉庫 370	13.2	3.2		80	10YR8/2灰白色 0.5～1mmの石英・長石微 量	
287	瓦器	皿	地下式倉庫 370	10.8				口縁20 N3/0暗灰色	
288	輸入陶磁器 白磁	合子蓋	地下式倉庫 370	9.0			25	釉5GY8/1灰白色	
289	輸入陶磁器 白磁	合子	地下式倉庫 370	6.0	2.1		25	釉10Y8/1灰白色	
290	輸入陶磁器 白磁	小皿	地下式倉庫 370			2.0	25	釉5GY7/1明オリーブ灰色	
291	輸入陶磁器 白磁	皿	地下式倉庫 370	10.6	2.7	4.6	10	釉2.5GY7/1明オリーブ灰色	
292	輸入陶磁器 白磁	椀	地下式倉庫 370	12.0			10	釉7.5Y7/1灰白色	
293	輸入陶磁器 青磁	皿	地下式倉庫 370	10.6	1.8		20	釉2.5GY7/1明オリーブ灰色	
294	焼締陶器 常滑	甕	埋甕55	55.7				口縁80 7.5YR4/3褐色 1～5mmの石英・長石・ チャート少量	口縁の歪み大きい。底 部は底より30cm残存。 縁帯幅は3.8cm。

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
295	焼締陶器 常滑	甕	埋甕57	48.3			口縁60	N3/0暗灰色 0.5~3.5mmの石英・長石・チャート少量	肩部にタタキあり。底部は底より24cm残存。縁帯幅は3.5cm。
296	焼締陶器 常滑	甕	埋甕115	52.8		23.2	60	5Y3/6明赤褐色 1~4mmの石英・長石・チャート少量	底部は内側から4ヶ所穿孔。縁帯幅は2.3cm。
297	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕58				破片	5YR3/3暗赤褐色	縁帯幅は3.2cm。底部は底より22cm残存。底部穿孔1ヶ所。
298	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕59				破片	2.5Y4/2暗灰黄色	縁帯幅は2.0cm。底部は底より高さ22cm残存。底部穿孔1ヶ所。
299	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕118				破片	5YR4/4にぶい赤褐色	縁帯幅は3.0cm。
300	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕237				破片	10YR3/3暗赤褐色	単独埋甕。縁帯幅は2.6cm。底部は底より高さ20cm残存。
301	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕118				破片	2.5YR4/2灰赤色	縁帯幅は2.7cm。底部は底より高さ23cm残存。底部穿孔3ヶ所。
302	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕300				破片	5YR3/4暗赤褐色	縁帯幅は2.8cm。底部は底より高さ25cm残存。
303	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕387				破片	2.5Y4/3にぶい赤褐色	縁帯幅は4.2cm。底部は底より高さ29cm残存。底部穿孔は3ヶ所。
304	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕388				破片	5YR3/4暗赤褐色	縁帯幅は4.0cm。底部は底より高さ15cm残存。
305	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕390				破片	2.5YR3/4暗赤褐色	縁帯幅は3.0cm。底部は底より高さ36cm残存。
306	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕392				破片	5YR3/2暗赤褐色	縁帯幅は1.7cm。底部は底より高さ17cm残存。
307	焼締陶器 常滑	甕口縁	埋甕394				破片	2.5YR4/3にぶい赤褐色	縁帯幅は3.2cm。
308	土師器	皿・赤小	埋甕55	7.3	1.5		60	7.5YR8/4浅黄橙色 クサリレキ少量	
309	土師器	皿・赤小	埋甕55	7.8	1.6		80	5YR6/6橙色 クサリレキ多量	
310	土師器	皿・赤小	埋甕58	7.6	1.5		25	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ多量	
311	土師器	皿・赤小	埋甕59	7.8	1.5		90	7.5YR7/4にぶい橙色 1~2mmの石英・長石少量、クサリレキ少量	
312	土師器	皿・赤小	埋甕300	7.6	1.8		70	10YR6/2灰黄褐色	
313	土師器	皿・赤小	埋甕300	7.6	1.3		25	10YR7/3にぶい黄橙色	
314	土師器	皿・赤小	埋甕300	8.0	1.6		100	7.5YR7/2明褐灰色 クサリレキ多量	
315	土師器	皿・赤小	埋甕300	8.2	1.8		80	10YR5/2灰黄褐色 クサリレキ多量	
316	土師器	皿・赤小	埋甕390	7.8	1.7		25	5YR6/6橙色 クサリレキ多量	
317	土師器	皿・赤小	埋甕390	7.8	1.7		70	7.5YR7/4にぶい橙色	
318	土師器	皿・赤小	埋甕390	7.8	1.3		70	5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ多量	
319	土師器	皿・赤小	埋甕390	8.0	1.2		50	7.5YR7/6橙色 0.5~2mmの石英・長石・チャート少量	
320	土師器	皿・赤小	埋甕390	8.0	1.5		40	10YR8/4浅黄褐色	
321	土師器	皿・赤小	埋甕390	8.0	1.6		50	2.5Y8/2灰白色	
322	土師器	皿・赤小	埋甕390	8.1	1.4		100	7.5YR7/6橙色 0.5~2mmの石英・長石・チャート少量	
323	土師器	皿・赤小	埋甕390	8.4	1.3		30	7.5YR7/3にぶい橙色	
324	土師器	皿・赤大	埋甕300	10.0	2.2		45	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ多量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
325	土師器	皿・赤大	埋喪56	11.5	2.1		70	10YR8/3浅黄橙色 1～5mmの石英・長石 少量 クサリレキ少量	
326	土師器	皿・赤大	埋喪57	11.0	2.0		75	7.5YR8/4浅黄橙色 1～2mmの石英・長石 少量、クサリレキ・金雲母多量	
327	土師器	皿・赤大	埋喪57	10.8	2.0		50	7.5YR7/6橙色 クサリレキ多量	
328	土師器	皿・赤大	埋喪58	11.0	1.9		25	7.5YR5/2灰褐色 クサリレキ多量	
329	土師器	皿・白小	埋喪54	7.0	1.8		40	10YR8/2灰白色 1～2mmの石英・長石・ チャート少量	
330	土師器	皿・白小	埋喪55	6.4	1.8		90	10YR8/2灰白色	
331	土師器	皿・白小	埋喪300	6.6	1.9		100	10YR8/2灰白色 1～7mmのチャート少量	
332	土師器	皿・白へそ	埋喪390	6.2	2.0		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
333	土師器	皿・白大	埋喪54	12.2	3.0		40	10YR8/1灰白色	
334	土師器	皿・白大	埋喪56	12.0	2.9		25	10YR8/1灰白色 1～2mmのチャート少量	
335	土師器	皿・白大	埋喪56	12.0	2.7		20	10YR8/1灰白色	
336	土師器	皿・白大	埋喪59	12.0	3.0		40	10YR8/1灰白色	
337	土師器	皿・白大	埋喪57	12.0	3.0		40	10YR8/1灰白色	
338	土師器	皿・白大	埋喪57	12.0	3.0		100	10YR8/1灰白色 1～5mmの石英・長石・ チャート少量	
339	土師器	皿・白大	埋喪58	11.8	2.6		90	7.5YR8/1灰白色	
340	土師器	皿・白大	埋喪58	12.6	2.9		50	7.5YR8/1灰白色	
341	土師器	皿・白大	埋喪300	11.6	3.1		50	2.5Y8/2灰白色	
342	土師器	皿・白大	埋喪300	11.8	3.0		100	2.5Y8/2灰白色	
343	土師器	皿・白大	埋喪300	12.4	3.2		40	2.5Y8/2灰白色	
344	土師器	皿・白大	埋喪392	11.8	3.0		80	10YR8/1灰白色	
345	須恵器	鉢	埋喪115	29.0			口縁15	N5/0灰色	
346	瓦器	鉢	埋喪54	42.0			口縁20	2.5Y4/1黄灰色	
347	輸入陶磁器 白磁	椀	埋喪390	11.5			10	釉10Y8/1灰白色	
348	輸入陶磁器 白磁	椀	埋喪55			6.2	15	釉5Y8/1灰白色	
349	輸入陶磁器 青白磁	小皿	埋喪390	5.6	1.0	2.0	25	10GY8/1明緑灰色	
350	輸入陶磁器	天目茶椀	埋喪394	10.2	4.8	3.6	20	胎土N3/0灰色、上葉7.5YR5/4にぶい褐色	
351	土師器	皿・赤小	土坑20	7.2	1.9		90	7.5YR7/4にぶい橙色 1～2mmの石英・長石 少量	
352	土師器	皿・赤小	土坑20	7.4	1.3		100	7.5YR7/3にぶい黄橙色	
353	土師器	皿・赤小	土坑20	7.6	1.7		80	7.5YR7/3にぶい黄橙色	
354	土師器	皿・赤小	土坑20	7.6	1.8		90	10YR7/2にぶい黄橙色 0.5～1mmの石英・ 長石少量	
355	土師器	皿・赤小	土坑20	7.6	1.6		100	10YR7/4にぶい黄橙色 0.5～2mmの石英・ 長石少量	
356	土師器	皿・赤小	土坑20	7.6	1.5		80	10YR6/2灰黄褐色	
357	土師器	皿・赤小	土坑20	7.8	1.6		100	10YR8/2灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
358	土師器	皿・赤小	土坑20	8.0	1.5		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
359	土師器	皿・赤小	土坑20	8.0	1.5		100	10YR7/2にぶい黄橙色	
360	土師器	皿・赤小	土坑20	8.0	1.6		100	10YR7/3にぶい黄橙色 クサリレキ多量	
361	土師器	皿・赤小	土坑20	8.0	1.5		65	10YR7/2にぶい黄橙色 1～5mmの石英・長石少量	
362	土師器	皿・赤小	土坑20	8.0	1.7		100	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5～2mmのチャート少量、クサリレキ少量	
363	土師器	皿・赤小	土坑20	8.0	1.8		100	10YR8/2灰白色 1～3mmのチャート少量、クサリレキ少量	
364	土師器	皿・赤小	土坑20	8.2	1.7		100	10YR7/3にぶい黄橙色 1～3mmのチャート少量	
365	土師器	皿・赤小	土坑20	8.2	1.9		100	10YR7/2にぶい黄橙色	
366	土師器	皿・赤大	土坑20	10.4	1.9		100	10YR8/2灰白色	
367	土師器	皿・赤大	土坑20	10.4	2.0		90	7.5YR8/4浅黄橙色 0.5～2mmの石英・長石多量、クサリレキ多量	
368	土師器	皿・赤大	土坑20	10.6	2.0		100	10YR7/2にぶい黄橙色 0.5～2mmのチャート・石英・長石少量、クサリレキ少量	
369	土師器	皿・赤大	土坑20	10.6	2.1		90	10YR7/2にぶい黄橙色 1～2mmの石英・長石少量	
370	土師器	皿・赤大	土坑20	10.6	2.4		100	10YR7/2にぶい黄橙色 1～3mmの石英・長石少量	
371	土師器	皿・赤大	土坑20	10.8	2.0		100	10YR7/2にぶい黄橙色	
372	土師器	皿・赤大	土坑20	10.8	2.0		100	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5～2mmの石英・長石多量、クサリレキ多量	
373	土師器	皿・赤大	土坑20	11.1	2.0		100	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5～2mmの石英・長石少量、クサリレキ多量	
374	土師器	皿・赤大	土坑20	10.8	2.1		100		
375	土師器	皿・赤大	土坑20	10.9	1.8		90	7.5YR7/3にぶい橙色 1～2mmのチャート・石英・長石やや多量、クサリレキ少量	
376	土師器	皿・赤大	土坑20	10.9	2.2		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
377	土師器	皿・赤大	土坑20	11.0	2.1		90	10YR7/2にぶい黄橙色 1～2mmの石英・長石少量	
378	土師器	皿・赤大	土坑20	11.0	2.2		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
379	土師器	皿・赤大	土坑20	11.1	2.0		80	5YR7/6橙色 1～3mmのチャート多量、0.5～2mmの石英・長石少量、クサリレキ多量	
380	土師器	皿・赤大	土坑20	11.2	2.0		90	10YR7/3にぶい黄橙色 1～2mmの石英・長石少量、クサリレキ多量	
381	土師器	皿・赤大	土坑20	11.2	2.1		100	10YR7/4にぶい黄橙色 0.5～3mmの石英・長石少量、クサリレキ少量	
382	土師器	皿・赤大	土坑20	11.2	2.1		100	10YR7/2にぶい黄橙色 1～2mmの石英・長石やや多量	
383	土師器	皿・赤大	土坑20	11.2	2.2		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
384	土師器	皿・赤大	土坑20	11.3	2.2		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
385	土師器	皿・赤大	土坑20	12.0	2.8		100	10YR7/2にぶい黄橙色 0.5～2mmのチャート少量	
386	土師器	皿・白小	土坑20	6.0	1.9		100	10YR8/1灰白色 1～2mmのチャート少量	
387	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.1	1.8		100	10YR8/2灰白色	
388	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.2	1.9		90	10YR8/2灰白色	
389	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.2	1.7		100	10YR8/1灰白色	
390	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.4	1.8		100	10YR8/1灰白色 5mmのチャート少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
391	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.4	1.9		100	10YR8/2灰白色	
392	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.6	1.8		100	10YR8/1灰白色	
393	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.6	1.9		100	10YR8/1灰白色	
394	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.6	1.8		100	10YR8/2灰白色	
395	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.6	1.9		100	10YR8/2灰白色 1～3mmのチャート少量	
396	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.6	1.8		100	10YR8/2灰白色	
397	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.6	1.8		100	10YR8/2灰白色	
398	土師器	皿・白へそ	土坑20	6.8	1.8		100	10YR8/2灰白色 1～2mmのチャート少量	
399	土師器	皿・白へそ	土坑20	7.0	1.7		100	10YR8/1灰白色	
400	土師器	皿・白へそ	土坑20	7.0	1.9		100	10YR8/1灰白色	
401	土師器	皿・白へそ	土坑20	7.1	1.9		100	10YR8/2灰白色	
402	土師器	皿・白中	土坑20	9.2	1.6		90	10YR8/1灰白色	灯明皿
403	土師器	皿・白中	土坑20	9.6	1.8		100	10YR8/2灰白色 0.5～5mmの石英・長石少量	灯明皿
404	土師器	皿・白大	土坑20	11.2	2.9		100	2.5Y8/1灰白色 1～3mmの石英・長石少量	
405	土師器	皿・白大	土坑20	11.2	2.8		100	10YR8/2灰白色	
406	土師器	皿・白大	土坑20	11.2	2.8		100	10YR8/1灰白色 1～5mmのチャート少量	
407	土師器	皿・白大	土坑20	11.3	2.8		60	10YR8/2灰白色	
408	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	3.0		100	10YR8/1灰白色	
409	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	3.0		100	10YR8/2灰白色	
410	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	2.8		100	10YR8/2灰白色	
411	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	2.9		90	10YR8/1灰白色 0.5～2mmのチャート少量	
412	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	2.9		100	10YR8/2灰白色 1～3mmのチャート少量	
413	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	2.9		90	10YR8/1灰白色 1～5mmの石英・長石少量	
414	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	2.9		100	10YR8/2灰白色	
415	土師器	皿・白大	土坑20	11.4	2.7		90	10YR7/2にぶい黄橙色	二次焼成を受ける。 底部に煤付着。
416	土師器	皿・白大	土坑20	11.6	3.0		100	10YR8/灰白色 1～5mmのチャート少量	
417	土師器	皿・白大	土坑20	11.6	3.0		100	10YR8/1灰白色	
418	土師器	皿・白大	土坑20	11.6	3.0		100	10YR6/2灰黄褐色	
419	土師器	皿・白大	土坑20	11.6	3.2		80	10YR8/2灰白色	
420	土師器	皿・白大	土坑20	11.6	2.7		90	10YR8/2灰白色	
421	土師器	皿・白大	土坑20	11.6	3.0		100	10YR8/1灰白色 1～3mmの石英・長石少量	
422	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	2.7		100	10YR8/2灰白色	
423	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	3.1		90	10YR8/1灰白色 1～2mmのチャート少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
424	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	3.2		100	10YR8/1灰白色	
425	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	3.0		100	10YR8/2灰白色	
426	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	2.9		90	10YR8/2灰白色	
427	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	2.7		100	10YR8/1灰白色 1～3mmの石英・長石少量	
428	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	3.1		80	10YR8/1灰白色	
429	土師器	皿・白大	土坑20	11.8	3.0		100	10YR8/1灰白色	
430	土師器	皿・白大	土坑20	12.0	3.1		100	10YR8/2灰白色	
431	土師器	皿・白大	土坑20	12.0	2.9		100	10YR8/2灰白色	
432	土師器	皿・白大	土坑20	12.0	3.3		90	10YR8/2灰白色	
433	輸入陶磁器 白磁	皿	土坑20	10.0	3.4		100	釉5GY8/1灰白色	
434	瓦器	ミニチュア 羽釜	土坑20	4.4			80	N3/0灰色	
435	土師器	皿・赤小	土坑79	7.3	1.7		100	10YR8/2灰白色	
436	土師器	皿・赤小	土坑79	7.3	1.7		70	2.5Y8/2灰白色	
437	土師器	皿・赤小	土坑79	7.4	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色 クサリレキ微量	
438	土師器	皿・赤小	土坑79	7.4	1.5		100	10YR8/3浅黄橙色	
439	土師器	皿・赤小	土坑79	7.4	1.7		100	2.5Y8/2灰白色 0.5～2mmの石英・長石多量	
440	土師器	皿・赤小	土坑79	7.4	1.9		100	2.5Y8/3淡黄色 1～5mmの石英・長石少量	
441	土師器	皿・赤小	土坑79	7.5	1.5		60	10YR8/3浅黄橙色	
442	土師器	皿・赤小	土坑79	7.5	1.7		80	2.5Y8/2灰白色	
443	土師器	皿・赤小	土坑79	7.5	1.7		100	2.5Y8/3淡黄色	
444	土師器	皿・赤小	土坑79	7.5	1.5		50	10YR8/3浅黄橙色	
445	土師器	皿・赤小	土坑79	7.6	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
446	土師器	皿・赤小	土坑79	7.6	1.6		100	7.5YR8/3浅黄橙色	灯明皿
447	土師器	皿・赤小	土坑79	7.6	1.8		100	2.5Y8/2灰白色	
448	土師器	皿・赤小	土坑79	7.6	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
449	土師器	皿・赤小	土坑79	7.6	1.8		80	2.5Y8/2灰白色	
450	土師器	皿・赤小	土坑79	7.7	1.7		100	2.5Y8/3淡黄色	
451	土師器	皿・赤小	土坑79	7.8	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
452	土師器	皿・赤小	土坑79	7.8	2.0		90	2.5Y7/3浅黄色 0.5～1mmの石英・長石少量	
453	土師器	皿・赤小	土坑79	8.0	1.8		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
454	土師器	皿・赤小	土坑79	8.0	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色 1～5mmの石英・長石少量	
455	土師器	皿・赤小	土坑79	8.0	1.8		60	2.5Y8/3淡黄色	
456	土師器	皿・赤小	土坑79	8.0	1.8		60	10YR8/3浅黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
457	土師器	皿・赤小	土坑79	8.0	1.7		100	2.5Y8/2灰白色	
458	土師器	皿・赤小	土坑79	8.2	1.7		90	2.5Y8/3淡黄色	
459	土師器	皿・赤へそ	土坑79	9.0	1.9		50	2.5Y8/2灰白色	
460	土師器	皿・赤大	土坑79	9.7	2.0		80	10YR8/1灰白色 0.5~4mmの石英・長石・チャート少量	
461	土師器	皿・赤大	土坑79	10.0	2.5		100	10YR8/2灰白色	
462	土師器	皿・赤大	土坑79	10.0	2.1		100	2.5Y8/3淡黄色 0.5~3mmの石英・長石少量	
463	土師器	皿・赤大	土坑79	10.0	2.2		100	2.5Y8/3淡黄色	
464	土師器	皿・赤大	土坑79	10.2	2.3		100	2.5Y8/2灰白色 0.5~2mmの石英・長石少量、金雲母少量	
465	土師器	皿・赤大	土坑79	10.3	2.2		100	10YR8/3浅黄橙色	
466	土師器	皿・赤大	土坑79	10.4	2.0		100	10YR8/3浅黄橙色 0.5~3mmの石英・長石少量	
467	土師器	皿・赤大	土坑79	10.4	2.2		100	7.5YR8/3浅黄橙色 0.5~2.5mmの石英・長石・チャート多量、クサリレキ少量	
468	土師器	皿・赤大	土坑79	10.5	2.2		80	2.5Y8/3淡黄色	
469	土師器	皿・赤大	土坑79	10.6	2.2		100	2.5Y8/3淡黄色 0.5~1.5の石英・長石・チャート少量	
470	土師器	皿・赤大	土坑79	10.6	2.1		100	2.5Y8/3淡黄色	
471	土師器	皿・赤大	土坑79	10.6	2.3		100	10YR8/3浅黄橙色	
472	土師器	皿・赤大	土坑79	10.6	2.1		100	2.5Y8/3淡黄色	
473	土師器	皿・赤大	土坑79	10.6	2.0		25	2.5Y7/2灰黄色	
474	土師器	皿・赤大	土坑79	10.6	2.0		50	10YR8/3浅黄橙色 0.5~5mmの石英・長石・チャート多量	
475	土師器	皿・赤大	土坑79	10.6	2.1		100	2.5Y8/3淡黄色	
476	土師器	皿・赤大	土坑79	10.7	2.2		100	10YR8/1灰白色 0.5~2mmの石英・長石・チャート多量	
477	土師器	皿・赤大	土坑79	10.8	2.6		100	10YR8/2灰白色 1~5mmの石英・長石・チャート少量	
478	土師器	皿・赤大	土坑79	10.8	2.5		100	2.5Y8/2灰白色	
479	土師器	皿・赤大	土坑79	10.8	2.3		100	2.5Y7/2灰黄色	
480	土師器	皿・赤大	土坑79	10.8	2.3		100	2.5Y8/3淡黄色	
481	土師器	皿・赤大	土坑79	10.9	2.2		90	10YR8/3浅黄橙色	
482	土師器	皿・赤大	土坑79	11.0	2.4		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
483	土師器	皿・赤大	土坑79	11.0	2.2		95	7.5YR8/4浅黄橙色	
484	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.2	1.8		100	7.5YR8/2灰白色 0.5~1mmのチャート少量	
485	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.3	2.0		100	2.5Y8/2灰白色	
486	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.4	1.9		100	2.5Y8/2灰白色	
487	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.4	1.8		100	2.5Y8/2灰白色	
488	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.4	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
489	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.6	1.9		100	7.5YR8/3浅黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
490	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.6	1.9		100	2.5Y8/2灰白色	
491	土師器	皿・白へそ	土坑79	6.8	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
492	土師器	皿・白へそ	土坑79	7.0	1.9		100	7.5YR8/2灰白色 0.5~1.5mmの石英・長石 少量	
493	土師器	皿・白小	土坑79	7.6	2.2		60	2.5Y8/2灰白色	
494	土師器	皿・白小	土坑79	8.8	2.1		60	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
495	土師器	皿・白小	土坑79	9.2	2.0		100	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
496	土師器	皿・白大	土坑79	11.0	3.1		100	2.5Y8/2灰白色	
497	土師器	皿・白大	土坑79	11.0	2.9		100	2.5Y8/2灰白色 0.5~1mmの石英・長石・ チャート少量	
498	土師器	皿・白大	土坑79	11.0	2.9		100	2.5Y8/2灰白色	
499	土師器	皿・白大	土坑79	11.0	3.4		100	10YR8/2灰白色	
500	土師器	皿・白大	土坑79	11.0	3.3		100	2.5Y8/1灰白色	
501	土師器	皿・白大	土坑79	11.2	3.3		100	2.5Y8/3淡黄色 0.5~2mmのチャート少量	
502	土師器	皿・白大	土坑79	11.3	3.0		100	2.5Y8/2灰白色 0.5~2mmの石英・長石少 量	
503	土師器	皿・白大	土坑79	11.4	3.2		80	10YR8/3浅黄橙色	
504	土師器	皿・白大	土坑79	11.4	3.2		80	10YR8/2灰白色	
505	土師器	皿・白大	土坑79	11.4	3.3		100	10YR8/2灰白色	
506	土師器	皿・白大	土坑79	11.4	3.0		100	2.5Y8/2灰白色 0.5~1mmのチャート微量	
507	土師器	皿・白大	土坑79	11.4	3.1		50	2.5Y8/2灰白色	
508	土師器	皿・白大	土坑79	11.8	3.1		100	10YR8/2灰白色	
509	土師器	皿・白大	土坑79	11.5	3.0		100	2.5Y8/2灰白色	
510	土師器	皿・白大	土坑79	11.5	2.8		80	2.5Y8/2灰白色	
511	土師器	皿・白大	土坑79	11.5	3.0		80	10YR8/2灰白色 0.5~2mmの石英・長石・ チャート少量	
512	土師器	皿・白大	土坑79	11.6	3.0		100	2.5Y8/2灰白色 0.5~2mmの石英・長石・ チャート少量	
513	土師器	皿・白大	土坑79	11.6	3.3		100	2.5Y8/2灰白色 0.5~5mmのチャート多量	
514	土師器	皿・白大	土坑79	11.7	3.2		100	10YR8/2灰白色 0.5~3mmの石英・長石・ チャート少量	
515	土師器	皿・白大	土坑79	11.8	3.0		80	10YR8/2灰白色	
516	瓦器	壺	土坑79	6.2	8.3		100	N4/0灰色	肩部に花卉状に暗文施 す
517	瓦器	小皿	土坑79	6.0	2.0		100	N3/0暗灰色	
518	施釉陶器 瀬戸	小皿	土坑79	6.3	2.6	2.4	100	胎土7.5YR8/4浅黄橙色 釉5Y7/2灰白色	
519	土師器	皿・赤小	土坑560	7.2	1.6		100	7.5YR8/3浅黄橙色 0.5~1mmの石英・長 石少量、クサリレキ微量	
520	土師器	皿・赤小	土坑560	7.6	1.5		100	10YR8/3浅黄橙色	
521	土師器	皿・赤小	土坑560	7.6	1.8		100	7.5YR8/3浅黄橙色 クサリレキ多量	
522	土師器	皿・赤小	土坑560	8.0	1.6		100	2.5Y8/3淡黄色 クサリレキ少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
523	土師器	皿・赤小	土坑560	8.0	1.5		80	2.5Y8/3淡黄色	
524	土師器	皿・赤小	土坑560	8.0	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色 0.5~1mmの石英・長石少量、クサリレキ多量	
525	土師器	皿・赤大	土坑560	10.2	2.2		90	7.5YR8/4浅黄橙色 クサリレキ多量	
526	土師器	皿・赤大	土坑560	10.6	2.3		100	10YR8/3浅黄橙色 0.5~2mmの石英・長石・チャート少量	
527	土師器	皿・赤大	土坑560	10.6	2.2		100	7.5YR8/3浅黄橙色 0.5~2mmの石英・長石・チャート多量	
528	土師器	皿・赤大	土坑560	10.6	2.0		90	10YR8/3浅黄橙色 0.5~3mmの石英・長石・チャート多量	
529	土師器	皿・赤大	土坑560	10.8	2.3		100	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ多量	
530	土師器	皿・赤大	土坑560	11.0	2.5		100	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ多量	
531	土師器	皿・赤大	土坑560	11.0	2.2		100	7.5YR7/3にぶい橙色 0.5~5mmの石英・長石・チャート多量、クサリレキ多量	
532	土師器	皿・赤大	土坑560	11.2	2.2		100	10YR8/3浅黄橙色 0.5~3mmの石英・長石・チャート多量	
533	土師器	皿・白へそ	土坑560	7.0	2.0		100	10YR8/2灰白色	
534	土師器	皿・白へそ	土坑560	6.6	1.9		100	2.5Y8/2灰白色 1~3mmの石英・長石少量	
535	土師器	皿・白へそ	土坑560	6.6	1.9		100	10YR8/2灰白色 0.5~1mmの石英・長石・チャート少量	
536	土師器	皿・白へそ	土坑560	6.6	1.9		100	10YR8/2灰白色	
537	土師器	皿・白へそ	土坑560	6.6	2.1		100	10YR8/2灰白色 0.5~1mmの石英・長石・チャート少量	
538	土師器	皿・白へそ	土坑560	7.1	2.0		80	2.5Y8/2灰白色 0.5~2mmの石英・長石・チャート微量	
539	土師器	皿・白へそ	土坑560	6.8	2.1		100	10YR8/2灰白色 0.5~1mmのチャート少量	
540	土師器	皿・白中	土坑560	9.4	2.0		90	10YR8/2灰白色	灯明皿
541	土師器	皿・白中	土坑560	9.4	2.0		100	2.5Y8/2灰白色	灯明皿 全面に煤付着
542	土師器	皿・白大	土坑560	11.4	3.0		60	2.5Y8/2灰白色	
543	土師器	皿・白大	土坑560	11.4	3.1		80	10YR8/2灰白色	
544	土師器	皿・白大	土坑560	11.6	3.0		80	10YR8/2灰白色	
545	土師器	皿・白大	土坑560	11.9	3.0		90	2.5Y8/2灰白色	
546	土師器	皿・白大	土坑560	12.0	3.3		100	2.5Y8/2灰白色	
547	土師器	皿・白大	土坑560	11.6	2.8		15	2.5Y8/2灰白色	
548	土師器	皿・赤小	土坑791	7.4	1.7		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
549	土師器	皿・赤小	土坑791	7.8	1.7		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
550	土師器	皿・赤小	土坑791	7.8	1.5		70	10YR7/4にぶい黄橙色 0.5~5mmのチャート少量	
551	土師器	皿・赤小	土坑791	8.0	1.7		100	10YR7/4にぶい黄橙色 クサリレキ多量	
552	土師器	皿・赤小	土坑791	7.8	1.7		100	10YR7/4にぶい黄橙色 クサリレキ多量	
553	土師器	皿・赤小	土坑791	7.8	1.6		50	10YR7/2にぶい黄橙色 0.5~10mmの石英・長石・チャート少量	
554	土師器	皿・赤大	土坑791	10.8	2.3		100	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ少量	
555	土師器	皿・赤大	土坑791	10.8	2.5		100	10YR7/4にぶい黄橙色 0.5~3mmのチャート少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
556	土師器	皿・赤大	土坑791	11.0	2.4		50	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5～2mmの石英・長石少量	
557	土師器	皿・白小	土坑791	6.8	1.9		80	10YR8/2灰白色	
558	土師器	皿・白へそ	土坑791	6.5	1.9		60	5Y8/1灰白色	
559	土師器	皿・白へそ	土坑791	6.4	1.9		100	5Y8/1灰白色 1～5mmの石英・長石少量	
560	土師器	皿・白大	土坑791	10.0	2.4		25	2.5Y8/2灰白色	
561	土師器	皿・白大	土坑791	11.4	3.0		40	2.5Y8/1灰白色	
562	輸入陶磁器 白磁	椀	土坑791			7.4	底部50	釉2.5Y8/2灰白色	底部外面に墨書あり
563	土師器	皿・赤小	土坑418	7.6	1.6		100	10YR8/3浅黄橙色 クサリレキ少	
564	土師器	皿・赤小	土坑418	7.6	1.8		90	10YR7/2にぶい黄橙色	
565	土師器	皿・赤小	土坑418	7.8	1.5		70	7.5YR8/4浅黄橙色	底部内面に墨付着
566	土師器	皿・赤小	土坑418	8.0	2.0		100	10YR8/2灰白色	
567	土師器	皿・赤大	土坑418	10.6	2.1		100	7.5YR8/4浅黄橙色 0.5～5mmの石英・長石少量、クサリレキ少量	
568	土師器	皿・赤大	土坑418	10.8	2.3		100	7.5YR7/3にぶい橙色 0.5～2mmのチャート少量	
569	土師器	皿・赤大	土坑418	10.6	2.2		100	7.5YR8/4浅黄橙色 0.5～3mmのチャート少量、クサリレキ多量	
570	土師器	皿・赤大	土坑418	10.6	2.4		90	10YR8/3浅黄橙色 0.5～3mmの石英・長石少量	
571	土師器	皿・赤大	土坑418	10.8	2.4		100	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5～2mmの石英・長石少量	
572	土師器	皿・赤大	土坑418	11.0	2.3		100	7.5YR7/4にぶい橙色 0.5～2mmのチャート少量	
573	土師器	皿・赤大	土坑418	11.2	2.2		100	7.5YR8/4浅黄橙色 1～3mmの石英・長石多量、クサリレキ多量	
574	土師器	皿・赤大	土坑418	11.4	2.0		100	7.5YR7/4にぶい橙色 1～6mmの石英・長石少量	
575	土師器	皿・白へそ	土坑418	6.4	2.1		100	10YR8/2灰白色	
576	土師器	皿・白へそ	土坑418	6.4	1.8		100	10YR8/2灰白色	
577	土師器	皿・白へそ	土坑418	6.2	1.8		100	10YR8/2灰白色	
578	土師器	皿・白へそ	土坑418	6.2	1.8		100	10YR8/2灰白色	
579	土師器	皿・白へそ	土坑418	6.8	2.1		100	10YR8/1灰白色	
580	土師器	皿・白へそ	土坑418	6.8	2.0		100	10YR8/1灰白色	
581	土師器	皿・白小	土坑418	6.4	1.8		100	10YR8/1灰白色	
582	土師器	皿・白小	土坑418	6.8	1.8		100	2.5Y8/2灰白色	
583	土師器	皿・白小	土坑418	6.8	2.0		100	10YR8/2灰白色	
584	土師器	皿・白小	土坑418	8.0	2.1		100	2.5Y8/2灰白色 1～5mmのチャート少量	
585	土師器	皿・白小	土坑418	8.2	2.1		100	2.5Y8/2灰白色	
586	土師器	皿・白小	土坑418	8.4	2.2		100	2.5Y8/2灰白色	
587	土師器	皿・白中	土坑418	9.1	1.7		100	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
588	土師器	皿・白中	土坑418	9.4	1.7		50	10YR3/1黒褐色	灯明皿

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
589	土師器	皿・白大	土坑418	10.1	2.6		90	2.5Y8/2灰白色 0.5～2mmの石英・長石・チャート少量	
590	土師器	皿・白大	土坑418	10.2	2.9		70	2.5Y8/2灰白色 0.5～1mmの石英・長石・チャート少量	
591	土師器	皿・白大	土坑418	11.0	2.9		100	2.5Y8/2灰白色 2～5mmのチャート少量	
592	土師器	皿・白大	土坑418	11.4	3.1		100	2.5Y8/2灰白色	
593	土師器	皿・白大	土坑418	11.4	3.0		90	2.5Y8/2灰白色	
594	土師器	皿・白大	土坑418	11.4	3.0		100	2.5Y8/2灰白色 1～3mmのチャート多量	
595	土師器	皿・白大	土坑418	11.6	2.9		100	2.5Y8/2灰白色	
596	土師器	皿・白大	土坑418	11.6	3.2		100	2.5Y8/2灰白色	
597	土師器	皿・白大	土坑418	11.8	3.0		100	2.5Y8/2灰白色	
598	土師器	皿・白大	土坑418	13.6	3.7		100	10YR8/2灰白色 1～3mmのチャート多量	
599	土師器	皿・白大	土坑418	14.0	4.0		50	2.5Y8/2灰白色 0.5～3mmの石英・長石・チャート少量	
600	須恵器	鉢	土坑418	30.0			10	N5/0灰色	
601	瓦器	火鉢	土坑418				口縁10	N3/0暗灰色	
602	土師器	皿・赤小	土坑471	8.0	1.7		100	7.5YR8/3浅黄橙色 クサリレキ少量	
603	土師器	皿・赤大	土坑471	10.6	2.2		100	7.5YR8/3浅黄橙色 0.5～3mmの石英・長石微量	
604	土師器	皿・赤大	土坑471	10.8	2.2		60	7.5YR7/3にぶい橙色	
605	土師器	皿・赤大	土坑471	10.8	2.2		60	7.5YR7/3にぶい橙色 クサリレキ多量	
606	土師器	皿・赤大	土坑471	10.8	2.3		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
607	土師器	皿・赤大	土坑471	10.8	2.5		60	7.5YR8/3浅黄橙色	
608	土師器	皿・赤大	土坑471	10.8	2.3		100	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ微量	
609	土師器	皿・赤大	土坑471	11.0	2.1		90	7.5YR7/3にぶい橙色	
610	土師器	皿・白へそ	土坑471	6.8	1.9		100	2.5Y8/2灰白色	
611	土師器	皿・白へそ	土坑471	7.2	1.8		30	7.5YR8/1灰白色	
612	土師器	皿・白小	土坑471	6.8	1.8		50	2.5Y8/2灰白色	
613	土師器	皿・白中	土坑471	8.2	2.2		100	2.5Y8/2灰白色 1～2mmの石英・長石少量	
614	土師器	皿・白中	土坑471	9.2	1.9		100	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
615	土師器	皿・白中	土坑471	9.2	1.9		60	2.5Y8/2灰白色 0.5～1mmの石英・長石少量	
616	土師器	皿・白大	土坑471	11.6	3.3		100	2.5Y8/2灰白色	
617	土師器	皿・白大	土坑471	12.6	2.9		20	2.5Y8/2灰白色 1～3mmの石英・長石少量	
618	土師器	皿・白大	土坑471	13.2	3.8		90	2.5Y8/2灰白色	
619	土師器	皿	井戸80	8.1	1.7		30	7.5YR8/4浅黄橙色 0.5～1.5mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
620	土師器	皿	井戸419	10.5	1.9		90	2.5Y8/1灰白色	
621	土師器	皿	井戸22	8.5	1.4		25	7.5YR8/4浅黄橙色	灯明皿

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
622	土師器	皿	井戸22	8.9	1.6		40	10YR8/1灰白色	
623	輸入陶磁器 青磁	蓋	井戸22	6.4	2.9		50	釉明緑色	
624	輸入陶磁器 染付	皿	井戸22	12.1	3.3	6.0	90		
625	焼締陶器 備前	播鉢	井戸22				口縁10	7.5YR4/3褐色	
626	焼締陶器 備前	播鉢	井戸22				口縁10	5YR4/3にぶい赤褐色 1～3mmの石英・ 長石・チャート少量	
627	焼締陶器 信楽	播鉢	井戸22	26.4			20	2.5Y8/1灰白色 1～3mmの石英・長石・ チャート少量	
628	土師器	皿・小	土坑216	7.0	1.5		20	7.5YR6/4にぶい橙色	
629	土師器	皿・小	土坑216	8.6	1.3		25	7.5YR8/4浅黄橙色 1～2mmの石英・長石 少量	
630	土師器	皿・小	土坑216	10.5	2.1		20	10YR7/2にぶい黄橙色	
631	土師器	皿・小	土坑216	10.3			15	10YR7/2にぶい黄橙色	
632	土師器	皿・へそ	土坑216	8.0			30	10YR8/2灰白色	
633	土師器	皿・へそ	土坑216	8.0	1.6		25	10YR8/2灰白色	
634	土師器	皿・赤大	土坑216	6.6	2.0		100	10YR8/1灰白色	
635	土師器	皿・赤大	土坑216	6.8	1.9		50	7.5YR8/4浅黄橙色	
636	土師器	皿・大	土坑216	14.2	2.7		10	7.5YR8/3浅黄橙色	
637	土師器	皿・大	土坑216	14.5	2.3		10	7.5YR8/4浅黄橙色	
638	土師器	皿・大	土坑216	14.6			20	7.5YR8/4浅黄橙色	
639	土師器	皿・大	土坑216	15.0			20	7.5YR8/3浅黄橙色	
640	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	土坑216			3.8	20	10YR8/1灰白色	天目茶碗
641	土師器	皿・赤小	土坑130	7.0	1.5		100	10YR8/2灰白色 0.5～5mmの石英・長石・ チャート少量	
642	土師器	皿・赤小	土坑130	7.0	1.9		40	5YR6/4にぶい橙色 クサリレキ少量	
643	土師器	皿・赤小	土坑130	7.4	1.5			2.5Y5/1黄灰色 0.5～2mmの石英・長石・ チャート少量	
644	土師器	皿・赤小	土坑130	7.5	2.1		60	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5～2.5mmの石英・ 長石・チャート少量	
645	土師器	皿・赤小	土坑130	7.6	1.4		35	7.5YR6/4にぶい橙色	
646	土師器	皿・赤小	土坑130	7.6	1.5		50	10YR7/3にぶい黄橙色 0.5～3mmの石英・ 長石・チャート少量、クサリレキ少量	
647	土師器	皿・赤小	土坑130	7.6	1.8		80	2.5Y6/2灰黄色 1	
648	土師器	皿・赤小	土坑130	7.7	1.6		50	2.5Y7/2灰黄色 0.5～1.5mmの石英・長石・ チャート少量	
649	土師器	皿・赤小	土坑130	8.4	1.5		35	10YR7/2にぶい黄橙色 1～4.5mmの石英・ 長石・チャート少量	
650	土師器	皿・赤小	土坑130	8.6	1.5		35	2.5Y7/2灰黄色 1～2.5mmの石英・長石・ チャート少量	
651	土師器	皿・赤小	土坑130	8.8	1.7		100	5Y7/1灰白色 0.5～4mmの石英・長石・チ ャート少量	
652	土師器	皿・赤小	土坑130	8.8	1.6		50	10YR7/2にぶい黄橙色	
653	土師器	皿・赤小	土坑130	9.0	1.6		35	5YR6/6橙色 0.5～4mmの石英・長石・チ ャート、クサリレキ少量	
654	土師器	皿・赤大	土坑130	11.9	7.2		80	5YR7/6橙色 0.5～3mmの石英・長石・チ ャート少量	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
655	土師器	皿・赤大	土坑130	12.0	2.3		25	2.5Y6/2灰黄色 0.5~3.5mmの石英・長石・チャート少量	
656	土師器	皿・白へそ	土坑130	7.0	1.8		100	2.5Y8/1灰白色	
657	土師器	皿・白小	土坑130	8.8	(1.9)		35	10YR7/3にぶい黄橙色	
658	土師器	皿・白小	土坑130	8.2	2.3		100	10YR8/3浅黄橙色	
659	土師器	皿・白小	土坑130	8.6	1.8		35	2.5Y7/3浅黄色	
660	土師器	皿・白大	土坑130	12.4	2.6		25	10YR8/3浅黄橙色	
661	土師器	皿・白大	土坑130	13.2	2.4		50	10YR8/3浅黄橙色	
662	土師器	皿・白大	土坑130	15.4	3.1		35	2.5Y8/2灰白色 0.5~2mmの石英・長石・チャート少量	
663	土師器	皿・白大	土坑130	15.6	3.1		30	10YR7/2にぶい黄橙色 1mm以下の石英・長石少量、金雲母・クサリレキ少量	
664	土師器	皿・白大	土坑130	15.6	3.3		35	10YR8/2灰白色	
665	土師器	皿・白大	土坑130	15.6	2.7		15	2.5Y7/2灰黄色	
666	土師器	皿・白大	土坑130	15.8	2.9		50	10YR8/3浅黄橙色	
667	土師器	皿・白大	土坑130	15.8	3.0		100	10YR7/2にぶい黄橙色	土坑底より出土
668	土師器	皿・白大	土坑130	16.2	2.7		25	10YR8/2灰白色	
669	輸入陶磁器 青磁	脚	土坑130			3.5	20	釉2.5GY7/1明オリーブ色	
670	輸入陶磁器 青磁	椀	土坑130	16.0			10	釉10Y6/2灰オリーブ色	
671	輸入陶磁器 青磁	椀	土坑130	15.0			10	胎土7.5Y6/1灰色 黒色砂粒含 釉7.5Y5/2灰オリーブ色	高麗青磁か？
672	輸入陶磁器 白磁	椀	土坑130	15.8			10	釉5Y8/1灰白色	
673	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	土坑130			4.0	20	胎土2.5Y7/2灰黄色、釉7.5YR3/3暗褐色	天目茶椀
674	施釉陶器 瀬戸	壺	土坑130	14.4				胎土5Y7/1灰白色、釉明緑色	
675	施釉陶器 瀬戸	筒型容器	土坑130			9.6	20	胎土2.5Y7/1灰白色	
676	須恵器	鉢	土坑130	29.6			20	5Y4/1灰色	
677	瓦質土器	羽釜	土坑130	13.7	9.8		85	2.5Y8/1灰白色 1~5mmの石英・長石・チャートやや多量	
678	瓦質土器	火鉢	土坑130	30.0			20	N5/0灰色	奈良火鉢
679	土師器	皿・へそ	土坑74	6.8	1.9		100	2.5Y8/3淡黄色 1~5mmのチャート少量	
680	土師器	皿・へそ	土坑74	6.2	1.7		50	2.5Y8/2灰白色	
681	土師器	皿・へそ	土坑74	6.5	1.9		90	10YR8/3浅黄橙色	
682	土師器	皿・白小	土坑74	8.8	1.7		40	10YR8/2灰白色	
683	土師器	皿・白小	土坑74	9.0	1.8		25	7.5YR8/3浅黄橙色	
684	土師器	皿・白小	土坑74	9.0	1.8		50	10YR8/3浅黄橙色 1~6mmの石英・長石・チャート少量	
685	土師器	皿・白小	土坑74	9.0	2.0		25	10YR8/2灰白色	
686	土師器	皿・白小	土坑74	9.4	1.7		40	10YR8/2灰白色 1~2mmの石英・長石・チャート少量	
687	土師器	皿・白小	土坑74	9.0	1.9		50	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
688	土師器	皿・白小	土坑74	8.5	2.2		25	2.5Y8/3淡黄色 1～2mmの石英・長石・チャート少量	灯明皿
689	土師器	皿・白小	土坑74	9.1	1.9		40	10YR8/3浅黄橙色	
690	土師器	皿・白大	土坑74	13.9	1.8		25	2.5Y8/2灰白色	
691	土師器	皿・白大	土坑74	13.9	1.9		50	5YR8/1灰白色	
692	土師器	皿・白大	土坑74	14.5	2.6		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
693	土師器	皿・赤	土坑74	7.2	1.8		25	7.5YR8/6浅黄橙色	
694	土師器	皿・赤	土坑74	10.5	2.2		40	2.5Y8/3淡黄色	
695	輸入陶磁器 青磁	盤脚	土坑74				10	釉10Y5/2オリーブ灰色	獣脚三足盤
696	輸入陶磁器 白磁	椀	土坑74			6.6	70	胎土5Y8/1灰白色、釉葉7.5Y8/1灰白色	
697	施釉陶器 瀬戸	卸目皿	土坑74			8.7	40	胎土2.5Y7/2灰黄色、釉5Y6/3オリーブ黄色	
698	施釉陶器 瀬戸	花瓶	土坑74			7.0	脚部100	胎土2.5Y7/3浅黄色、釉5Y7/3浅黄色	
699	施釉陶器 瀬戸	鉢	土坑74	33.2			20	胎土2.5Y7/1灰白色、釉7.5Y6/3オリーブ黄色	
700	施釉陶器 瀬戸	鉢	土坑74	43.0			20	胎土10YR7/2にぶい黄橙色、釉5Y6/4オリーブ黄色	
701	瓦器	羽釜	土坑74	21.8			20	2.5Y6/2灰黄色	
702	瓦器	鍋	土坑74	23.2			10	7.5YR7/2明褐色	
703	施釉陶器 志野	皿	江戸整地層				10	釉7.5Y8/1灰白色	
704	焼締陶器 備前	甕	埋甕72				50	2.5YR3/3暗赤褐色	
705	焼締陶器 信楽	甕	埋甕15			34.0	底部100	7.5YR6/6橙色 1～2mmの石英・長石少量	
706	土師器	皿	井戸52	8.7			20	10YR7/4にぶい黄橙色 1～2mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
707	土師器	皿	井戸52	9.6	2.0		90	10YR7/3にぶい黄橙色	
708	土師器	皿	井戸52	12.6	2.2		20	10YR7/3にぶい黄橙色	
709	施釉陶器 瀬戸	皿	井戸52	11.4	2.4		25	胎土2.5Y8/1灰白色	
710	施釉陶器 肥前系	椀	井戸52			4.3	30	胎土5YR5/3にぶい赤褐色	
711	焼締陶器 信楽	擂鉢	井戸52				口縁10	5YR6/6橙色	
712	輸入陶磁器 高麗青磁		井戸52				破片	胎土7.5Y6/1灰色 黒色砂粒含、釉5Y5/2灰オリーブ色	梅瓶もしくは扁壺の肩部
713	輸入陶磁器 染付	椀	井戸52			4.2	底部80		
714	土師器	皿	土坑296	4.9	0.8		30	10YR7/4にぶい黄橙色	灯明皿か
715	土師器	皿	土坑296	5.4	1.2		90	2.5Y7/3浅黄色	
716	土師器	皿	土坑296	5.5	1.2		90	2.5Y7/3浅黄色	キラ粉付着
717	土師器	皿	土坑296	6.4	1.4		90	2.5Y7/2灰黄色	キラ粉付着
718	土師器	皿	土坑296	6.4	1.5		80	10YR7/3にぶい黄橙色	
719	土師器	皿	土坑296	6.4	1.4		50	10YR7/3にぶい黄橙色 1～5mmの石英・長石・チャート少量	灯明皿
720	土師器	皿	土坑296	7.1	1.9		30	10YR7/3にぶい黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
721	土師器	皿	土坑296	7.1	1.5		90	10YR7/4にぶい黄橙色	
722	土師器	皿	土坑296	9.1	2.1		60	7.5YR7/3にぶい橙色	灯明皿
723	土師器	皿	土坑296	10.4	1.9		25	10YR7/3にぶい黄橙色	
724	土師器	皿	土坑296	11.1	2.0		25	7.5YR7/3にぶい橙色 1～2mmの石英・長石少量	
725	土師器	皿	土坑296	13.0	2.0		20	7.5YR7/4にぶい橙色	
726	土師器	小壺	土坑296	1.3	2.5		50	2.5Y7/3浅黄色	
727	土師器	塩壺蓋	土坑296	6.9	1.9		25	5YR6/4にぶい橙色 1～3mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
728	土師器	塩壺	土坑296	5.9			25	5YR6/4にぶい橙色 1～5mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
729	土師器	塩壺	土坑296	5.1			50	5YR6/3にぶい橙色 1～4mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ・金雲母少量	
730	土師器	羽釜	土坑296	20.6			40	10YR8/3浅黄橙色	
731	土師器	羽釜	土坑296	20.0	15.6		60	10YR8/3浅黄橙色	
732	焼締陶器 信楽	掃鉢	土坑296			15.2	30	7.5YR7/4にぶい橙色 1～7mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
733	焼締陶器	壺	土坑296	11.8			25	5YR4/8赤褐色 1～3mmの石英・長石・チャート少量	
734	瓦器	火鉢	土坑296	39.0			20	N4/0灰色	
735	施釉陶器 瀬戸	皿	土坑296	10.2	1.9	5.6	30	胎土5Y7/1灰白色、釉7.5Y7/2灰白色	
736	施釉陶器 肥前系	皿	土坑296	10.5	3.8	3.9	90	胎土10YR7/2にぶい黄橙色、2.5Y6/2灰黄色	
737	施釉陶器 肥前系	皿	土坑296			4.2	50	胎土5Y6/1灰色、釉5Y6/2灰オリーブ色	底部内面に煤付着
738	施釉陶器 肥前系	椀	土坑296	11.2	7.4	4.2	30	胎土5Y7/1灰白色、釉10YR3/2黒褐色	天目茶椀
739	施釉陶器 肥前系	椀	土坑296	11.6	6.3	4.2	40	胎土7.5YR4/3褐色、釉7.5YR3/3暗褐色	天目茶椀
740	施釉陶器 肥前系	椀	土坑296	11.2	6.2	5.1	70	胎土2.5Y7/3浅黄色、釉2.5Y6/1黄灰色	
741	施釉陶器 肥前系	椀	土坑296	10.9	6.3	4.0	60	胎土7.5YR6/6橙色、釉7.5Y7/1灰白色	
742	輸入陶磁器 染付	小椀	土坑296				3.8	底部100	
743	土師器	皿・小	土坑236	5.0	1.3		100	10YR7/3にぶい黄橙色 1～2.5mmの石英・長石・チャート少量	灯明皿
744	土師器	皿・小	土坑236	5.0	1.3		50	7.5YR7/4にぶい橙色	
745	土師器	皿・小	土坑236	5.9	0.9		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
746	土師器	皿・大	土坑236	8.8	1.9		30	10YR8/3浅黄橙色	
747	土師器	皿・大	土坑236	10.2	1.8		20	5Y2/1黒色	
748	土師器	皿・大	土坑236	10.4	2.2		25	10YR8/4浅黄橙色	
749	土師器	皿・大	土坑236	10.4	2.3		30	7.5YR7/4にぶい橙色 1～1.5mmの石英・長石・チャート少量	灯明皿
750	土師器	皿・大	土坑236	10.6	2.0		25	2.5Y7/3浅黄色	
751	土師器	皿・大	土坑236	11.1	2.4		25	2.5Y6/3にぶい黄色	
752	土師器	皿・大	土坑236	11.2	2.0		25	10YR6/2灰黄褐色	
753	土師器	皿・大	土坑236	11.3			30	10YR7/4にぶい黄橙色	灯明皿

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
754	土師器	皿・大	土坑236	11.6	1.9		15	7.5YR8/6浅黄橙色	
755	土師器	小壺	土坑236	2.0	2.3		100	10YR8/2灰白色	
756	土師器	塩壺蓋	土坑236	6.8	1.4		50	5YR6/6橙色	
757	土師器	塩壺	土坑236	5.9	9.4		100	5YR7/6橙色 0.5~1.5mmの石英・長石・チャート少量	
758	土師器	塩壺	土坑236	5.8	9.5		70	10YR7/4にぶい黄橙色 1~3mmの石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
759	土師器	円盤状製品	土坑236				90	7.5YR6/3にぶい褐色	直径4.7cm、厚さ1.2cm
760	軟質 施釉陶器	小壺	土坑236	1.6			50	胎土2.5Y8/1灰白色、釉7.5YR6/2灰オリーブ色	
761	軟質 施釉陶器	小壺	土坑236			2.4	底部80	胎土2.5Y8/1灰白色、釉7.5YR6/2灰オリーブ色	
762	施釉陶器 瀬戸美濃系	杯	土坑236	7.0	4.7	3.8	40	胎土2.5Y8/2灰白色、釉10YR7/2にぶい黄橙色	
763	施釉陶器 瀬戸美濃系	杯	土坑236	7.7	3.5	3.5	40	胎土10YR8/2灰白色、釉10YR8/1灰白色	
764	施釉陶器 瀬戸美濃系	香炉	土坑236	10.2				胎土2.5Y8/2灰白色、釉5Y7/3浅黄色	
765	施釉陶器 瀬戸美濃系	壺	土坑236			6.6	60	胎土2.5Y8/2灰白色、2.5Y8/3浅黄色	
766	施釉陶器 瀬戸美濃系	椀	土坑236	10.2	6.3	4.9	40	2.5Y8/2灰白色	天目茶椀
767	施釉陶器 瀬戸美濃系	椀	土坑236	10.3	6.8	5.2	40	2.5Y8/2灰白色	天目茶椀
768	施釉陶器 瀬戸美濃系	椀	土坑236	10.6	7.0	4.8	40	2.5Y8/2灰白色	天目茶椀
769	施釉陶器 肥前系	蓋	土坑236	8.7		3.3	80	胎土2.5Y7/1灰白色、釉7.5Y4/3暗オリーブ色	
770	施釉陶器 肥前系	椀	土坑236	11.7	7.2	4.6	70	胎土2.5Y8/1灰白色、釉2.5Y7/4浅黄色	
771	施釉陶器 肥前系	椀	土坑236	11.4	6.2	5.2	30	胎土7.5YR6/4にぶい橙色、釉10YR8/1灰白色	
772	施釉陶器 肥前系	椀	土坑236	12.4	6.6	5.5	30	胎土2.5Y6/1黄灰色 黒色砂粒含、釉上半2.5Y8/1灰白色、釉下半7.5Y5/1灰色	高台裏に砂付着
773	施釉陶器	椀	土坑236	12.8			25	胎土2.5Y4/1黄灰色、釉5YR3/3暗赤褐色・10YR8/2灰白色	
774	施釉陶器 肥前系	椀	土坑236	11.6	6.5	4.9	20	胎土5Y7/1灰白色、釉2.5Y3/3暗オリーブ褐色	天目茶椀
775	施釉陶器 肥前系	椀	土坑236			5.5	底部100	胎土10YR7/2灰白色、釉10YR2/1黒色	鉄釉。底部内面トチン痕3ヶ所あり。
776	施釉陶器 肥前系	皿	土坑236	15.9	3.8	5.2	30	胎土2.5Y6/2灰黄色、釉5Y6/2灰オリーブ色	
777	施釉陶器 肥前系	椀	土坑236			4.1	30	胎土10YR6/4にぶい黄橙色、釉2.5Y7/2灰黄色	底部内面トチン痕4ヶ所あり。
778	施釉陶器 肥前系	皿	土坑236			7.5	底部100	胎土7.5YR5/4にぶい褐色、釉10YR5/3にぶい黄褐色	底部内面トチン痕あり。
779	施釉陶器 肥前系	壺	土坑236	5.6	7.1	4.2	80	胎土7.5YR8/6浅黄橙色、釉葉2.5Y6/1黄灰色	
780	施釉陶器 肥前系	壺	土坑236	11.0			30	胎土2.5Y7/3浅黄色、釉5YR3/2暗赤褐色	
781	施釉陶器 肥前系	壺	土坑236	9.0			20	胎土10YR5/3にぶい黄褐色、釉7.5Y7/1灰白色	福岡、藁灰釉
782	焼締陶器 信楽	搦鉢	土坑236	35.8	16.3	14.3	60	5YR5/3にぶい赤褐色 1~3mmの砂粒少量	搦目5条1単位。
783	焼締陶器 備前	壺	土坑236	4.2		13.6	50	2.5YR3/1暗赤灰色	舟徳利 底部に「○」のスタンプあり。
784	焼締陶器 丹波	搦鉢	土坑236				破片	N6/0灰色 1~4mmの砂粒少量	搦目1条1単位。
785	焼締陶器 丹波	搦鉢	土坑236				破片	5Y5/1灰色 1~4mmの砂粒少量	搦目9条1単位。
786	焼締陶器 丹波	搦鉢	土坑236				破片	5YR4/3にぶい赤褐色 1~5mmの砂粒多量	搦目6条1単位。

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
787	焼締陶器 丹波	搦鉢	土坑236				破片	5Y5/1灰色 1～7mmの砂粒少量	播目8条1単位。
788	焼締陶器 丹波	壺	土坑236	14.7			20	2.5Y6/1黄灰色	
789	磁器 肥前系染付	壺	土坑236			5.1	30		
790	磁器 肥前系染付	椀	土坑236	11.7	7.0	4.5	40		底部外面露胎
791	磁器 肥前系染付	椀	土坑236	9.9	6.9	4.3	70		底部外面施釉。高台裏に砂付着。
792	磁器 肥前系染付	椀	土坑236	9.8	6.7	4.4	70		底部外面施釉。
793	磁器 肥前系染付	椀	土坑236	11.8	6.3	5.1	70		底部外面施釉。
794	磁器 肥前系染付	椀	土坑236	9.8			25		
795	磁器 肥前 系鉄釉染付	椀	土坑236	10.5	7.3	5.0	30		外面鉄釉、内面染付。 底部外面露胎。
796	磁器 肥前 系鉄釉染付	椀	土坑236			5.0	底部50		外面鉄釉、内面染付。 底部外面露胎。
797	磁器 肥前系	皿	土坑236	14.2	3.3	5.5	30		底部外面施釉、砂付着。
798	磁器 肥前系	皿	土坑236	14.2	3.2	5.1	50		底部外面施釉。高台裏に砂付着。
799	磁器 肥前系染付	皿	土坑236	23.3	6.3	7.1	80		底部外面施釉。
800	磁器 肥前系染付	皿	土坑236	22.9	6.5	8.9	30		底部外面施釉。高台に砂付着。
801	磁器 肥前系青磁	皿	土坑236	26.0	6.9		40		三足
802	輸入陶磁器 白磁	小椀	土坑236	5.0	2.8	2.0	60		
803	輸入陶磁器 白磁	脚部	土坑236			4.2	脚部70		
804	輸入陶磁器 明 染付	鉢	土坑236	20.0			15		
805	輸入陶磁器 明 染付	椀	土坑236	12.4	6.4	4.6	70		
806	輸入陶磁器 明 染付	椀	土坑236	13.1	7.5	5.6	90		
807	輸入陶磁器 染付	皿	土坑236	10.9	3.1	4.5	80		底部外面施釉。
808	輸入陶磁器 か 白磁	小椀	土坑236	6.6	4.4	2.8	50	胎土2.5Y8/1灰白色、釉2.5Y8/2灰白色 0.5mmの黒色砂粒少量	高台裏と底部内面に貝粉付着
809	輸入陶磁器 李朝 白磁	皿	土坑236			5.7	底部50	胎土2.5Y8/2灰白色、釉7.5Y7/1灰白色	底部内面に砂目。
810	輸入陶磁器 ベトナム 焼締陶器	壺	土坑236			10.2	底部25	7.5YR7/6橙色 0.5～2.5mmの砂粒少量	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうさんぼうきゅうちょうあと・からすまあやのこうじいせき							
書名	平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-10							
編著者名	網 伸也・柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 ごじょうさんぼうきゅうちょうあと 五条三坊九町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 童侍者町159-1	26100		35度 00分 10秒	135度 45分 32秒	2008年5月 7日～2008 年9月26日	585㎡	ビル建設
からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡			712					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
烏丸綾小路遺跡	集落跡	弥生時代	溝、土坑	弥生土器、石器				
平安京左京 五条三坊九町跡	都城跡	平安時代	建物、溝、井戸、 土坑	土師器、須恵器、灰釉 陶器、白色土器、緑釉 陶器、黒色土器、瓦器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦類、石製品				
		鎌倉・ 室町時代	礎石列、炉、埋甕、 埋甕群、埋甕抜取 土坑群、羽釜埋納 土坑、井戸、地下 式倉庫、土坑	土師器、須恵器、山茶 椀、瓦器、白色土器、 焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦、金属 製品、銭貨、鑄造関係、 石製品、ガラス製品、骨				
		江戸時代	礎石列、竈、埋甕、 石組溝、石室、石 組遺構、井戸、土 坑	土師器、軟質施釉陶器、 瓦器、焼締陶器、輸入 陶磁器、国産陶磁器、 瓦類、銭貨、石製品、骨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10

平安京左京五条三坊九町跡・
烏丸綾小路遺跡

発行日 2008年12月26日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961